

岐阜県文化財保護センター
調査報告書 第139集

六里遺跡・稻荷遺跡 (第2分冊)

2017

岐阜県文化財保護センター

ろく り
六里遺跡・稻荷遺跡
いな り
(第2分冊)

2017

岐阜県文化財保護センター

目 次 (第2分冊)

第4章 稲荷遺跡の調査成果	1
第1節 基本層序	1
第2節 遺構・遺物の概要	4
第3節 古墳時代及び古代の遺構・遺物	7
第4節 その他の時代の遺構・遺物	102
第5節 遺物包含層出土遺物	108
第5章 自然科学分析	116
第1節 分析の概要と成果	116
第2節 花粉分析及びプランツ・オバール分析	118
第3節 炭化材樹種同定及び放射性炭素年代測定	133
第4節 鉄滓の成分分析	139
第6章 総括	145
第1節 六里遺跡・稻荷遺跡の堅穴建物について	145
第2節 六里遺跡の土器埋設遺構について	151
第3節 六里遺跡・稻荷遺跡の出土土器について	156
第4節 土地利用の変遷について	162
引用・参考文献	
写真図版	

目次 (第1分冊)

巻頭図版

序

例言

目次

第1章 調査の経過

- 第1節 調査に至る経緯
- 第2節 調査の方法と経過

第2章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境
- 第2節 歴史的環境

第3章 六里遺跡の調査成果

- 第1節 基本層序
- 第2節 遺構・遺物の概要
- 第3節 第1調査面の遺構・遺物
- 第4節 第2調査面の遺構・遺物
- 第5節 第3調査面の遺構・遺物

報告書抄録

挿図目次

第 160 図 稲荷遺跡土柱状図	2	第 203 図 SI15 出土遺物	48
第 161 図 発掘区壁面上土層図	3	第 204 図 SI16 遺構図	49
第 162 図 SI1 埋土炭化物検出範囲	8	第 205 図 SI17 遺構図	49
第 163 図 SI1 遺構図①	9	第 206 図 SI18 遺構図	50
第 164 図 SI1 遺構図②	10	第 207 図 DM16～D019 グリッド溝状遺構遺構図①	53
第 165 図 SI1 出土遺物	11	第 208 図 DM16～D019 グリッド溝状遺構遺構図②	54
第 166 図 SI2 遺構図	12	第 209 図 DM16～D019 グリッド溝状遺構出土遺物	55
第 167 図 SI2 出土遺物	13	第 210 図 SD14 遺構図	57
第 168 図 SI3 遺構図①	15	第 211 図 SD14 主な遺物の出土位置	57
第 169 図 SI3 遺構図②	16	第 212 図 SD14 出土遺物	58
第 170 図 SI3 出土遺物	17	第 213 図 SD16 遺構図	59
第 171 図 SI4 遺構図①	18	第 214 図 SD16 出土遺物	59
第 172 図 SI4 遺構図②	20	第 215 図 SN1 出土遺物	60
第 173 図 SI4 遺構図③	21	第 216 図 SN1 遺構図	61
第 174 図 SI4 出土遺物	21	第 217 図 柱穴状遺構遺構図①	62
第 175 図 SI5 遺構図①	22	第 218 図 柱穴状遺構遺構図②	63
第 176 図 SI5 遺構図②	23	第 219 図 柱穴状遺構出土遺物	63
第 177 図 SI5 遺構図③	24	第 220 図 土坑列 1 遺構図	65
第 178 図 SI5 出土遺物	25	第 221 国 土坑列 2 遺構図	66
第 179 国 SI6 遺構図①	26	第 222 国 土坑列 3 遺構図	66
第 180 国 SI6 遺構図②	27	第 223 国 土坑列 4 遺構図	68
第 181 国 SI6 山土遺物	27	第 224 国 土坑列 1～4 出土遺物	69
第 182 国 SI7 遺構図	29	第 225 国 その他の土坑遺構図①	70
第 183 国 SI7 出土遺物	30	第 226 国 その他の土坑遺構図②	72
第 184 国 SI8 遺構図①	31	第 227 国 その他の土坑遺構図③	74
第 185 国 SI8 遺構図②	32	第 228 国 SK128 遺構図	75
第 186 国 SI8 出土遺物	32	第 229 国 SK129 遺構図	75
第 187 国 SI9 遺構図	34	第 230 国 その他の土坑出土遺物	77
第 188 国 SI9 出土遺物	35	第 231 国 発掘区全域図割付図	95
第 189 国 SI10 遺構図①	36	第 232 国 発掘区全域図分割図①	96
第 190 国 SI10 遺構図②	37	第 233 国 発掘区全域図分割図②	97
第 191 国 SI10 出土遺物	38	第 234 国 発掘区全域図分割図③	98
第 192 国 SI11 遺構図	40	第 235 国 発掘区全域図分割図④	99
第 193 国 SI11 出土遺物	41	第 236 国 発掘区全域図分割図⑤	100
第 194 国 SI12 遺構図①	42	第 237 国 発掘区全域図分割図⑥	101
第 195 国 SI12 遺構図②	43	第 238 国 III層上面遺構群	103
第 196 国 SI12 山土遺物	43	第 239 国 SM1 遺構図①	104
第 197 国 SI13 遺構図	44	第 240 国 SM1 遺構図②	105
第 198 国 SI13 出土遺物	44	第 241 国 SM1 出土坑	105
第 199 国 SI14 遺構図	45	第 242 国 SK8 出土遺物	105
第 200 国 SI14 出土遺物	45	第 243 国 遺物包含層出土遺物①	109
第 201 国 SI15 遺構図①	46	第 244 国 遺物包含層出土遺物②	110
第 202 国 SI15 遺構図②	47	第 245 国 遺物包含層出土遺物③	111

第 246 図 試料採取位置	119
第 247 図 六里遺跡における花粉分布図	125
第 248 図 稲荷遺跡における花粉分布図	126
第 249 図 六里遺跡及び稻荷遺跡におけるプラント・オペール分布図	132
第 250 図 年代校正結果	139
第 251 図 鉄津の SME 観察と EMS 分析結果①	142
第 252 図 鉄津の SME 観察と EMS 分析結果②	143
第 253 図 鉄津の SME 観察と EMS 分析結果③	144
第 254 図 カマド属性分類模式図	146
第 255 図 各時期の窓穴建物	150
第 256 図 六里遺跡における土器埋設遺構の分類	152
第 257 図 土器埋設遺構の長軸方位と配置	153
第 258 図 いんべ遺跡における土器埋設遺構の配置	155
第 259 図 埋設土器の分類と時期区分	157
第 260 図 各区分における組成上の特徴を示す土器	160
第 261 図 土地利用の変遷（I 期）	163
第 262 図 土地利用の変遷（III 期及び IV a 期・IV b 期）	165
第 263 図 土地利用の変遷（IV c 期・IV d 期及び V 期）	166
第 264 図 土地利用の変遷（VI 期及び VII・VII 期）	167

表目次

表 71 稲荷遺跡沖羽原遺跡検出数	4
表 72 稲荷遺跡出土土器点数	6
表 73 窓穴建物一覧表	78
表 74 窓穴建物カット属性表	79
表 75 窓穴建物柱穴一覧表①	79
表 76 窓穴建物主柱穴一覧表②	80
表 77 窓穴建物半圓窓一覧表	80
表 78 窓穴建物その他の床面遺構一覧表①	80
表 79 窓穴建物その他の床面遺構一覧表②	81
表 80 構造遺構一覧表①	81
表 81 溝状遺構一覧表②	82
表 82 故障穴遺構一覧表	82
表 83 柱穴遺構一覧表	82
表 84 土坑一覧表①	83
表 85 土坑一覧表②	84
表 86 遺構出土土器觀察表①	85
表 87 遺構出土土器觀察表②	86
表 88 遺構出土土器觀察表③	87
表 89 遺構出土土器觀察表④	88
表 90 遺構出土土器觀察表⑤	89
表 91 遺構出土土器觀察表⑥	90
表 92 遺構出土土器觀察表⑦	91
表 93 遺構出土土器觀察表⑧	92
表 94 遺構出土土器觀察表⑨	93
表 95 遺構出土土器觀察表⑩	94
表 96 遺構出土土器・石製品一覧表	94
表 97 Ⅲ層上面切痕一覧表	106
表 98 Ⅲ層上面横穴遺構一覧表	106
表 99 SM 1 等杭一覧表	106
表 100 Ⅲ層上面土坑一覧表	107
表 101 SK 8 号土上土器觀察表	107
表 102 遺物包含層出土土器觀察表①	113
表 103 遺物包含層出土土器觀察表②	114
表 104 遺物包含層出土土器觀察表③	115
表 105 遺物包含層出土土製品一覧表	115
表 106 遺物包含層出土石器・石製品一覧表	115
表 107 遺物包含層出土金屬製品一覧表	115
表 108 花粉分析試料一覧表	118
表 109 六里遺跡から出土した花粉孢子一覧表①	121
表 110 六里遺跡から出土した花粉孢子一覧表②	122
表 111 稲荷遺跡から出土した花粉孢子一覧表	123
表 112 プラント・オペール分析対象試料一覧	129
表 113 六里遺跡試料 1 g当たりのプラント・オペール個数	131
表 114 稲荷遺跡試料 1 g当たりのプラント・オペール個数	131
表 115 樹種同定試料一覧及び同定結果	136
表 116 放射性炭素年代測定試料及び処理	138
表 117 測定及び年代校正の結果	138
表 118 鉄津成分分析対象試料一覧	139
表 119 強光 X 線分析による半定量値	140
表 120 EDS 分析結果	140
表 121 西濃地域におけるカマドをもつ窓穴建物一覧表	147
表 122 美濃地域における I b・I c 期の土器埋設遺構	154
表 123 埋設土器の分類と組み合わせ	157
表 124 遺構から出土した織文土器の分類と組成	158
表 125 遺物包含層で出土した織文土器の分類と組成	159
表 126 古墳時代～古代の土器組成	162
表 127 条里塙遺構と併記	168

挿入写真目次

写真11 六里遺跡から発出した花粉化石	127	写真14 稲荷遺跡のプラント・オバール	135
写真12 稲荷遺跡から発出した花粉化石	128	写真15 六里遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	137
写真13 六里遺跡のプラント・オバール	134		

写真図版目次

図版1 六里遺跡・稻荷遺跡周辺の地形	図版30 六里遺跡第2調査面出土遺物⑧	図版62 稲荷遺跡出土遺物⑤
図版2 六里遺跡の土層	図版31 六里遺跡第2調査面川土遺物⑨	図版63 稲荷遺跡出土遺物⑨
図版3 六里遺跡第1調査面検出遺構①	図版32 六里遺跡第2調査面出土遺物⑩	図版64 稲荷遺跡出土遺物⑩
図版4 六里遺跡第1調査面検出遺構②	図版33 六里遺跡第2調査面出土遺物⑪	図版65 稲荷遺跡出土遺物⑪
図版5 六里遺跡第1調査面検出遺構 ③・第2調査面検出遺構①	図版34 六里遺跡第3調査面出土遺物①	図版66 稲荷遺跡出土遺物②
図版6 六里遺跡第2調査面検出遺構②	図版35 六里遺跡第3調査面出土遺物②	図版67 稲荷遺跡出土遺物③
図版7 六里遺跡第2調査面検出遺構③	図版36 六里遺跡第3調査面出土遺物③	図版68 稲荷遺跡出土遺物④
図版8 六里遺跡第2調査面検出遺構④	図版37 六里遺跡第3調査面出土遺物④	図版69 稲荷遺跡出土遺物⑤
図版9 六里遺跡第2調査面検出遺構⑤	図版38 六里遺跡第3調査面出土遺物⑤	図版70 稲荷遺跡出土遺物⑥
図版10 六里遺跡第2調査面検出遺構⑥	図版39 六里遺跡第3調査面出土遺物⑥	図版71 稲荷遺跡出土遺物⑦
図版11 六里遺跡第2調査面検出遺構⑦	図版40 六里遺跡第3調査面出土遺物⑦	図版72 稲荷遺跡出土遺物⑧
図版12 六里遺跡第2調査面検出遺構⑧	図版41 六里遺跡第3調査面出土遺物⑧	図版73 稲荷遺跡出土遺物⑨
図版13 六里遺跡第2調査面検出遺構⑨	図版42 六里遺跡第3調査面出土遺物⑨	図版74 稲荷遺跡出土遺物⑩
図版14 六里遺跡第2調査面検出遺構⑩	図版43 六里遺跡第3調査面出土遺物⑩	図版75 稲荷遺跡出土遺物⑪
図版15 六里遺跡第2調査面検出遺構⑪	図版44 六里遺跡第3調査面出土遺物⑪	
図版16 六里遺跡第2調査面検出遺構⑫	図版45 六里遺跡第3調査面出土遺物⑫	
図版17 六里遺跡第2調査面検出遺構 ⑬・第3調査面検出遺構①	図版46 六里遺跡第3調査面出土遺物⑬	
図版18 六里遺跡第3調査面検出遺構②	図版47 六里遺跡第3調査面出土遺物⑭	
図版19 六里遺跡第3調査面検出遺構③	図版48 六里遺跡第3調査面出土遺物⑮	
図版20 六里遺跡第3調査面検出遺構④	図版49 六里遺跡第3調査面出土遺物⑯	
図版21 六里遺跡第3調査面検出遺構⑤	図版50 六里遺跡第3調査面出土遺物⑰	
図版22 六里遺跡第1調査面出土遺物①	図版51 六里遺跡第3調査面出土遺物⑱	
図版23 六里遺跡第1調査面出土遺物 ②・第2調査面出土遺物①	図版52 六里遺跡第3調査面出土遺物⑲	
図版24 六里遺跡第2調査面出土遺物②	図版53 六里遺跡第3調査面出土遺物⑳	
図版25 六里遺跡第2調査面出土遺物③	図版54 六里遺跡第3調査面出土遺物㉑	
図版26 六里遺跡第2調査面出土遺物④	図版55 稲荷遺跡全貌及び土層	
図版27 六里遺跡第2調査面出土遺物⑤	図版56 稲荷遺跡検出遺構①	
図版28 六里遺跡第2調査面出土遺物⑥	図版57 稲荷遺跡検出遺構②	
図版29 六里遺跡第2調査面出土遺物⑦	図版58 稲荷遺跡検出遺構③	
	図版59 稲荷遺跡検出遺構④	
	図版60 稲荷遺跡検出遺構⑤	
	図版61 稲荷遺跡検出遺構⑥	

第4章 稲荷遺跡の調査成果

第1節 基本層序

1 層序

当遺跡は、六里遺跡と同様な沖積平地上に立地しており、河道や自然堤防など起伏を活かした集落や生産域が営まれていた点についても、同じ事が言える。大きく異なる点は、六里遺跡の集落跡が立地する微高地が西側であったのに対し、三水川に近い東側に立地していることが上げられる。

今回の調査では、最も深く掘削した発掘区西端付近の壁面土層を基準に、I～VI層に基本層序を設定した。

(1) I層

発掘区内の表土を一括してI層とし、東側宅地の土地改良土をI a層、現在の水田耕作土をI b層、その下の水田敷土をI c層として細分した。

I b層は、発掘区全域に認められる。上面の標高は発掘区西端で約19.8m、東端（宅地西側）で約19.7mであり、ほとんど差がない。土色は灰色（5Y4/1）で、小礫や植物遺体を多く含んでしまってない。I c層は、黒褐色（2.5Y3/1）で、ややしまりがある。

(2) II層

圃場整備以前の水田層と考えられる。土壤分析では、イネ科のプラント・オパールを多量に検出した（第5章第1節）。出土遺物は、六里遺跡と同様に破片が多い。

D019グリッド（第160図⑦）以西に認められる。非常に薄く、堆積が途切れる場所もある。また、D014から17グリッド（第160図④・⑤）の間では2層に分層できる（II a・II b層）。いずれも、暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）又はオリーブ褐色（2.5Y4/3）の粘質シルトで、鉄斑やマンガン斑の沈着が顕著にみられる。

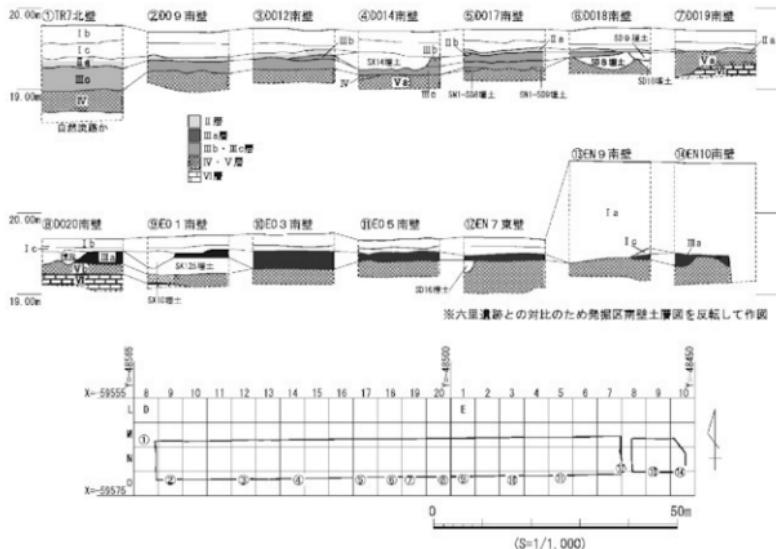
(3) III層

今回の調査において、遺物包含層とした土層である。III b・III c層は、土壤分析によってイネ科のプラント・オパールを多量に検出したため、水田層と考えられる。主に古代から中世にかけての遺物が含まれる。土質等により3層に細分した。

III a層 集落域が立地する微高地上（第160図⑧～⑩）にみられる土層で、上面が遺構検出面であるV b層に土質が似る。III a層上面には、II層がみられない。D019からD020グリッドにかけて、砂礫層（VI層）まで及ぶ搅乱があるため、III b層との先後関係が確認できないが、便宜上「III a層」とした。灰黄褐色（10YR4/2）の粘質シルトで、鉄斑やマンガン斑の沈着が顕著にみられる。ブロック状の混ざりが目立ち、耕作土である可能性は高いが、III b・c層ほど粘性はない。

III b層 D012からD018グリッド（第160図③～⑥）にかけて認められ、その範囲は西がDN・D012から13グリッドの土坑群、東が南北方向の溝SD 9・10グリッドまでであり、これらの遺構との関係が考えられる。土色は灰色（5Y4/1）で、粘性が強い。マンガン斑の沈着は僅かで全体に粗砂が混じるなど、六里遺跡のIII a層と類似点が多い。D012グリッド以西（第160図①～③）はIII b層が無く、

2 第4章 稲荷遺跡の調査成果



第160図 稲荷遺跡土層柱状図

III c 層のみとなって地形が若干低くなる。東側の集落が廃絶した後に、III c 層の水田域を東に拡張した際の土層である可能性がある。

III c 層 D0 8 から D017 グリッド（第 160 図①～⑤）にかけてみられる堆積で、東端は歓溝状遺構群（SN1）と重複している（第 160 図⑤）。暗灰黄色（2.5Y4/2）の粘質シルトで、粘性が強い。耕作の影響か下層との混ざりが顕著に見られる。この層の下層が今回の調査面であるが、集落に関する遺構ではなく、この土層の堆積範囲が集落が営まれていた時期の水田域である可能性がある。

（4）IV 層

D0 8 から D014 グリッド（第 160 図①～⑤）にかけてみられる土層である。オリーブ褐色（2.5Y4/3）の粘土で混じりが少ない。耕作の影響か上層のIII c 層と層界での混ざりが顕著で、層界付近の土壤で行った分析では、5,000 個 / g のプラント・オパールを確認した（第 5 章第 1 節）。試掘確認調査では下層から自然流路と思われる砂層を検出しておらず、V a 層から西に落ち込む流路埋土の一部である可能性もある。

（5）V 層

集落域の立地する微高地の基盤となっている土層で、土質から 2 層に細分できる。細分した両層の先後関係は搅乱によって確認できなかったが、便宜上、搅乱の西側を「V a 層」、東側を「V b 層」とした。なお、発掘区中央付近の遺構や遺物包含層から繩文土器が出土しており、本来当該層に含まれていたと考えられる。

V a層 D014からD019グリッド(第160図④～⑦)にかけて確認した。土色は暗灰黄色(2.5Y4/2)で、混じりが少ない。

V b層 発掘区の東半全域(第160図⑧～⑩)にみられる。検出したすべての堅穴建物がこの土層を基盤としている。色調は暗灰黄色(2.5Y4/2)で、上層であるⅢ a層との層界が混ざりのため不明瞭である。河床礫層と思われるVI層の影響で、礫が多い部分もみられる。礫層の上面を平坦化するよう堆積した、河川の堆積物と考えられる。

(6) VI層

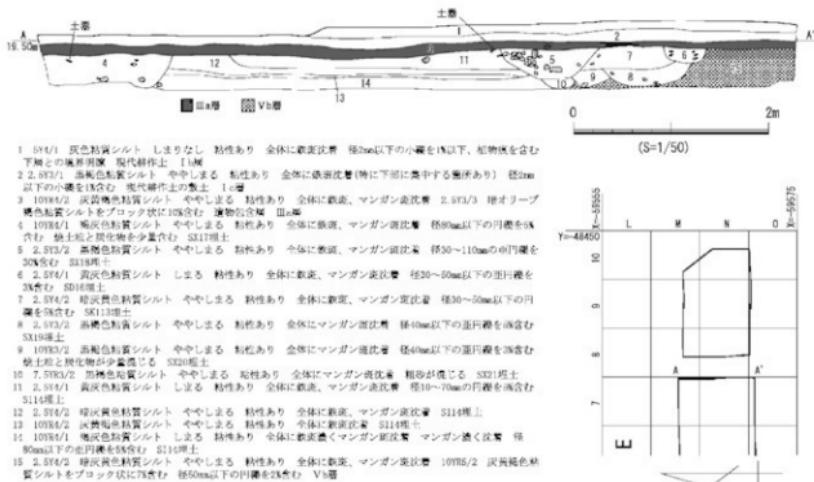
D019グリッド以東で確認した。特にD019からE01グリッド(第160図⑦～⑨)で、上面が最も高くなり、東へ向かって徐々に低くなる。D019と20グリッドの間にある搅乱では、当該層の上面が露出していた。また、図示していないが、発掘区東端の宅地跡では、土地改良の影響で当該層まで削平された部分も見られた。

2 調査面と遺構検査面について

今回の調査における調査面は、Ⅲ層を除去後に露出した面である。D014からD016グリッドについては、Ⅱ層除去後にSM1を検出したことから、2面の調査を実施している。

遺構検査面は、六里遺跡と同様に遺構の所属する土層を確定できない部分もあることから、遺構検査面を以下のとおり整理した。

- ・Ⅱ層除去後のDN14～D016における遺構検査面…「Ⅲ層上面」
- ・Ⅲ層除去後のIV層が基盤となる遺構検査面(DM～D014グリッド以西)…「IV層上面」
- ・上記以外のⅢ層除去後の遺構検査面…「Ⅲ層基底面」



第161図 発掘区壁面土層図

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構の概要

(1) 概要

今回の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけての遺構を中心に検出した。遺構種別毎の数量は表71のとおりである。第1調査面の遺構群より時期的に新しいと考えられる遺構を、III層上面から検出したため（第4章第4節）、表では別に数量を表示した。古墳時代から平安時代にかけての集落跡と溝状遺構の他、畠溝状遺構群や水田城に関する遺構を検出した。遺構の時期決定や掲載に関しては、六里遺跡と統一した（第3章第2節）。

(2) 遺構の分類

分類や略記号は、六里遺跡と統一した。ここでは、六里遺跡と異なる遺構の特徴のみを記載する。

堅穴建物（S I） 上屋が想定できる諸条件を供える遺構を堅穴建物とした。当遺跡の堅穴建物はカマドが残存しているものが多く、発掘区壁面付近で検出した遺構で主柱穴が確認できなかった場合でも、カマドが認められる場合は堅穴建物に含めた。また、遺構の重複により残存状態が悪い場合でも、柱穴や壁際溝、整地土が確認できる遺構は堅穴建物とした。ただし、堅穴建物と同規模の堅穴状の掘り込みでも、上記の条件を満たさない場合は、SKとした。

柱穴（S P） 柱痕跡や柱の当たりが確認でき、柱穴と推定できるものを本類に含めたが、柱穴の建物・工作物と考えられる配置は確認できなかった。

畦畔（S M） 当遺跡においてはIII層上面で検出した大畦畔の痕跡のみであるが、これに伴うと考えられる杭痕を、堅穴建物と同様に「SM 1-P ●」として示した。

杭列（S A） III層上面で検出した杭痕の内、SM 1に伴わず列をなすものについてSAとした。

(3) 遺構の時代・時期

今回の調査における時期区分は、六里遺跡・稻荷遺跡と合わせて、下記のとおりとした。

I a期 繩文時代後期

I b期 繩文時代晚期（繩文土器編年：稻荷山式）

I c期 繩文時代晚期（繩文土器編年：西之山式）

I d期 繩文時代晚期（繩文土器編年：五貴森式）

I e期 繩文時代晚期（繩文土器編年：馬見塚式以降）

II期 弥生時代

III期 古墳時代前・中期（土師器編年：廻間II式～宇田II式）

IV a期 古墳時代後期（須恵器編年：MT15～TK43型式）

表71 稲荷遺構種別遺構検出数

調査面	SM	SA	SI	SD	SN	SP	SK	合計
第1調査面			18	13	1	10	118	160
(III層上面)	1	1		5			10	17
合計	1	1	18	18	1	10	128	177

- IV b 期 古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯II期後半、蘇原6号窯併行期）
- IV c 期 古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯III期前半、須衛65号窯併行期）
- IV d 期 古墳時代後期（須恵器編年：美濃須衛窯III期後半、那加5号窯併行期）
- V a 期 奈良時代前半（須恵器編年：美濃須衛窯IV-1期）
- V b 期 奈良時代後半（須恵器編年：美濃須衛窯IV-2・3～V-1期前半）
- VI a 期 平安時代前葉（須恵器・灰釉陶器編年：美濃須衛窯V-1期後半・K-90号窯式期）
- VI b 期 平安時代中葉（灰釉陶器編年：0-53号窯式期）
- VI c 期 平安時代後葉（灰釉陶器編年：H-72号窯式期～百代寺窯式期）
- VII 期 鎌倉～室町時代（山茶碗編年：3型式～11型式・古瀬戸系施釉陶器編年：前～後期）
- VIII 期 戦国時代・安土桃山時代（大窯編年：1～4期）
- IX 期 江戸時代以降

（4）遺構一覧表

記載内容は、六里遺跡と統一した。

2 遺物の概要

（1）概要

今回の調査では、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器などの土器と、石器・石製品、金属製品等が出土した。この内、土器の出土点数は表72のとおりである。なお、「遺物包含層（II～III層）」としたものはII・III層の区別なく掘り下げた際の出土土器である、また、遺物包含層（IV・V層上面）」としたものは、遺構検出作業で出土したもので本来はIII層に含まれるが、一定量が出土していることからIII層と区別して表示した。この、「IV・V層上面」とした出土土器は、「III層」としたものより中世以降のものが多く、遺構検出面に近い状況を表していると思われる。遺物包含層では中世以降の遺物が比較的多く含まれる一方、遺構ではIII層上面を除いて古代以前の遺物のみが出土しており、今回第1調査面で検出した遺構群が、中世以前に廃絶した状況を示すと考えられる。また、六里遺跡とは異なり、明確に弥生時代と判断できる土器が出土していないが、縄文時代晩期と考えられる土器はわずかに認められる。

これらの遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。

（2）出土遺物の器種・分類

各遺物の分類は、六里遺跡と統一した。

縄文土器 遺物包含層や遺構埋土中からわずかに出土しているが、二次的な混入の可能性が高い。いずれも摩耗が著しく、時期や器形が判別できる個体は少ない。図示したものについては、六里遺跡のIV・V層にも含まれるI e期に属すると考えられる。

土師器 古墳時代から中世にかけて製作された素焼きの製品を、すべて土師器と表記した。器種は古墳時代の壺、古代の壺や鍋、瓶、焼塙土器、ロクロ土師器、中世の鍋や土師器皿がある。古墳時代後期から古代にかけての壺は、六里遺跡とは異なりB類が目立つ。

須恵器 美濃須衛窯IV-2～V-1期と考えられる須恵器がまとまって出土している。六里遺跡で

6 第4章 稲荷遺跡の調査成果

表72 稲荷遺跡出土土器点数

種別	縄文土器	土師器	須恵器	灰釉陶器	山基陶	中近世 陶磁器	合計
重機掘削・排水渠等	17	568	845	229	61	90	1,810
出土層位不明・堆土等	1	21	42	15	6	9	94
遺物包含層（Ⅱ層）		364	551	167	122	118	1,312
遺物包含層（Ⅱ～Ⅲ層）		244	301	29	18	9	601
遺物包含層（Ⅲ層）	5	1,324	1,536	472	249	37	3,623
遺物包含層（IV・V層上面）	5	1,762	1,152	179	13	3	3,114
試掘トレンチ		128	165	32	10	6	341
擾乱		3	6				9
SI	3	1,174	1,115	124			2,416
SD	4	105	143	35			287
SN	4	2	15	5			26
SP		53	31	6			90
SM		28	13	8	8		57
SK		281	195	20	2	1	499
その他の廣構		2					2
合計	39	6,049	6,110	1,321	489	273	14,281

は弥生土器・土師器の出土量が須恵器の約5倍にもなるが、当遺跡では表72で示すように、ほぼ同数である。器種は美濃須衛産の壺身B2類、壺身C類、壺蓋C類が大半である。ただし、遺構の少ないIV期の壺身・壺蓋A類も少なからず出土しており、さらに時期の降るものも認められる。六里遺跡では、5世紀以降の遺構・遺物が認められ、当遺跡においても何らかの活動があったと考えられる。

灰釉陶器 SI 1等では、美濃須衛V期の遺物と共に共存して、K-90号窯式期の灰釉陶器が出土した。また、時期の降る0-53号窯式期の灰釉陶器も堅穴建物(SI 3等)から出土した。K-90号窯式期に属するとしたものは、器壁が薄手で刷毛塗りで施した灰釉の発色が比較的明瞭である。器種には碗・皿類、瓶類などがあり、耳皿(665)や手付瓶(667)など特殊な器種も含まれる。0-53号窯式期に属するとしたものは、器壁が厚手で灰釉を漬掛けするもので、碗類の高台端部にやや丸みがある。器種は碗・皿類が多く、体部下半が張る深碗の器形をとるものや、段皿も認められる。なお、当遺跡では、0-53号窯式期以降の灰釉陶器は極わずかである。

山茶碗 六里遺跡と同様、III層内で尾張型のものが目立ち、第7型式以降で東濃型も認められる。器種は碗又は皿であるが、尾張型の片口鉢もわずかにみられる。

中近世陶磁器 古瀬戸系施釉陶器、大窯、瀬戸・美濃、貿易陶磁器などがある。いずれも、III層(IV・V層上面を含む)より上層に含まれる。

土製品 III層から布目痕が認められる平瓦が1点(913)、表土から轍の羽口の可能性がある細片が1点出土している。

石器・石製品 堅穴建物と遺物包含層から、砂岩製と泥岩製の砥石が出土しているほか、SI 7で、花崗岩製の台石(724)が出土している。台石はSI 6でも花崗閃緑岩製のものが出土しているが、破片のため図示しなかった。これらについては古代以降の遺物である可能性がある。この他、929のような磨石・叩石類、チャートの微細な連続剥離をもつ剥片(MF)が出土しており、縄文土器と同様に二次的な混入と考えられる。なお、六里遺跡の第3調査面で出土したサヌカイト製や下呂

石製の剥片石器は出土しなかった。

木製品 SM 1 の遺構の構造材として、加工のある杭が 3 点出土した。

金属製品 銅製の鏡貨 1 点、煙管 1 点、鉄製品 6 点、鉛玉 1 点がある。用途不明の鉄製品が 1 点(925)Ⅲ層で出土した以外は、いずれも II 層より上層から出土した。

(3) 遺物観察表

記載内容は、六里遺跡と統一した。

第3節 古墳時代及び古代の遺構・遺物

1 積穴建物

SI 1 (第 162 図～165 図)

検出状況 EM20 から EN 1 グリッドにかけて検出した。遺構検出作業の初期段階で、炭化物を多く含む堆積（2 層）が露出していた（第 RR 3 図）。当初は焼失建物の可能性を念頭において調査を進めていたが、まとまった炭化材は検出できなかった。長軸方位は N-8° -E でわずかに東へ傾く。本遺構の南側で SI 2 と重複し、これより新しい。また、床面上から SD14 を検出した。

堆積状況 埋土は Vb 層に類似する黄灰色の粘質シルトと、炭化物及び焼土を大量に含む黒褐色の粘質シルト（同 2 層）からなる。2 層は掘方の中央部に堆積しており、3 層の堆積が廃絶後初期段階に流入して残った窪地状の部分に、炭化物を含む 2 層が堆積したと考えられる。

床面・掘方 床面はしまりが無く、床面遺構を検出した時点で基盤層に含まれる礫が露出した。床面上で重複する SD14 を検出したため、貼床や整地土はないと判断した。

付属遺構 壁際溝は掘方壁面に沿って検出し、カマド設置位置のみ途切れる。壁際溝の断面形は半円形である。

主柱穴とした遺構 (P 1～4) は、P 3 を除いて浅い窪み状であり、いずれも柱痕跡などの柱穴の特徴は確認できなかったが、その配置から主柱穴とした。P 1・2・4 は形状や埋土が類似する。P 3 は他の主柱穴より径が小さく、最下層に黒褐色の粘性が強い土が堆積していた。

カマドは、掘方北壁の中央東寄りに位置する。炭化物・焼土混じりの堆積土を除去したところ、炭化物の広がりと燃焼部と考えられる被熱範囲（4 层）、北壁から延びる袖の一部（7～10 層）を検出した。また、被熱範囲北側の壁際から小穴を検出しており、支脚柱が存在した可能性がある。西側袖部の下面に焼土混じりの埋土をもつ小穴があり、埋土上面の一部が被熱範囲に含まれる。この他、カマド設置箇所から掘方の外へ約 1.1 m 北に延びる煙道を検出した。非常に浅いため、上面が削平されていると考えられる。遺構の北端部はやや窪んでおり、煙道の端部と考えられる。

遺物出土状況 掘方北西部の埋土中から、ほぼ完形の灰釉陶器耳皿（665）が出土した。また、東壁中央の壁際溝上面から、複数の亜角礫と土師器甕や須恵器、灰釉陶器がまとまって出土した。土師器甕（668）は、口縁部から底部までが破碎した状態で出土した。壁際溝の壁面に沿うように破片が散布しており、口縁部から体部上半の破片は南側にまとまっていた。カマドからは、

3層上面で灰釉陶器の壺類(659・660)、煙道部北端から須恵器の碗(653)が出土した(第164図)。

出土遺物 SI 1 及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器、石器1点が出土した。この内、24点を図示した。

647～658・661は須恵器である。648～650は坏蓋C類で、647はC類に類似するが口縁端部のかえりがほとんどみられない。651は坏身B2類で、器高が低く口縁部が大きく開く。底面は回転ヘラ切り痕が残る。652は坏身C類である。底面はヘラ切り痕がナデ消され、ヘラ記号がみられる。653～656は碗である。653はカマド煙道部内から出土しており、破片ではあるが、口縁から底部までの形態がわかる。口縁部が緩やかに外反する。657は皿である。体部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。底部内面は使用による摩耗がみられる。底面には回転ヘラ切り痕が明瞭に残り、焼成前に刻まれた2条の沈線(ヘラ記号)が認められる。658は短頸壺と考えられる。661は壺である。器壁の外面にタタキ目、内面に当て具痕が明瞭に残る。体部中程に指頭成形痕が残る把手が付されている。

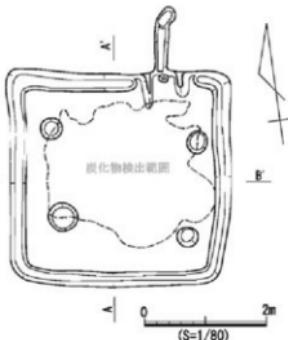
659・660・662～667は灰釉陶器である。662・663は碗である。662は器壁が薄く、灰釉が刷毛塗りされている。口縁端部が強く外反する。663は器壁が厚く、灰釉の発色がほとんどみられない。664は皿である。灰釉や器壁の厚みなどは662に似る。665は耳皿である。器壁が非常に薄い。ロクロで成形した皿の口縁部を折り曲げて、耳皿の形態を作出している。659・660・666は壺・瓶類である。660は659とともにカマド内から出土しており、同一個体の可能性もある。666は外面全体に灰釉を施す。667は手付瓶の把手である。粘土紐を面取りし、細い板状にして器壁に貼り付けたと考えられる。上端には自然釉が付着する。

668～670は土師器である。668・669は甕B類である。668は小型品で、器高は15cm程度である。外面には煤が付着しており、煮炊きに使用したと思われる。底面は平底で胴の上半に最大径をもち、口縁部はくの字に屈曲する。胴部外面は斜方向、口縁部内面には横位の粗いハケを施す。胴部と底部ではハケの方向が異なっており、底部側の方が後から施されている。この部分はやや器壁が厚くなっている、底部と胴部をつなぎ合わせた痕跡と考えられる。底面の凹凸から、底面の粘土板は粘土紐を巻いて成形した可能性がある。670も668と同様くの字に外反する口縁をもつが、屈曲部分が厚く端部が面取りされていることから、鍋と考えられる。

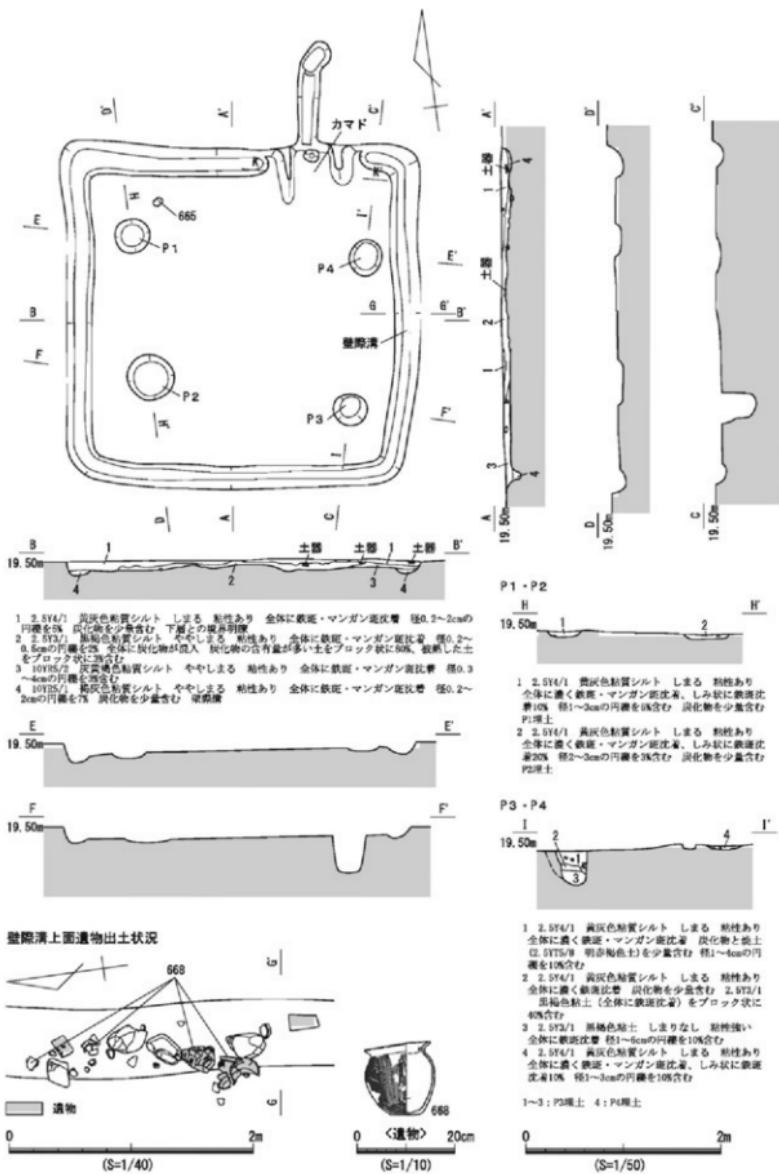
所属時期 出土した須恵器は美濃須衛窯V-1期、灰釉陶器はK-90号窯期のものが大半であることから、VIa期に位置づけられる。

SI 2 (第166・167図)

検出状況 EN 1からE0 1グリッドにかけて検出した。平面形が隅丸方形であると考えられるが、南半分が発掘区外に延びるため全容は不明である。検出した範囲の埋土はV a層に酷似してお



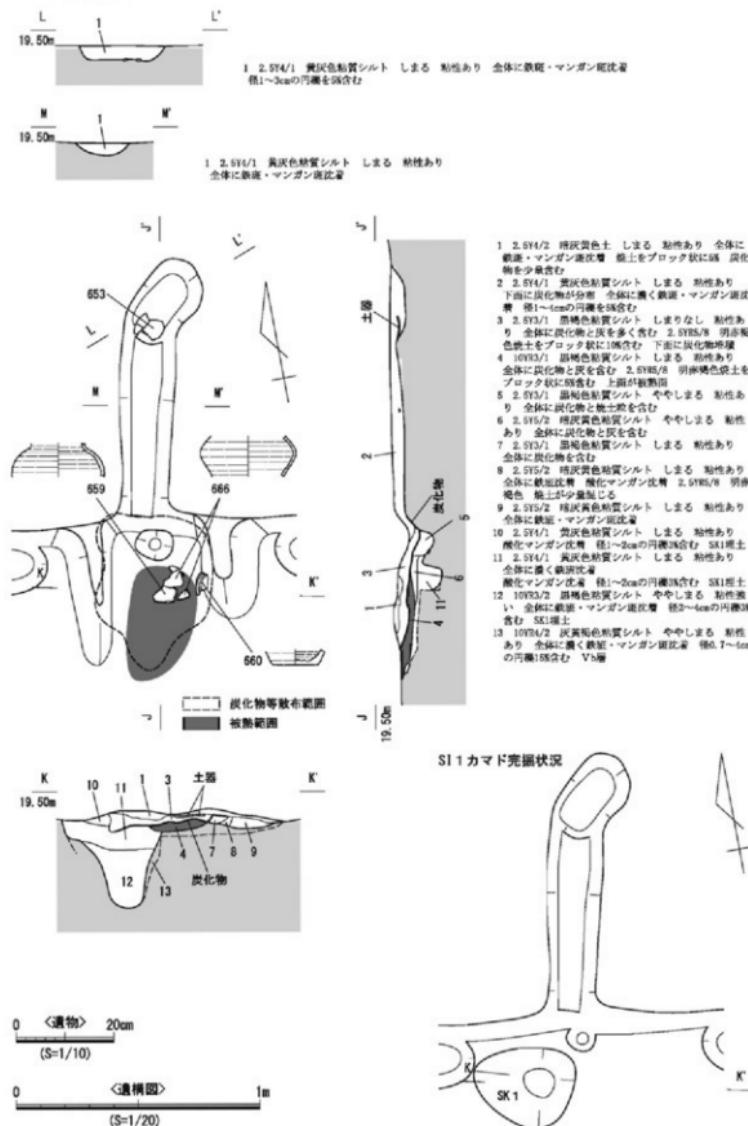
第162図 SI 1 埋土炭化物検出範囲



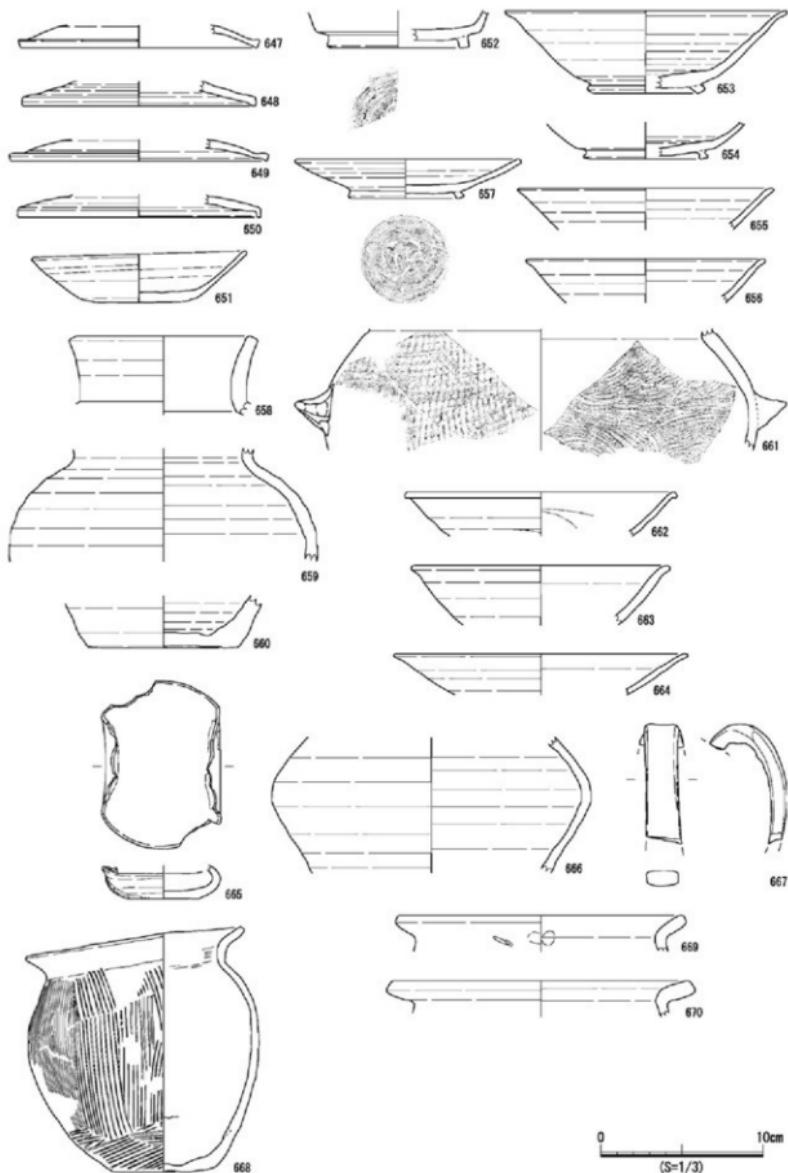
第163図 SI 1 遺構図①

10 第4章 稲荷遺跡の調査成果

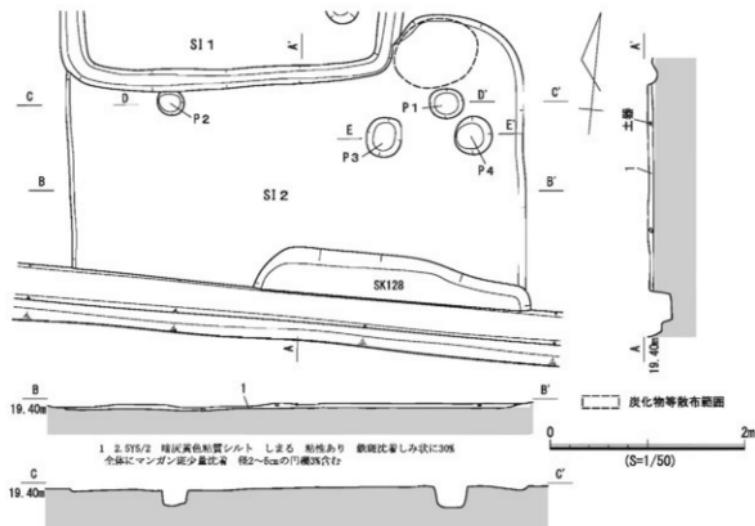
SI 1 カマド検出状況



第164図 SI 1 遺構図②



第165図 SI 1 出土遺物



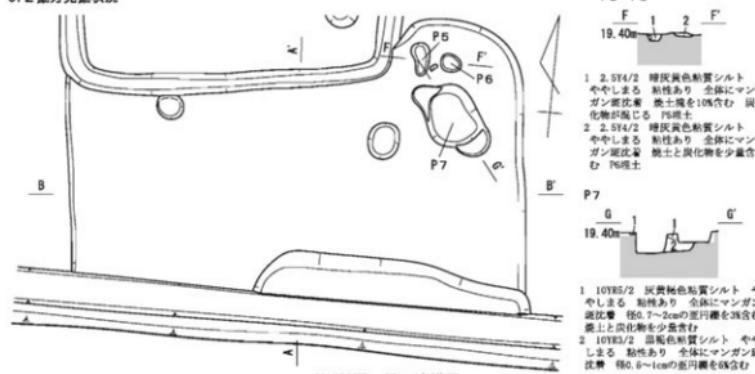
P1-P2

1. 10YR6/2 暗灰褐色粘質シルト しまる 黏性あり 全体に鉄質・マンガン斑状有
2. 10YR6/1 黑褐色粘質シルト しまなし 剥離性あり 底を大量に含む 径1~4cmの円錐孔7%含む 土器を含む
3. 10YR6/1 黑褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり 全体に鉄鉱化しみ状に30%含む 地下水との間隔10cm含む
4. 10YR6/2 暗灰褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり 全体に濃く鉄質・マンガン斑状有
5. 10YR5/2 暗褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり 土体に鉄鉱化しみ状 1cm2~8cmの円錐孔10%含む
1~3 : P1堆土 4~5 : P2堆土

P3-P4

1. 5Y6/2 暗灰褐色粘質シルト しまる 黏性あり 全体にマンガン斑状有
2. 10YR6/1 暗灰褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり 全体に鉄質・マンガン斑状有 10%含む
3. 2. 5Y6/2 暗灰褐色粘質シルト しまる 黏性あり 全体に鉄鉱化しみ状に30%含む 土器を含む
4. 10YR6/1 暗灰褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり 全体に鉄質・マンガン斑状有 10%含む
1~2 : P3堆土 3~4 : P4堆土

SI 2 掘方完掘状況



第166図 SI 2 透構図

り、検出当初から SI 2 より古い SD14 の一部が露出していたことから、埋土が大きく削平されていたと考えられる。長軸方位は N-84° -E で、SI 1 とほぼ直交する。SI 1 及び SD14 と重複しており、SI 1 より古く、SD14 より新しい。

堆積状況 埋土が大きく削平されていたため、詳細は不明である。

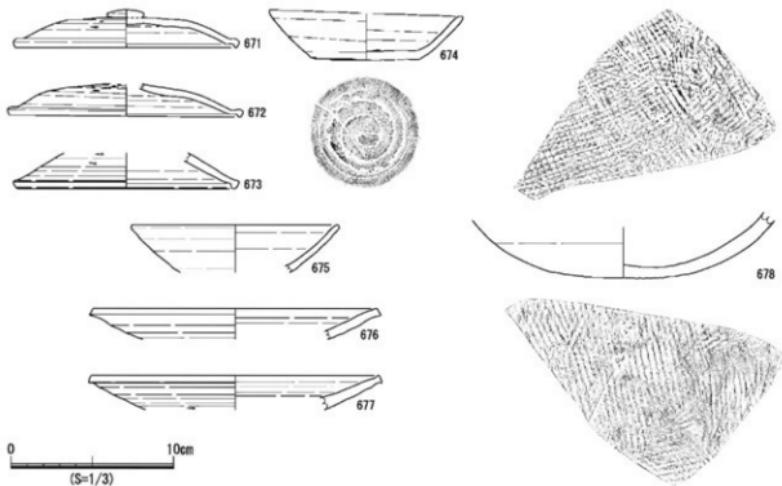
床面・掘方 第166図下図は、北東角付近で P 1 を検出した段階で一度掘削を終了し、その後周囲の土層確認によって埋土が残存していることを確認し、再度掘り下げた後に検出した遺構の図である。このことから、主柱穴のある床面が存在しており、SK 3～5 を検出した面が掘方底面と考えられる。

付属遺構 主柱穴とした P 1・P 2 は、柱痕跡は確認できなかったが、形状や掘方がよく似ており、P 1 の底面には粘土が堆積していた。遺構の北東角付近から焼土と炭化物の集積を検出したが、カマドの痕跡であるかどうかは不明である。

遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI 2 及びその付属遺構からは、縄文土器、須恵器、土師器が出土した。この内、8 点を図示した。

図示した遺物はいずれも須恵器である。671～673 は坏蓋 C 類である。いずれも体部中程から頂部にかけて回転ケズリ調整されている。674・675 は坏身 B 2 類である。674 は青みがかった色調で、美濃須衛窯産ではない可能性がある。底面に明瞭な回転糸切り痕が残り、1 条のヘラ記号が付される。676・677 は盤である。ともに口縁端部が直線的に開き、端部が面取りされる形態をとる。678 は甕の底部である。底面部分が僅かに平らになるが、丸底に近い。外面にタタキ目、



第167図 SI 2 出土遺物

内面に当て具痕が残る。

所属時期 出土した須恵器は美濃須衛窯V-1期に属すると考えられ、埋土中に灰釉陶器が含まれないことからV b期に位置付けられる。

SI 3 (第168~170図)

検出状況 EN 2グリッドで検出した。平面形は方形である。周囲の堅穴建物より若干規模が小さく、長軸方位がN-77°-Eである。SI 4と重複し、これより新しい。

堆積状況 黄灰色の粘質シルトが堆積しており、基盤層との識別は容易であった。

床面・掘方 硬化した貼床はみられないが、主柱穴と思われる遺構を検出した面を床面とした。掘方の埋土は、北西-南東の対角線を境にして、土質が異なる(第168図3・4層)。掘方完掘後、底面から4基の土坑(P 6・8~10)とともに、SI 4の主柱穴の可能性がある掘り込み(SI 4-P 4)を検出した。

付属遺構 床面の壁際で検出した瘤み状の遺構4基を主柱穴(P 1~4)とした。柱痕跡など柱穴の特徴は確認できなかったため、配置から判断した。

カマドは、燃焼部と思われる被熱痕と掘方の東壁面から伸びる袖の一部を検出した。東壁に張りだす部分は煙道部と考えられるが、この部分には、カマドの構造材と思われる土とともに被熱していない円礫が入れ込まれていた(I-I' 1・3・4層)。礫は径20cmを超えるものが4個、少し小さめなものが3個あり、埋土上部に集中していた。これらと同種の礫が、カマドに隣接するP 5と、埋土中から2個出土した。燃焼部は検出した袖部の間に位置する。土層図から、カマドの下部土坑の埋土上面(H-H' 6層)が被熱したと判断した。

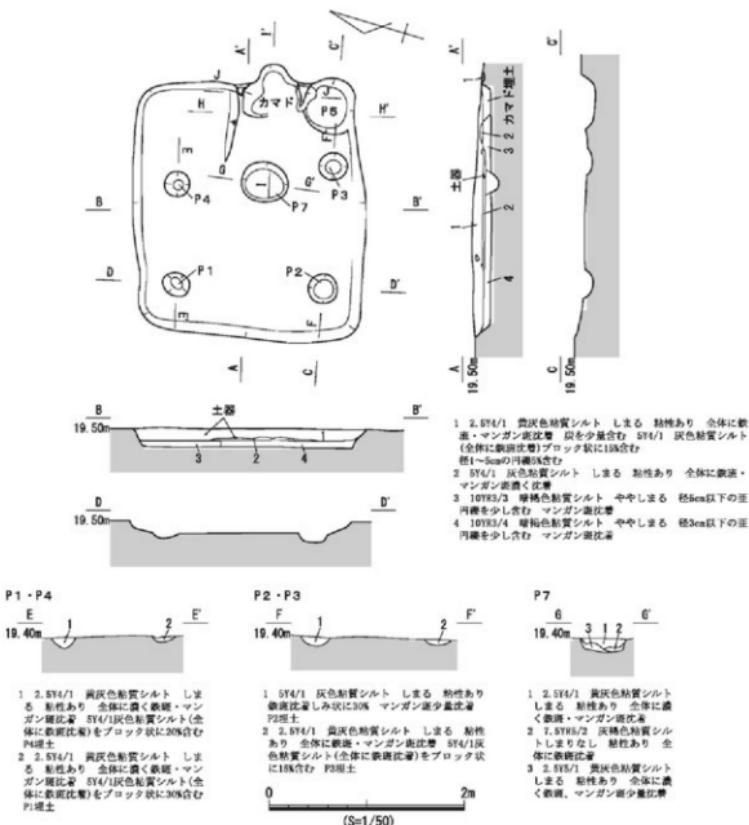
この他、床面上と掘方底面で土坑を検出した。P 5はカマドに接して掘り込まれており、北側の肩が袖部と一体化している。貯藏穴である可能性がある。

遺物出土状況 カマドやその周辺から、灰釉陶器の完形に近い個体がまとまって出土した(第169図688~692)。

出土遺物 SI 3及びその付属遺構からは、繩文土器、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、16点を図示した。

679~687が須恵器である。679・680は坏蓋A類である。ともに口縁部と体部に明瞭な境がみられない。679は体部外面が磨耗している。681・682は坏蓋B類である。内面に短いかえりを有するが、682はかなり口縁端部に近い位置に付される。683は坏蓋C類である。体部上半に回転ヘラケズリ調整を施す。684は坏身A類で、短い口縁部が内傾する。685は坏身C類である。体部から口縁部にかけて直線的に開く。高台は残存していない。686は盤である。口縁端部が上方に短く折り返され、底面のやや外側に高めの高台が付される。687は甕の口縁部破片であるが、焼成不良により全体が磨耗している。

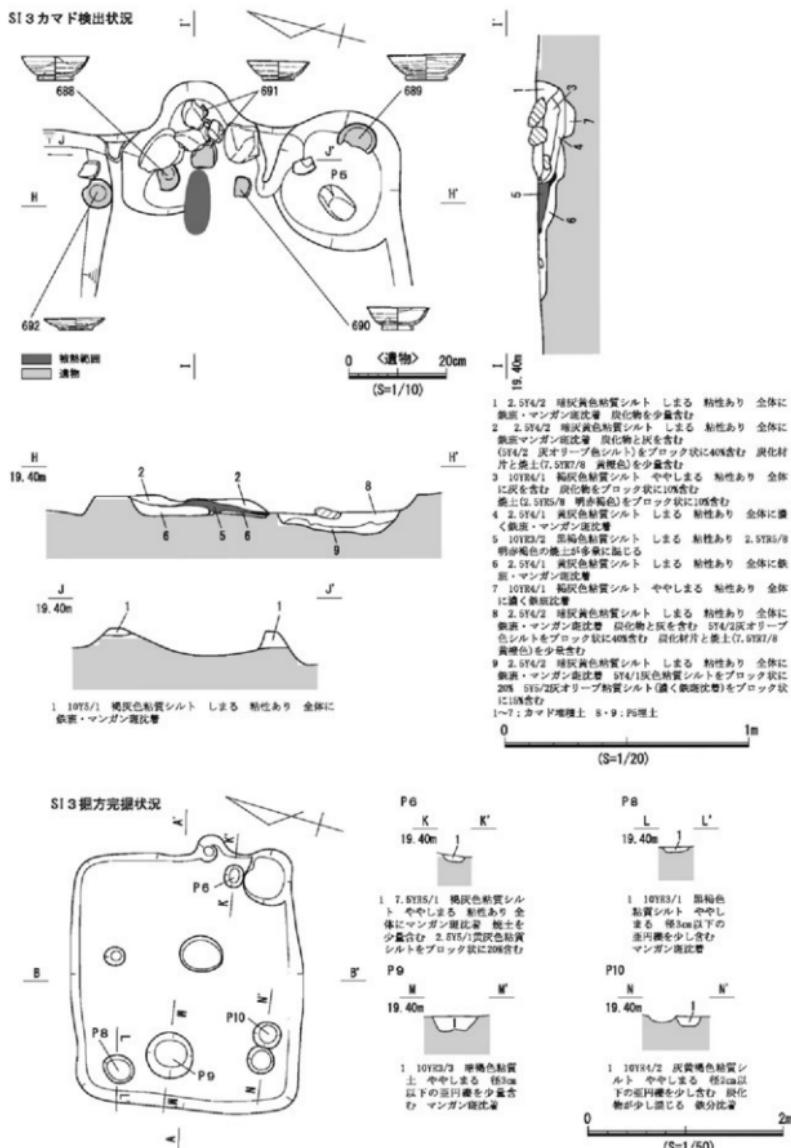
688~694は灰釉陶器である。688と689は碗である。688は体部に丸みがあり、口縁部の外反がほとんどみられない。689も同様であるが、径が大きい。また688は体部外面にヘラケズリ調整がみられるが、689は回転ナデ調整のみである。689の底面には、回転糸切り痕が明瞭に残る。灰釉はともに漬け掛けである。690は、比較的高い高台と外反する口縁端部が特徴の深碗と考えられる。灰釉を漬け掛けで施す。691は碗であるが、高台が低く角張る特徴がある。全体的な



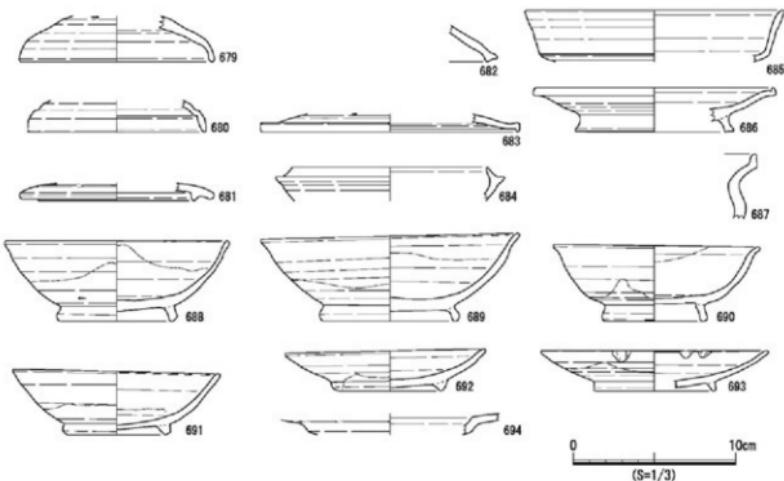
第168図 SI 3 遺構図①

器高も低い。灰釉を漬け掛けで施す。692・693は皿である。692は内面に焼成時の付着物が著しく付着する。693は口縁端部に意図的な瘤みが付されており、輪花皿と思われる。692よりやや高めの高台が付される。694は段皿の体部である。内面に灰釉を施すが、破片であるため詳細は不明である。

所属時期 墓土中の須恵器は破片が多く時期にまとまりがないことから、混入と考えられる。一方灰釉陶器は完形に近い個体が多く、カマド付近に集中することから、竪穴建物廃絶時に遭棄されたと思われる。出土した灰釉陶器が0-53号窯式期に属すると考えられることから、VI b期に位置付けられる。



第169図 SI 3遺構図②



第170図 SI 3出土遺物

SI 4 (第 171 ~ 174 図)

検出状況 EM 2 から EN 3 グリッドで検出した。平面形は、東西方向に広い長方形である。長軸方位は N-72° -E である。SI 3 と SI 5、土坑列 4 の SK51 ~ 53 と重複し、これらより古い。

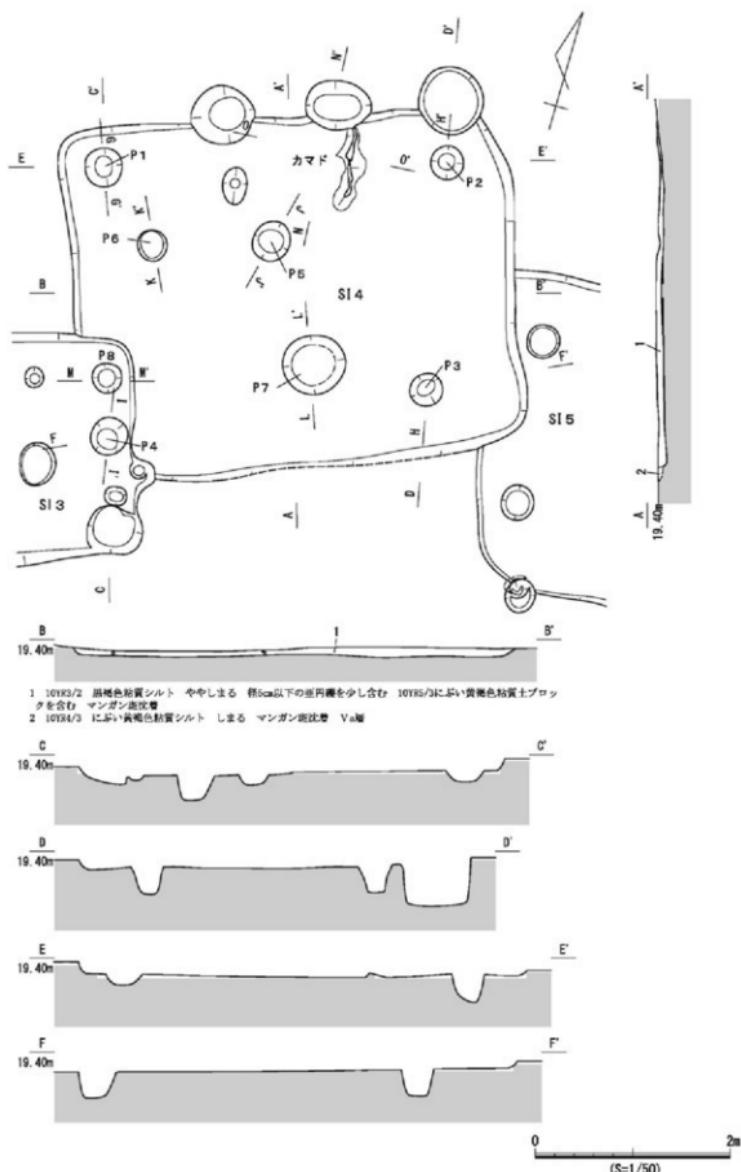
堆積状況 黒褐色の粘質シルトが堆積している。

床面・掘方 貼床や整地土はみられず、主柱穴は掘方底面に直接設置されていた。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構 掘方底面で検出した遺構の内、その配置から 3 基を主柱穴 (P 1 ~ 3) とした。また、SI 3 の掘方底面で検出した遺構の内、SI 4 の掘方に含まれることが想定される 2 基を本遺構の付属遺構とし、その内 1 基を主柱穴とした (P 4)。P 2 ~ 4 は規模が似ており、P 2 には柱痕跡と思われる土層がみられる (第 172 図)。

カマドは掘方北壁中央のほぼ中央に設置されている。燃焼部と思われる被熱痕と東側の袖の一部などを確認した。被熱痕は残存する袖部の西側に位置し、掘方底面や P 9 の上面が熱を受けている。この被熱痕の北側に、P11 を掘方とする立石があり、検出面から上に約 13cm 露出していた。支脚柱の可能性があるが、明確な被熱の痕跡は確認できなかった。残存する袖部の南端からは、被熱した長楕円礫を検出した。長軸の長さが約 35 cm ある大型礫で、カマドの構造材として用いられていた可能性がある。袖部の除去後、7 基の小穴 (P10 ~ 15) を検出した。どの土坑の埋土にも焼土や炭化物が混じるが、P11 以外はカマドとの関係は不明である。この他、掘方底面で検出した土坑 (P 5 ~ 8) についても、性格は不明である。

遺物出土状況 カマドの被熱痕上層から、土器器蓋の口縁部から頸部にかけての破片がまとめて出土した (第 172 図 697)。体部から底部の破片は出土していない。



第171図 SI 4 遺構図①

出土遺物 SI 4 及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、3点を図示した。

695・696は、須恵器の壺蓋A類である。ともに口縁部と体部に明確な境界が無い。695の体部上半には、回転ヘラケズリ痕が残る。697は土師器の甕A類である。体部外面は斜方向、内面に横位の同様な工具によるハケ調整を施す。口縁部内外面を横ナデ調整し、ハケ目をナデ消す。口縁端部を面取りし、上方に摘み上げる。体部上半の内面には、コゲが付着する。

所属時期 重複関係が周囲の遺構の中では最も古い。出土した須恵器壺蓋は破片であるため明確ではないが、IV b期に位置付けられる。

SI 5 (第175～178図)

検出状況 EM 3からEN 3グリッドで検出した。遺物包含層の掘削を行った時点で炭化物を多く含む堆積と集積した須恵器等の破片を確認したが、後の遺構検出によって、SI 5の北壁中央に近い埋土上面に位置することが判明した。平面形は、やや歪んだ方形で、煙道部がやや突出している。長軸方位はN-7°-Wである。掘方の北西でSI 4と重複し、これより新しい。

堆積状況 黒褐色の粘質シルトが堆積していた。

床面・掘方 床面の硬化や整地土は確認できなかった。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構 掘方底面で検出した遺構の内、その配置から4基を主柱穴(P 1～4)としたが、いずれも浅い窪み状の遺構である。また、掘方底面の南東隅と中央付近から土坑(P 5・6)を検出したが、性格不明である。

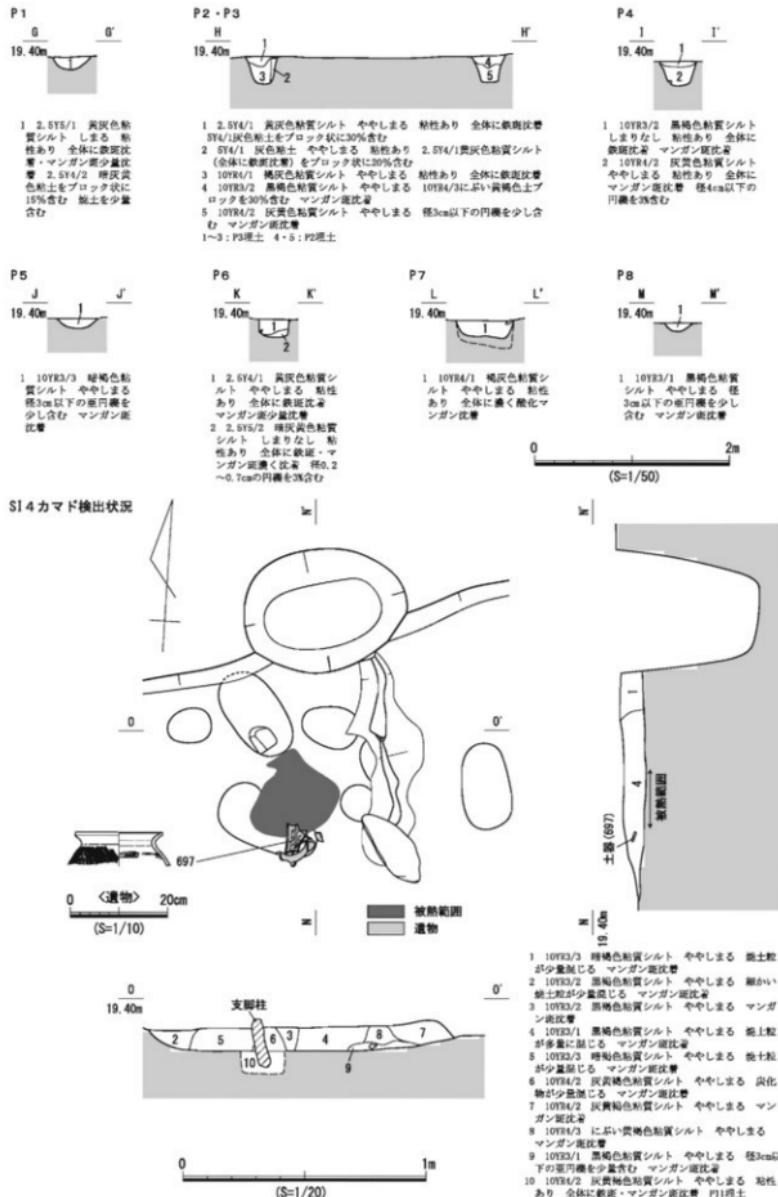
カマドは、掘方北壁のやや東に寄った位置から検出した。当該位置には、SI 5を検出した段階ですでに埋土上面に炭化物が集中していた。破却された構造材と思われる堆積を除去後、袖の一部と被熱痕、炭化物の広がりを検出した。被熱痕は2箇所あり、南側が燃焼部、北側が被熱した煙道部と思われる。袖部にも円形の焼土がみられるが、断面図から、モグラ穴あるいは植物痕に焼土が入り込んだものである可能性が高い。煙道部が掘方北壁の外へ0.15m程度突出している。袖部除去後には3基の土坑(P 7～9)を検出した。この内、P 9はカマドの焚口正面にあたり、カマドと何らかの関係があった可能性はあるが、埋土に炭化物が混入するなどの特徴はみられなかった。

遺物出土状況 掘方北西に近い位置の埋土上面から、須恵器や灰釉陶器がまとまって出土した。遺構検出作業の際にすでに露出していたため、遺物包含層出土遺物として取り上げた破片も多い。出土状況から、SI 5の埋没過程で、窪地状になった遺構内に遺棄されたと考えられる。出土位置にまとまりがあるものは(第175図)同時に遺棄された可能性があるが、完形になる固体は認められない。猿投産の須恵器の甕(704)や平瓶(702)、灰釉陶器の長頸瓶(703)や小瓶(706)など、特徴的な遺物が出土している。なお、器面がはざるように割れているものが多いことから、二次焼成を受けている可能性がある。

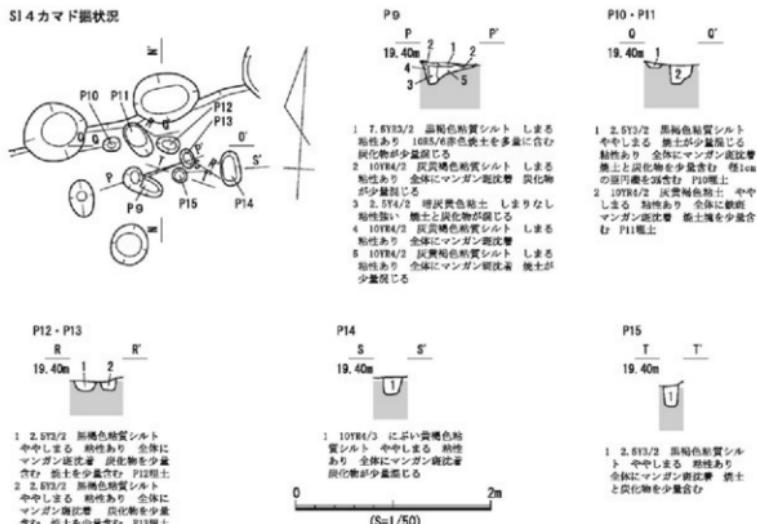
出土遺物 SI 5(埋土上面含む)及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、10点を図示した。

698～702・704は須恵器である。698は壺蓋C類で、カマドから出土した。699は壺身A類である。

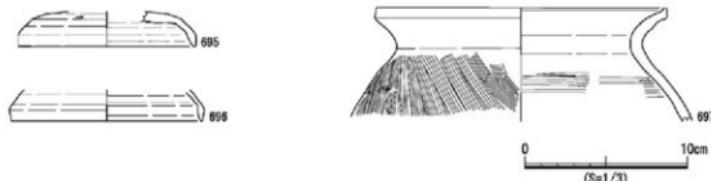
20 第4章 稲荷遺跡の調査成果



第172図 SI 4 遺構図②



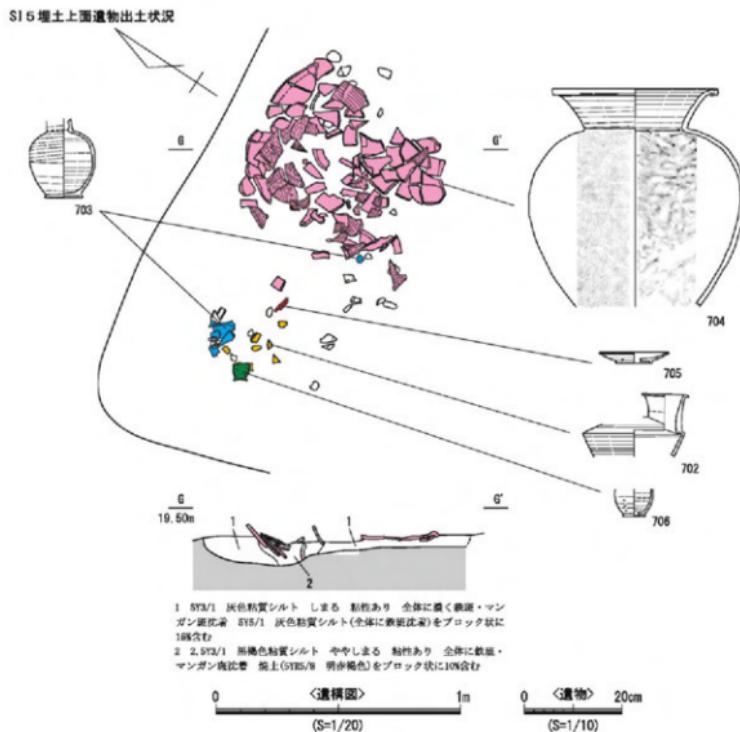
第173図 SI 4 遺構図③



第174図 SI 4 出土遺物

口縁部の立ち上がりは短く、やや強く外反する。受部は丸みがあり、境界が明瞭である。底面には回転ヘラケヅリを施す。700は壺身B2類、701は碗である。701はSI 1出土の653と比較すると体部下半に丸みがあり、高台の断面形が矩形に近い。702・704は埋土上面で出土した。702は平瓶である。口縁部は僅かに外側へ傾くが直立に近い。口縁端部は強く外反する。胴部との境には穿孔して差し込んだ製作痕が明瞭に残る。体部外面上半と底面に回転ヘラケヅリを施す。内外面に被熱によるものか器面荒れがみられる。704は甕である。口径が約30cmある大型品で、赤みがかった体部外面の色調が特徴である。口縁部を回転ナデ、体部をタタキによって成形する。体部外面にはタタキ目がみられるが、内面には青海波などの当て具痕はなく、複数の凹凸のみが残る。これらの特徴から、猿投産と考えられる。なお、内面に702と同様な器面荒れがみられる。

703・705・706は灰釉陶器である。いずれも埋土上面から出土した。705は皿であり、口縁端



第175図 SI 5 遺構図①

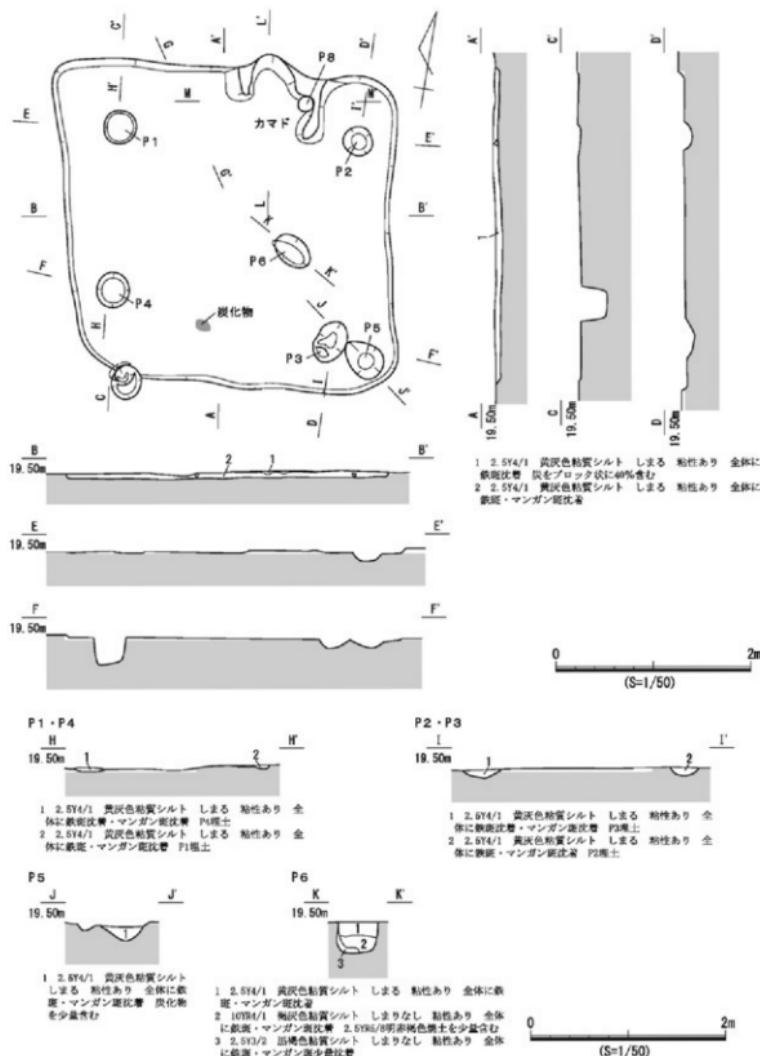
部が強く外反する。灰釉は発色が悪いためほとんど確認できない。703は長頸瓶である。胴上半に最大径がある丸みを帯びた体部をもつ。底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリを施す。高台は底面ではなく体部側に付されており、断面形は矩形である。外面に702と同様の器面荒れがみられる。706は小瓶である。体部下半の外面が回転ヘラケズリ調整されている。灰釉の施釉は確認できない。702と同様の器面荒れがみられる。

707は土師器の瓶である。把手部分であり、指ナデによる成形痕が明瞭に残る。

所属時期 埋土上面から出土した遺物はVI a期に属すると考えられるが、以下の埋土中からは灰釉陶器が出土していないことから、一時期古いV b期に位置付くと判断した。

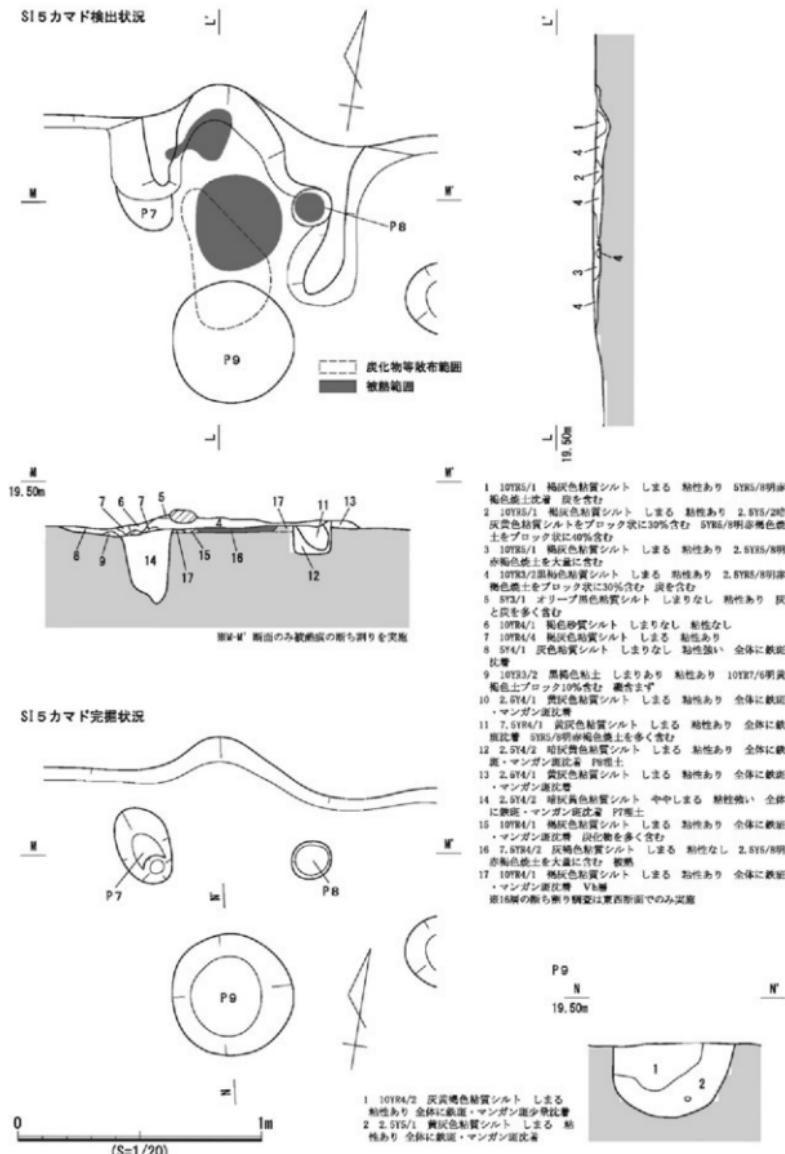
SI 6 (第179~181図)

検出状況 EM 4からEN 4グリッドで検出した。北東部分は発掘区外に延びる。平面形はほぼ方形である。長軸方位はN-18°-Wである。掘方の東壁は掘りすぎ等により不明瞭であるが、SK112の掘方壁面でSI 7との重複関係を確認し、SI 6の方が古いことが判明した。

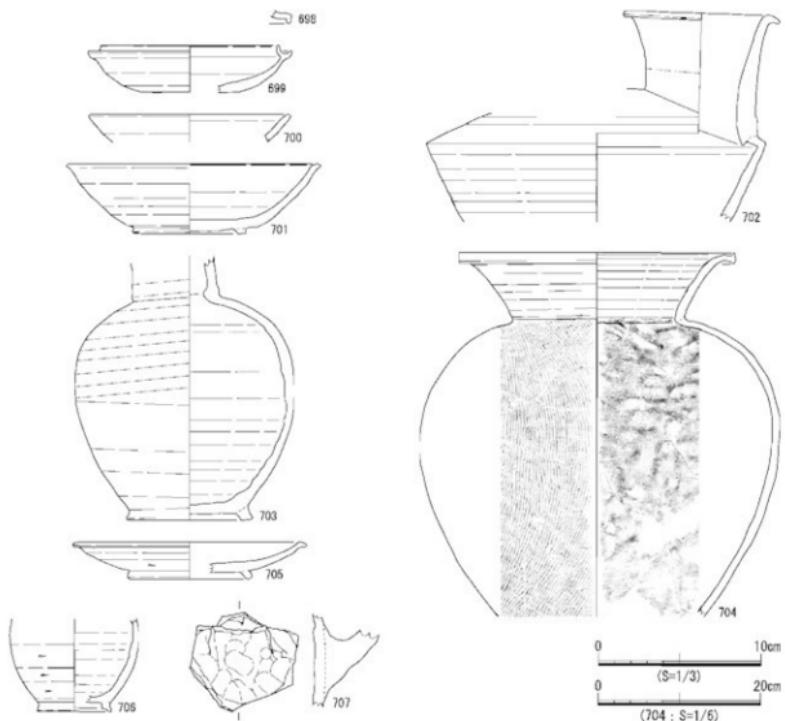


第176図 SI 5遺構図②

SI5カマド検出状況



第177図 SI5遺構図③



第178図 S1-5出土遺物

堆積状況 黒褐色の粘質シルトが堆積していた。

床面・掘方 床面の硬化や整地土はみられなかった。掘方が非常に浅いため、上面が削平されたと考えられる。

付属遺構 掘方底面で検出した遺構の内、その配置から2基を主柱穴（P1・2）としたが、窪み状の深い遺構である。また、掘方底面の中央から土坑（P3）を検出したが、上屋構造に関わる遺構かどうかは不明である。

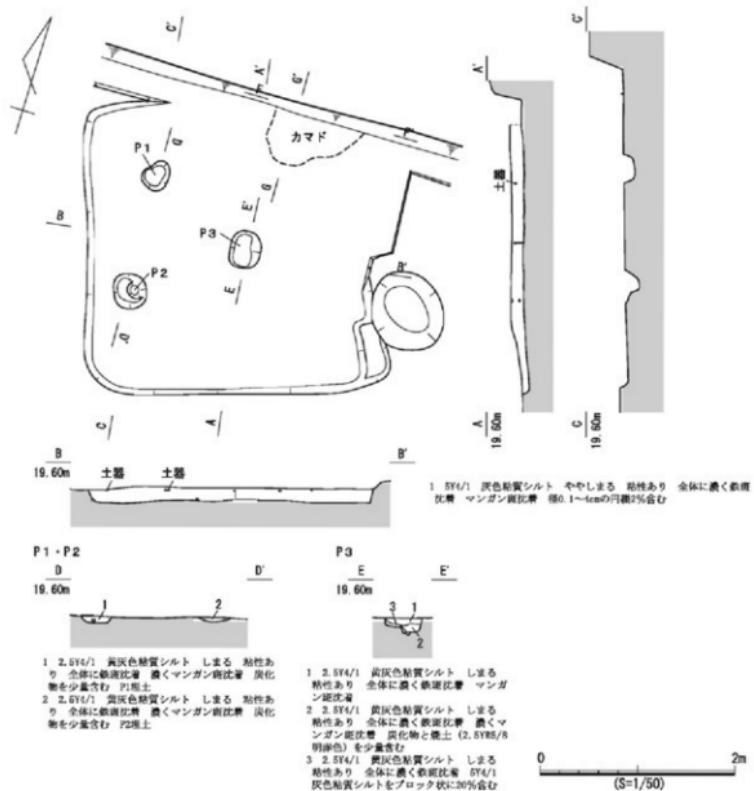
カマドは、掘方北東隅で検出した。破却されたカマド構造材と思われる堆積を除去した結果、薄く広がる炭化物と燃焼部と思われる被熱痕を検出した。なお、構造材の堆積は発掘区北壁でも確認でき、その状況から廃絶時には原形を留めていなかったと思われる。燃焼部と思われる被熱痕は、カマド下部に掘られた土坑の埋土上面にみられる。下部土坑は約0.1mの深さがあり、底面で小穴（P6）を検出した。

遺物出土状況 埋土中から遺物は出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

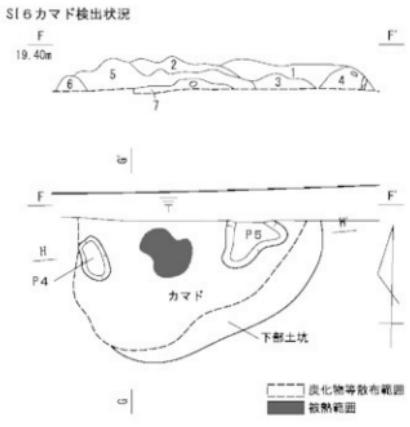
出土遺物 SI 6 及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、10点を図示した。

708～713は須恵器である。708は壺身A類である。口縁部は僅かに外反しながら上方に立ち上がる。体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。なお、体部外面に原因不明の摩耗がみられる。709は壺身C類である。底面が丁寧な回転ヘラケズリによって調整され、底面の内側によつた位置に断面形が矩形の高台が付される。710は器種不明の口縁部である。711は盤である。口縁部は短く立ち上がり、体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。712は高壺等の脚部と思われる。薄手で胎土の断面が灰赤色である。単位は不明であるが、透かしが付される。713も高壺等の脚部と考えられる。

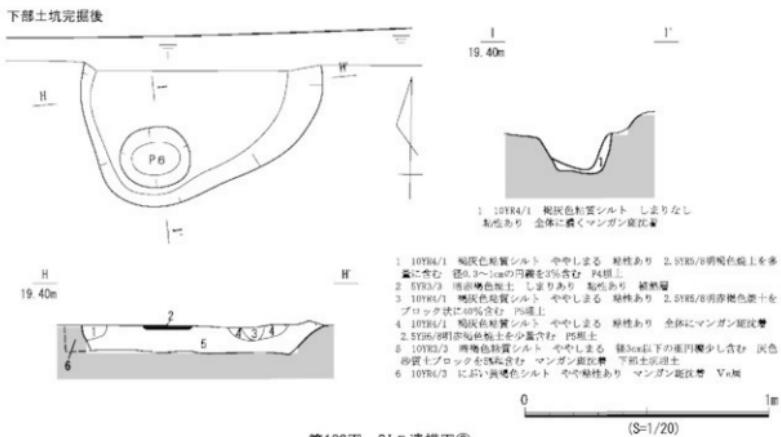
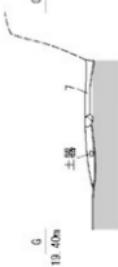
714～717は土師器である。714はロクロ土師器の柱状高台をもつ皿である。底面に回転糸切



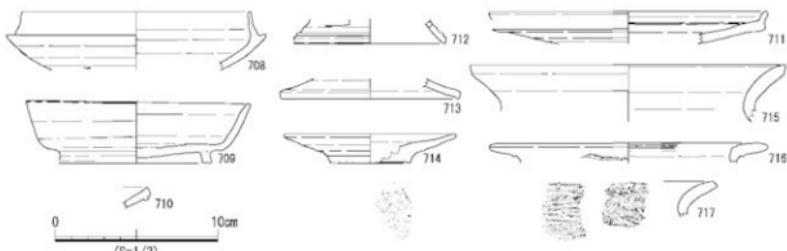
第179図 SI 6 遺構図①



1. 2.SY4/1 黄褐色粘質シルト しまる 粘性あり 全体に鉛鉱沈査
・マンガン斑紋土 2. SY5/8明赤鉄色粘土をブロック状に10%含む
2. 2.SY4/1 黄褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体に鉛鉱
・マンガン斑紋土を混入 7. 5SY6/2灰褐色をしみ戻すに10%含む
3. 2.SY4/1 黄褐色粘質シルト しまる 粘性あり 全体に鉛鉱・マ
ンガン斑紋土
4. 2.5SY4/1 黄褐色粘質シルト しまる 粘性あり 全体に鉛鉱・マ
ンガン斑紋土 3cm~4cmの凹面を10%含む
5. 2.SY6/1 灰褐色粘質シルト ややしまる 全体に鉛鉱沈査・マン
ガニ斑紋土 10SY4/1灰褐色
粘質シルトをしめ状に15%
含む 2. 3SY5/8 明赤鉄色粘
土をブロック状に10%含む
6. 2.5SY4/1 灰褐色粘質シルト
しまる 粘性あり
鉛鉱・マンガン少斑沈
査 2. 5SY5/8明赤鉄色粘土
と鉛鉱を少量含む 3cm
の凹面を10%含む



第180図 SI 6 遺構図②



第181図 SI 6 出土遺物

り痕が残る。715は壺A類と思われるが、口縁端部の摘み上げはそれほど顕著ではない。716・717は壺B類の口縁部破片であり、内外面ともにハケ調整が施されている。

所属時期 出土した遺物に時期差はあるが、カマドから灰釉陶器の破片、埋土からロクロ土師器（714）が出土していることから、VIa期以降に位置付けられる可能性が高い。なお、遺構の重複からSI7より古いが、SI7の遺物出土状況もSI6と同様である。

SI7（第182・183図）

検出状況 EM4からEN4グリッドで検出した。遺構北部は発掘区外に延びる。平面形は方形に近い形状であると考えられる。長軸方位はN-58°-Eで、南北軸から東に傾く。掘方の西壁は掘りすぎ等により不明瞭であるが、SK112の掘方壁面でSI6の重複関係を確認し、SI7の方が新しいことが判明した。また、南側で重複するSI8よりも新しい。なお、水田の取水管を通すために掘り残していた畦に遺構の西部がかかっており、当初の掘削で畦にかかっていなかった東部の床面を下げすぎたため、平面図上では床に段がついた状態になっている。

堆積状況 埋土は黄灰色の粘質シルト、掘方埋土は褐色の粘質シルトが堆積している。いずれも全体的に鉄斑とマンガン斑が沈着し、VI層に由来する円礫が混じる。

床面・掘方 前述の畦の除去中に床面土坑（P2）を検出したことから、遺構東部の床面を掘りすぎてしまっていたことが判明した。検出面から床面までの深さは約0.08m、掘方の埋土も約0.06mで非常に浅い。

付属遺構 床面で検出した遺構の内、P3は遺構の半分を確認できなかったため、規模・性格とともに不明である。P1は、排水溝掘削で確認した遺構であるが、その位置から主柱穴とした。ただし、その他の位置で主柱穴と思われる遺構は確認できなかった。P2は掘方底面から検出した土坑であるが、その性格は不明である。カマドは、発掘区外に位置すると想定される。

遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI7及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器の他、台石と考えられる石器1点が出土した。この内、7点を図示した。

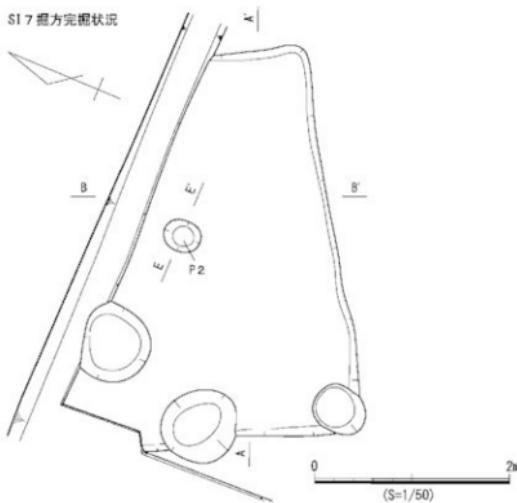
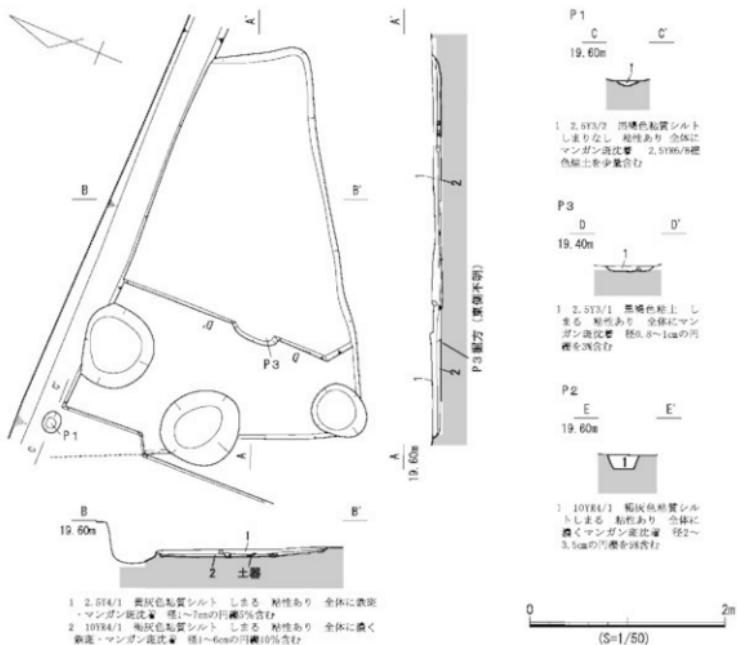
718～722は須恵器である。718は壺蓋C類である。体部外面が口縁部付近まで回転ヘラケズリ調整される。719・720は壺身A類である。719は、口縁部が外反しながら上方に立ち上がり、受部は横方向に突き出す形状をとる。体部は直線的で丸みがない。底面は平坦で、ヘラ切り痕を不定方向にナデ消す。底面周縁には僅かに回転ヘラケズリ調整を施す。720は、口縁部が内傾し、受部の高さとの差が少ない。721は壺身B2類である。焼成不良により、色調が灰白色である。722は盤である。今回出土した盤の中では最も高い脚台をもち、身との境に透かしを施す。

その他、723は土師器の壺A類、724は台石と考えられる。723は口縁端部の摘み上げと面取りが確認できるが、表面が磨滅している。724は、扁平な川原石の平坦面にやや窪んだ磨面がみられる。

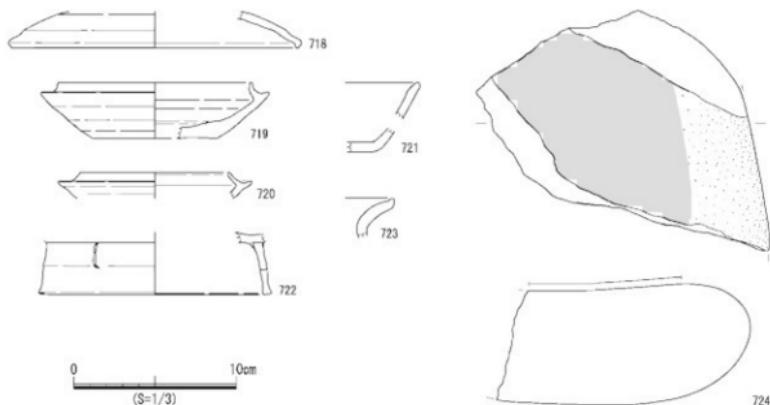
所属時期 出土した須恵器は、最も新しいもので美濃須衛V-1期まで確認できる。SI6・SI8より新しいため、VIa期以降に位置付けられる。

SI8（第184～186図）

検出状況 EM4からEN6グリッドで検出した。平面形はやや不整な方形である。遺構の南側は



第182図 SI7 遺構図



第183図 SI 7 出土遺物

大きく搅乱されている。長軸方位は N-75°-E で隣接する SI 6 や SI 7 とは若干異なる。北東部で重複する SI 7 より古い。

堆積状況 暗灰黄色の粘土をブロック状に含む、V b 層と類似した灰黄褐色の粘質シルトが堆積していた。全体的に鉄斑とマンガン斑が沈着し、礫が少量混じる。

床面・掘方 検出面から掘方底面までが約 0.07 m で非常に浅い。調査の段階で、硬化した床面や整地土は確認できなかったが、SI 8 カマドの土層における 4・6 層 (H-H'・I-I') の上に焼土・炭化物がみられ、完掘状態で盛り上がったような状況になっていることから、4・6 層が整地土であった可能性がある。

付属遺構 掘方底面で検出した遺構の内、掘方の四隅に位置する小穴を主柱穴とした (P 1 ~ 4)。

カマドは掘方の東壁中央に接して設置されていた痕跡のみを確認した。遺物包含層掘削作業の段階から、すでに焼土・炭化物を確認しており、燃焼部を含めて削平されていた可能性が高い。なお、カマド除去後に小穴を検出したが、その土層断面から、後世の掘り込みと思われる。

遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI 8 およびその付属遺構からは、須恵器、土師器が出土した。ほとんどが破片である。このうち、3 点を図示した。725・726 は須恵器の壺蓋 C 類である。727 は土師器の壺の体部破片である。胎土から B 類と思われる。

所属時期 SI 7 より古く、出土した須恵器に美濃須衛 V-1 期のものが認められることから、V b 期に位置付けられる。

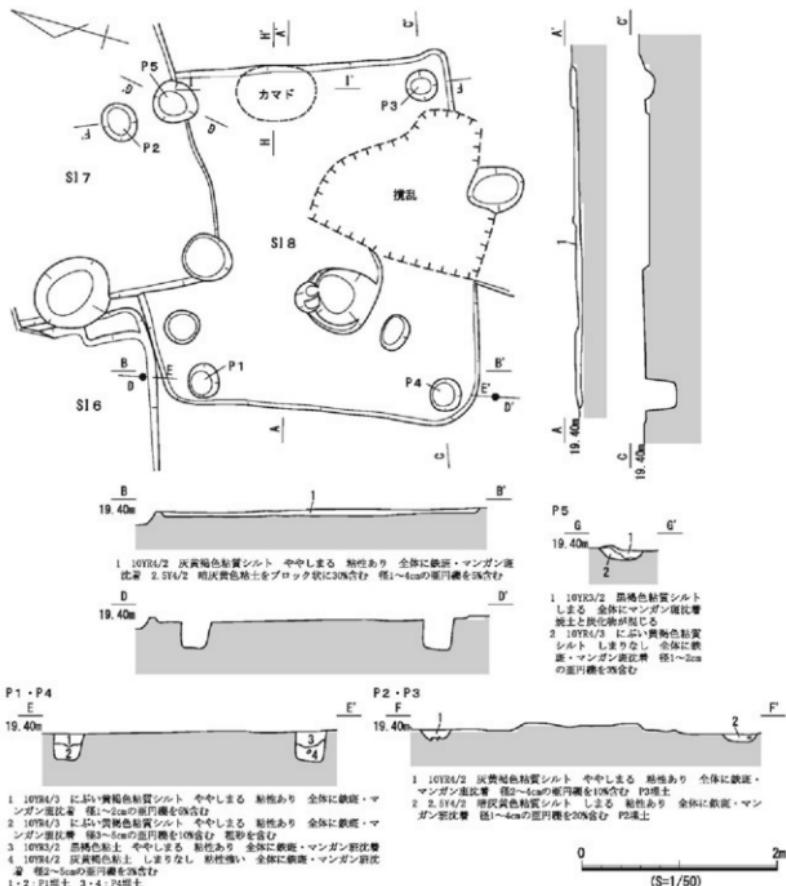
SI 9 (第 187・188 図)

検出状況 EM 7 から EN 7 グリッドで検出した。遺構の南側が発掘区外へ続くため、全容は不明である。検出作業段階から焼土や炭化物が確認できた。

堆積状況 黄灰色の粘質シルトが堆積しており、多少の差はあるが、埋土の広い範囲で焼土と炭化物の混じりが認められた。

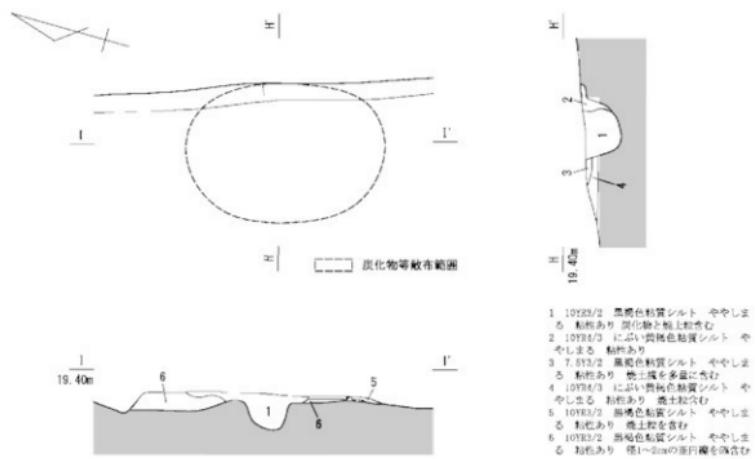
床面・掘方 硬化した床面や整地層は確認できなかった。発掘区壁面上土層にみられる壁際構のある掘方底面と、平面で検出した底面の標高値がほぼ同じであるため、床面の整地は行われていなかったと思われる。

付属遺構　主柱穴は確認できなかった。カマドと考えられる遺構は、掘方の北東隅に近い底面から北壁に接して検出した。A-A'の土層図では、カマドの痕跡と考えられる土坑の上面に灰黄褐色の堆積（2・3・5層）がみられ、破壊されたカマドの構造材が堆積していた可能性がある。埋土

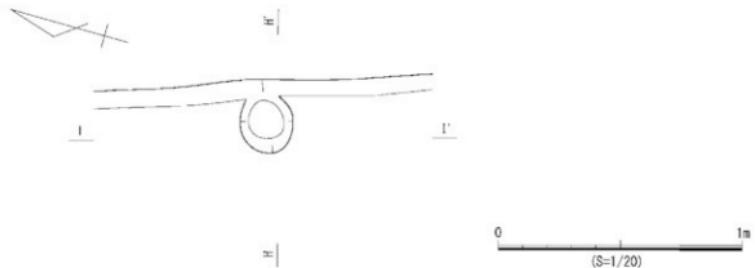


第184圖 SI 8 速標圖①

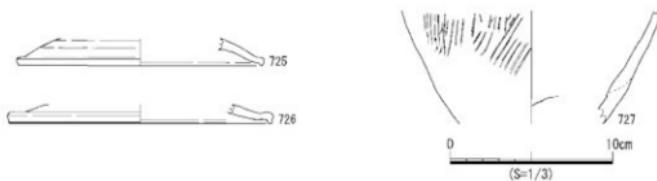
SI 8 カマド検出状況



SI 8 カマド洗土・炭化物除去状況



第185図 SI 8 遺構図②



第186図 SI 8 出土遺物

中に多量の焼土や炭化物を含むが、燃焼部は確認できなかった。完掘後に複数の小穴を検出したが、北壁に最も近い小穴（C-C' 5・6層）が位置的に支脚柱の掘方である可能性がある。

なお、土層図では壁際構と考えられる掘方の立ち上がりが確認できるが、平面で検出すことはできなかった。

遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI 9 およびその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。ほとんどが破片である。このうち 2 点を図示した。

728 は須恵器の壺蓋である。カマドから出土した。厚手で、頂部周縁の広い範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。また、摘みの痕跡が残る。口縁端部にかえりがなく、内面にわずかな段がある。729 は土師器の壺 A 類である。磨滅が激しいが、口縁端部の摘み上げと外面のハケ目が確認できる。

所属時期 カマドから出土した須恵器壺蓋の時期や、埋土中から灰釉陶器が出土していることから、VI a 期に位置付けられる。

SI10（第 189～191 図）

検出状況 EN 5 から E0 6 グリッドで検出した。平面形は隅丸方形である。長軸方位は N-30° -W である。当該範囲は検出作業時に複数の堅穴建物が重複していることが予想されたが、平面では先後関係が確定できなかったため、断ち割り調査などで 3 軒（SI10～SI12）の切り合いであることを確認した。また、遺構の掘削過程で、掘方南東部の平面形が判明し、方形に近い形状であることを確認した。掘方の北西部で SI11 と重複しこれより新しく、南側では SI12 と重複しこれより古い。

堆積状況 埋土は黒褐色の粘質シルトで、礫と炭化物が混じる。掘方埋土も黒褐色の粘質シルトだが、含まれる礫が大きく、その量が多い。

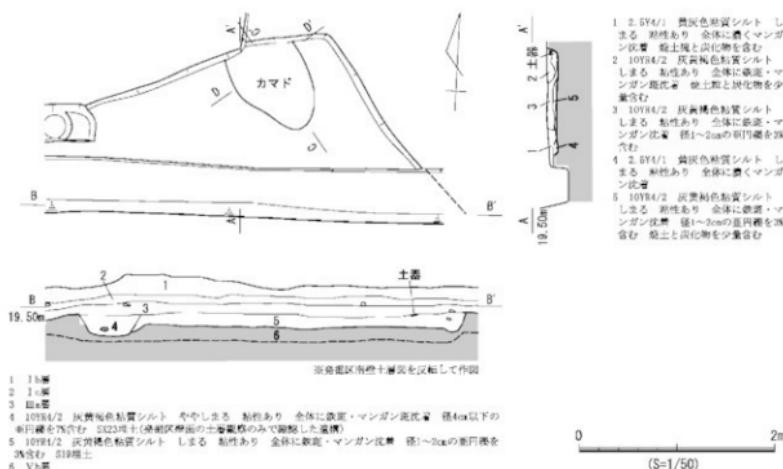
床面・掘方 硬化した床面は確認できなかったが、カマドや主柱穴を検出した 4 層の上面を床面とした。整地土除去後の掘方底面は VI 層まで達しており、完掘後は一面礫の状態となった。掘方底面の北西部は一段低くなっている。整地土を充填して床面を整地したと考えられる。

付属遺構 床面の四隅で検出した小穴（P 1～4）を主柱穴とした。いずれも浅い瘤み状の遺構であり、柱痕跡等はみられない。

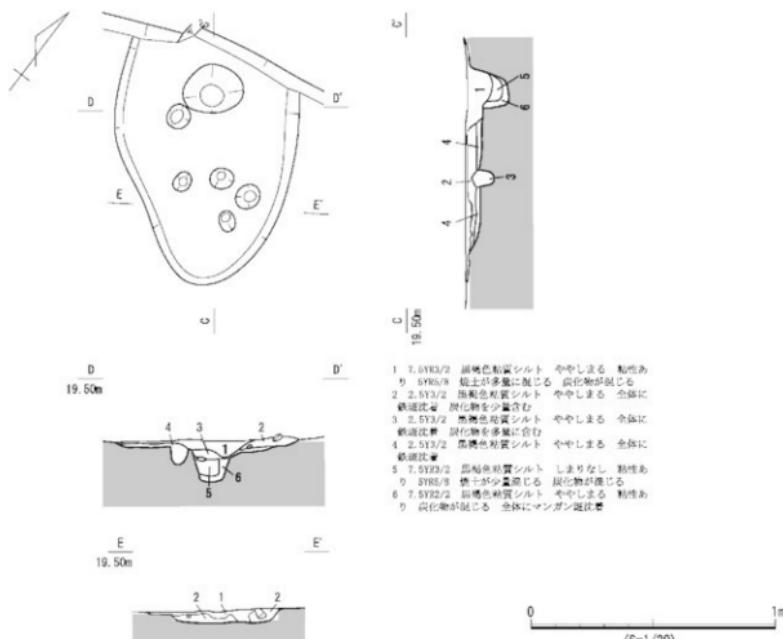
カマドは掘方の北東隅に近い床面で、下部土坑と考えられる遺構を検出した。下部土坑の北東部が掘方の北壁に接している。破却されたカマド構造材と考えられる 1 层（J-J'）を除去した下面で被熱痕を確認した。南北に細長い範囲で検出しているため、燃焼部だけでなく被熱した煙道の一部を含んでいる可能性がある。下部土坑の土層から、黒褐色である粘質シルト（K-K' 5 層）を充填した後に黄褐色の粘質シルト（J-J' 3 層）を敷いてカマドを構築したと考えられる。この他床面上で埋土に焼土と炭化物を多く含む土坑 1 基（P 5）を検出したが、その性格は不明である。

遺物出土状況 埋土中から多くの遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI10 およびその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器、石器が出土した。この内、22 点を図示した。



SI9カマド窓枠状況



第187図 S19造機図



第188図 SI 9出土遺物

730～746は須恵器である。730・731は坏蓋C類である。とともに頂部周縁の広い範囲に回転ヘラケズリ調整を施す。732と733は坏身A類でともに青黒く焼き縮まった胎土が特徴である。732は体部と受部の境が明瞭で、口縁部は内傾する。体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。外表面の摩耗が著しい。733は底部と思われる。底面が産んで平底のような形状をとる。734～736は坏身B2類である。いずれも焼成不良で白っぽい色調である。なお、736はカマドから出土している。737～741は坏身C類である。737と739は突出した底面に回転ヘラケズリが施され、その外側に断面形が矩形の高台が付される。738と740は底面が薄く平らで、740には溝状の明瞭な回転ヘラ切り痕が残る。741は他のものに比べ大型品で全体的に角張った印象を受ける。内底面に摩耗がみられる。742・743は盤である。743は底面が突出し、737・739と同様な調整を施す。744～746は甕である。いずれも外面にはタタキ目、内面に青海波状の當て具痕が残る。

747～750は土師器である。747は台付甕の脚部と考えられる。748は甕B類である。カマドから出土した。非常に薄手で、外面に粗いハケ調整を施す。内面にはコゲが付着する。749と750は甕A類である。748とは異なり、厚手で赤みがかった胎土をもつ。またハケ目が細かい。

751は砥石である。角柱状で4面に砥面がみられる。砥面の中央部がやや産む。砥面が広く、いずれの面を下にしても安定することから、刃物等を研ぐための置き砥石と考えられる。

所属時期 出土した須恵器の時期には若干ばらつきはあるが、美濃須衛IV-2～V-1期に時期的なまとまりがある。これらの須恵器から、V b期に位置付けられる。

SI11 (第192・193図)

検出状況 EM 5からEN 6グリッドで検出した。平面形は方形である。長軸方位はN-23°-Wで南北軸から西に傾く。遺構の西部については、通常の検出面から約0.05m掘り下げた段階で遺構掘方の識別が可能となった。掘方の南東部でSI10と重複し、これより古い。

堆積状況 遺構埋土・掘方埋土とともに、黒褐色の粘質シルトである。掘方埋土は、場所によって礫の含有率が異なる。全体的にマンガン斑が沈着する。埋土に含まれる礫はVI層に由来すると考えられる。

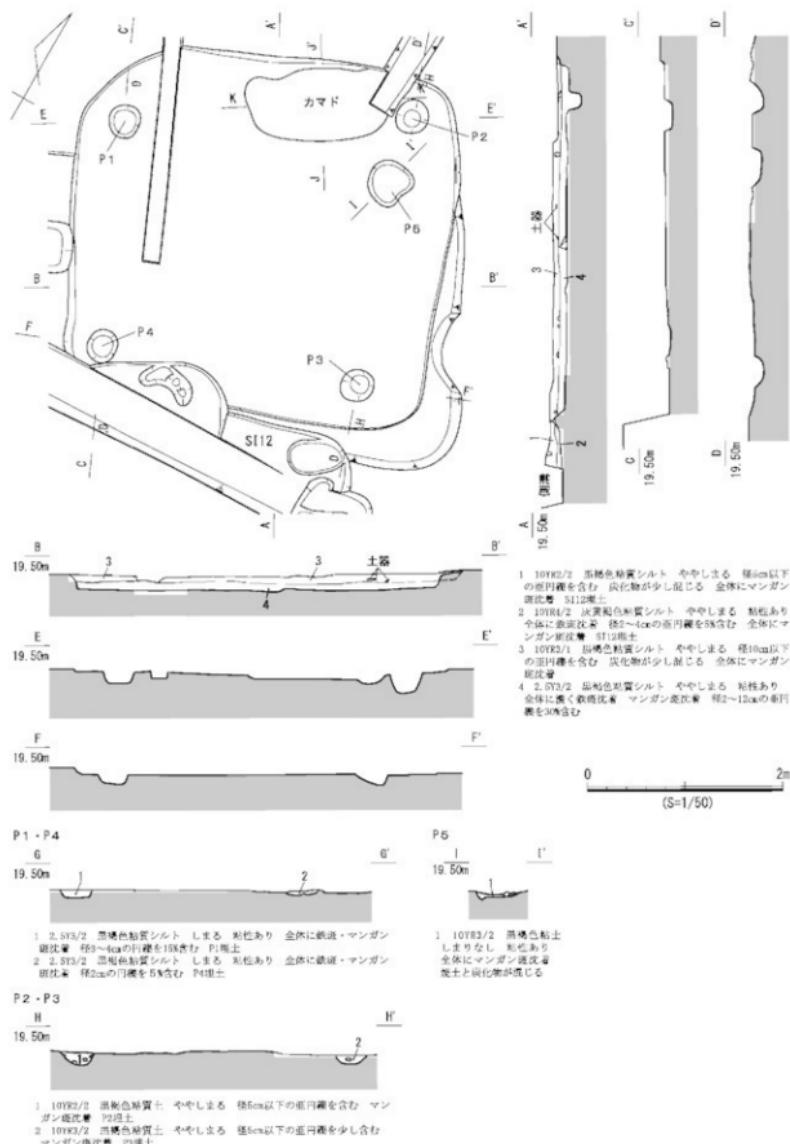
床面・掘方 硬化した貼床はみられないが、主柱穴を検出した面を床面とした。掘方底面は平坦でなく、一部VI層の礫が露出していた。

付属遺構 掘方の北西及び南西部の隅で検出した小穴(P1・P2)を主柱穴とした。いずれも浅い瘤み状の遺構であり、柱痕跡等はみられない。東側の主柱穴は確認できなかった。

カマドの構造 が確認できなかったが、床面の北東隅に焼土や炭化物が集積する土坑状の瘤み(P4)があり、そこから平面形が不定形の土坑が掘り込まれていた。この土坑がカマドの下部土坑と考えられるが、明確な被熱面は残存していないかった。

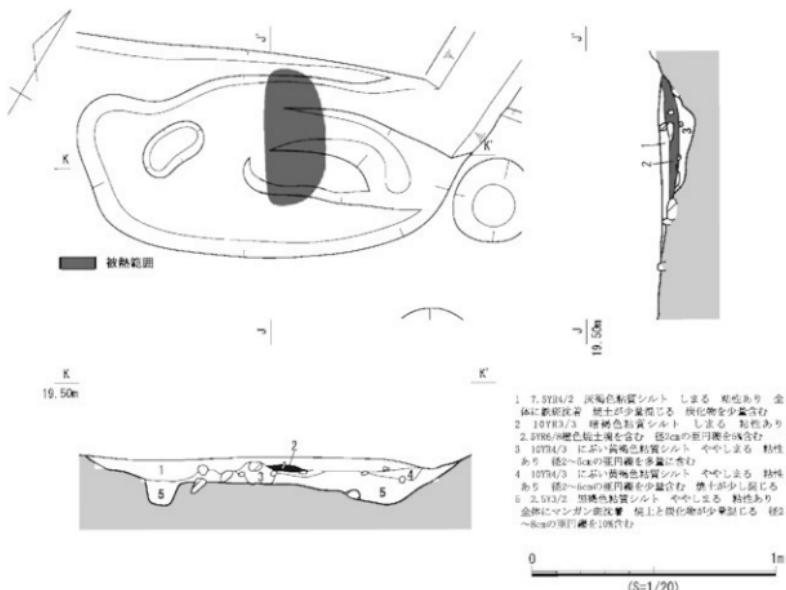
遺物出土状況 埋土中から多くの遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI10及びその付属遺構からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、17

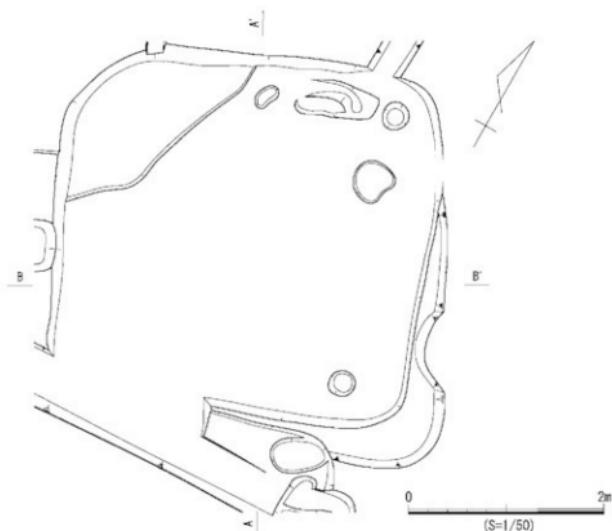


第189図 SI10遺構図①

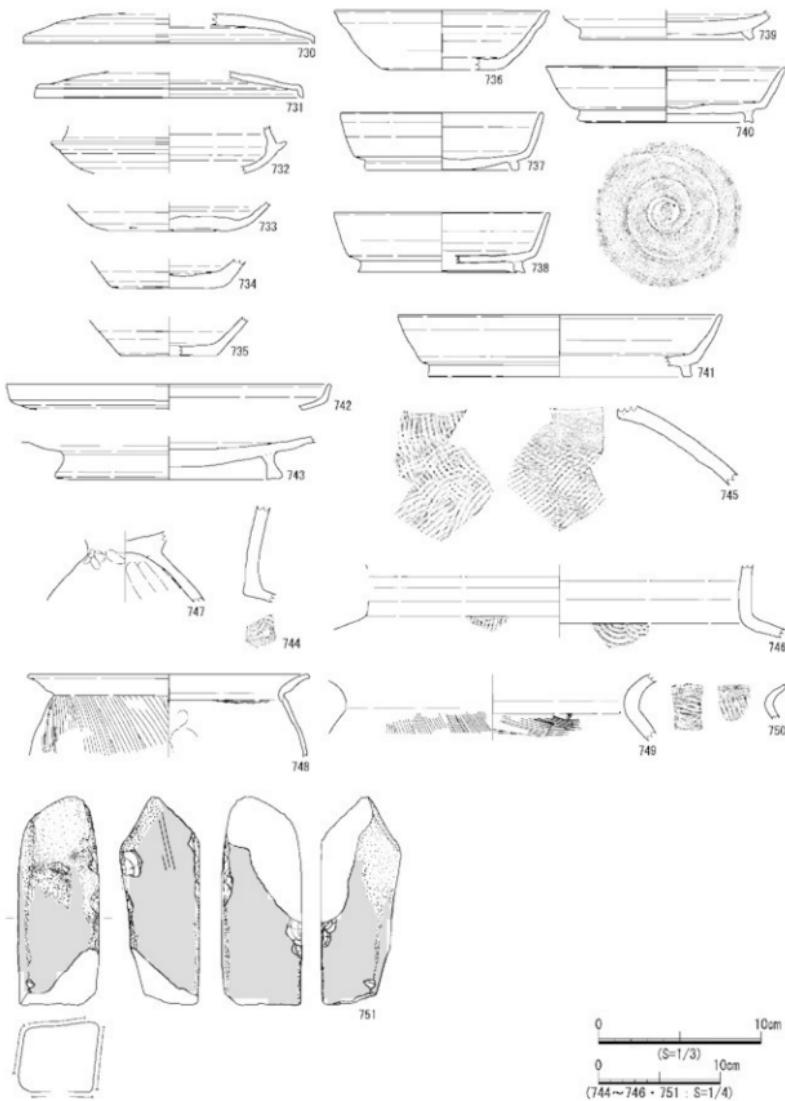
SI10カマド火床検出及び下部土坑完掘状況



SI10掘方完掘状況



第190図 SI10遺構図②



第191図 SII10出土遺物

点を図示した。

752～767は須恵器である。752～755・764は壺蓋C類である。カマドから出土した754は内面が摩耗し、墨痕のような染みがみられる。転用窯の可能性がある。756は壺身B2類、757～761は壺身C類である。762は青黒い色調で、外面にカキ目を施す。ハソウの可能性があるが、注口部分は残存していない。763・765は盤である。763は口縁部の折り返しがやや外反する。766・767は甕である。766は762と同様に青黒い色調で、焼き締まった印象を受ける。頸部に横位のカキ目を施す。

768は土師器で壺A類と思われるが、磨滅のため詳細は不明である。

所属時期 遺構の重複ではSI10より古いが、出土した須恵器の大半は美濃須衛IV-2～V-1期で時期差はなく、Vb期に位置付けられる。

SI12（第194～196図）

検出状況 E06グリッドで検出した。遺構の南側が発掘区外へ続くため、全容は不明である。検出した当初は、焼土や炭化物を多く含む範囲のみを当該遺構としていたが、SI10・11との切り合いを確認する断ち割り調査によって遺構東部の掘方を確認したため、当初検出した範囲はSI12のカマドとした。しかし、カマドを検出した標高が南壁土層で確認できる遺構埋土の上面に近いため（B-B'）、それぞれ別の遺構の重複とも考えられる。SI10と重複しこれより新しいことは判明したが、土層断面図作図後にSI10周辺が埋土の誤認により掘り下げてしまつたため、平面図に切り合はは反映されていない。

堆積状況 埋土は、黒褐色粘質シルトの上層と灰黄褐色粘質シルトの下層（A-A'）に分層することが可能で、発掘区南壁でも2層の堆積を確認した。

床面・掘方 硬化した床面は確認できなかった。検出範囲が狭いため、詳細は不明である。

付属遺構 カマドの燃焼部と思われる被熱範囲は、1層（D-D'）除去後に確認した。下部土坑埋土である7・8層が被熱しており、下部土坑上面にカマドの上部構造があったことが推定される。なお、下部土坑底面に不定形の瘤みがみられ、支脚柱の掘方であった可能性がある。

この他、掘方完掘後に北東隅やSK114と接する部分で瘤みを確認したが、床面遺構として調査していないため詳細は不明である。

遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

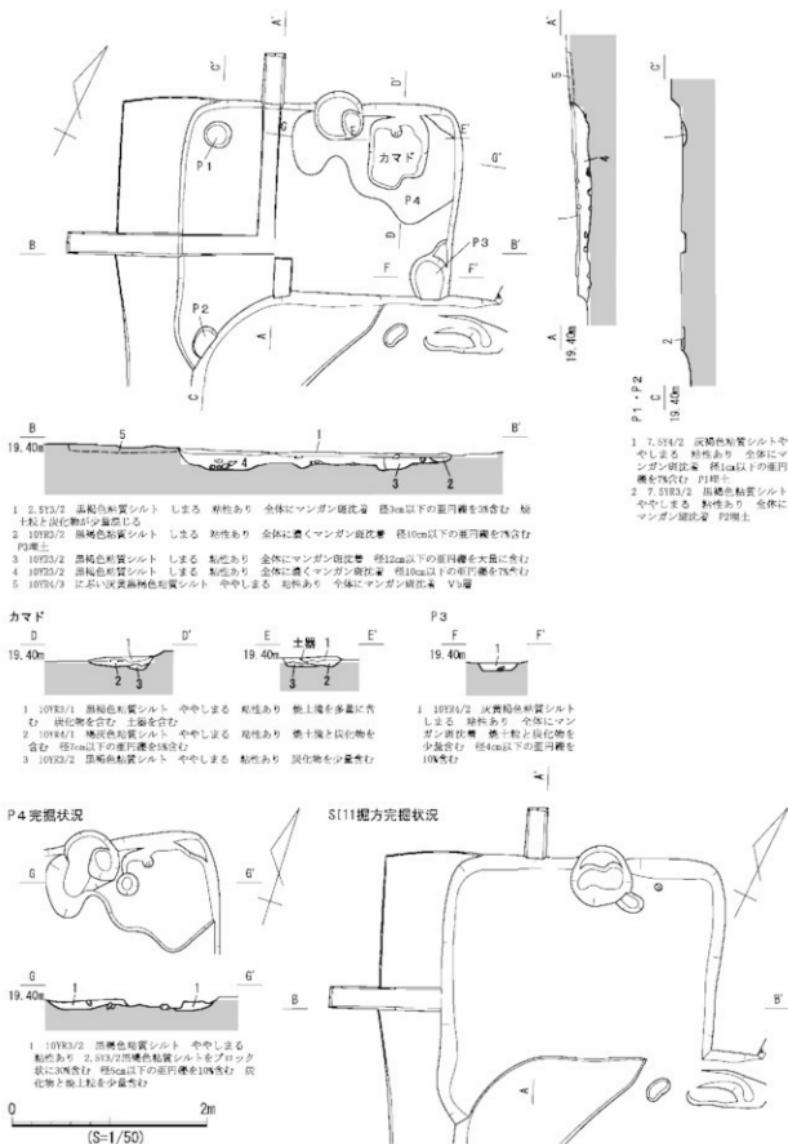
出土遺物 SI12及びカマドからは、須恵器、土師器が出土した。この内、4点を図示した。

図示した遺物はいずれも須恵器で、771を除きカマドから出土した。769・770は壺蓋C類である。ともに頂部周縁に回転ヘラケズリを施す。771は壺身C類である。底面がやや突出し、回転ヘラケズリ調整を施す。高台は断面形が矩形でやや端部に寄った位置に付される。底部内面が摩耗している。772は盤である。口縁部がやや外反して折り返される。底部内面のみ摩耗している。

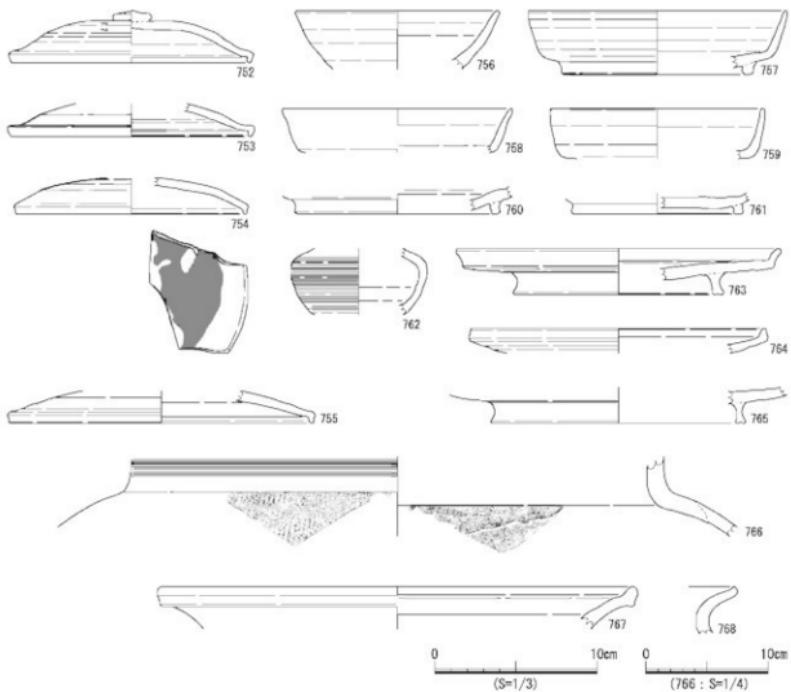
所属時期 遺構の重複ではSI10より新しいが、出土した須恵器は美濃須衛IV-3～V-1期で時期差はなく、Vb期に位置付けられる。

SI13（第197・198図）

検出状況 EM6からEN6グリッドで検出した。遺構の北側が発掘区外へ続くため、全容は不明である。SK129、SI14～17と重複している。この内、SK129及びSI14より古く、SI15～17より



第192図 S111遺構図



第193図 SI11出土遺物

新しい。

堆積状況 埋土は黒褐色の粘質シルトで、焼土や炭化物を少量含み、小型の円礫が少し混じる。

埋土が周囲の竪穴建物とほぼ同じであり、平面での検出は困難であった。

床面・掘方 硬化した貼床や整地土は確認できなかった。

付属遺構 掘方底面で、西壁に沿う壁際溝を検出した。南壁には廻らず、西壁の一部にとどまる。

また南西隅の底面で、主柱穴と考えられる小穴(P 1)を検出した。浅い遺構であり、柱痕跡など特徴的な堆積は確認できなかった。

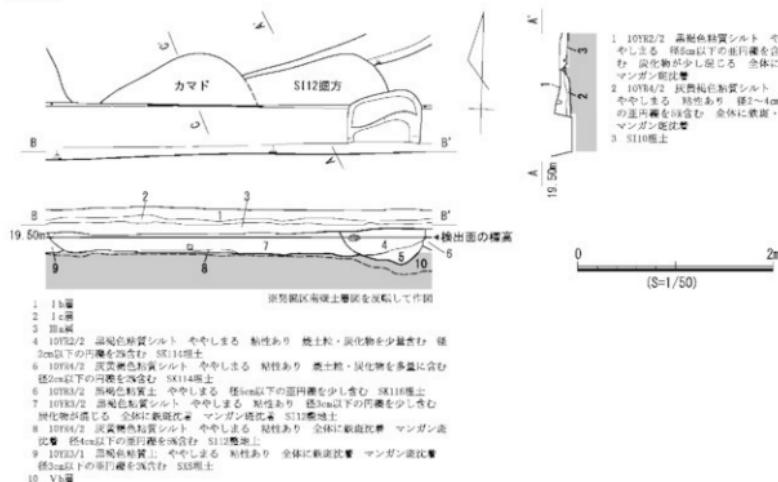
遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI13 およびその付属遺構からは、須恵器、土師器が出土した。この内、1点を示した。

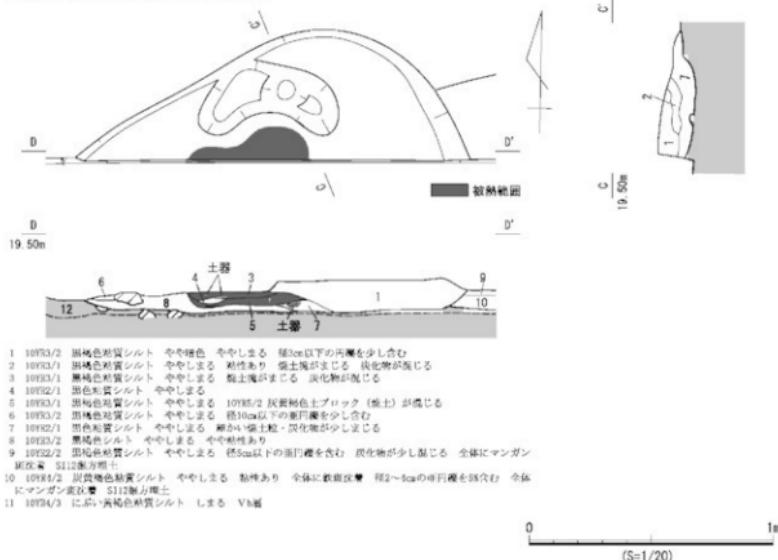
773は須恵器の壺身C類である。底面のやや内側に断面形が矩形の高台が付される。

所属時期 遺構の切り合いでSI14より古く、出土した須恵器が美濃須衛IV-3期であることから、V b期に位置付けられる。

検出状況

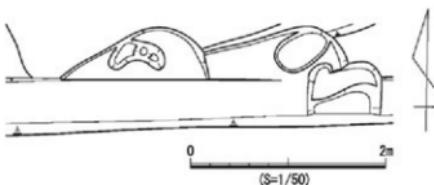


SI12カマド火床検出及び下部土坑完掘状況

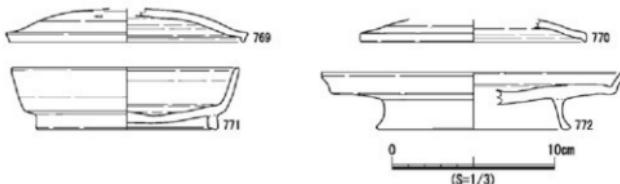


第194図 SI12遺構図①

SI12掘方完掘状況



第195図 SI12遺構図②



第196図 SI12出土遺物

SI14（第199・200図）

検出状況 EM 7からEN 7グリッドで検出した。遺構の東側と北側が発掘区外へ続くため全容は不明であるが、検出した一辺が4mを超えており、今回検出した竪穴建物の中では最大の規模となる可能性がある。長軸方位はN-3°-Wでほぼ南北軸に近い。遺構の西側でSI13・SI15～18、SK129と重複しているが、そのいずれよりも新しい。

堆積状況 埋土は黄灰色、整地土は褐色である粘質シルトが堆積していた。掘方底面がVI層に達しているためか、埋土中の礫が多い。

床面・掘方 硬化した貼床は確認できなかった。整地土はV b層に非常によく似ているが、遺物が混入することから整地土であることを確認した。

付属遺構 遺構南西隅の床面上で検出した小穴を、主柱穴（P 1）とした。P 1の南側と掘方底面から土坑を3基（P 2～P 4）を検出したが、いずれも浅い崖み状の遺構である。

遺物出土状況 埋土中から遺物が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SI14からは、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内、8点を図示した。

774～776は須恵器である。774は須恵器の壺蓋C類であり、頂部外縁に回転ヘラケズリ調整を施す。内面には重ね焼き痕が残る。775は壺身B2類である。底面に回転ヘラ切り痕が残る。776は壺の口縁部と考えられる。

777～780は灰釉陶器である。777は碗であり、690と同様な深碗と思われる。底面に回転ヘラケズリ調整が施され、灰釉がわずかに確認できる。778は碗の底部であり、内面が摩耗している。779は高台がやや低く体部が直線的に開くことから皿類と思われる。内面に灰釉が施され、線彫りが描かれる。780も皿と思われる。底面に回転糸切り痕が明瞭に残る。内面が著しく摩耗し、



第197圖 SI13遺攜圖

朱墨が付着していることから転用硯と考えられる。

781はロクロ士師器である。柱状の高台部分であり、底面に回転差切り痕がある。

所属時期 周囲の堅穴建物で出土しない灰釉陶器が認められ、遺構の切り合いも周辺の堅穴建物の中で最も新しい。灰釉陶器はO-53号墓期に比定されることから、VI b 期に位置付けられる。

SI15 (第 201 ~ 203 図)

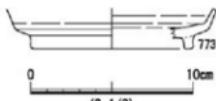
検出状況 EM 7 から EN 7 グリッドで検出した。遺構の東部は SI14・SK126、北部は SI13 と重複し、これより古い。また、遺構の北西部で重複する SI16 よりは新しく、さらに床面上で SI17・18 を検出した。複雑な重複状況から、本来の平面形は不明である。長軸方位は N-23°-W である。本遺構の検出段階で、焼土を含んだ埋土を遺構西辺中央付近で確認し (B-B')、カマドを備えた竪穴建物として調査を進めた。

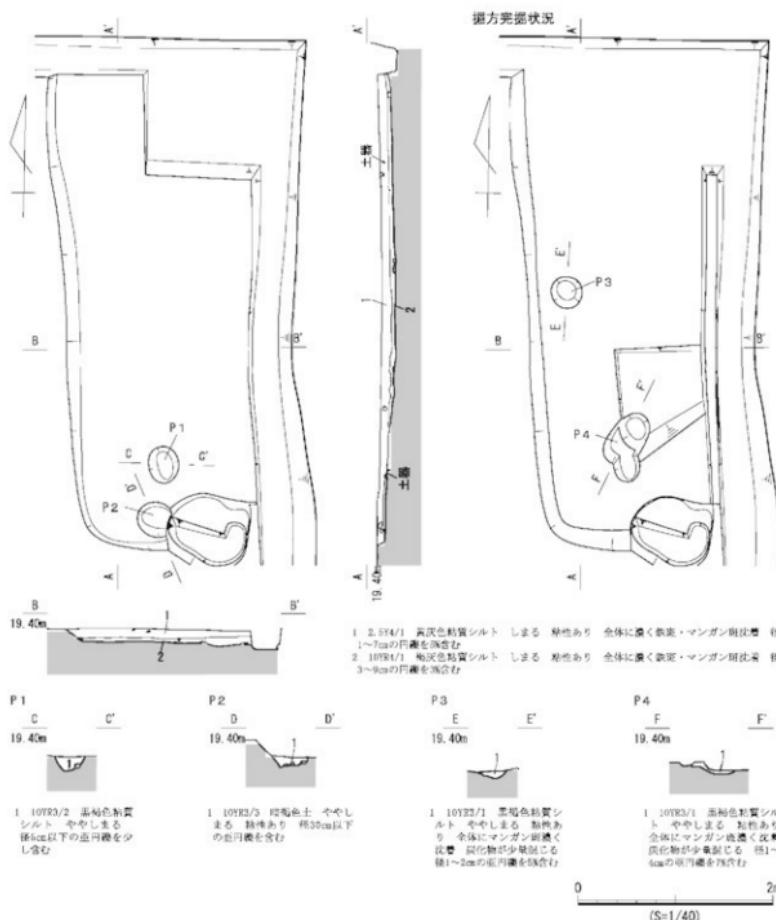
堆積状況 埋土の南部に黒褐色、北部に灰黄褐色の粘質シルトが堆積しており、差異が認められた。全体的にVI層に由来するものと思われる礫を含む。

床面・掘方 硬化した床面や整地土は検出できなかったが、カマドを検出した面を床面とした。同じ面で SI17 の掘方や SI18 の壁際溝、小穴 3 基を検出した。小穴については、本遺構の主柱穴にあたる位置でないことや、SI18 の範囲内であることから、SI18 の床面遺構 (SI18-P 1 ~ P 3) として取り扱ったため、第 201 図の平面図には示していない。

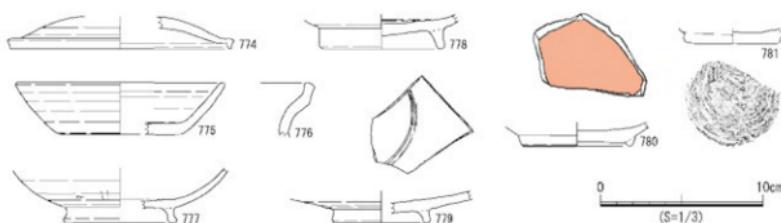
付属遺構 主柱穴は確認できなかった。カマドは、掘方西壁中央に接した位置で検出した。今回の調査で掘方の西壁にカマドが設置されるのは本遺構のみである。また、土坑状の窪み底面に設置する点も特異である。袖の一部が残存しており、SI15 掘方から西へ若干張りだした部分から二股に延びる。燃焼部と考えられる被熱痕は、基盤層上面にみられた。また、袖の一部にも被熱

第198图 SI13出土遗物





第199図 SI14遺構図



第200図 SI14出土遺物

痕が認められた。カマドの北側にはカマドと同質な埋土で埋没した不定型な張り出しがあるが、その性格は不明である。なお、袖部の除去後に支脚柱痕の可能性がある小穴（P 1）を検出した。

遺物出土状況 カマド内部から、須恵器がまとめて出土した。カマド本体となる土坑からだけでなく、北側の張り出し部からも出土している。完形に近いものは、坏身・坏蓋が多い。いずれもカマドの3層（B-B'）より高い位置で出土しており、廃絶後に意図的に投棄したと思われる。

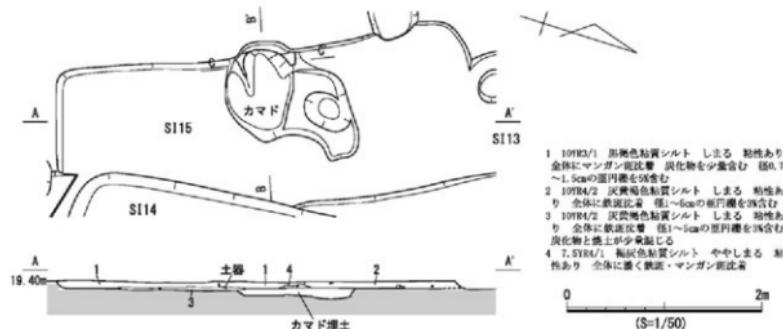
出土遺物 SI15及びその付属遺構からは、須恵器と土師器が出土した。この内、19点を図示し、その内 782～784・789～796・798・800 がカマドの一括出土遺物である。782～789・791～798 は須恵器である。782～787 は坏蓋 C 類である。782 はほぼ完形で、頂部外縁に回転ヘラケズリを施す。783 は完形に近いが口縁部のみ残存しておらず、意図的な打欠きの可能性もある。788 は坏身 A 類である。青黒い色調で、口縁部が外反しながら上方へ立ち上がる。789・791・792 は坏身 B 類である。789 は回転ヘラ切り痕が丁寧にナデ消されている。793～797 は坏身 C 類である。底面が残存するものは、いずれも丁寧に回転ヘラケズリ調整され、厚みがある。793 には「大口」と書かれた2文字の墨書がある。798 は盤である。坏身 C 類と同様に底面が突出し、回転ヘラケズリ調整を施す。

790 は内外面の磨滅で回転ナデ痕が判別できることや胎土から土師器とした。器形は坏身 B 2 類に類似する。内面に何らかの付着物がみられる。799・800 は土師器の甕で、799 は甕 A 類の胴部破片、800 は B 類である。800 は薄手で口縁部が強く屈曲し、外面に粗いハケ調整を施す。口縁部内面にも横位のハケ目が残り、その下に横位の板ナデがみられる。

所属時期 カマドから出土した一括遺物は、美濃須術IV-3～V-1期でまとまりがあるため、遺構の時期も V b 期に位置づけられる。

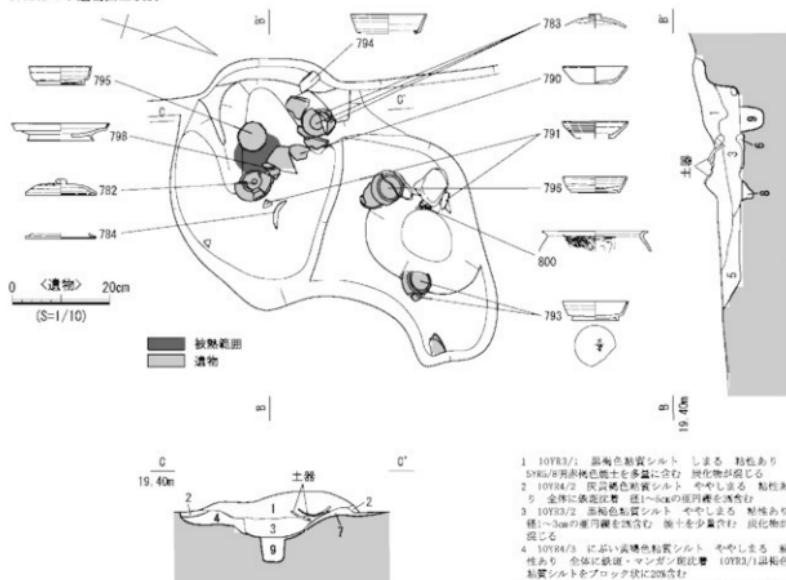
SI16（第204図）

検出状況 EN 7 から EN 7 グリッドで検出した。北西隅部分のみ残存しているため、平面形の全容は不明である。掘方の東部分が SI13・SI15 と重複し、これらより古い。SI17・18などとも重複するはずであるが、SI15 によって同じ高さまで削平されているため、新旧を確認することができなかった。



第201図 SI15遺構図①

SI15カマド遺物出土状況

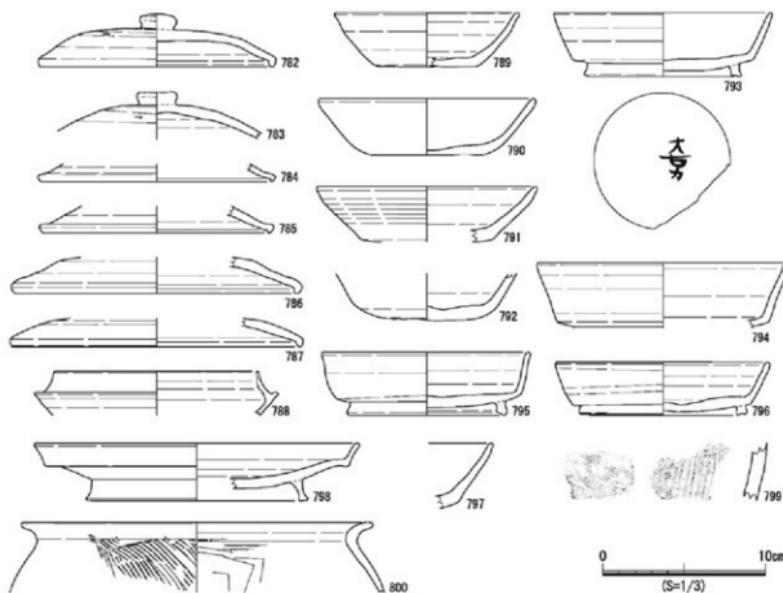


SI15カマド完掘状況



第202図 SI15遺構図②

1. 10YR3/1 黄褐色粘質シルト しまる 粘性あり
5%未満/黑色粘土を多量含む
2. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり
5%未満/黑色粘土を多量含む
3. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり
5%未満/3cmの粗角礫を含む 黒土を少量含む 灰化物が混じる
4. 10YR3/3 に高い黄褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり 全体に鐵斑・マンガン斑沈着 10YR3/1黑褐色
粘質シルトをブロック状に20%含む
5. 10YR3/3 黄褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり
5%未満/全体に鐵斑沈着 黑化物を少量含む
6. 10YR3/3 黑褐色粘質シルト ややしまる 黏性あり
5%未満
7. 10YR4/3 に高い黄褐色粘質シルト 全てしまる 黏性あり 全体に鐵斑・マンガン斑沈着 10YR3/1黑褐色
粘質シルトをブロック状に10%含む
8. 10YR3/3 黄褐色粘質シルト しまりなし 黏性あり
粘土粒と灰化物を少量含む 四周上
9. 10YR3/2 黑褐色粘質シルト しまりなし 黏性あり
粘土を多く含む 灰化物を少量含む 内壁上



第203図 SI15出土遺物

堆積状況 黒褐色の粘質シルトが堆積していた。

床面・掘方 硬化した床面や整地土は確認できなかった。

付属遺構 主柱穴やカマドは確認できなかったが、掘方壁面に沿う壁際溝を検出した。壁際溝が浅いため、SI13・SI15との重複部分は削平された可能性が高い。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

所属時期 遺構の重複から SI13・SI15 より古い遺構であり、V b 期以前に位置付けられる。

SI17(第205図)

検出状況 EN 7 から EN 7 グリッドの SI15 床面で検出した。長軸方位や掘方の西壁が SI13 とほぼ一致している。調査時の所見で重複を整理すると SI17 → SI15 → SI13 の順となり、同様な長軸方位で建て替えが繰り返された結果、SI17 が偶然 SI13 を南側へ拡張したような掘方になったと考えられる。遺構の西側は SK129 と重複し、これより古い。SI18 との重複関係は不明である。

堆積状況 埋土が V b 層に類似しており、黒褐色シルトのブロックを含むことから、人為的に埋め戻された整地土と判断した。SI13・SI15 によって大きく上面が削平されているため、検出した段階で整地土が露出したと考えられる。

床面・掘方 大きく削平されているため、本来の掘方形状は不明である。掘方底面はVI層に達し、礫が露出していた。

付属遺構 整地土上面で検出した土坑1基(P1)

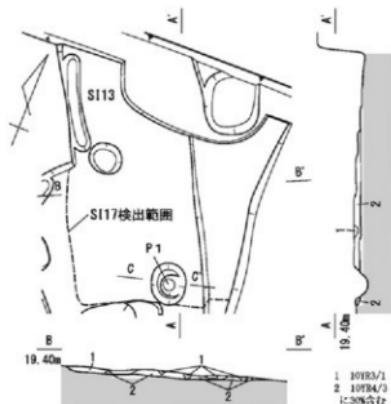
と掘方底面で検出した土坑2基(P2・P3)を付属遺構としたが、いずれも性格不明である。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

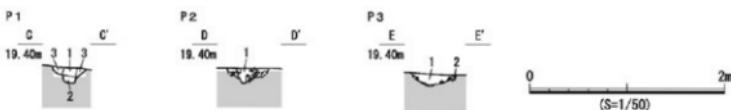
所属時期 遺構の重複からSI13・SI15より古い遺構であり、Vb期以前に位置付けられる。

SI18(第206図)

検出状況 EN7グリッドで検出した。SI15の床面で掘方南壁と西壁に沿う壁際構を検出したが、SI15掘方西壁中央に設置されたカマドに重複して東に延びる構を検出したことから、これを北壁とした別の堅穴建物に伴うと判断した。しかし、SI15と南側の掘方を完全に共有しているため、SI18の掘方を北側に拡幅してSI15が建てられた可能性も考えられる。遺構東部はSI14と重複しており、これより古い。

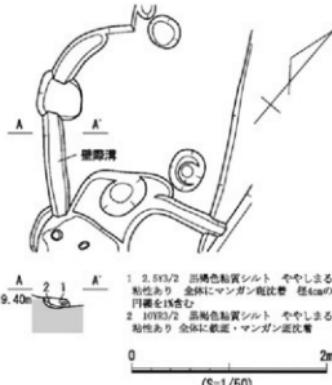


1. 2.SY3/2 品褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体にマンガン斑状化 5cmの円面を1%含む
2. 10YR3/2 品褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体にマンガン斑状化

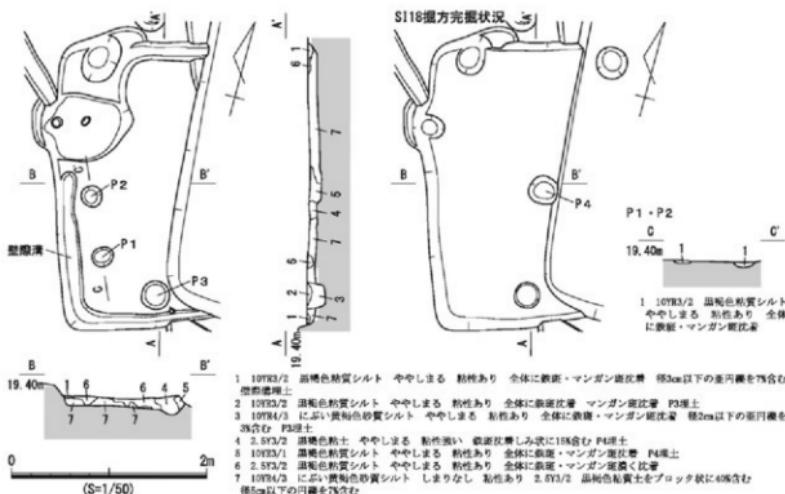


1. 10YR3/1 品褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体にマンガン斑状化
2. 2.5Y3/2 品褐色粘質シルト しまりなし 4%含む
3. 10YR3/2 品褐色粘質シルト しまる 粘性あり 全体に鉄斑化 マンガン斑状化 5cm以下の円面を1%含む
1. 10YR3/2 品褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体にマンガン斑状化 5cm以下の円面を1%含む
2. 10YR3/2 品褐色粘質シルト ややしまる 粘性あり 全体に鉄斑化 マンガン斑状化 5cm以下の円面を1%含む

第207図 SI17遺構図



第208図 SI16遺構図



第206図 SI18遺構図

堆積状況 検出時点すでに床面が露出していた。整地土はV b層に類似する砂質シルトに黒褐色粘質シルトのブロックが混入する土質であり、礫を多く含む。

床面・掘方 検出した床面の高さはSI15と同じで段差はないが、壁際構が浅いことから、SI15に伴う掘削によって上面が削平された可能性もある。掘方底面はVI層に達し、礫が露出していた。
付属遺構 床面上で小穴4基を検出し、この内、掘方南西隅に近い1基を主柱穴（P 1）とした。その他の遺構（P 2～P 4）はいずれもSI18検出面から掘り込まれており、SI15の床面遺構ともいえるが、SI15の主柱穴といえる位置にないため、SI18に含めた。なお、P 4は掘方底面で検出したため完掘状況の図に示したが、土層断面図（B-B'）から床面から掘り込まれた遺構と考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

所属時期 遺構の重複からSI15より古い遺構であるが、SI15がSI18の建て替えとすれば、V b期に位置付けられる。

2 溝状遺構

(1) DM16～D019グリッド溝状遺構群（第207～209図）

豊穴建物が集中する微高地と生産域と考えられる低地の間に、南北に近い方位で設置された溝状遺構群であり、集落域と水田域を区画する区画溝と考えられる。なお、長軸方位が南北軸にほぼ一致する溝状遺構については、大野郡の条里地割導入後に設置された可能性がある。

検出状況 DM16 から D018 グリッドで検出した。長軸方位は、SD 6 が N-39° -W、SD 7 が 35° で、ほぼ平行している。SD 6 の方が新しく、若干浅い。

堆積状況 SD 6 は単層で、流水の痕跡は認められない。SD 7 は、上層の埋土にブロックが多く、人為的に埋め戻されたと思われる。流水の痕跡は認められない。また、土層の堆積状況から、再掘削が行われた可能性がある。

掘方 両遺構とともに、遺構の南北で底面レベルがほぼ同じであり、流水の方向は不明である。SD 6 は SK43 と重複しているが、SK43 東側に接する SD 6 底面が窪んでおり、この窪みと SK43 の埋土が同一であることを確認した。SK43 と SD 6 底面の窪みが SD 6 に付属する何らかの遺構であり、一括して埋め戻された可能性がある。

遺物出土状況 SD 6 は、埋土中から須恵器を中心に土器が出土している。須恵器の鉄鉢（804）や平瓶（806）のように復元可能な個体も認められる。SD 7 は遺物がほとんど出土しなかった。

出土遺物 SD 6 からは須恵器、灰釉陶器、土師器が出土している。この内、9 点を図示した。

801～807 は須恵器である。801 は壊身 B 2 類の可能性がある。焼成不良により橙色で、非常に脆い。胎土から美濃須衛産ではないと考えられる。802・803 は壊身 C 類である。802 は底面に回転ヘラ切り痕が残り、内面が摩耗している。804・805 は鉄鉢である。804 はほぼ完形品であるが、まとまつては出土していない。やや焼成不良で、灰白色である。805 は 804 より若干径が小さい。底部内面に自然釉が付着している。806 は平瓶である。口縁部と把手、底面を欠く。SI 5 の埋土上面から出土した 702 と比較すると若干小型で丸みのある印象を受ける。体部上半まで回転ヘラケズリによって調整される。807 は甌又は鉢の底部と思われる。底面には調整の痕跡が認められない。

808 は灰釉陶器の壺・瓶類である。外面全体が回転ヘラケズリによって調整される。外面上半に灰釉を施す。精緻な胎土が特徴的で、東濃産である可能性がある。

809 は土師器の鍋である。外面と口縁部に粗いハケによる調整が施され、体部内面には板ナデ痕が残る。破片の下端には把手の一部が残存する。

所属時期 出土した須恵器は V b 期のものが目立つが、同一層内に 808 などの灰釉陶器も混在している。そのため、最終的に埋没した時期は VI a 期以降と考えられる。SD 7 は、SD 6 と平行して設置されていることから、SD 7 から SD 6 へ付け替えが行われた可能性が高い。

SD 8・9

検出状況 DM18 から D018 グリッドで検出した。SD 8・9 ともに長軸方位が N-1° -E で、平行して設置されている。ともに SD10・SD13 と重複しており、これより新しい。なお、発掘区北壁の土層観察により、SD 9 が III 層上面から掘り込まれている状況を確認しており、VII 期以降の遺構と考えられる。

堆積状況 SD 8 は単層で、粘質のある埋土が堆積していた。SD 9 は、下層埋土にブロックが多く混じる。両遺構とも流水の痕跡は認められない。

底面・掘方 両遺構とともに、南北で底面の高さがほぼ同じであり、流水方向は不明である。

遺物出土状況 埋土中から土器の破片が出土しているが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SD 8・9 ともに、縄文土器、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土している。いずれも

破片であり、図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 SD 8・9などの北から西へ傾く長軸方位とは異なり、南北方向に近いことから、条里プラン導入以降に設置されたと考えられる。またSD 9は、SD 8を踏襲して設置された溝状遺構と推定される。

SD10・11

検出状況 DM17からD018グリッドで検出した。SD10の長軸方位はN-36° -W、SD11は31° 傾いており、ほぼ平行している。両遺構とも直線的に設置されているが、SD11の南半は、削平により残存していないかった。SD10の南端でSD 8・9と重複し、これより古い。

堆積状況 SD10はE-E'断面で掘方の壁面から流出したような堆積（3層）が認められ、當時滞水していなかった可能性が高い。SD11は、埋土にブロックが多く認められ、人為的に埋め戻されたと考えられる。なお、SD10の埋土下層を対象に花粉分析を実施したが、花粉化石は検出できなかった（第5章第1節）。

底面・掘方 両遺構とともに、南北で底面レベルがほぼ同じであり、流水の方向は不明である。SD10は明確な断面逆台形の掘方をもつが、SD11は非常に浅い。SD11は、本来検出面より高い位置から掘り込まれていたが、Ⅲ層に伴う耕作などによって削平されたと考えられる。

遺物出土状況 SD10からは遺物が出土しなかった。SD11は埋土から土師器が1点出土した。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 出土遺物から時期を判断することはできない。長軸方位がほぼSD 6・7と同じであり、同じ性格の遺構である可能性がある。

SD12

検出状況 DM19からD019グリッドで検出した。長軸方位はN-3° -Wで南北軸に近いが、他の溝状遺構とは異なり、平面形がやや湾曲している。

堆積状況 埋土にブロックが多く認められ、VI層に由来する円礫を多く含む。流水の痕跡はみられなかった。

底面・掘方 南側の方が僅かに深くなることから、設置の際に流水の方向が意識されていた可能性がある。非常に浅いため、本来は検出面より高い位置から掘り込まれていたと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器の破片が出土したが、特徴的な出土状況はみられなかった。

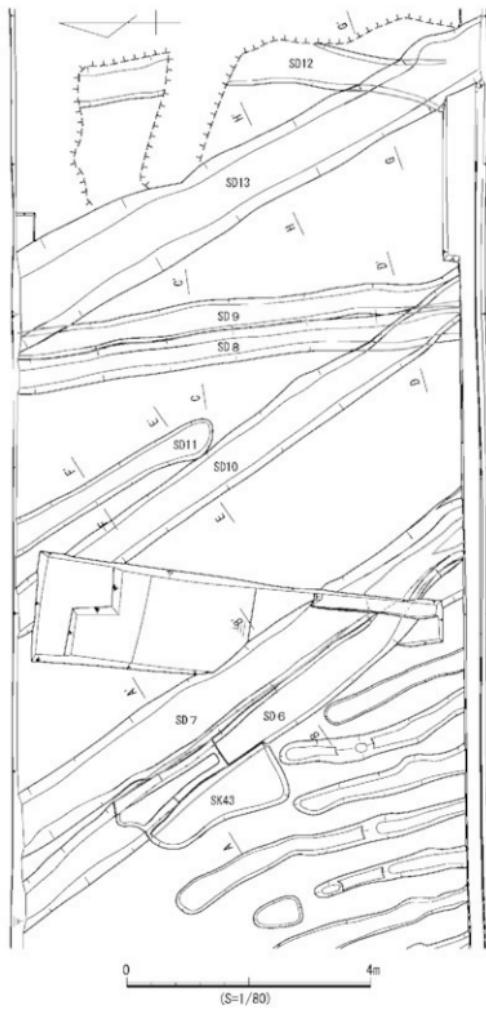
出土遺物 須恵器、灰釉陶器、土師器の破片が出土したが、図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 出土遺物から時期を判断することはできない。DM19からD019グリッド付近は上層が搅乱されておりⅢ層が残存していないが、米軍撮影の空中写真（第7図）によれば、当該地付近に水路が存在しているため、その影響を受けていると考えられる。SD12は、その前身となる水路である可能性があり、時期的に新しい遺構と判断される。

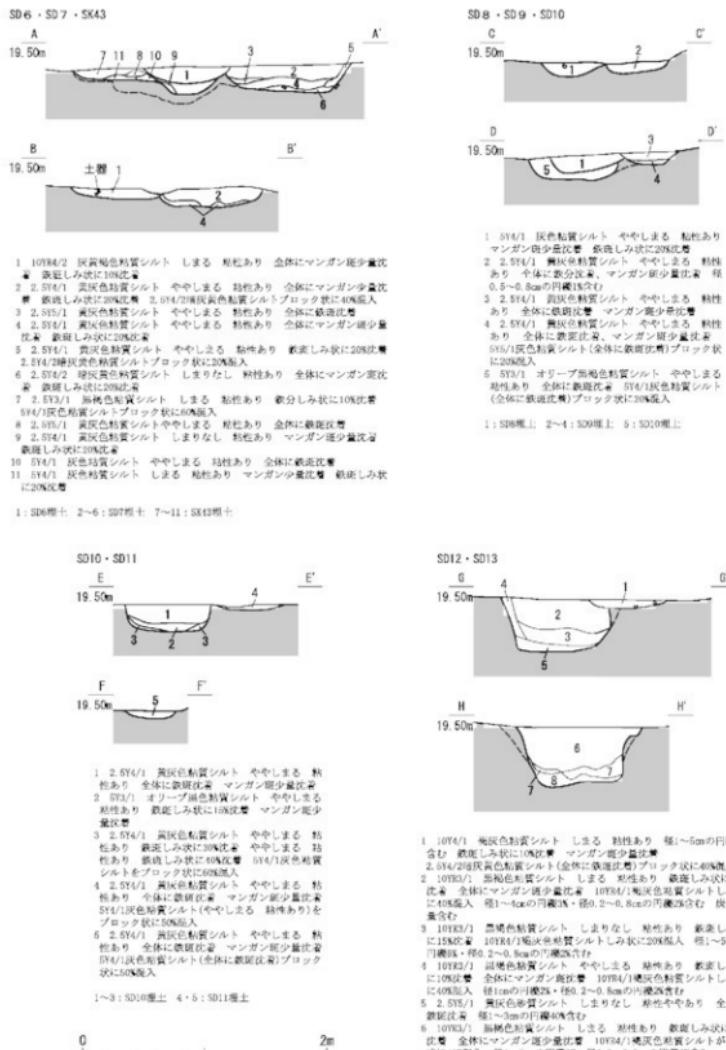
SD13

検出状況 DM16からD019グリッドで検出した。長軸方位はN-30° -Wで、SD 6などとほぼ平行して直線的に設置されている。北端でSD 9、南端でSD12と重複し、これらより古い。

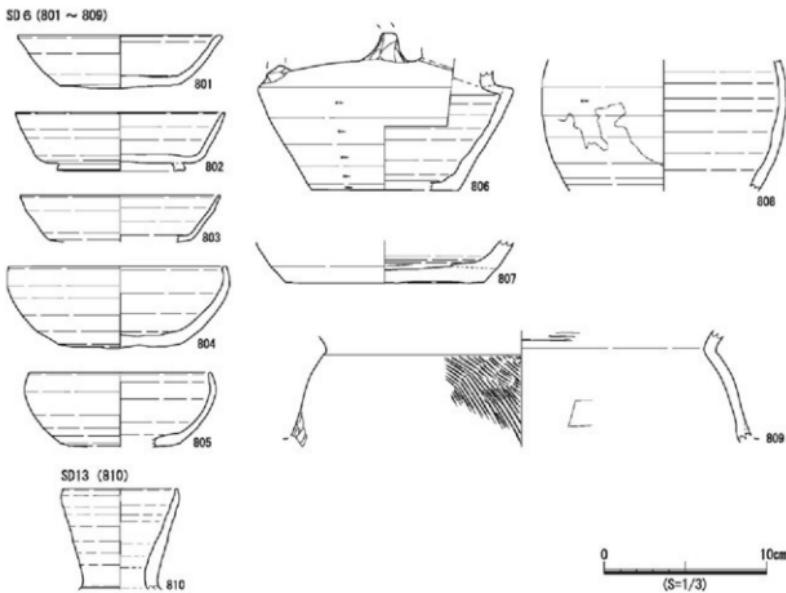
堆積状況 埋土の上層にはブロックが多く混じり、人為的に埋め戻された可能性が高い。一方下層にはブロックがなく、自然堆積である可能性がある。なお、SD12と同様にVI層を基盤とすること



第207図 DM16~D019グリッド溝状遺構群遺構図①



第208図 DM16～D019グリッド構造構造群構造図(2)



第209図 DM16~0019グリッド溝状遺構群出土遺物

から、埋土に円礫が多く含まれる。流水の痕跡は認められなかった。

底面・掘方 南北で底面の高さがほぼ同じであり、流水の方向は不明である。掘方の断面は逆台形に近く、周辺の溝では最も深く掘り込まれている。

遺物出土状況 埋土中から土器の破片が出土したが、遺構の規模に比して出土遺物は少ない。

出土遺物 須恵器と土師器の破片が出土した。この内、1点を図示した。

810は平瓶の口縁部と考えられる。頸部から直線的に開き、口縁端部が僅かに内湾する。

所属時期 出土遺物から時期を判断することはできない。長軸方位がほぼSD 6・7と同じであり、同様な性格の遺構と考えられる。

(2) SD14 (第 210 ~ 212 図)

検出状況 DM20 から E0 1 グリッドで検出した。長軸方位は N-18° -W である。わずかに蛇行しており、西側の溝状遺構群とは様相が異なる。SI 1・2・SK125 と重複し、いずれの遺構より古い。

堆積状況 比較的の遺物を多く含む1層とその下層(2~10層)で様相が異なる。1層はほぼ同質の堆積で一括して埋没している。礫が多く、出土遺物はこの層に限定される。下層は砂質の堆積が目立ち、流水があった可能性がある。また、5層の状況から、5層埋没後に少なくとも1回の再掘削があったと考えられる。なお、埋土下層を対象に花粉分析を実施したが、花粉化石は検出できなかった(第5章第1節)。

底面・掘方 底面の高さが南に向かって低くなっている。流水が意識されている。掘方の断面形は逆台形又は方形に近い形状であるが、1層の堆積部分で若干広がっている。掘方の再掘削が行われた可能性がある。このような改修は、六里遺跡の溝状遺構でも複数確認した(第3章第4節)。

遺物出土状況 すべての出土遺物が、SD14の検出面から0.2m下まで出土しており、1層に含まれていたと考えられる。第211図は、主な出土遺物の出土位置を示したものである。ドットは出土遺物の7割程度を表示しているが、①北端に集中していること、②検出面に近いレベルからも遺物出土していることがわかる。①については、出土した遺物に破片が多いことから一括廃棄とは考えにくいため、SI 1などとの重複によって、遺物が多い1層が削平された結果と考えられる。②については、灰釉陶器や古代の須恵器が該当し、SI 1などで使われていた土器が、僅かな産みとなって残っていたSD14に入り込んだことが予想される。それ以外の遺物はIV期のものが多いため、当該時期にSD14の大部分が埋没した可能性が考えられる。

出土遺物 SD14からは青黒い胎土である須恵器や横瓶などの特徴的な遺物の他、土師器、灰釉陶器が出土した。この内、11点を図示した。

811～816は須恵器である。811は坏蓋A類の頂部である。胎土が青黒く、頂部の回転ヘラ切り痕が未調整で残される。812は坏身B1類の底部である。底面は回転ヘラ切り痕がナデ消されている。813は須恵器の碗である。底面にヘラ記号が認められ、内底面が摩耗している。814は、鉢又は甕と考えられる大型器種の口縁部である。外面に2条の横位沈線を施す。815は横瓶である。体部外面のタタキ目と内面の当て具痕が明瞭に残る。美濃須衛窯産の可能性がある。816は甕の頸部から体部上半にかけての破片と考えられる。青黒い色調で、焼き締まる。体部外面に平行タタキ目と内面の当て具痕が明瞭に残り、その後に施したカキ目調整が認められる。

817・818は灰釉陶器である。817は皿又は鉢の口縁部と思われる。口縁部が強く屈曲する。内外面に灰釉を施す。818は小碗である。口縁端部が強く外反する。器壁が薄く、底面を除き灰釉を施す。

819・820は土師器の甕A類である。体部外面には斜位、内面上半には横位のハケ調整を施すが、内面のハケの方が粗い。体部内面下半には指頭調整痕が残る。口縁部は横ナデによって調整され、口縁端部の面取りと摘み上げが認められる。820は口縁部の器壁が厚く、2段の横ナデを施す。内外面のハケ調整は、よく似た工具が用いられる。

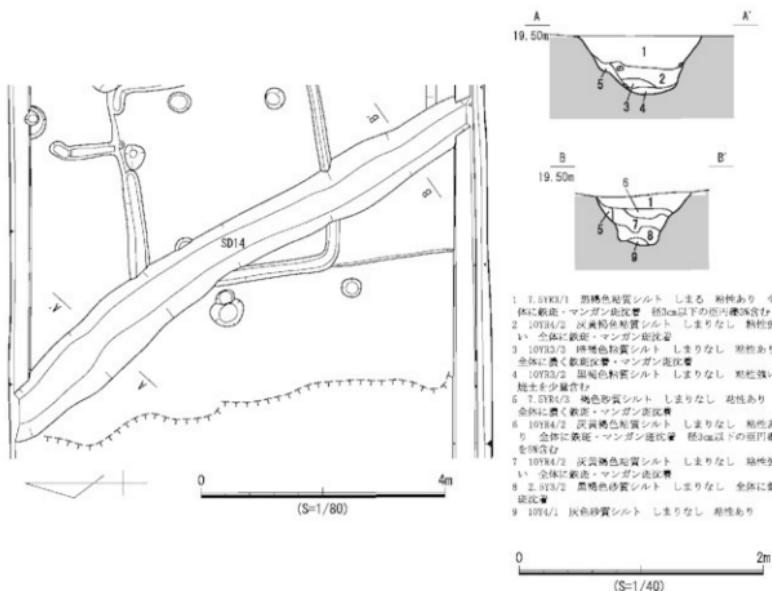
所属時期 IV b期以前に水路として設置され、何度かの改修を経てその役割を終えたと思われる。その後、VI a期の段階で浅い窪地となっていたが、SI 1の設置等に伴い完全に埋没したと考えられる。

(3) SD16(第213・214図)

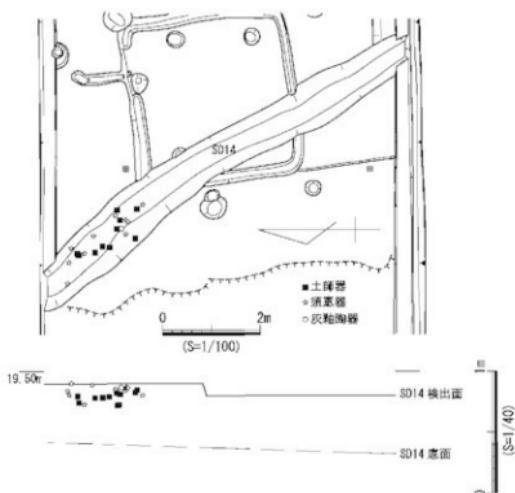
検出状況 EN 7からEO 7グリッドで検出した。発掘区東部の重複する竪穴建物群の南側に位置する。長軸方位がN-74°-Eであるが、この方位はSD 6などの溝上遺構とは直交せず、VI b期の竪穴建物であるSI 3の長軸方位とほぼ同じである。SK113と重複し、これより新しい。

堆積状況 埋土は単層で、特徴的な状況は認められない。

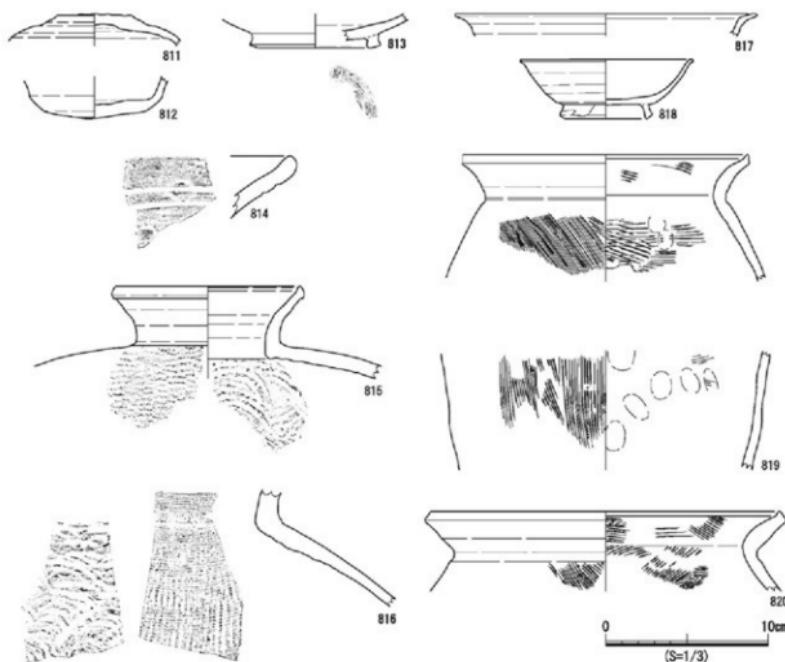
底面・掘方 非常に浅く、断面形状は半円形である。底面の高さは東西でほぼ同じであり、流水の方向は不明である。



第210図 SD14遺構図



第211図 SD14主な遺物の出土位置



第212図 SD14出土遺物

遺物出土状況 遺構の底面から、完形のロクロ土師器の碗（823）が出土した他、多数のロクロ土師器片が出土している。

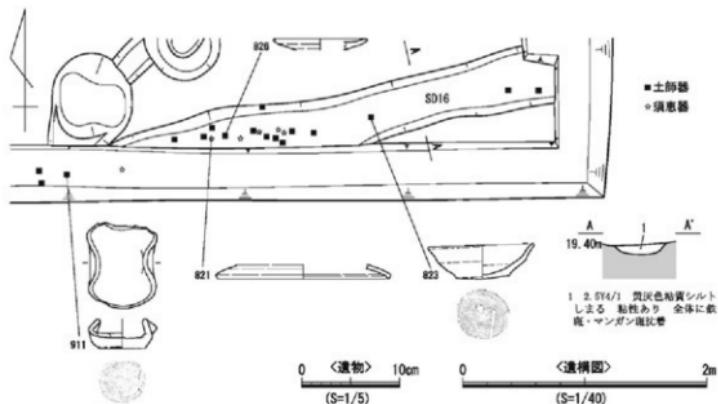
また、排水溝掘削の際出土したロクロ土師器の耳皿（911）もこの遺構から出土した可能性が高く（第213図）、本遺構に意図的に廃棄された可能性が高い。なお、遺物包含層掘削の際出土したロクロ土師器（同図 908～910）も、本遺構の周辺から出土している。

出土遺物 須恵器、灰釉陶器、土師器が出土した。この内 6 点を図示した。

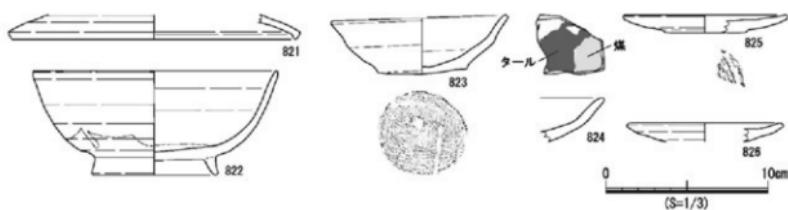
821 は須恵器の器蓋 C 類である。口縁端部外面のみ自然釉が付着しており、重ね焼き痕と考えられる。822 は灰釉陶器の深碗である。底面は回転ヘラケズリで調整されている。口縁部から体部の内外面に灰釉が漬け掛けで施される。内面が摩耗している。

823～826 はロクロ土師器である。823 は碗であり、ほぼ完形で、柱状の底面に回転糸切り痕が残る。824 も碗と思われるが、内面に煤やタールが付着しているため、灯明皿として使用されたと思われる。825・826 は皿で、825 の底面には不鮮明な回転糸切り痕が残る。

所属時期 出土した灰釉陶器から、VI b 期に位置付けられる。



第213図 SD16遺構図



第214図 SD16出土遺物

(4) 破壊状遺構群（第215・216図）

検出状況 DN15からDO17グリッドのSD 6西側で検出した。10条の溝が平行して配置されており、いずれも長軸方位がN-15°-Wである。隣接するSD 6やSK43とは重複しておらず、長軸方位も異なる。

堆積状況 IIIa層に類似した土壤に、基盤層であるVb層のブロックが混入する。全体的に鉄斑が沈着するが、マンガン斑が沈着しない特徴が認められた。なお、D7・D9・D10の埋土を対象に花粉分析及びプラント・オパール分析を実施した。その結果、花粉分析ではコウヤマキ属などの樹木の他、イネ科の花粉が卓越し、プラント・オパール分析でもイネが9,000個/g前後検出されており、水田耕作土の可能性が高い上層のIII層の影響が強いと考えられる。また、ネザサ節型が多いことから、周辺が開けた日の当たる場所であったことが推定される（第5章第1節）。分析の目的であった米以外の栽培食物に関する知見は得ることができなかった。

底面・掘方 底面は全体的に凹凸が多く、一定でない。耕作の痕跡という性格を反映していると考えられる。SD3・SD4は、上面が削平されて底面の凹凸のみが残った結果、連続する小穴と

して検出したと推定される。

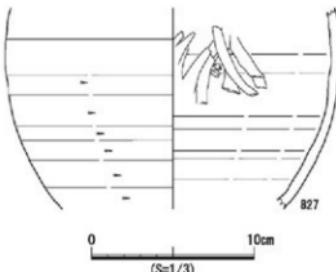
遺物出土状況 埋土中から、土器の破片が出土している。図示した須恵器の壺・瓶類（827）は、SD 6 から出土した破片と接合した。

出土遺物 繩文土器、須恵器、灰釉陶器、土師器が出土しているが、ほとんどが破片である。この内、1点を図示した。

827 は須恵器の壺・瓶類である。体部外面下半は回転ヘラケズリ調整が施され、内面には不定方向の深いヘラナデのような痕跡が残る。

所属時期 出土した 827 は、SD 6 から出土した

破片と接合しており、埋没時期の近似性を示す。また、灰釉陶器片が出土していることから、VIa 期以降の遺構と考えられる。水田化により当時の耕作土が削平されたと推定される。



第215図 SN 1出土遺物

3 柱穴状遺構（第 217 ~ 219 図）

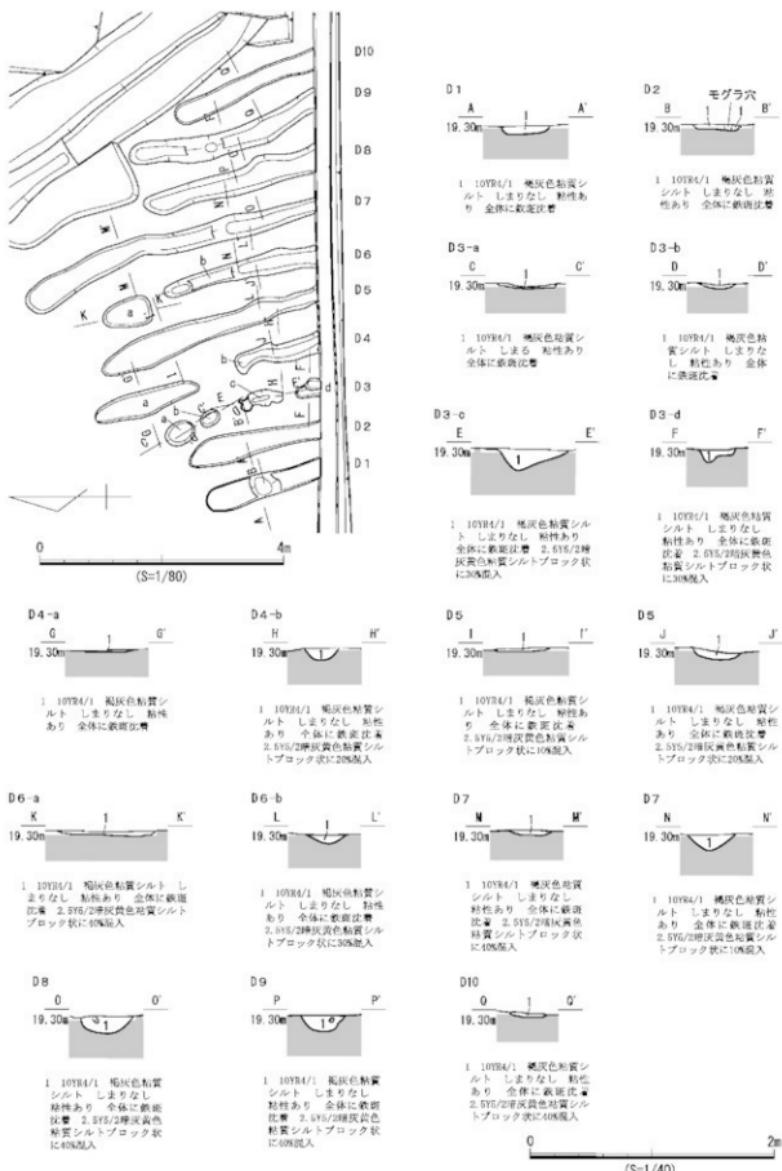
今回の調査で検出した土坑の内、柱が立てられていた可能性がある遺構を柱穴状遺構として抽出した（第4章第2節）。これらの遺構が掘立柱建物や櫛を構成する可能性について、堅穴建物の底面から検出した遺構を含めて検討したが、等間隔や平行な配置を確認できなかった。

検出状況 DM20 から EN 1 グリッドで 3 基 (SP 1 ~ 3)、EN 6・7 グリッドで 6 基 (SP 4 ~ 9)、EN 9 グリッドで 1 基 (SP10) を検出した。平面形が円形や梢円形であるものが多いが、隅丸方形 (SP 4・5) や不定形 (SP 3・9) のものもある。

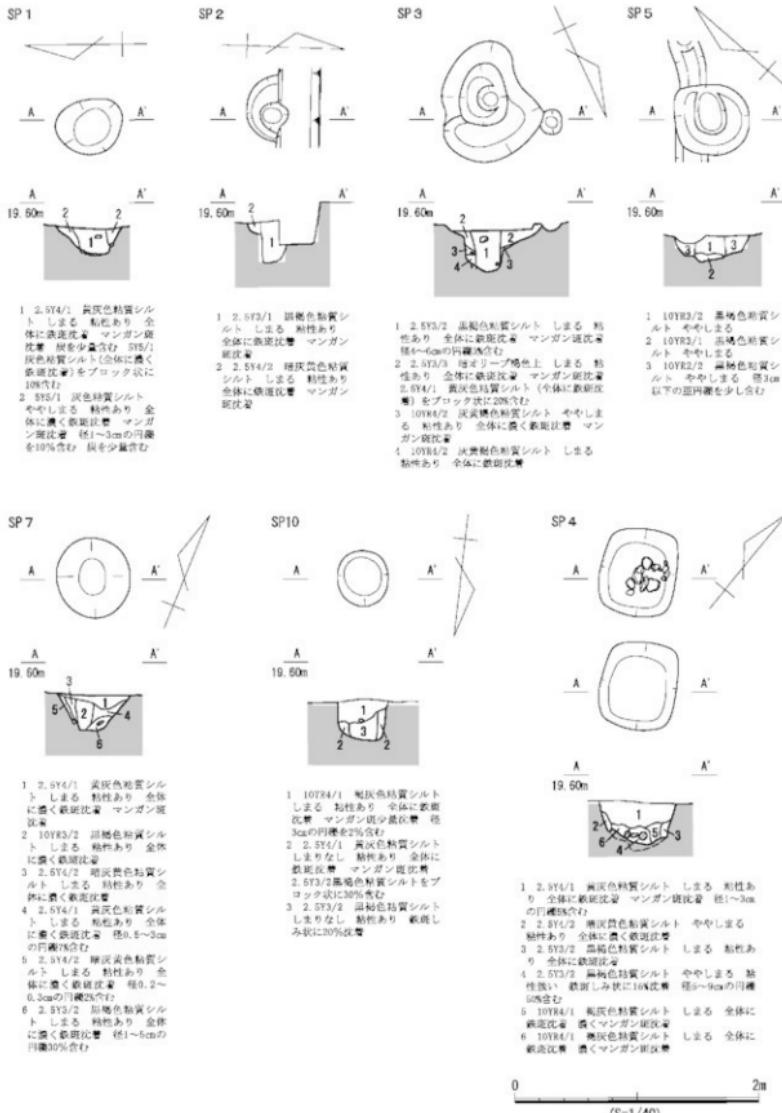
SP 1 は単独で、周囲に同様な遺構は認められない。SP 2 と SP 3 は約 2 m の間隔で近接しているが、この方位で他に並ぶ遺構は確認できなかった。また、SP 3 の南側に約 1 m の間隔で同規模の土坑が 2 基 (SK48・SK50) 並んでおり、東側にこの並びに直交する方位で土坑列 (SK51 ~ 56) が存在するが、その関係は不明である。SP 4 ~ 8 は SI10 と SI15 の間にある空閑地に集まつておらず、周囲に同規模の土坑もみられるが、配置に規則性は認められない。SP 9 は SI14 と重複しており、これより新しい。やや離れた位置で検出した SP10 も、周囲に同様な遺構は確認できなかった。

堆積・掘方 掘方では、柱当たりの部分が一段深くなるもの (SP 2・SP 3・SP 5・SP 6・SP 8・SP 9) とならないもの (SP 1・SP 4・SP 7・SP10) に分けられる。SP 4・SP 6・SP 8・SP 9 では、深くなった部分の周囲に VI 層に由来する礫群が集中しており、柱を埋め戻す際に VI 層の礫を利用した可能性がある。

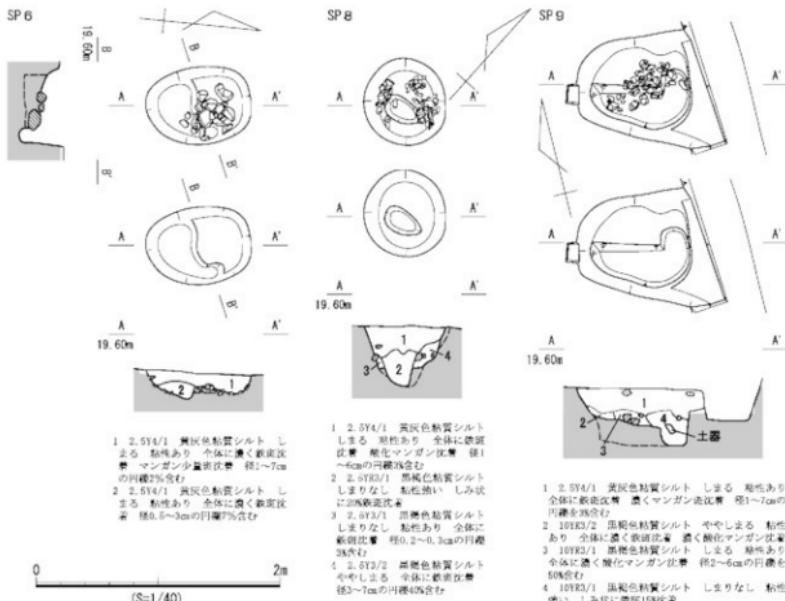
土層堆積では、柱痕跡の上面に別の堆積があるもの (SP 4・SP 7 ~ 10) と無いもの (SP 1 ~ 3・SP 5) に分けられる。無いものについては廃絶時まで柱が残されていたと考えられるが、あるものについては、廃絶後の僅かな程みに落ち込んだ堆積や柱を抜き取る際の再掘削が想定される。しかし、再掘削すれば掘方の形状が変化するはずであり、その可能性を指摘できるのは SP 9 のみである。柱痕跡が埋土上面まで達しない原因としては、柱痕跡が断面観察した位置



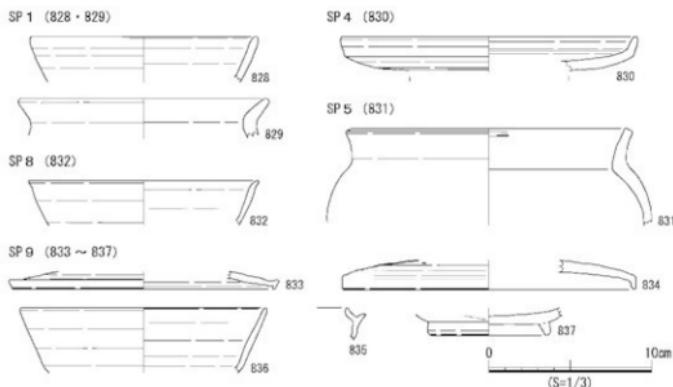
第216図 SN 1 遺構図



第217図 柱穴状遺構遺構図①



第218図 柱穴状遺構遺構図②



第219図 柱穴状遺構出土遺物

に無い場合 (SP 6) や、柱そのものが傾いてる場合も考えられるが、柱あたりの状態などから考えると柱は真っ直ぐ立っていた可能性が高い。そのため、掘方が掘削され柱が立てられたものの、次の段階に移る前に柱が抜かれ、廃絶した事が想定される。このような堆積をもつ柱穴状遺構は EN 6・7 グリッドに集中しており、同規模な土坑を含めて規則的な配置がみられない状況は、掘立柱建物（樋）が実際に建てられなかったことを示唆しているのかもしれない。

遺物出土状況 SP 3 と SP 7 を除いて土器片は出土したが、特徴的な出土状況はみられなかった。

出土遺物 SP 2・SP 6・SP 9 からは須恵器、灰釉陶器、土師器、その他は須恵器と土師器が出土した。この内、10 点を図示した。

828 は須恵器の壺身 C 類と思われる。829 は土師器の壺 B 類であるが、破片であるためかハケ目が確認できない。830 は須恵器の盤であり、底面に高台の痕跡が残る。831 は土師器の壺である。小型で口縁部外面に炭化物が付着する。口縁端部の面取りや内面のハケ目から A 類の 1 種と思われる。832 は須恵器の碗である。口縁端部が僅かに外反する。833・834 は須恵器の壺蓋 C 類、835 は壺身 A 類、836 が壺身 C 類である。837 は灰釉陶器の碗であり、底部内面が摩耗している。

所属時期 遺構の重複から、SP 9 は SI14 より新しいため、VI b 期以降に位置付けられる。同様な遺構の SP 4・6・8 も同時期の可能性がある。その他の遺構も、V b 期以降と考えられる。

4 土坑

土坑とした遺構の内、配置に規則性があるものを抽出し「土坑列」として記載した。

(1) 土坑列 1～3 (SK13～34、第 220～222 図)

検出状況 DM19 から D014 グリッドで検出した。当該遺構周辺は、Ⅲ層の掘削後にⅣ層上面で遺構検出を実施したが、不定形でシミ状の落ち込みを多数確認したことから、半割前にその範囲を段掘りし、明確な掘方の有無を判定する作業から行った。その結果、掘り込みを確認できたものを遺構として取り扱った。

遺構としたものの内、一定の間隔で一列に配置がみられる土坑を「土坑列」として抽出した。土坑列 1 は最も西に位置し (DM10～D011)、軸の方位は北-26° -E である。土坑列 2 は土坑列 1 から東へ約 12 m に位置し、軸の方位がほぼ南北軸に一致する。土坑列 3 は土坑列 2 の南端から派生するよう北東に延びており、軸の方位は N-50° -E である。それぞれの土坑の平面形は、土坑の並びの軸に直交する方位に長軸がある楕円形若しくは不定形で、土坑列 1 が 5 基 (SK13～SK17)、土坑列 2 が 9 基 (SK18～SK26)、土坑列 3 が 8 基 (SK27～SK34) で構成される。

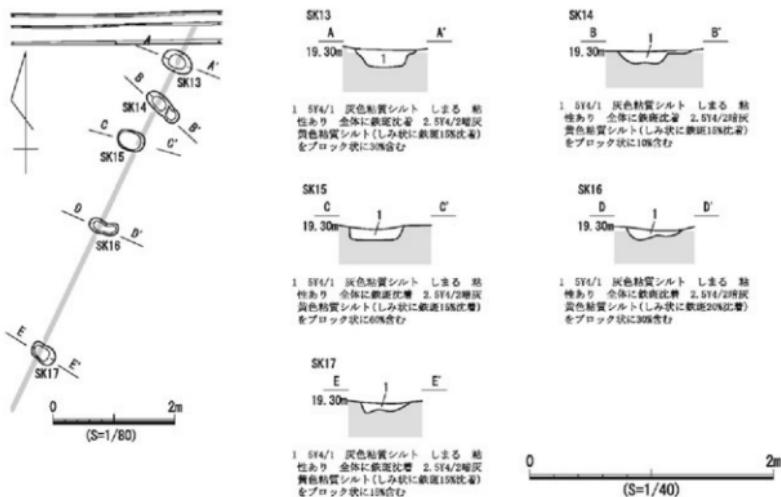
堆積状況 いずれの土坑もⅢ c 層とほぼ同質の埋土に、Ⅳ層がブロック状に混入する。マンガン斑の沈着はみられない。

掘方 いずれも非常に浅く、底面形状も不定なものが多い。意図的に掘り込んだ遺構ではなく、上層からの踏み込みなど、水田耕作に関する遺構と推定される。

遺物出土状況 SK19 の埋土から土師器が 1 点出土した以外に、遺物は出土しなかった。

出土遺物 図示可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 Ⅲ層が耕作土であった時期に、何らかの作業に伴ってⅣ層に痕跡が残されたと推定される。Ⅲ層にはⅦ期までの遺物が含まれるが、古代以前にも水田が存在した可能性があるため、



第220図 土坑列1遺構図

詳細な所属時期は不明である。

(2) 土坑列4 (SK51～56、223・224図)

検出状況 EM 2からEM 3グリッドで検出した。N-70°-Eで、5基の上坑が一列に配置されている。この方位は、隣接する竪穴建物群の長軸とほぼ直交する。平面形はいずれも円形や楕円形である。検出当初は掘立柱建物の柱穴である可能性を考えたが、間隔が1.0～1.1mと短く、柱痕跡が確認できないことから、性格不明の配置をもつ土坑群とした。5基の内、西から3基 (SK51～53) はSI 4の北壁に沿うように重複しており、これより新しい。SK54・SK55は一部発掘区の北壁にかかっているが、配置の間隔等から同様な遺構と判断した。また発掘区壁面の精査でも土層の落ち込みを確認しており (SK56)、位置的に、SK54の東側に連なる土坑掘方の南端と考えられる。

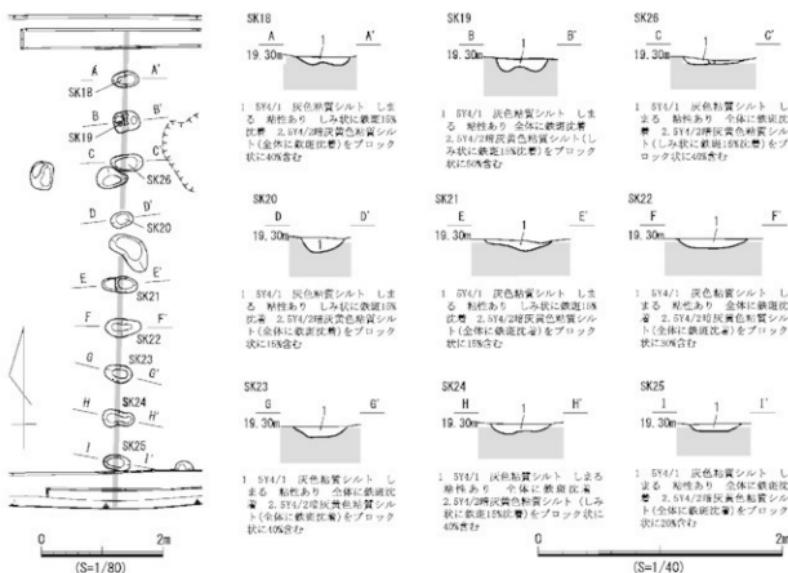
堆積状況 SK52～SK55まで共通して、上層にブロックや礫が混じる黄灰色粘質シルトがみられるため、人為的に埋め戻されたと考えられる。SK53は単層であるが、それ以外は下層の一部に黒色の粘質が強い堆積が認められた。SK56は上層の一部を検出したと考えられる。

掘方 SK52・SK54・SK55は、底面の高さがほぼ一致し、断面形が逆台形や方形である明瞭な掘方をもつ。SK53は他の土坑より深く、埋土が単層である点を含めて他の土坑と異なる。

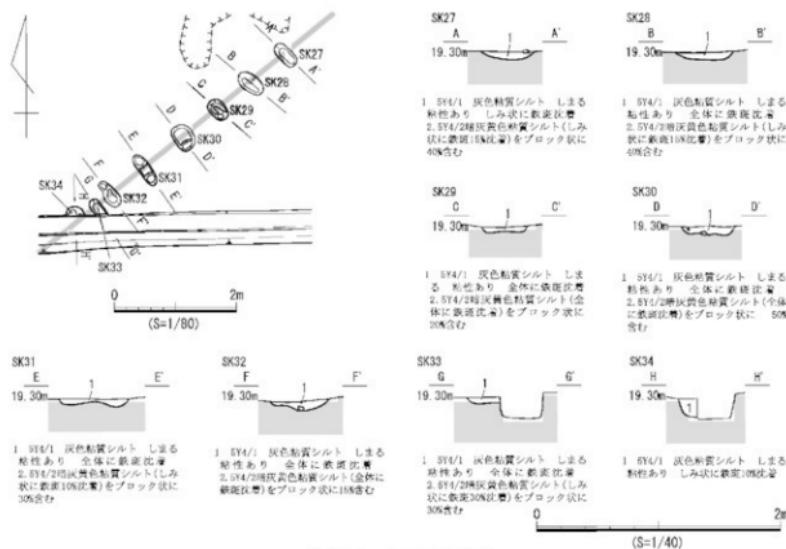
遺物出土状況 SK51～SK53・SK55から須恵器と土師器が出土している。SK51は、比較的の出土量が多いが、完形になる個体は認められない。1層からの出土遺物が多い (第223図) ことから、人為的に埋め戻した埋土に、大部分の遺物が含まれていたと考えられる。

出土遺物 本遺構群から出土した遺物の内、6点を図示した。

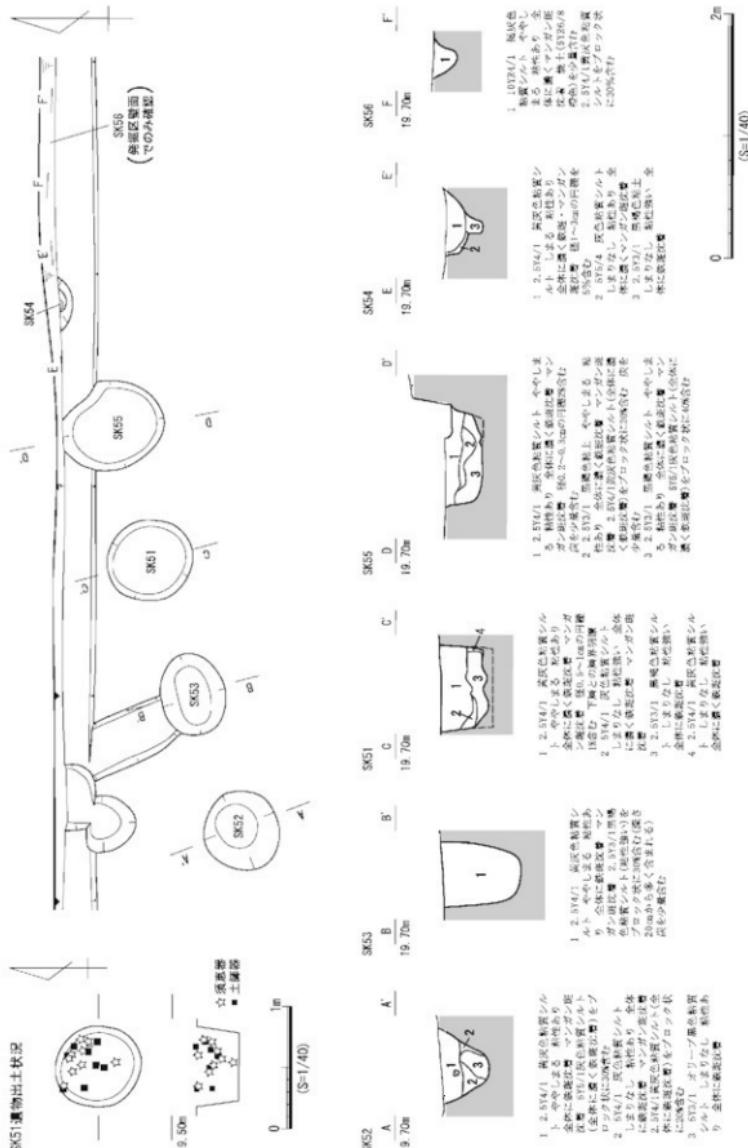
図示した遺物はいずれも須恵器である。838は壺蓋C類である。839・840は壺身C類である。



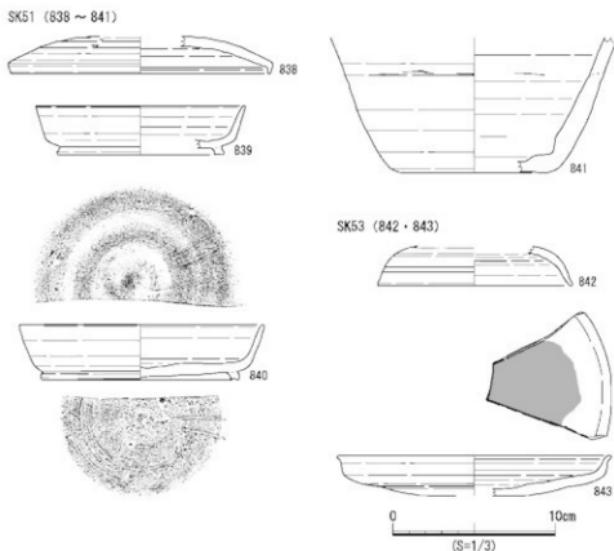
第221図 土坑列2遺構図



第222図 土坑列3遺構図



第223図 土坑例4 遺構図



第224図 土坑列1～4出土遺物

840は底面の回転ヘラ切り痕がナデ消されている。底部内外面のほぼ同じ位置に2条のヘラ記号が刻まれている。841は壺類の底部である。外面はヘラケズリ調整され、内外面に接合痕が残る。842は坪蓋A類である。体部と口縁部の境に浅い凹線が施され、口縁端部はやや開き気味になる。体部の外面が摩耗している。843は高台のないタイプの盤である。内面が摩耗し墨痕が残ることから、転用窯と考えられる。回転ヘラケズリ調整された底面も摩耗している。

所属時期 遺構の重複から、IV b期のSI 4より新しい。灰釉陶器が混入しないことや出土した須恵器の年代から、V b期には埋没したと考えられる。

(3) その他の土坑

今回の調査で検出した土坑の内、特徴的なものについて以下に述べる。なお、出土遺物については、次項にまとめて記載した。

SK12（第225図） D0 9グリッドで検出した。周辺のIV層上面から検出した土坑はほとんどが土坑列1～3のように不定形で浅かったが、本遺構については明瞭な掘方がみられた。また、埋土もII層とは明確に異なる黒褐色粘質シルトが堆積していた。性格は不明であるが、意図的に掘削された遺構と考えられる。出土遺物や遺構の重複がないため、所属時期は不明である。

SK42（第225図） DN15グリッドで検出した。SK12と同様に、周囲の土坑と異なる明確な掘方がみられた。埋土についても同様である。出土遺物や遺構の重複がないため、所属時期は不明である。

SK44（第225図） EM 1からEN 1グリッドで検出した。SI 1と重複し、これより古い。平面形はほぼ円形である。断面形は底面がやや狭い逆三角形に近い形状である。遺物は、土師器の破片が出土している。SI 1より古いため、VI a期以前の遺構と考えられる。

SK48（第225図） EM 1グリッドで検出した。堅穴建物がない空閑地に、SP 3・SK50などとともに設置されている。この3基の並びは、土坑列4と直交するような方位にみえるが、その関係は不明である。平面形は東西に長い楕円形で、断面形は2段になっている。2段の掘り込みに対応する土層がみられないことから意図的にこのような形状にされたと思われるが、その理由は不明である。なお、埋土にはブロックやVI層に由来する円礫が多く混じり、人為的に埋められたと考えられる。遺物は、土師器と須恵器の破片が出土している。時期判別可能な遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

SK49・50（第225・230図） EN 1からEN 2グリッドで検出した。両遺構は重複しており、SK49の方が新しい。平面形はSK49が円形、SK50が方形に近い形状である。SK50は断面形も方形に近く、特に南側が底面に対し壁面が垂直に近い形状をとる。埋土にはブロックやVI層に由来するとと思われる円礫が多く混じるため、人為的に埋められたと考えられるが、土層の状況から、複数の遺構であった可能性がある。遺物はSK49から灰釉陶器（845）、SK50から須恵器と土師器の破片が出土している。SH49は灰釉陶器が出土したことから、VI a期以降の遺構と考えられる。

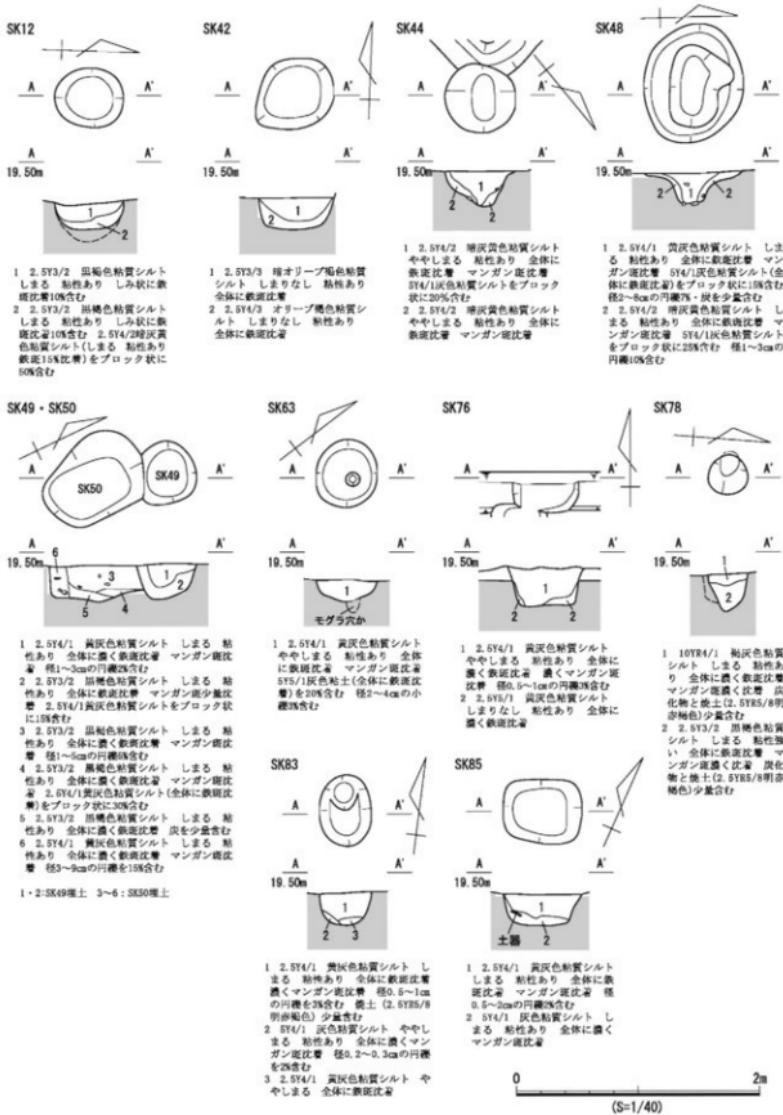
SK63（第225・230図） EN 2グリッドで検出した。西側にSI 3、北側にSI 4が隣接しているが重複しない。平面形は円形、断面形は半円形である。埋土は単層であるが、比較的多くの遺物が含まれる。遺物は大半が土師器の破片であり、わずかに須恵器（846）と灰釉陶器の破片が混じる。詳細な時期は不明であるが、灰釉陶器が混入することから、VI a期以降の遺構と考えられる。

SK76（第225図） EM 2グリッドの排水溝底面で検出した。遺構の北半が発掘区外に延びる。SK58と重複し、これより古い。全容は不明であるが、検出した範囲の平面形は方形である。また、断面形も方形に近く、底面に対して壁面がほぼ垂直に掘り込まれる。土坑列4の北側に位置しているが、その関係は不明である。出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK78（第225図） EN 3グリッドで検出した。平面形は円形で、断面は三角形に近い形状をとる。埋土中に焼土や炭化物が混入しており、土師器や灰釉陶器の破片が含まれる。以上の状況から、掘方が削平された堅穴建物のカマドに関連する遺構である可能性がある。詳細な時期は不明であるが、灰釉陶器が混入することから、VI a期以降の遺構と考えられる。

SK83（第225・230図） EN 5グリッドで検出した。西側にSI 9が隣接するが、重複しない。平面形は南北が長い楕円形で、断面形は半円形である。遺構底面の北部が若干深くなっているが、詳細は不明である。埋土中に焼土や炭化物が混入しており、須恵器（848等）が出土している。SK78と同様に、掘方が削平された堅穴建物の一部である可能性がある。所属時期は、灰釉陶器が混入しないことや848の時期から、V b期に属すると考えられる。

SK85（第225・230図） EN 5グリッドで検出した。東側でSI10と重複し、これより新しい。平面形は方形で、断面形も方形に近い。長軸方位がSI10とほぼ直交しており、この点はSP 4のような方形の遺構と共通している。埋土中から須恵器（849・850等）や土師器の破片が出土している。出土した須恵器から、V b期に属する遺構と考えられる。



第225図 その他の土坑遺構図①

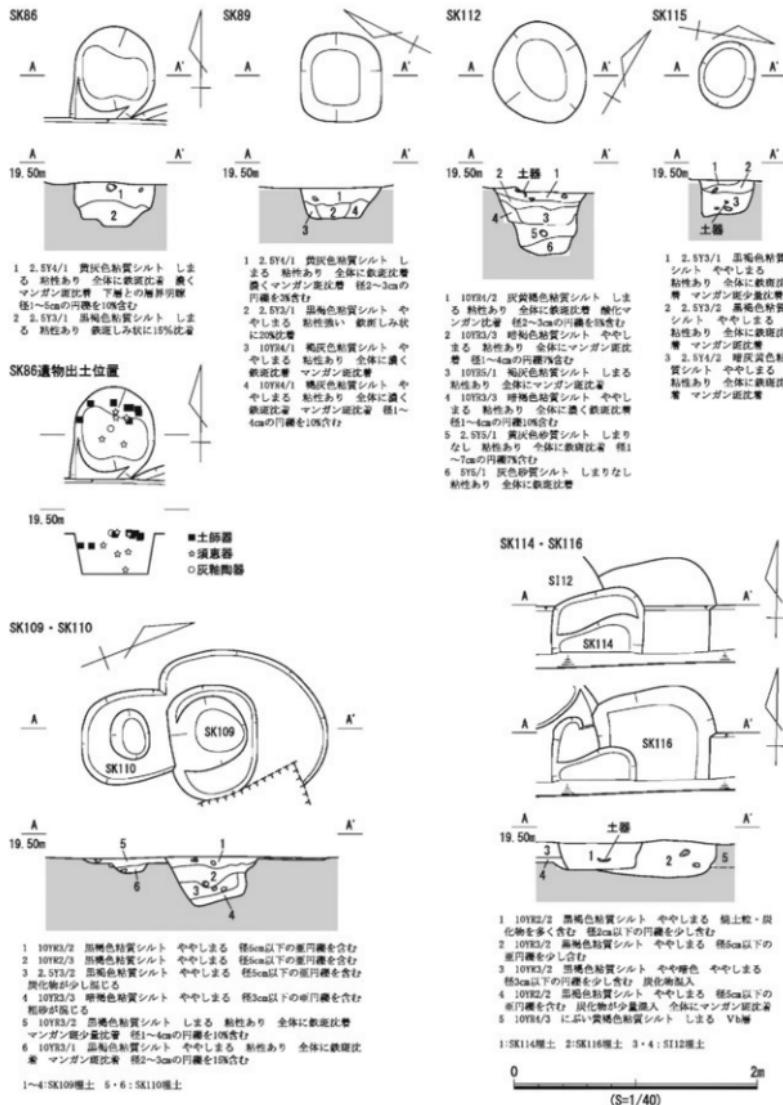
SK86（第226・230図） EN 7からEO 7グリッドで検出した。SD15と重複し、これより新しい。平面形は円形で、南側にやや浅い掘り込みが付属するような形状をとるが、この浅い部分はSD15の延長と思われる。断面形は不定な形状で、底面も平坦にならない。本遺構の周辺に、方形や円形である柱穴状遺構や土坑が複数存在するが、それぞれの関係は不明である。埋土中から須恵器（851等）・土師器・灰釉陶器（852）が比較的多く出土している。散布状況を比較すると、土師器や灰釉陶器は表層に近い1層から出土しているのに対し、須恵器は底面に近い2層からも出土している。そのため、1層と2層が異なる経緯で埋没した可能性が考えられる。なお、851は、出土遺物の中で最も深い位置から出土している。所属時期は、灰釉陶器が混入することからVIa期以降に埋没したと考えられる。

SK89（第226図） EN 7グリッドで検出した。SI15・18の南側に位置し、SP 5・SK92とも隣接するが、どの遺構とも重複していない。平面形は方形で、断面形は逆台形の形状をとる。長軸方位は北から西に傾いており、他の方形土坑と共通する。埋土の上層（1層）と下層（2～4層）で大きく堆積が異なっており、特に2層は黒褐色粘質シルトはかなり粘質が強く、礫が混入しない特徴がある。掘方壁面の崩落（3・4層）→滲水等による堆積（2層）→人為的埋設（1層）の過程が想定されるが、土坑の性格は不明である。遺物は、須恵器の破片が出土している。遺構の重複や時期判別可能な出土遺物がないため、所属時期は不明である。

SK109・110（第226・230図） EN 4グリッドで検出した。両遺構は重複しており、SK109の方が新しい。また、両遺構の検出位置がSI 8の埋土上面であり、SI 8より新しい遺構である。掘方には複数の段があり、複雑な形状である。埋土の状況から考えると、SK109が4回、SK110が2回の掘削・再掘削を経ていると考えられる。このような状況は、後述するSK113・SK121・SK122でも確認できる。遺物は、SK109から土師器・須恵器（854等）、灰釉陶器の破片が出土している。所属時期は、埋土に灰釉陶器が混入し、SI 8より新しいことから、VIa期以降と考えられる。

SK112（第226・230図） EM 4グリッドで検出した。SI 6・SI 7の埋土上面で検出しておらず、これらの遺構より新しい。平面では確認できなかったが、土層の状況から2つの土坑が重なっている可能性が高い。遺物のほとんどは上層（1～4層）中に含まれており、下層（5・6層）からの出土は少ない。土師器（856等）、須恵器（855等）の破片が出土しているが、856は1層と6層から出土したものが接合しており、上層の再掘削によって埋土に混入したと考えられる。所属時期はSI 6・SI 7より新しいためVIa期以降に位置付けられる。

SK114・SK116（第226・230図） EN 6グリッドで検出した。ともにSI12と重複しており、SK114はSI12より新しく、SK116はSI12より古い。したがって、SK116→SI12→SK114の順で構築されたことになる。発掘区南壁にかかっているため全容は不明であるが、検出した範囲ではともに方形に近い平面形である。SK114は底面南部が一段低くなってしまっており、この部分のみSK116よりも深くなる。SK114の埋土中には炭化物や焼土が目立つが、元々はSI12の埋土中に含まれていたものと思われる。遺物は、ともに須恵器（862～864等）や土師器（865）が出土している。所属時期は、SK116がSI12よりも古いくことや出土遺物からVb期に位置付けられる。SK114は、埋土の状況から出土遺物がSI12からの混入である可能性があり、遺構の重複から所属時期が周囲の遺構よりは降ると考えられる。



第226図 その他の土坑遺構図②

SK115（第226図） EN 6グリッドで検出した。SI10とSI15の間に位置し、SP 6、SP 4、SK118と直線的に並んでいるようにみえるが、平面形状や埋土などに共通点がなく、等間隔にならないことから、土坑列とはしなかった。平面形は円形で、断面形は方形に近い。周辺のSK86やSK89とは異なり、下層（3層）にV b層に類似した埋土がみられる。遺物は須恵器の破片が1点のみ出土している。遺構の重複や時期を判別できる出土遺物がないため、所属時期は不明である。

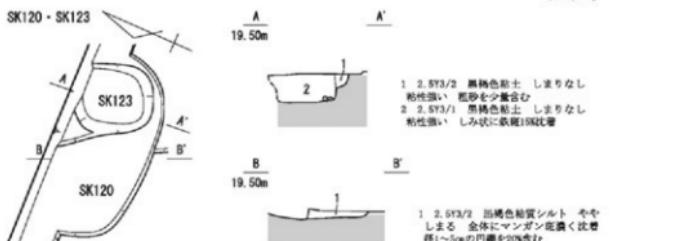
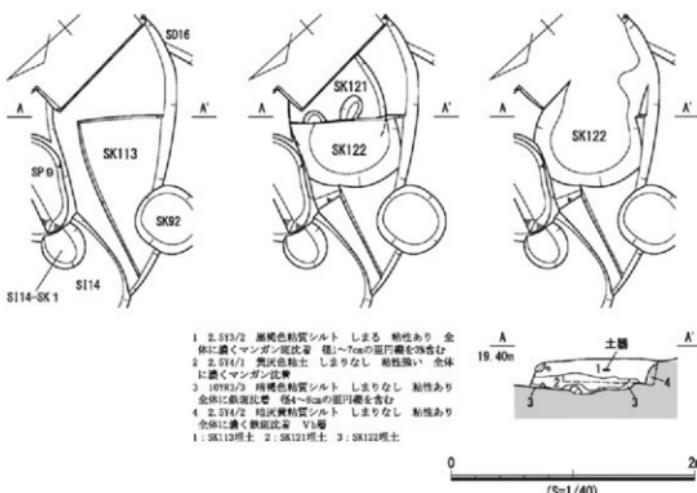
SK113・SK121・SK122（第227・230図） EN 7グリッドで検出した。複雑に重複するSI13～18の竪穴建物群の南側に位置し、検出当初は竪穴建物であることを想定していた。掘削を進める過程で、複数の土坑が複雑に重複する遺構であることが判明した。遺構の北側でSI14と重複しこれより新しく、南側のSD16より古い。EN 7グリッドの発掘区東壁の土層では、さらに多くの遺構が重複する状況が観察され（第227図5～10層）、当該箇所で集中して掘削が行われている。なお、各務原市広畠野口遺跡において、「廃棄土坑」とされる7世紀後半の遺構（SK24）が検出されており、複雑な堆積状況や掘方に共通点がみられる（岐阜県文化財保護センター2010）。本遺構群からは須恵器（858～861等）、土師器、灰釉陶器が比較的多く出土しているが、いずれも破片である。所属時期は、SI14より新しいことからVI b期以降と判断される。

SK120・SK123（第227・230図） EM 7グリッドで検出した。SK120はSI13及びSK125の完掘後にその底面から検出した遺構であり、これらより古い。またSK123は、SK120完掘後にその底面から検出した。SK120・SK123ともに北部が発掘区外であるため全容は不明であるが、平面形は方形に近い形状と考えられる。SK120は、上面をSI13やSK125によって削平されているため非常に浅い。一方SK123は断面形が方形に近い形状をとり、本来はSK85やSK89のような方形土坑であったと考えられる。出土遺物は、SK120から須恵器（866）が1点のみ出土している。所属時期は、遺構の重複からV b期以前と考えられる。

SK128（第228・230図） EN 1からEO 1グリッドで検出した。掘方の南側が発掘区外であるため、全容は不明である。掘方の北側でSI 2と重複し、これより新しい。SI 2との重複関係を誤認していたため、SI 2の掘削中に平面形を確認した。埋土は、しまりのない黒褐色シルトが堆積していた。なお、南北方向の断面で確認した褐色の粘質シルト（A-A' 5層）は、発掘区南壁では確認できなかった。掘方の形状から竪穴建物である可能性を考慮して調査を起こったが、硬化した床面や整地上は確認できなかった。遺物は、須恵器、土師器が出上した。所属時期は、SI 2より新しいことから、V b期以降に位置付けられる。

SK129（第229・230図） EM 7からEN 7グリッドで検出した。掘方の北側が発掘区外であることや、多くの遺構と重複するため、全容は不明である。掘方の東側でSI14と重複しこれより古い。SI13とSI15とも重複し、これより新しい。SI13・SI15の掘削後に検出し、その後の土層確認によつてSK129の方が新しいことが判明したため、SI13・SI15掘削後の掘方を図示している。埋土の上層の状況は不明であるが、当初検出できなかったことから、周囲の竪穴建物と類似した埋土であったと思われる。検出した面から下は、黒褐色粘質シルトが堆積していた。掘方の形状から竪穴建物である可能性を考慮して調査を起こったが、硬化した床面や整地土は確認できなかった。掘方底面はVI層に達し、礫が露出した。遺物は、須恵器、土師器が出土した。所属時期は、SI14よ

SK113・SK121・SK122

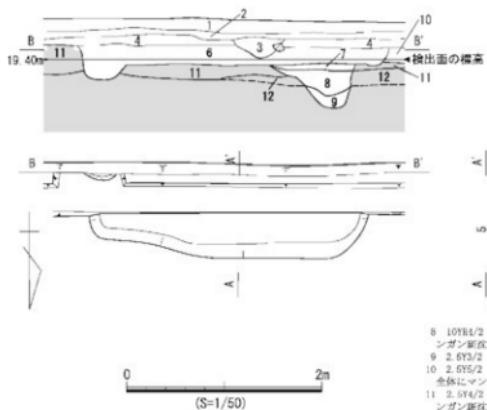


第227図 その他の土坑遺構図③

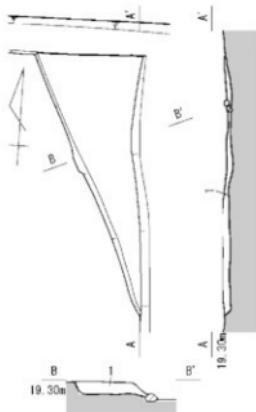
り新しいことから、VI b期以前に位置付けられる。また、掘方西壁の方位が周辺の堅穴建物と長軸方位がほぼ同じであり、V b期に属する可能性がある。

(4) その他の土坑出土遺物（第230図）

844は土器器の壺A類である。体部外面と口縁部内面にハケ調整を施す。口縁部は2段に横ナデされ、口縁端部は面取りと摘み上げがみられる。845は灰釉陶器の短頸壺である。口縁部が僅かに外反し、体部上半に自然釉が付着する。846は須恵器の壺蓋A類と思われる。焼成不良により胎土が灰白色である。内面に畿内系の特徴とされる同心円状の當て具痕が残る（渡辺1996）。847は須恵器の壺蓋C類である。848は須恵器の壺身C類である。底面が突出し、回転ヘラケズリで調整されている。内面に墨痕が残り、転用硯と考えられる。849は須恵器の壺蓋C類、850は大型の壺身C類か盤と思われる。850の底面はナデ調整を施す。851は須恵器の壺身B2類で

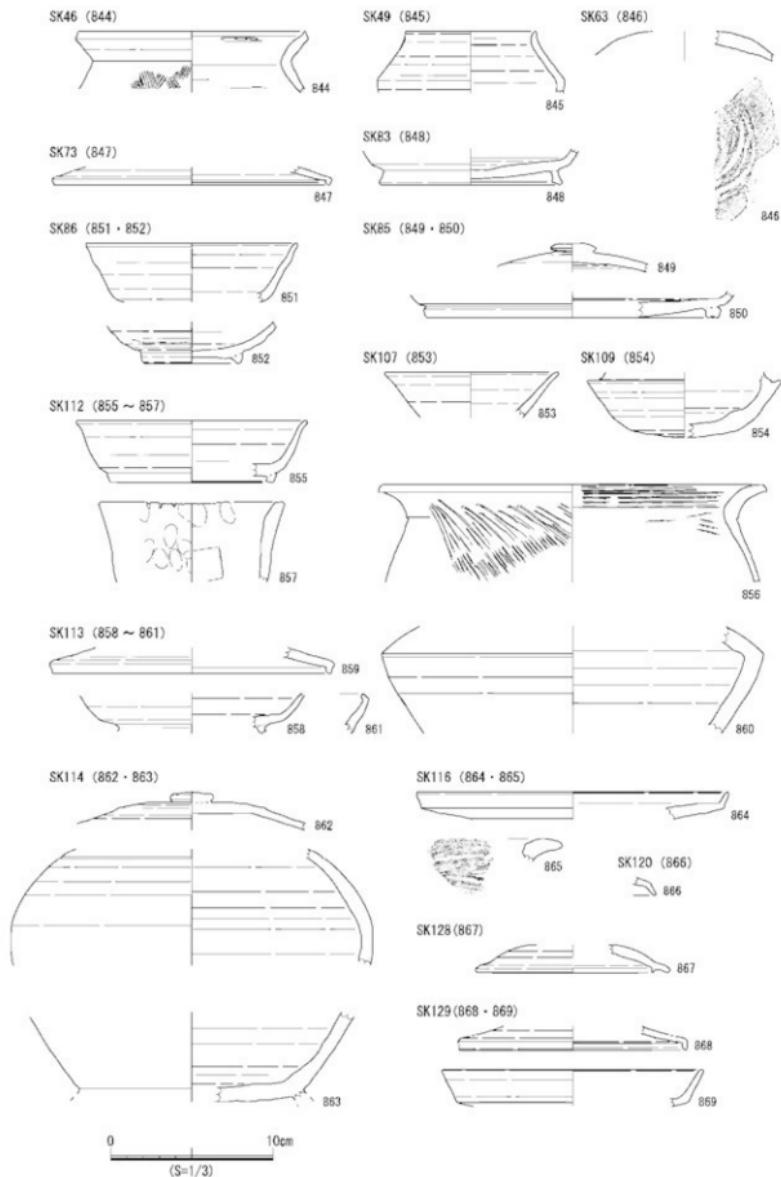


第228図 SK126遺構図



第229図 SK129遺構図

ある。852 は灰釉陶器の碗である。高台は低く、底面の外側に付される。底面に回転糸切り痕が残る。853 はロクロ土師器の柱状高台碗又は脚高高台皿と思われる。854 は須恵器の坏身 A 類である。小型であるが器壁が厚い。855 は須恵器の坏身 C 類である。高台の位置が底面の外縁寄りに付され、口縁部が緩やかに外反する。856 は土師器の甕 B 類である。体部外面と口縁部内面に粗いハケ目が残る。口縁部は強く外反し、口縁端部は指ナデによって面取り状になっている。体部の器壁は薄く、外面に煤が付着する。857 は土師器であり製塙土器の可能性がある。口縁端部には粘土板を折り曲げた際に生じるひび割れが残り、指オサエや板ナデによって成形されている。特に口縁部の器壁が厚い。858 は器種不明であるが、青黒い色調であり畿内系と考えられる。859 は須恵器の坏蓋 C 類、860 は瓶類の体部、861 は器種不明の口縁部である。860 は体部上半が屈曲するため、平瓶の可能性がある。862 は須恵器の坏蓋 C 類、863 は頸部下に横位の沈線がめぐるため、水瓶と思われる。底部には高台の痕跡が残る。864 は須恵器の盤、865 は土師器の甕 B 類である。865 は屈曲が強く内面に粗いハケ目が残る。866 は須恵器の蓋類の口縁部と考えられる。867 は須恵器の坏蓋 B 類である。内面にかえりがあり、口縁部より僅かに突出する。868 は須恵器の坏蓋 C 類である。外面に重ね焼きによる融着を剥がした痕跡が残る。869 は須恵器の坏身 C 類である。口径に比して器高が低い。



第230図 その他の土坑出土遺物

表73 壁穴建物一覧表

遺構 番号	地区割り		棟出面	平面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	長軸 方位	切り合い		出土 遺物
	南北	東西			上端	下端	上端	下端			新	旧	
SI 1	EM-EN	20-1	Ⅲ基	方形	3.64	3.06	3.49	2.90	0.13	N 8° E	SI 2 SD 4 SD14 SK44		P145 K33 H155 S1
SI 2	EN-EO	1	Ⅲ基	方形	4.69	4.50	2.96	2.85	0.06	N 84° E	SI 1 SK128 SK11	SD14	P39 H23 J2
SI 3	EN	2	Ⅲ基	方形	2.59	2.40	2.38	2.12	0.12	N 77° E		SI 4	P90 K14 H96 J1 S1
SI 4	EM-EN	2-3	Ⅲ基	方形	4.53	4.32	3.67	3.37	0.11	N 72° E	SI 3 SI 5 SK51 SK52 SK53 SK62		P8 K3 H42
SI 5	EN	3	Ⅲ基	方形	3.30	3.18	3.25	3.08	0.07	N 7° W	SK77	SI 4	P245 K31 H51
SI 6	EM-EN	4	Ⅲ基	方形	3.01	2.84	2.85	2.70	0.16	N 18° W	SI 7 SK112		P48 K2 H84
SI 7	EM-EN	4-5	Ⅲ基	-	3.98	3.80	(3.04)	(2.94)	0.11	N 68° E	SK107 SK111 SK112	SI 6 SI 8	P45 K1 H65 S1
SI 8	EN	4-5	Ⅲ基	-	3.52	3.36	3.36	3.32	0.07	N 75° E	SI 7 SK107 SK109 SK119		P7 H19
SI 9	EN-EO	4-5	Ⅲ基	方形	(2.82)	(2.74)	(1.60)	(1.50)	0.11	-	SK117		P1 H4
SI 10	EM-EN	5-6	Ⅲ基	方形	3.88	3.60	3.66	3.48	0.10	N 30° W	SI 12	SI 11 SK85	P136 K1 H200 S1
SI 11	EM-EN	5-6	Ⅲ基	方形	2.85	2.70	2.80	2.58	0.16	N 23° W	SI 10 SK84		P82 K2 H92 S1
SI 12	EN	6	Ⅲ基	方形	(1.45)	(1.30)	(0.90)	(0.45)	0.19	N 28° W		SI 10 SK114 SK116	P22 H7
SI 13	EM	7	Ⅲ基	方形	(1.60)	(1.46)	(1.22)	(1.18)	0.10	-	SI 14 SK129	SI 15 SI 16 SI 17 SK91 SK120	P4 H22
SI 14	EM-EN	7	Ⅲ基	方形	(4.72)	(4.65)	(2.12)	(1.99)	0.24	N 3° W	SI 9	SI 13 SI 15 SI 18 SK113 SK125 SK129	P78 K12 S1
SI 15	EM-EN	7	Ⅲ基	方形	(4.20)	(4.16)	(1.68)	(1.60)	0.14	N 23° W	SI 13 SI 14 SI 16 SK93 SK129		P43 H37
SI 16	EM-EN	7	Ⅲ基	-	-	-	-	-	0.09	-	SI 13 SI 17 SK93	SI 15	
SI 17	EM-EN	7	Ⅲ基	方形	(2.76)	(2.48)	(1.79)	(1.70)	0.10	N 24° W	SI 13 SI 15 SK129	SI 16	H1
SI 18	EN	7	Ⅲ基	方形	2.92	2.68	(1.27)	(1.19)	0.11	N 15° W	SI 14 SI 15 SK129		H2

表74 穫穴建物カマド属性表

遺構名	地区割り		棟出面	棟出位置	被侵部	袖部	下部土坑	煙道部	支脚柱	棟出範囲 (m)		出土遺物	備考
	南北	東西								長軸	短軸		
SI 1 カマド	EN	1	III基	北壁中央 東寄り	床面	一部 残存	無	側方外へ突出 (1.02m)	抜取穴	1.06	0.23	P6 H4	袖跡下に上 火坑 (P6)
SI 3 カマド	EN	2	III基	東壁中央 南寄り	下部土坑 堆土上面	一部 残存	有	側方外へ突出 (0.18m)	無	0.65	0.49	P4 K18 H4 S7	遺物がまと まって出土
SI 4 カマド	EM	2	III基	北壁中央	床面	一部 残存	無	不明	支脚柱 残存	1.06	0.95	H1 S2	被侵跡上面 から土師器 埋出土
SI 5 カマド	EN	3	III基	北壁中央 東寄り	床面	一部 残存	無	側方外へ突出 (0.12m)	無	1.19	0.94	P7 K1 H18	火床手前に 土席 (P9)
SI 6 カマド	EN-EN	4	III基	北壁中央 東寄り	下部土坑 堆土上面	一	有	不明	不明	1.00	0.56	P3 K1 H3	
SI 8 カマド	EN	5	III基	北壁中央	不明	一	無	不明	抜取穴か	0.28	0.21	P10 H25	
SI 9 カマド	EN	5	III基	北壁中央 東寄り	不明	一	有	不明	抜取穴か	1.05	0.76	K2	
SI 10 カマド	EN	6	III基	北壁中央 東寄り	下部土坑 堆土上面	一	有	不明	無	1.59	0.72	P8 K3 H11	
SI 11 カマド	EN	6	III基	北壁中央 東寄り	不明	一	有	不明	抜取穴か	0.75	0.64	P11 H2	
SI 12 カマド	EN	6	III基	不明	下部土坑 堆土上面	一	有	側方外へ突兀 (0.33m)	抜取穴か	1.52	0.48	P13 H26	
SI 15 カマド	EN	7	III基	西壁中央	下部土坑 底面	一部 残存	有	側方外へ突出 (0.12m)	抜取穴か	1.55	0.87	P32 H15 S2	遺物がまと まって出土

表75 穫穴建物主柱穴一覧表①

遺構名	地区割り		棟出面	平 面 形	堆 積	断 面 形	長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	切り合い		出土 遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端		新	旧	
SI 1-P 1	EN	1	II基	円形	a	半円形	0.36	0.24	0.33	0.23	0.06			
SI 1-P 2	EN	1	II基	円形	a	半円形	0.48	0.35	0.43	0.34	0.05			
SI 1-P 3	EN	1	II基	円形	b3	半円形	0.35	0.20	0.32	0.22	0.35			
SI 1-P 4	EN	1	II基	円形	a	半円形	0.37	0.28	0.33	0.24	0.04			
SI 2-P 1	EN	1	II基	円形	b3	台形	0.35	0.26	0.30	0.22	0.22			SI 2-P 7 P6
SI 2-P 2	EN	1	II基	円形	b1	台形	0.27	0.22	(0.24)	(0.18)	0.32			
SI 3-P 1	EN	2	II基	円形	a	半円形	0.28	0.16	0.23	0.10	0.05			SI 3-P 8
SI 3-P 2	EN	2	II基	円形	a	半円形	0.30	0.20	0.26	0.20	0.09			SI 3-P 10 H8
SI 3-P 3	EN	2	II基	円形	a	半円形	0.29	0.16	0.26	0.14	0.06			H1
SI 3-P 4	EN	2	II基	円形	a	三角形	0.26	0.10	0.22	0.10	0.11			
SI 4-P 1	EN	2	II基	円形	a	半円形	0.38	0.22	0.36	0.18	0.13			H1
SI 4-P 2	EN	3	II基	円形	b1	台形	0.34	0.19	0.30	0.18	0.27			
SI 4-P 3	EN	3	II基	円形	d	台形	0.34	0.20	0.29	0.14	0.28			
SI 4-P 4	EN	2	II基	円形	b2	台形	0.37	0.23	0.36	0.20	0.25			
SI 5-P 1	EN	3	II基	円形	a	台形	0.33	0.28	0.32	0.28	0.04			
SI 5-P 2	EN	3	II基	円形	a	半円形	0.30	0.15	0.25	0.13	0.09			
SI 5-P 3	EN	3	II基	円形	a	半円形	0.44	0.18	0.28	0.16	0.09			SI 5-P 5
SI 5-P 4	EN	3	II基	円形	a	半円形	0.36	0.24	0.30	0.24	0.04			P1
SI 6-P 1	EN	4	II基	円形	a	台形	0.32	0.22	0.21	0.19	0.07			
SI 6-P 2	EN	4	II基	円形	a	半円形	0.36	0.10	0.31	0.08	0.05			P1
SI 7-P 1	EN	4	III基	円形	a	半円形	0.22	0.12	0.18	0.10	0.05			
SI 8-P 1	EN	4	III基	円形	b1	方形	0.35	0.25	0.30	0.21	0.27			P1
SI 8-P 2	EN	5	III基	円形	a	台形	0.40	0.30	0.33	0.22	0.08			
SI 8-P 3	EN	5	III基	円形	a	台形	0.32	0.20	0.28	0.16	0.10			
SI 8-P 4	EN	4	III基	円形	b1	方形	0.33	0.25	0.30	0.22	0.31			

表76 壁穴建物主柱穴一覧表②

造構名	地区割り 南北 東西	棟出面	平面形	堆積	断面形	長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	切り合い		出土 遺物		
						上端		下端			新				
						上端	下端	上端	下端		上端	下端			
S110-P1	EN	5	Ⅲ基	円形	a	台形	0.34	0.26	0.29	0.24	0.08			P1	
S110-P2	EN	6	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.33	0.18	0.31	0.18	0.13				
S110-P3	EN	6	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.34	0.19	0.31	0.19	0.09				
S110-P4	EN	5	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.34	0.23	0.28	0.22	0.04				
S111-P1	EN	5	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.28	0.20	0.27	0.20	0.05				
S111-P2	EN	5	Ⅲ基	—	a	—	0.32	0.27	(0.19)	(0.15)	0.03				
S113-P1	EM	7	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.34	0.25	0.29	0.22	0.08				
S114-P1	EN	7	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.37	0.28	0.30	0.15	0.15				

※「切り合い」は床面直線同士のみ記載

表77 壁穴建物壁塗清一覧表

造構名	地区割り 南北 東西	棟出面	堆積	断面形	幅 (m)		深さ (m)	切り合い		出土 遺物
					上端	下端		新	旧	
S11壁塗清	EN・EN	20・1	Ⅲ基	a	半円形	N:0.27 S:0.13 E:0.23 W:0.23	N:0.15 S:0.05 E:0.11 W:0.13	N:0.04 S:0.08 E:0.04 W:0.05		H2
S113壁塗清	EM	7	Ⅲ基	a	半円形	0.15	0.11	0.06		
S116壁塗清	EM・EN	7	Ⅲ基	b3	半円形	0.17	0.10	0.02		
S118壁塗清	EN	7	Ⅲ基	a	半円形	0.20	0.09	0.06		H3

※「切り合い」は床面直線同士のみ記載

表78 壁穴建物その他の床面塗構一覧表①

造構名	地区 南北 東西	棟出面	平面形	堆積	断面形	長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	長軸 方位	切り合い		出 土 遺 物
						上端	下端	上端	下端			新	旧	
S12-P5	EM EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.41	0.14	0.31	0.12	0.40	—		神門下 土坑
S12-P3	EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.41	0.30	0.35	0.22	0.12	—		
S12-P4	EN	1	Ⅲ基	円形	b1	台形	0.39	0.29	0.37	0.26	0.12	—		S12 -P7 P4
S12-P6	EN	1	Ⅲ基	不規則	a	台形	0.34	0.28	0.18	0.10	0.07	—		
S12-P6	EN	1	Ⅲ基	円形	a	台形	0.21	0.18	0.16	0.14	0.03	—		
S12-P7	EM	1	Ⅲ基	円形	d	台形	0.97	(0.38)	0.68	(0.21)	0.21	—		S12 -P1 S12 -P3 S1
S13-P5	EN	3	Ⅲ基	円形	b1	半円形	0.67	0.42	0.63	0.39	0.16	—		P1 S1
S13-P6	EN	3	Ⅲ基	楕円形	a	合形	0.23	0.15	0.18	0.10	0.06	N 80° E		
S13-P7	EN	2	Ⅲ基	円形	b3	方形	0.48	0.40	0.38	0.22	0.14	—		
S13-P8	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	台形	0.33	0.26	0.25	0.20	0.06	N 75° E		S13 -P1
S13-P9	EN	3	Ⅲ基	円形	a	合形	0.48	0.33	0.45	0.26	0.16	—		
S13-P10	EN	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.28	0.19	0.25	0.17	0.10	—		
S14-P5	EN	3	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.42	0.26	0.35	0.23	0.10	—		
S14-P6	EN	2	Ⅲ基	円形	a	二角形	0.32	0.30	0.30	0.24	0.28	—		
S14-P7	EN	3	Ⅲ基	円形	a	合形	0.65	0.44	0.56	0.42	0.18	—		P1 S3
S14-P8	EN	2	Ⅲ基	円形	a	台形	0.30	0.19	0.26	0.17	0.09	—		
S14-P9	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	不規則	0.43	0.13	0.19	0.08	0.22	N 68° W		
S14-P10	EN	2	Ⅲ基	円形	a	半円形	0.18	0.06	0.13	0.06	0.06	—		
S14-P11	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	不定形	0.39	0.24	0.23	0.08	0.08	N 36° W		支撑柱 支柱
S14-P12	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	半円形	0.24	0.15	0.15	0.08	0.10	N 87° W		
S14-P13	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	台形	0.20	0.13	0.13	0.08	0.11	N 18° W		
S14-P14	EN	2	Ⅲ基	楕円形	a	方形	0.35	0.26	0.19	0.14	0.18	N 8° W		
S14-P15	EN	2	Ⅲ基	円形	a	方形	0.16	0.10	0.15	0.10	0.26	—		

表79 積穴建物その他の床面造構一覧表②

遺構名	地区 南北 東西	検出面	堆積	断面形	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土物	備考
					上端	下端	上端	下端			新	旧		
S15-P5	EN 3	Ⅲ基	橋円形	a 三角形	0.45	0.16	0.30	0.15	0.14	N 60° W	SD 5 -P3			
S15-P6	EN 3	Ⅲ基	橋円形	b3 方形	0.41	0.38	0.25	0.15	0.33	N 60° W		B4		
S15-P7	EN 3	Ⅲ基	橋円形	d 三角形	0.33	0.05	0.21	0.04	0.35	N 38° W				袖型下土室
S15-P8	EN 3	Ⅲ基	円形	d 方形	0.15	0.17	0.14	0.13	0.13	-				袖型下土室
S15-P9	EN 3	Ⅲ基	円形	b4 半円形	0.50	0.33	0.45	0.29	0.20	-			H7	火葬跡の土室
S16-P3	EN 4	Ⅲ基	方形	b3 方形	0.38	0.33	0.28	0.20	0.16	N 5° W	P1 H2			
S16-P4	EN 4	Ⅲ基	不定形	a 半円形	0.18	0.14	0.11	0.09	0.06	-				
S16-P5	EN 4	Ⅲ基	不明	b2 半円形	0.25	(0.16)	0.17	0.10	0.05	-				
S16-P6	EN 4	Ⅲ基	不明	(a) 不規	0.29	0.20	0.24	0.14	0.02	-				下部土室跡
S17-P2	EN 5	Ⅲ基	円形	a 台形	0.39	0.22	0.31	0.20	0.16	-			H1	東側不規
S17-P3	EN 5	Ⅲ基	不明	a 台形	(0.48)	(0.42)	(0.10)	(0.10)	0.06	-			P2	
S18-P5	EN 5	Ⅲ基	円形	b3 台形	0.46	0.30	0.36	0.24	0.10	-			P3 H4	
S19-P5	EN 6	Ⅲ基	円形	a 台形	0.44	0.37	0.38	0.34	0.07	-			H3	
SII1-P3	EN 6	Ⅲ基	不定形	a 半円形	0.60	0.58	0.41	0.28	0.10	-			H2	
SII1-P4	EN 6	Ⅲ基	不定形	a 不規	1.75	1.46	0.66	0.47	0.15					下部土室または焼過土
SII14-P2	EN 7	Ⅲ基	円形	a 方形	(0.36)	(0.28)	0.30	0.22	0.12	-				
SII14-P3	EN 7	Ⅲ基	円形	a 半円形	0.33	0.22	0.29	0.20	0.07	-				
SII14-P4	EN 7	Ⅲ基	橋円形	a 方形	0.69	0.24	0.32	0.18	0.04	N 45° E				
SII15-P1	EN 7	Ⅲ基	円形	a 台形	0.11	0.06	0.10	0.07	0.11	-			P1	
SII15-P2	EN 7	Ⅲ基	円形	a 三角形	0.10	0.06	0.07	0.04	0.03	-				
SII17-P1	EN 7	Ⅲ基	楕円形	c 二段	0.46	0.11	0.39	0.11	0.17	N 23° W				
SII17-P2	EN 7	Ⅲ基	円形	a 不規形	0.40	0.22	0.40	0.13	0.36	-				
SII17-P3	EN 7	Ⅲ基	円形	a 半円形	0.62	0.37	0.62	0.30	0.20	-			H1	

※「切り合い」は床面造構同士のみ記載

表80 滑状造構一覧表①

遺構名	地区割り 南北 東西	検出面	堆積	断面形	長さ(m) 上端 下端		幅A(m) 上端 下端		幅B(m) 上端 下端		深さA(m)	深さB(m)	長軸方位	切り合い		出土物	
					新	旧	新	旧	新	旧				新	旧		
SD6	DN 16 ~DO 16 ~18	Ⅲ基	a	半円形	(S.91)	-	0.73	0.35	0.71	0.52	0.14	0.09	N 39° W			SD 7 K12 SK43 H13	
SD7	DN 16 ~DO 16 ~18	Ⅲ基	b2	台形	(S.72)	-	1.04		-	-	0.23	0.16	N 36° W	SD 6		P1 H4 S1	
SD8	DN 18 ~DO	18	Ⅲ上	a	半円形	(7.28)	-	0.54	0.24	0.59	0.28	0.14	0.12	N 1° E	SD 9	SD10	J3 P3 H4 K2
SD9	DN 18 ~DO	18	Ⅲ上	b1	台形	(7.20)	-	0.52	0.36	0.46	0.22	0.11	0.15	N 1° W			SD 8 SD13 K6 H12
SD10	DN 17 ~DO 18	Ⅲ基	b3	台形	(S.99)	-	0.69	0.45	0.70	0.53	0.22	0.13	N 36° W	SD 8		H4	
SD11	DN 17 ~DO 18	Ⅲ基	a	半円形	(S.63)	-	0.41	0.17	0.39	0.28	0.06	0.03	N 31° W			R1	
SD12	DN 19 ~DO	19	Ⅲ上	a	半円形	(6.02)	-	0.70	0.43	-	-	0.07	-	N 3° W	SD 13		P3 K1 E3
SD13	DN 18 ~DO 19	Ⅲ基	b1	台形	(S.89)	-	1.04	0.62	0.94	0.61	0.49	0.44	N 30° W	SD 9 SD12		P1 E5	
SD14	DN 20 ~EO 1	20 1	Ⅲ基	b1	台形	(S.83)	-	1.05	0.50	-	-	0.56	-	N 18° W	SD 11 SD 12 SK128		P13 K6 H36
SD15	EN 7	Ⅲ基	b1	半円形	(1.40)	(1.40)	0.23	0.16	-	-	0.08	-	N 46° W	SK86	SP 5 SK103		

82 第4章 稲荷遺跡の調査成果

表81 溝状造構一覧表②

造構名	地区割り 南北 東西	検出面	堆積	断面形	長さ (m)		幅A (m)		幅B (m)		深さA (m)	深さB (m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
					上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧	
SD16	EN ~EO	7	Ⅲ基	a 半円形	(4.80)	-	0.35	0.30	-	-	0.08	-	-	-	-	SK113 SK116 H19
SD17	EN 8	Ⅲ基	a 台形	2.64	2.63	(0.21)	(0.16)	-	-	0.08	-	N 75° E	SK102			
SD18	EN 9	Ⅲ基	a 台形	(0.91)	(0.85)	(0.26)	(0.18)	-	-	0.07	-	N 3° W	SK105			

表82 跪溝状造構群一覧表

造構名	付属造構	地区割り 南北 東西	検出面	断面形	堆積	長さ (m)		幅A (m)		幅B (m)		深さA (m)	深さB (m)	長軸方位	出土遺物	
						上端	下端	上端	下端	上端	下端				新	旧
SN 1	SN 1-D 1	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a (1.94)	(1.89)	0.44	0.39	-	-	0.07	-	N 15° W	P1	
SN 1	SN 1-D 2	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a (2.23)	(2.16)	0.48	0.41	-	-	0.04	-	N 15° W		
SN 1	SN 1-D 3 a	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	0.50	0.40	0.35	0.28	-	-	0.02	-	N 30° W	
SN 1	SN 1-D 3 b	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	0.34	0.28	0.21	0.16	-	-	0.03	-	N 31° W	
SN 1	SN 1-D 3 c	DN DO	16	Ⅲ基	△彎形	a	0.71	0.29	0.21	0.07	-	-	0.17	-	N 11° W	
SN 1	SN 1-D 3 d	DN DO	16	Ⅲ基	2段掘込	a	(0.22)	(0.38)	0.28	0.08	-	-	0.10	-	-	
SN 1	SN 1-D 4 a	DN DO	16	Ⅲ基	不明	a	1.78	1.73	0.37	0.32	-	-	0.02	-	N 18° W	
SN 1	SN 1-D 4 b	DN DO	16	Ⅲ基	不明	a	(1.43)	(1.34)	0.23	0.14	-	-	0.10	-	N 18° W	
SN 1	SN 1-D 5	DN DO	16	Ⅲ基	不明	a	(3.70)	(3.65)	0.58	0.45	-	-	0.07	0.06	N 21° W	
SN 1	SN 1-D 6 a	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	0.81	0.70	0.05	0.42	-	-	0.04	-	N 12° W	P1 H1
SN 1	SN 1-D 6 b	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	(2.57)	(2.41)	0.26	0.20	-	-	0.07	-	N 14° W	P1
SN 1	SN 1-D 7	DN DO	16	Ⅲ基	△彎形	a	(3.22)	(2.27)	0.33	0.25	0.28	0.19	0.13	0.11	N 19° W	
SN 1	SN 1-D 8	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	(2.84)	(2.77)	0.37	0.33	-	-	0.14	-	N 15° W	P1 H1 J4 H1
SN 1	SN 1-D 9	DN DO	16	Ⅲ基	台形	a	(3.18)	(3.05)	0.38	0.28	-	-	0.13	-	N 18° W	P4 H1
SN 1	SN 1-D 10	DN DO	16	Ⅲ基	半円形	a	(2.45)	(2.36)	0.33	0.31	-	-	0.04	-	N 23° W	P1

表83 柱穴状造構一覧表

造構名	地区割り 南北 東西	検出面	平面形	堆積	断面形	長軸 (m)		短軸 (m)		深さ	長軸方位	切り合い		出土遺物		
						上端	下端	上端	下端			新	旧			
SP 1	EN 20	Ⅲ層基底面	円形	c	△彎形	0.53	0.33	0.38	0.30	0.21	-	-	-	SK75	P3 H6	
SP 2	EM 1	Ⅲ層基底面	円形	c	△彎	0.55	0.16	0.26	0.12	0.33	-	-	-	-	P3 K1 H3	
SP 3	EN 1	Ⅲ層基底面	不定形	c	2段掘込	0.99	0.12	0.79	0.11	0.34	-	-	-	-	SK47	
SP 4	EN 6	Ⅲ層基底面	方形	c	不定形	0.72	0.64	0.62	0.47	0.36	N 32° W	-	-	-	P1 H15	
SP 5	EN 7	Ⅲ層基底面	円形	c	不定形	0.61	0.32	0.51	0.20	0.19	-	-	-	-	SD18	H6
SP 6	EN 6	Ⅲ層基底面	桿円形	b1	2段掘込	0.66	0.57	0.60	0.34	0.22	N 15° W	-	-	-	P2 K1 H3	
SP 7	EM 6 7	Ⅲ層基底面	円形	c	台形	0.66	0.30	0.67	0.22	0.29	-	-	-	-	-	
SP 8	EM 6 7	Ⅲ層基底面	円形	c	台形	0.71	0.21	0.56	0.15	0.49	-	-	-	-	-	P1 H6
SP 9	EN 7	Ⅲ層基底面	不明	c	2段掘込	1.06	(0.10)	0.99	(0.14)	0.46	-	-	-	-	S114 SK113 SK121 SK122 SK124	P2 K4 H18
SP10	EN 9	Ⅲ層基底面	桿門形	c	方形	0.65	0.32	0.60	0.30	0.33	N 83° W	-	-	-	P1 H1	

表84 土坑一覧表①

遺構名	地区割り 南北 東西	横 出 面 形	平 面 形	地 積	断 面 形		長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	長軸方位	切り合い		出土 遺物	備考	
					上端	下端	上端	下端	上端	下端			新	旧			
SK11 DN DO	9 IV上	横円形	a 台形	0.50 0.50	0.50 0.50	0.28	0.14	0.11	3 1°	E							
SK12 DN DO	9 IV上	円形	b3 半円形	0.37 0.37	0.40 0.40	0.48	0.36	0.33		—							
SK13 DN DO	11 IV上	横円形	a 台形	0.59 0.59	0.50 0.50	0.34	0.22	0.14	N 69°	W						土坑判1	
SK14 DN DO	11 IV上	横円形	a 二段	0.65 0.65	0.26 0.26	0.25	0.18	0.10	N 48°	W						土坑判1	
SK15 DN DO	11 IV上	横円形	a 台形	0.45 0.45	0.36 0.36	0.33	0.28	0.10	N 74°	W						土坑判1	
SK16 DN DO	10 11 IV上	不定形	a 不明	0.49 0.49	0.38 0.38	0.22	0.17	0.09	N 79°	W						土坑判1	
SK17 DN DO	10 IV上	不定形	a 不明	0.43 0.43	0.27 0.27	0.27	0.20	0.09	N 58°	W						土坑判1	
SK18 DN DO	13 IV上	横円形	a 台形	0.44 0.44	0.31 0.31	0.26	0.16	0.07	N 89°	W						土坑判2	
SK19 DN DO	13 IV上	横円形	a 台形	0.43 0.43	0.13 0.13	0.32	0.11	0.10	N 87°	W						土坑判2	
SK20 DN DO	13 IV上	横円形	a 半円形	0.37 0.37	0.21 0.21	0.23	0.16	0.12	N 76°	W						土坑判2	
SK21 DN DO	13 IV上	横円形	a 半円形	0.58 0.58	0.49 0.49	0.22	0.17	0.09	N 86°	E						土坑判2	
SK22 DN DO	13 IV上	横円形	a 半円形	0.59 0.59	0.33 0.33	0.24	0.13	0.08	N 59°	W						土坑判2	
SK23 DN DO	13 IV上	横円形	a 台形	0.46 0.46	0.25 0.25	0.24	0.13	0.09	N 77°	W						土坑判2	
SK24 DN DO	13 IV上	横円形	a 半円形	0.51 0.51	0.40 0.40	0.26	0.16	0.08	N 87°	W						土坑判2	
SK25 DN DO	13 IV上	横円形	a 半円形	0.44 0.44	0.28 0.28	0.23	0.16	0.06	N 79°	W						土坑判2	
SK26 DN DO	13 IV上	横円形	a 半円形	0.54 0.54	0.36 0.36	0.24	0.20	0.15	N 96°	W						土坑判2	
SK27 DN DO	14 IV上	横円形	a 半円形	0.45 0.45	0.31 0.31	0.22	0.13	0.07	N 46°	W						土坑判3	
SK28 DN DO	14 IV上	横円形	a 台形	0.68 0.68	0.54 0.54	0.24	0.19	0.09	N 51°	W						土坑判3	
SK29 DN DO	14 IV上	横円形	a 台形	0.38 0.38	0.11 0.11	0.25	0.08	0.05	N 49°	W						土坑判3	
SK30 DN DO	14 IV上	横円形	a 台形	0.64 0.64	0.18 0.18	0.32	0.18	0.07	N 38°	W						土坑判3	
SK31 DN DO	13 14 IV上	横円形	a 不明	0.59 0.59	0.13 0.13	0.19	0.12	0.06	N 36°	W						土坑判3	
SK32 DN DO	13 13 IV上	不定形	a 不明	0.48 0.48	0.24 0.24	0.19	0.14	0.08	N 37°	W						土坑判3	
SK33 DN DO	13 13 IV上	不定形	a 不明	0.28 0.28	0.20 0.20	0.16	0.13	0.05	N 33°	W						土坑判3	
SK34 DN DO	13 13 IV上	不定形	a 台形	0.30 0.30	0.13 0.13	0.16	0.15	0.15	—	—						土坑判3	
SK35 DN DO	12 IV上	横円形	a 台形	0.45 0.45	0.24 0.24	0.37	0.23	0.10	N 82°	E						土坑判3	
SK36 DN DO	12 IV上	小窓形	a 不明	0.43 0.43	0.34 0.34	0.25	0.21	0.08	N 62°	W						土坑判3	
SK37 DN DO	14 14 IV上	横円形	a 台形	0.43 0.43	0.33 0.33	0.30	0.23	0.08	N 7°	E						土坑判3	
SK38 DN DO	14 14 IV上	小窓形	a 不明	0.98 0.98	0.88 0.88	0.32	0.27	0.08	N 2°	E						土坑判3	
SK39 DN DO	13 13 IV上	方窓	a 半円形	0.46 0.46	0.31 0.31	0.36	0.17	0.08	N 8°	E						P1	
SK40 DN DO	13 13 IV上	不定形	a 半円形	0.51 0.51	0.31 0.31	0.31	0.08	0.14	—	—						K1	
SK41 DN DO	13 13 IV上	不定形	a 半円形	0.74 0.74	0.49 0.49	0.32	0.27	0.07	N 46°	W						K1	
SK42 DN DO	15 III基	方窓	b2 半円形	0.72 0.72	0.61 0.61	0.63	0.34	0.26	N 9°	E						土坑判3	
SK43 DN DO	16-17 III基	不定形	b3 二段	(9.02)	—	0.81	0.46	0.31	N 14°	E	SK46						P1
SK44 DN DO	1 III基	円形	b2 一角形	0.58 0.58	0.40 0.40	0.66	0.20	0.29	—	SI1						IS	
SK45 DN DO	1 III基	円形	b3 半円形	0.34 0.34	0.20 0.20	0.26	0.16	0.13	—	SI74							
SK46 DN DO	1 III基	円形	a 台形	0.38 0.38	0.25 0.25	0.24	0.16	0.16	—	—	P4	E3					
SK47 DN DO	1 III基	円形	a 半円形	0.20 0.20	0.12 0.12	0.18	0.08	0.07	—	SP3							
SK48 DN DO	1-2 III基	円形	b2 半円形	0.98 0.98	0.49 0.49	0.78	0.24	0.25	—	—	P1						
SK49 DN DO	1-2 III基	円形	b2 台形	0.32 0.32	0.10 0.10	0.46	0.32	0.29	—	—	SK50	P2					
SK50 DN DO	1-2 III基	円形	b3 不明	0.88 0.88	0.62 0.62	0.57	0.43	0.31	N 15°	E	SK49	P1					
SK51 DN DO	2-3 III基	円形	a 方窓	0.68 0.68	0.60 0.60	0.62	0.55	0.43	—	—	SI4	PW IS	土坑判4				
SK52 DN DO	2 III基	横円形	b3 一角形	0.67 0.67	0.35 0.35	0.58	0.33	0.29	N 56°	R	SI4	P1 H1	土坑判4				
SK53 DN DO	2 III基	横円形	a 台形	0.68 0.68	0.49 0.49	0.60	0.26	0.64	N 77°	E	SK59 SI4	P2 H7	土坑判4				
SK54 DN DO	3 III基	円形	b2 二段	0.42 0.42	0.08 0.08	0.10	0.63	0.30	—	—	P1						
SK55 DN DO	3 III基	円形	b2 台形	0.84 0.84	0.70 0.70	0.67	0.60	0.30	—	—	—	H2					
SK56 DN DO	3 III基	円形	a 三角形	(0.34)	—	(0.34)	—	0.19	—	—	—	—					土坑判4
SK57 DN DO	2 III基	円形	a 半円形	0.48 0.48	0.25 0.25	0.35	0.22	0.16	—	—	—	SI1					
SK58 DN DO	2 III基	円形	a 台形	0.46 0.46	0.30 0.30	0.39	0.25	0.28	—	—	SK76						
SK59 DN DO	2 III基	円形	a 半円形	(0.70)	—	0.44	0.32	0.06	N 24°	W	SK53 SK76						
SK60 DN DO	2 III基	円形	a 台形	0.41 0.41	0.27 0.27	0.31	0.21	0.11	—	—	—	H44					
SK61 DN DO	2 III基	円形	a 半円形	0.58 0.58	0.32 0.32	0.54	0.31	0.09	—	—	—	—					
SK62 DN DO	2 III基	横円形	a 三角形	0.42 0.42	0.10 0.10	0.28	0.09	0.20	N 1°	W	SI4	K1 H1					
SK63 DN DO	2 III基	横円形	a 半円形	0.56 0.56	0.42 0.42	0.48	0.39	0.18	—	—	—	P3 K1 H44					
SK64 DN DO	2 III基	横円形	a 半円形	0.37 0.37	0.28 0.28	0.25	0.12	0.23	—	—	—	H44					
SK65 DN DO	2 III基	円形	b2 不定形	0.47 0.47	0.28 0.28	0.34	0.22	0.39	—	—	—	—					
SK66 DN DO	2-3 III基	円形	a 方窓	0.17 0.17	0.11 0.11	0.14	0.10	0.18	—	—	—	—					
SK67 DN DO	3 III基	円形	a 二段	0.13 0.13	0.03 0.03	0.10	0.03	0.24	—	—	—	—					
SK68 DN DO	3 III基	円形	a 二段	0.34 0.34	0.05 0.05	0.28	0.05	0.28	—	—	—	—					
SK69 DN DO	3 III基	円形	a 半円形	0.30 0.30	0.20 0.20	0.27	0.15	0.07	—	—	—	—					
SK70 DN DO	2 III基	円形	a 不明	0.21 0.21	0.12 0.12	0.12	0.08	0.31	—	—	—	—					
SK71 DN DO	2 III基	円形	a (半円形)	(0.68)	(0.22)	(0.35)	(0.20)	6.20	—	—	—	P1 H6					
SK72 DN DO	2 III基	円形	a (半円形)	(0.66)	(0.27)	(0.16)	(0.09)	6.13	—	—	—	II					

表85 土坑一覧表②

遺構名	地区割り	横 出 面	平 面 形	堆 積	断 面 形	長輪 (m)		短輪 (m)		深さ (m)	長輪方位	切り合い		出土 遺物	備考		
						上端	下端	上端	下端			新	旧				
SKT3	HO	2	円形	a	方形容	(0.34)	(0.25)	(0.24)	(0.19)	0.20	—	—	—	P1			
SKT4	EM	1	円形	a	(半円形)	0.50	0.40	(0.24)	(0.13)	0.10	—	—	SK45				
SKT5	BN	29	円形	a	方形容	(0.31)	(0.21)	(0.22)	(0.19)	0.18	—	—	SK1	P1			
SKT6	EM	2	円形	b1	合形容	(0.54)	(0.42)	(0.23)	(0.21)	0.31	—	—	SK58	SK59			
SKT7	BN	3	円形	b1	不定形	0.35	0.13	0.27	0.08	0.43	—	—	SI9				
SKT8	BN	3	円形	b1	三角形	0.53	0.23	0.30	0.15	0.31	—	—	—	K1 HS			
SKT9	BN	3	円形	b1	方形容	0.31	0.22	0.28	0.19	0.19	—	—	—	H1			
SKB0	SK	2	円形	a	(台形)	(0.94)	(0.78)	(0.45)	(0.50)	0.15	—	—	SK117	H3			
SKB1	BN	29	円形	a	半円形	0.32	0.16	0.28	0.18	0.25	—	—	—				
SKB2	BN	5	円形	b3	不定形	(0.59)	0.68	(0.39)	0.31	0.14	—	—	—	H6			
SKB3	BN	5	円形	b3	半円形	0.68	0.17	0.41	0.16	0.27	3 6° W	—	—	P7			
SKB4	EM	5	円形	b1	半円形	0.53	0.22	0.18	0.16	0.20	—	—	—	SI11			
SKB5	EN	5	円形	b3	合形容	0.65	0.44	0.51	0.28	0.26	3 65° E	—	—	SI6 SI10	P3 H2		
SKB6	EN	7	円形	b1	不定形	(0.77)	0.54	0.66	0.43	0.36	—	—	—	SD15	P6 XI HS		
SKB7	EM	6	円形	a	台形容	0.41	0.22	0.33	0.20	0.10	—	—	—	—			
SKB8	BN	6	円形	b3	不定形	0.65	0.49	0.55	0.35	0.22	—	—	—	P1 H2			
SKB9	BN	7	円形	a	台形容	0.73	0.44	0.66	0.40	0.25	3 64° E	—	—	P1 H3			
SKB10	BN	6	円形	a	不定形	0.69	0.31	0.54	0.28	0.16	3 63° E	—	—	SK91			
SKB11	EM	6	円形	a	△形容	(0.69)	(0.45)	(0.52)	0.34	0.18	—	—	—	SK90 ST13	H3		
SKB12	BN	7	円形	b1	台形容	0.56	0.44	0.49	0.40	0.22	—	—	—	SK13	H2		
SKB13	BN	7	円形	b1	方形容	0.49	0.39	0.48	0.38	0.11	3 60° E	—	—	SI15 SI16			
SKB14	BN	8	円形	a	不明	(0.56)	(0.41)	(0.33)	(0.27)	0.09	—	—	—				
SKB15	BN	9	円形	a	台形容	(0.99)	(0.96)	(0.29)	(0.36)	0.05	3 73° E	—	—	K2 HS			
SKB16	BN	9	円形	b1	半円形	0.48	0.38	0.36	0.32	0.12	3 83° E	—	—	H4			
SKB17	BN	9	円形	b1	不定形	0.47	0.37	0.37	0.36	0.05	—	—	—	SK98	III		
SKB18	BN	9	円形	b3	推臼形容	0.74	0.59	(0.42)	(0.35)	0.14	N 40° W	—	—	P1 H2			
SKB19	EM	9	円形	a	不明	(0.90)	(0.90)	(0.32)	(0.32)	0.06	—	—	—	—	HS		
SKB20	EN	10	円形	a	不明	(0.90)	(0.90)	(0.32)	(0.32)	0.06	—	—	—	—			
SKB21	BN	10	円形	a	台形容	0.30	0.25	0.27	0.24	0.02	—	—	—				
SKB22	BN	9	円形	b1	台形容	0.37	0.25	0.33	0.19	0.08	—	—	—				
SKB23	BN	9	円形	a	不規形	0.81	0.76	0.70	0.68	0.06	—	—	SD17				
SKB24	BN	7	円形	a	方形容	0.21	0.14	0.19	0.14	0.13	—	—	—	SD15			
SKB25	BN	9	円形	a	不明	(0.29)	0.10	0.19	0.17	0.19	—	—	—	SD18			
SKB26	BN	4	円形	b2	台形容	0.39	0.29	0.37	0.27	0.16	—	—	—	P1 HS			
SKB27	BN	4	円形	b2	台形容	0.69	0.40	0.46	0.40	0.09	—	—	—	SI7 SI8 K1 HS			
SKB28	BN	4	円形	b1	台形容	0.50	0.36	0.43	0.32	0.18	—	—	—	P2			
SKB29	BN	4	円形	b3	台形容	1.32	0.42	1.02	0.35	0.41	—	—	—	SK10 SK18 P17 K2 HS			
SKB30	BN	4	円形	b1	二段	0.75	0.30	0.70	0.18	0.12	—	—	—	SK109			
SKB31	BN	5	円形	b3	台形容	(0.83)	(0.60)	(0.65)	(0.53)	0.23	—	—	—	SI7	P4 H15		
SKB32	BN	4	円形	b1	台形容	0.81	0.65	0.69	0.37	0.62	—	—	—	SI6 SI7	PIR H9		
SKB33	BN	7	円形	a	不定形	(2.85)	(2.20)	(1.98)	(0.92)	0.19	—	—	—	SD16 SP9 SD17 SI14 SK124 SK125	P3 K1 HS		
SKB34	BN	6	円形	a	台形容	(0.76)	(0.38)	(0.47)	(0.15)	0.22	N 12° E	E	SI12 SK116	P12 HS			
SKB35	BN	6	円形	b3	方形容	0.65	0.42	0.43	0.34	0.30	N 86° E	E	—	P1			
SKB36	BN	6	円形	a	半円形	(0.82)	(0.65)	(0.71)	(0.43)	0.33	N 10° S	S	SD16 SI12 SK14	P6 HS			
SKB37	BN	4	円形	b1	台形容	(0.65)	0.23	0.37	(0.23)	0.35	—	—	—	SD80	SI9		
SKB38	BN	6	円形	b1	台形容	(0.44)	(0.31)	(0.32)	(0.15)	0.25	—	—	—	—	H3		
SKB39	BN	4	円形	a	不明	(0.32)	(0.23)	(0.25)	—	0.19	—	—	SK109	SI8			
SKB40	BN	7	円形	a	台形容	(1.65)	(1.65)	(0.48)	(0.47)	0.06	—	—	—	SI13 SK126 SK123	P1 H2		
SKB41	BN	7	円形	a	不定形	(0.90)	(0.75)	(0.81)	(0.48)	0.29	—	—	—	SK113	P4 X2 H2		
SKB42	BN	7	円形	a	不定形	(1.44)	(0.92)	(0.97)	(0.65)	0.10	—	—	—	SK121 SI7 SK13	P4		
SKB43	BN	7	円形	b1	台形容	0.67	0.50	0.57	0.45	0.24	3 22° E	S	SK120	H3			
SKB44	BN	7	円形	b1	不明	(0.60)	(0.60)	(0.23)	(0.17)	0.06	—	—	—	SK113 SP9	K1		
SKB45	BN	7	円形	b1	不明	(0.46)	(0.46)	(0.23)	(0.23)	0.10	—	—	—	SI14 SK113			
SKB46	BN	3	円形	b1	台形容	(0.91)	(0.26)	(0.14)	(0.03)	(0.40)	—	—	—				
SKB47	BN	2	円形	b1	台形容	(0.28)	(0.16)	(0.18)	(0.06)	(0.37)	—	—	—				
SKB48	BN	1	円形	a	台形容	(2.85)	(2.60)	(0.47)	(0.30)	0.16	—	—	—	SI2 SD14	F1 H2 K1		
SKB49	BN	7	円形	a	台形容	(2.78)	(2.72)	(1.07)	0.96	0.13	—	—	—	SI13 SI17 SI18 SI16 P14 SK120	H2		

表86 遺構出土土器観察表①

遺構番号	種別	基準	出土位置				口径/底径 /高さ(最大幅 (cm))	口縁部 残存率 (0/12) ・底部 破壊部	出土 (単位: mm)	構成	色調 (内面) (外面) (断面)	表面加工 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	測定 番号	図 版番号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位											
647	須恵器	坏壊C	EN1	SII ④ —	b III	(14.5)/— (1.4)/—	1.3・—	磨—	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面 V-1	内面自然釉付 着	165	67	
648	須恵器	坏壊C		SII ① a	a	(15.3)/— (1.3)/—	1.4・—	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面 V-1			165	67
649	須恵器	坏壊C		SII ① a	a	(15.7)/— (1.3)/—	1.5・—	磨—	不 良	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面 V-1			165	67
650	須恵器	坏壊C		SII ③ a	a	(14.5)/— (1.3)/—	1.0・—	磨—	良 好	NB/ NB/ NB/	2.97/1 2.97/1 2.97/1	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面 V-1		165	67
651	須恵器	坏身B2		SII ② SII壁剥離	b b	13.0/0.5/3.2 /—	10.0・1	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ・凹凸ヘラ 切り波・ナデ削	表面鏡面 V-1			165	65
652	須恵器	坏身C		SII ⑦ —	a	(8.7)/(2.3) /—	—・0	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.57/1	円転ナデ/回転 ナデ・凹凸ヘラ ケタリ・凹凸切 り波ナデ削・ 波リ付け高台	表面鏡面 IV-3～V	内面削耗、真 面外側へフロ ウ	165	67	
653	須恵器	瓶	EN1 EN1	SIIカマ口 SIIカマ口 SIIカマ口 —	s b b III	(17.2)/(6.4) /6.1/—	2.6・0	やや粗(～ゅ1) の砂利をわずか に含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ・瓶ナ デ・凹凸ヘラ ケタリ・凹凸切 り波ナデ削・ 波リ付け高台	表面鏡面 V-1		165	67	
654	須恵器	瓶		SII ① b	b	(7.7)/(2.3) /—	—・0	やや粗(～ゅ1) の砂利をわずか に含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ・凹凸ヘラ ケタリ・凹凸切 り波・波リ付け 高台	表面鏡面 V-1	内面削耗	165	67	
655	須恵器	瓶		SII ① b	b	(15.5)/— (2.6)/—	2.5・—	やや粗(～ゅ1) の砂利をわずか に含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面 V-1		165	67	
656	須恵器	瓶		SII ① b	b	(14.5)/— (2.7)/—	3.2・—	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面 V-1	内面削耗外面 自然釉付付	165	67	
657	須恵器	且		SII ② a	a	(13.5)/1.1/2 —/4/—	3.1・1	やや粗(～ゅ1) の砂利をわずか に含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ・凹凸ヘラ ケタリ・凹凸切 り波ナデ削・ 波リ付け高台	表面鏡面 V-1	内底無底、 近外側高台 内にヘラ波等	165	65	
658	須恵器	知桜巻		SII ④ a	a	(10.6)/— (4.8)/—	2.5・—	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	知桜巻		165	67	
659	灰陶調 器	知桜巻		SIIカマ口 —	a	—/—/(7.0) /—	—・—	磨—	良 好	NB/ NB/ 2.57/1	円転ナデ/回転 ナデ		外面部自然 釉付	165	67	
660	灰陶調 器	袋・底盤		SIIカマ口 —	a	(9.4)/(3.2) /—	—・0	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	2.57/1 2.57/1 2.57/1	円転ナデ/回転 ナデ・底盤オ サ・底盤ヘラ ケタリ		内面全面、外 面一部に自然 釉付	165	67	
661	須恵器	甕		SII ③ b	b	—/—/(7.5) /—	—・—	磨(～ゅ1)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.57/1	2.57/1 2.57/1 2.57/1	ナデ・当て品度 (向心凹)・底7.5 ・抜タタキ・底部 部分西ナダ	表面鏡面 IV-3～V -1		165	67
662	灰陶調 器	甕		SII ③ b	b	(16.4)/— (2.7)/—	1.0・—	磨—	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ	E-90	灰陶調毛彫り	165	67	
663	灰陶調 器	甕		SII ① a	a	(15.7)/— (3.6)/—	1.0・—	磨(～ゅ2)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	2.57/1 2.57/1 2.57/1	円転ナデ/回転 ナデ	表面鏡面不明		165	67
664	灰陶調 器	且		SII ① a	a	(18.0)/— (3.5)/—	1.0・—	磨(～ゅ2)の半 斜を少し含 (7)	良 好	— 10008/1	円転ナデ/回転 ナデ・凹凸ヘラ ケタリ	E-90	内外全面鏡面 底突起及び 底斜	165	67	
665	灰陶調 器	瓦		SII ① a	a	10.0/4.4/(2. 0)/—	3.7・1	磨—	良 好	NB/ NB/ NB/	円転ナデ/回転 ナデ・凹凸ヘラ ケタリ	E-90	内面のみみ縫隙 焼拂一引出 特徴的の層 が形成 斜面及び 底斜	165	65	
666	灰陶調 器	瓦・底盤	EN2	SIIカマ口 —	s III	—/(8.3)/(19.6)	—・—	磨(～ゅ2)の半 斜をわずかに 含む)	良 好	10737/1 10738/1	円転ナデ/回転 ナデ	内面のみ自然 釉付、外面 金剛瓦斜料を施 付焼成及び 底斜・足付		165	67	

表87 遺構出土土器觀察表②

表88 遺構出土土器観察表③

施設番号	種別	構造	出土位置			口径/底径 /基高/最大幅 (cm)	口径部 堆積厚率 (%)/ 底部 堆積厚	出土 (単位: cm)	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	表面調整 内面/外面	分類 ・時期	大様・その他 (単位: cm)	被 用 番号		
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位											
689	灰陶陶器	瓶		S13カマド S13-P5 S13-P6 — —	1 b a — —	15.8/7.8/5.4 — —	11.3・1	底(～φ2の砂 粒をわずかに 含む)†	良 好	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	0-63	灰陶受け持 け、陶器及び 色調・灰釉 (6.8/6.2)	170	65	
690	灰陶陶器	深碗		S13カマド S13-P6	② a b	12.5/6.8/4.7 —	7.4・1	底(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	0-63	灰陶受け持 け、陶器及び 色調・灰釉 (6.8/6.2)	170	65
691	灰陶陶器	瓶	BN2	S13カマド —	s III	12.6/8.0/4.0 —	11.0・1	底(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)†	良 好	NB/ NB/ 2. S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	0-63	灰陶受け持 け、陶器及び 色調・灰釉 (2.3/1.2)	170	65
692	灰陶陶器	皿		S13カマド	a	12.2/6.2/2.6 —	10.2・1	底 —	良 好	— 2. S18/1 2. S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切り底・縁 付け画合	0-63	内面に付骨 物、自然陶物 等、灰陶底受け 持け、沿合に 堆積厚、陶器及 び色調・灰釉 (2.3/1.2)	170	65
693	灰陶陶器	輪花豆		S13-P6	① a	(13.8)/(7.4) /2.5/—	3.9・0	底(～φ4の小 な砂粒を含む) †	良 好	NB/ NB/ S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ(底面) 田輪ナダ/田輪 ナダ/縁付け画 合	田輪ナダ/田輪 ナダ(底面) 田輪ナダ/田輪 ナダ/縁付け画 合	0-63	輪花豆(骨 オラク)、内 面灰陶底受け 持け、沿合に 堆積厚、陶器及 び色調・灰釉 (2.3/1.2)	170	67
694	灰陶陶器	瓶		S13	④ a	—/-/(1.3)/ —	—	底 —	良 好	— 2. S18/1 2. S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 ナダ	X-90	内面に灰陶底 堆積厚及び色調 ・灰釉(2.3/1.2)	170	67
695	煮沸器	坏蓋A		S14	② a	(10.8)/— /(3.1)/—	—	底(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 り縁ナダ/田輪 火切	破損底蓋	174	67	
696	煮沸器	坏蓋A		S14	⑥ a	(11.6)/— /(3.0)/—	—	底(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)†	良 好	NB/ NB/ 2. S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ	田輪ナダ/田輪 ナダ	破損底蓋	174	67	
697	土器器	壺A		S14 S14 S14カマド	③ a a a	17.6/— /(7.0) —	11.8・0	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	STH/6 STH/4 10TH/2	虎口ナダ/ハマ ナダ/田輪火切 横模様ナダ/ ハマ	虎口ナダ/ハマ ナダ/田輪火切 横模様ナダ/ ハマ	ハマ直1.4(B 类)	174	65	
698	煮沸器	坏蓋C		S15カマド	③ a	—/—/(0.8)/ —	—	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ	田輪ナダ/田輪 ナダ	煮沸器底蓋	178	68	
699	煮沸器	坏身A		S15	② I	(10.8)/(6.1) /2.9/(12.6)	1.0・0	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ	田輪ナダ/田輪 ナダ	加压5倍 行期	178	68	
700	煮沸器	坏身B2		S15カマド	③ a	(12.1)/— /(1.7)/—	1.4・—	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ	田輪ナダ/田輪 ナダ	178	68		
701	煮沸器	瓶	BN2~BN4 BN5 BN4	S15	② a I~II Hb	(15.2)/6.9/4 — 3/—	6.4・1	やや粗(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	ST/7 2. S17/1 2. S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	煮沸器底	178	65	
702	煮沸器	平底	EN3 EN3.4 EN3	S15	① S15カマド ③ — — V壺上 Hb	8.2/— /(13.0)/—	5.2・—	底(～φ2の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S17/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	上蓋金合に自 然陶物等によ る面積充て	178	65	
703	灰陶陶器	長颈瓶	BN3	S15 S15 — — V壺上	① ① a a a	/7.8/(16.3) /(13.5)	— <td>底(～φ1の砂 粒を含む)†</td> <td>良 好</td> <td>NB/ NB/ NB/ S18/1</td> <td>田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合</td> <td>田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合</td> <td>外底二次燒成 による荒れ、 堆積物内面自然 陶物</td> <td>178</td> <td>65</td>	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	外底二次燒成 による荒れ、 堆積物内面自然 陶物	178	65	
704	便器	瓶	BN2~BN4 BN5 BN7	S15 S15 — — V壺上	① ① a a —	34.0/— /(44.7)/—	9.8・—	底(～φ1の石 粒を含む)†	良 好	2. S18/1 2. S18/1 2. S18/1	田輪ナダ/ナ ダ/田輪火切 横模様ナダ/タ キ	田輪ナダ/ナ ダ/田輪火切 横模様ナダ/タ キ	施設底	178	66	
705	灰陶陶器	皿		S15	① a	(13.4)/(7.6) /2.3/—	2.8・0	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	剥離不明	178	68	
706	灰陶陶器	小瓶		S15	① a	/(4.5)/(5.7) /—	— <td>底(～φ1の砂 粒を含む)†</td> <td>良 好</td> <td>NB/ NB/ NB/ S18/1</td> <td>田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合</td> <td>田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合</td> <td>内面自然陶 物、表面二次 燒成による荒 れ</td> <td>178</td> <td>68</td>	底(～φ1の砂 粒を含む)†	良 好	NB/ NB/ NB/ S18/1	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	田輪ナダ/田輪 ナダ/田輪火切 横模様ナダ/縁 付け画合	内面自然陶 物、表面二次 燒成による荒 れ	178	68	

表89 遺構出土土器観察表④

発掘番号	種別	番号	出土位置			口径/底径 /器高/最大幅 (cm)	土壌部 洗出率 (0/12) ・底盤 偏体数	出土 (単位: mm)	積成	色調 (内面) [外面] [断面]	表面装飾 内面/外面	分類・ 時期	太様・その他の (単位: mm)	説明番号	
			出土区・ グリット	湯沸 番号	層位										
707	土器部	瓶	ST5	③	a	-/-/(6.1) /-	- -	概(～6.2)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	10YR8/2 10YR7/3 10YR8/1	ナデ/ナデ・指 ナデ・指サエ			178	68
708	既應器	坪身A	ST6	②	b	(13.9)/ (3.6)/(16.0)	1.3 -	概(～6.2)の砂 岩を今や多く 含む)	丸 好	N6/ N7/ N6/	回転ナデ/回転 ナデ・回転ヘラ ケズリ	縦内系か EC中底		183	68
709	既應器	坪身C	SI6	④	a	13.5/9.3/3.8 5/-	8.7 - 1	中や細(～6.7) の粘土を含む ・石、石墨、 チャートをわ ずかに含む)	丸 好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転 ナデ・回転ヘラ ケズリ・辺り付 け清台	豊加5形 行期	外延付着物あ り	183	65
710	既應器	不明	SI6	④	a	-/-/(1.3) /-	1.0 -	概(～6.1)の黄 石・石炭、 チャートをや や多く含む)	丸 好	N6/ N6/	回転ナデ/回転 ナデ			183	68
711	既應器	盤か	ST6	③	a	(17.0)/ (2.0)/-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	N7/ N7/ N6/	回転ナデ/回転 ナデ・回転ヘラ ケズリ			183	68
712	既應器	高坪脚か	ST6	③	a	-/(9.2)/(1.5) /-	- 0	概(～6.1)の砂 岩を多く含 む)	丸 好	10YR4/2 10YR4/2	回転ナデ/回転 ナデ	尾張系か 別		183	68
713	既應器	高坪脚か	ST6	④	b	(10.8)/ (1.2)/-	- -	概(～6.1)	丸 好	N6/ N6/ 10YR5/2	回転ナデ/回転 ナデ			183	68
714	ロクロ 土器部	皿	SI6	②	b	(10.4)/(4.8) 1.8/-	1.0 - 0	概(～6.1)の黄 石・チャー ト・赤土土被 を纏む)含む)	丸 好	10YR8/2 10YR8/3 10YR8/2	回転ナデ/回転 ナデ・回転曲切 り版			183	68
715	土器部	甕A	SI6	④	a	(18.4)/ (3.5)/-	1.0 -	概(～6.1)の黄 石・笠置、 チャートをや や多く含む)	丸 好	10YR7/3 SI7/7 10YR7/3	楕ナデ/楕ナデ			183	68
716	土器部	甕B	ST6	②	a	(17.1)/ (1.2)/-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	10YR8/2 10YR8/2 K3/	楕ナデ・ハケ・ ナデ/楕ナデ			183	68
717	土器部	甕B	ST6-P3	①	a	-/-/(2.2) /-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩を多く含 む)	丸 好	10YR8/2 10YR7/3 7.5YR2/1	ナデ・ハケ/楕 ナデ・ハケ			183	68
718	既應器	坪身C	SI7	③	a	(17.5)/ (2.3)/-	1.1 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転 ナデ・回転ヘラ ケズリ	赤土ひびき、 口縁部内凹自 然剥離付		183	68
719	既應器	坪身A	SI7	z	a	(11.8)/(7.7) 3.5/(14.6)	1.0 - 0	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	N7/ 2.5YR7/1 N7/	回転ナデ/回転 ナデ・回転ヘラ ケズリ・切り 版ナデ消し	豊加5形 行期	外延自然剥 離	183	68
720	既應器	坪身A	SI7	④	a	(8.9)/ (1.6)/(11.9)	1.2 -	概(～6.1)	丸 好	N7/ N7/ N6/	回転ナデ/回転 ナデ	畿内系 TM217形 行期		183	68
721	既應器	坪身E2	SI7-P3	①	1	-/-/(4.3) /-	1.0 - 0	概(～6.1)	不 丸 好	SI7/1 SI7/1 SI7/1	回転ナデ/回転 ナデ		邊土崩成	183	68
722	既應器	甕	SI7	z	-	-/(14.2) (3.8)/-	- 0	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転 ナデ・ナデ・貼 付竹筒	豊加5形 行期	透(単位不 明)	183	68
723	土器部	甕A	SI7	①	1	-/-/(2.5) /-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	SI7/6 7.5YR7/6 7.5YR7/6	不明			183	68
725	既應器	坪身C	SI8カマド	③	a	(14.9)/ (1.7)/-	1.6 -	概(～6.1)	丸 好	N7/ N7/ N7/	回転ナデ/回転 ナデ	豊加5形 V-1		186	68
726	既應器	坪身C	SI8カマド	③	a	(16.1)/ (1.2)/-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	2.5YR7/1 2.5YR7/1 2.5YR7/1	回転ナデ/回転 ナデ			186	68
727	土器部	甕B	SI8カマド	③	a	-/-/(7.5) /-	- -	概(～6.1)の砂 岩を多く含 む)	丸 好	10YR7/1 10YR6/1 10YR4/1	ナデ/ナデ・ハ ケ		ハケ目(2.1 mm)、内面痕 合気	186	68
728	既應器	坪身	SI8	①	a III	(15.1)/ (2.0)/-	2.2 -	概(～6.1)の砂 岩を少し含 む)	丸 好	2.5YR7/1 2.5YR7/1 2.5YR7/1	回転ナデ・ナ デ・回転ナデ・回 転ヘラケズリ	豊加5形	外延自然剥 離	186	68
729	土器部	甕A	SI9	1	-/-/(2.7) /-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/1	楕ナデかく盛 ナデ・アカ・ハ ケ			186	68	
730	既應器	坪身C	SI10	③	a	(17.10)/ (1.10)/-	1.0 -	概(～6.1)の砂 岩をわずかに 含む)	丸 好	2.5YR7/1 2.5YR7/1 2.5YR7/1	回転ナデ/回転 ナデ・回転ヘラ ケズリ	豊加5形 V-1	外延自然剥 離	193	68

表90 遺構出土土器観察表⑤

遺構番号	種別	分類	出土位置			口径/底径 （高さ/底径 （cm）	口縁部 残存率 (0/12) ・底部 個体数	地土 (単位: m)	焼成	色鉄 (内面) (外面) (断面)	表面開削 内面/外面	分類・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	荷 造 番 号
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位									
731	須山塚	环壇C		SI10 ③	a	(16.5) /— (1.6) /—	1.0 ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	2.577/1 2.577/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	美濃須塚	外縁部外蓋白 熱帯化	191 66
732	須山塚	环壇A		SI10 ③	a	— /— / (3.0) / (14.5)	— ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	NB/ NB/ NB/	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	地内系C	地内系	191 66	
733	須山塚	环壇A		SI10 ②	b	/ (6.4) / (1.8) /—	— ± 1	焼(～ゅうの砂 粒を少し含む)	NB/ NB/ NB/	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	地内系C	地内系	191 66	
734	須山塚	环壇B2		SI10 ①	b	— / (7.0) / (1.8) /—	— ± 1	焼(～ゅうの砂 粒を少し含む)	2.578/1 2.578/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、ヘラ裏引 後ナデ	美濃須塚	還元焰成、 内底底部	191 66	
735	須山塚	环壇B2		SI10 ③	a	/ (5.6) / (2.4) /—	— ± 0	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	2.577/1 2.577/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	還元焰成	191 66	
736	須山塚	环壇B2	カマツ	SI10 ③	b	(13.0) / (7.5) / (3.7) /—	2.7 ± 0	焼(～ゅうの砂 粒を少し含む)	2.578/1 2.578/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、ヘラ裏引 後ナデ	美濃須塚	還元焰成	191 66	
737	須山塚	环壇C		SI10 ④	1	(12.2) / (9.4) / (3.1) /—	1.5 ± 1	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	2.577/1 2.577/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	191 66		
738	須山塚	牙身C		SI10 ①	b	(13.2) / (0.2) / (3.7) /—	3.5 ± 0	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	2.577/1 2.577/1 2.578/1	回転ナデ、歯ナ デ/回転ヘフ 回転 ナデ、歯ナデ	美濃須塚	IV-3	191 66	
739	須山塚	环壇C		SI10 ①	a	— / (10.1) / (1.6) /—	— ± 0	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	NB/ 2.577/1 2.577/1	回転ナデ、歯ナ デ/回転ヘフ 回転 ナデ、歯ナデ	美濃須塚	IV-3	191 66	
740	須山塚	牙身C		SI10 ③	1	14.6 / (10.7) / 4 /—	8.5 ± 1	焼(～ゅうの砂 粒を多く含む)	2.577/1 2.577/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、切石直、點付 行窓	美濃須塚	IV-2	191 65	
741	須山塚	牙身C		SI10 ③	1	(19.6) / (16.0) / (3.8) /—	1.5 ± 0	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	2.577/1 2.577/1 2.577/1	回転ナデ/回転 ナデ、ナデ	美濃須塚	IV-2～3 内底底部	191 66	
742	須山塚	盤		SI10 ①	a	(19.8) /— / (1.6) /—	1.2 ± —	やや粗(～ゅうの 砂粒をわずかに 含む)	2.577/1 2.577/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ	美濃須塚	IV-2	191 66	
743	須山塚	盤	EN6	SI10 ③	1 III	— / (13.4) / (2.6) /—	— ± 0	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	NB/ 2.577/1 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、歯ナデ/回 転ヘフ	美濃須塚	191 66		
744	須山塚	壁		SI10 ②	b	— /— / (7.9) /—	— ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	NB/ 2.578/1	回転ナデ/回転 ナデ、当て真底	美濃須塚	191 66		
745	須山塚	壁		SI10 ③	i	— /— / (6.0) /—	— ±	焼 —	NB/ 2.578/1	回転ナデ、当て 真底	美濃須塚	191 66		
746	須山塚	壁		SI10 ③	1	— /— / (6.0) /—	— ±	焼(～ゅうの砂 粒を多く含む)	2.577/1 2.577/1 2.577/1	回転ナデ、当て 真底/回転ナ デ、棒子ナキ	美濃須塚	外延河加自然 堆积层	191 66	
747	土師塚	台付壁		SI10 ③	1	— /— / (4.3) /—	— ±	焼(～ゅうの砂 粒を多く含む)	2.577/1 2.577/1 2.577/1	回転ナデ、当て 真底/回転ナ デ、棒子ナキ	10272/3 10272/3 10273/1	191 66		
748	土師塚	壁		SI10 ③	a	(16.8) /— / (5.1) /—	2.6 ±	焼(～ゅうの砂 粒を少し含む)	10265/6 10266/8 10265/8	横ナデ/ナデ 横ナデ/ナデ 横ナデ	内底コダ村層	191 66		
749	土師塚	壁		SI10 ③	b	— /— / (4.1) /—	— ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	10278/3 10277/2 10278/2	横ナデ/ナデ 横ナデ/ナデ 横ナデ	191 66			
750	土師塚	壁		SI10 ④	d	— /— / (2.2) /—	— ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	10272/2 10272/2 10272/1	ハケ/ハケ	191 66			
752	須山塚	环壇C	DW14	SI11 ④	a II	(14.7) /— / 3.2 /—	6.4 ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	NB/ NB/ NB/	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	V 1	193 69	
753	須山塚	环壇C		SI11 ③	a	(14.7) /— / (2.0) /—	1.5 ±	焼(～ゅうの砂 粒をわずかに 含む)	NB/ NB/	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	IV 2±	193 69	
754	須山塚	牙蓋C (輪形側)	SI11カット① SI11カット④	SI11カット① SI11カット④	a I	(14.5) /— / (2.0) /—	1.4 ±	焼 —	2.577/1 2.577/1	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	V 1	193 66	
755	須山塚	环壇C		SI11 ②	a	(18.5) /— / (2.0) /—	1.0 ±	焼 —	NB/ NB/ NB/	回転ナデ/回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	美濃須塚	IV 2	193 69	

表91 遺構出土土器観察表⑥

遺構番号	種別	器種	出土位置		口径/底径 /高さ/大径 (mm)	口縁部 残存率 (0/12) ・底部 傷害度	出土 (単位: cm)	焼成	色調 (内面) (外面) (断面)	表面調査 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	堆 積 層 番 号
			出土部 番号	埋藏 番号									
T56 水差器	坪庭S2		SII1 ④ TNE-Tレンチ	a a	(12.3) /— (3.6) /—	3.6 ± —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付 け混合	表面調査 内面	表面調査 VV-4面	190 69
T57 水差器	坪庭C		SII1 ④	a	(18.8) / (11.8) /2.9 /—	1.0 ± 0 —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付 け混合	表面調査 内面	内面削鉗	190 69
T58 水差器	坪庭C		SII1 ④	a	(14.0) /— (2.7) /—	2.0 ± —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	表面調査 VV-2	190 69
T59 水差器	坪庭C		SII1カマド ④	1	(12.0) /— (3.1) /—	1.0 ± —	やや焼(～φ1 の砂粒をわず かに含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	表面調査 VV-2	190 69
T60 水差器	坪庭C		SII1 ④	c	— / (12.7) (1.7) /—	— ± 0 —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・ラアリ テナブ・貼り付 け混合	表面調査 内面	内面削鉗	190 69
T61 水差器	坪庭C		SII1 ①	a	— / (10.3) (1.3) /—	— ± 0 —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	2.5V1/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・ラアリ テナブ・貼り付 け混合	表面調査 内面	内面削鉗	190 69
T62 水差器	はそう		SII1 ⑩	a	— /— / (4.1) — /—	— ± 0 —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 7.5V4/3	回転ナブ/回転 ナブ・カラ目 代	表面調査 内面	外面削鉗自然 剥離	190 69
T63 茶碗器	椎		SII1 ④	a	(19.7) / (12.9) /2.9 /—	1.0 ± 0 —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ・ラアリ テナブ・貼り付 け混合	表面調査 内面	内面削鉗	190 69
T64 水差器	坪庭C		SII1 ④	a	(18.0) /— (1.6) /—	1.0 ± —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	表面調査 VV-3	190 69
T65 水差器	椎		SII1 ④	a	— / (15.6) (3.2) /—	— ± 0 —	焼(～φ2の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	2.5V1/7 2.5V1/2	回転ナブ/ナ ブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付け 混合	表面調査 内面	表面調査 VV-3	190 69
T66 水差器	椎		SII1 ④	a	— / (6.5) — /—	— ± 0 —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ・複合 痕をハケナセ・ 輪縫み直し・回転 ナブ・タク・ カキ目	表面調査 内面	表面調査 VV-3	190 69
T67 水差器	椎		SII1 ②	a	(28.9) /— (2.6) /—	1.3 ± —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	ETT/1 NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ	時代	190 69	
T68 土器	甕A		SII1 ①	a	— /— / (2.9) — /—	1.0 ± —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	10TR8/2 10TR8/2 10TR8/2	不明	表面調査 内面	表面調査 VV-1	190 69
T69 水差器	坪庭C		SII2カマド ①	1	(14.0) /— (2.0) /—	4.2 ± —	焼(～φ2の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	表面調査 VV-1	190 69
T70 水差器	坪庭C		SII2カマド ①	1	(12.0) /— (1.0) /—	2.1 ± —	焼(～φ2の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	燒きひずみ	190 69
T71 水差器	坪庭C		SII2 SII2	b 3	(13.8) / (11.0) /3.8 /—	5.3 ± 1 —	焼(～φ2の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ NB/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付 け混合	表面調査 内面	底面内面撲耗	190 65
T72 水差器	椎		SII2カマド ①	1	(18.6) / (11.6) /3.6 /—	4.8 ± 0 —	焼(～φ2の砂 粒を少し含 む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・ラアリ テナブ・貼り付 け混合	表面調査 内面	内面に自然 剥離	190 66
T73 水差器	坪庭C		SII3 ②	1	— / (9.9) / (2.5) /—	— ± 0 —	やや焼(～φ1 の砂粒をわず かに含む)	良 好	2.5V1/2 2.5V1/2 2.5V1/2	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付 け混合	表面調査 内面	表面調査 VV-3	190 69
T74 水差器	坪庭C		SII4 ①	b	(13.4) /— (2.0) /—	1.0 ± —	焼(～φ1の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	内外面ねじ き痕	200 69
T75 水差器	坪庭S2		SII4	—	(12.7) / (7.9) /2.2 /—	1.1 ± 0 —	焼(～φ2の砂 粒をわずかに 含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	表面調査 内面	表面調査 VV-1	200 69
T76 水差器	椎		SII4	1	— /— / (3.4) — /—	1.0 ± —	やや焼(～φ1 の砂粒をわず かに含む)	良 好	NB/ NB/ 2.5V1/	回転ナブ/回転 ナブ	表面調査 内面	表面調査 VV-3	200 69

表92 遺構出土土器觀察表⑦

地 点 名 称 番 号	種 別	類 型	出土位置			口徑/底 径(幅)/最大 高さ (cm)	口径部 底面 形状 (X-Y-Z) 底面 偏心 度	出土 土 物 名	傳 成 状 態	色 調 (内面) (外 面) (断面)	帶 加 装 置 内面/外 面	分 類	文 様・その 他の 特 徴 (単位: m)	攝 影 番 号			
			出土区 域 名		層 位												
			遺構 番 号	層 位													
777	灰陶馬 器	車	SII14	③	a	—	—	瓶(～φ1の粉 粒をわずかに 含む)	長 軸 好	2.87Y/1 2.87Y/1 2.87Y/1	[回転ナ ビ]・ナ ド・[回転ナ ビ]・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	—	0-53	輪葉及び色 刷り灰陶 (2.87Y/3)	200	69	
778	灰陶馬 器	車	SII14	④	b	-/-/3.3/(2.1 /-)	-	瓶(～φ1の粉 粒をわずかに 含む)	長 軸 好 NS SII1 2.87Y/1	2.87Y/1 2.87Y/1 2.87Y/1	[回転ナ ビ]・[回転 ナビ]・ヘラクリ ズ・貼 り付け合 台	—	0-53	内面塗装無	200	69	
779	灰陶馬 器	車	SII14	⑤	a	—	—	瓶(～φ1の粉 粒をわずかに 含む)	長 軸 好 SII1 2.87Y/1	— 2.87Y/1 2.87Y/1	[回転ナ ビ]・[回転 ナビ]・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	K-14-8- E 好 貼 り付け合 台	—	2.87Y/2 2.87Y/2 2.87Y/2	正面面2重 輪葉、無 刷り及び色 刷り灰陶 (2.87Y/2) 内面塗装無	200	69
780	灰陶馬 器 (転用器)	車	SII14	⑥	b	—	—	瓶	長 軸 好 2.87Y/1	1078H/1 1078H/1 2.87Y/1	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	—	0-53	内面塗装、采 掘化有	200	66	
781	クロタ 上部器	不明	SII14	⑦	a	—/(5.8)/(0.9 /-)	-	瓶	長 軸 好 SII1 1098H/2 1098H/2	2.37Y/1 1098H/2 1098H/2	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・貼 り付け合 台	—	—	—	—	200	69
782	編織器	坪塗C	SII15カマ F	⑧	b	14.3/-/3.3 —	9.0	瓶(～φ3の粉 粒をわずかに 含む)	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・ナ ド・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	—	—	—	—	203	66	
783	編織器	坪塗C	SII15カマ F	⑨	b	-/-/(2.8) —	-	瓶(～φ3の粉 粒をわずかに 含む)	2.37Y/1 2.37Y/1 2.37Y/1	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	—	—	—	—	203	69	
784	編織器	坪塗C	SII15カマ F	⑩	c	(14.2)/— /(1.1)/—	4.1	瓶	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ナビ]	—	—	—	—	203	69	
785	編織器	坪塗C	SII15	⑪	b	(13.8)/— /(1.7)/—	3.6	瓶	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	—	—	—	—	203	69	
786	編織器	坪塗C	SII15	⑫	a	(17.2)/— /(2.2)/—	1.0	瓶	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	—	—	—	—	203	69	
787	編織器	坪塗C	SII15	⑬	a	(17.8)/— /(1.0)/—	1.0	瓶	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	—	—	—	—	203	69	
788	編織器	坪塗C	SII15	⑭	b	(12.4)/— /(2.7)/(15.9 —)	1.5	瓶	NS 好 SII1 SII1 SII1	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ナビ]	—	—	内面系EC 代	—	203	69	
789	編織器	坪塗C	SII15カマ F	⑮	b	(11.1)/(6.5 —)	3.8	瓶	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	—	—	—	—	203	69	
790	土師器	坪塗C	SII15カマ F	⑯	a	(12.1)/(7.4 —)	2.9	瓶	NS 好 SII1 2.87Y/1	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	—	—	内面塗装無	—	203	69	
791	瓶底器	坪塗C	SII15カマ F	⑰	c	(12.4)/— (1.9) (3.4)/—	2.1	瓶	(～φ1の粉 粒をわずかに 含む)	小 底 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・後 袋ナシ	—	—	深元瓶底成 形・内面底板	—	203	69
792	瓶底器	坪塗C	SII15カマ F	⑱	a	—	—	瓶(～φ1の粉 粒を少しあ る)	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・後 袋ナシ	—	—	在地底成 形	—	203	69	
793	瓶底器	坪塗C	SII15カマ F	⑲	c	(13.3)/(9.7 —)	3.2	瓶	(～φ2の粉 粒をわずかに 含む)	NS 好 2.87Y/1 NS 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	V-3 —	—	内面底板成 形・外面底 盤黒墨	—	203	66
794	瓶底器	坪塗C	SII15カマ F	⑳	a	(15.3)/— (4.0)/—	2.5	瓶	(～φ2の粉 粒をわずかに 含む)	NS 好 2.87Y/1	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]	V-1	—	美濃底盤 成形	—	203	69
795	底盤器	坪塗C	SII15カマ F	㉑	b	(12.6)/0.8/ 3.9/-	2.4	瓶	(～φ2の小 石を少しあ る)	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	V-3	—	美濃底盤 成形	—	203	66
796	底盤器	坪塗C	SII15カマ F	㉒	a	13.1/10.1/3. 3/-	8.1	瓶	(～φ2の粉 粒をわずかに 含む)	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	V-3 —	—	美濃底盤 成形	—	203	66
797	底盤器	坪塗C	SII15-P1	㉓	c	-/-/(4.8) —	1.0	瓶	(～φ2の粉 粒をわずかに 含む)	NS 好 NS 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	V-3 —	—	美濃底盤 成形	—	203	69
798	底盤器	盤	SII15カマ F	㉔	b	(19.9)/(13.7 —)	1.0	瓶	(～φ2の粉 粒をわずかに 含む)	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	V-1	—	美濃底盤 成形	—	203	69
799	土師器	盤	SII15	㉕	b	-/-/(3.6) —	—	瓶	(～φ2の粉 粒を少しあ る)	NS 好 SII1 好	[回転ナ ビ]・[回 転ナビ] ナド・[回 転ヘラクリ ズ]・貼 り付け合 台	V-3 —	—	ナメリ・湘南エ モ(2.4. 6.6)	—	203	69

表93 遺構出土土器観察表⑧

施設番号	種別	器種	出土位置				口径/底径 /器高/最大幅 (cm)	口縁部 洗有無 (O/I2) ・底 部斜 面有無	出土 (単位: m)	傾 斜 (度)	色 層 (内面) (外 面)	器 表 面 調 整 内面/外 面	分類 ・ 時期	文様・ その他 (単位: cm)	施 設 番 号
			出土区 ・ グリット	遺 構 番 号	層 位										
800 土師器	壺	ST15カマド ⑤	c	(21.6) / - (4.0) / -	1.5 ± -	密 (~ 6.2) の小 石多く含む)	107BB/2 107BB/1 107BB/1	燒ナデ/ハケ、 板ナデ/焼ナ デ、ハケ					ハケ日 (2.8. 10集)	203	69
801 氷温器	灰身25+	SD6 SD6 SD6 —	① ② ③ —	(12.5) / 7.5 / 3 — — III	1.0 ± 1	密 —	SD6/6 2. SYB/6 SD6/6	焼ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ 切り後ナデ					酸化粧焼成	209	70
802 氷温器	灰身C	DN17 DN16	SD6 —	② I III	(12.8) / 7.6 / 3 — —	1.0 ± 1	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ 切り・貼り付け 高台				美濃領南 V-1	209	70
803 氷温器	灰身C	SD6	①	1	(12.2) / - (2.9) / -	1.0 ± -	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	NT/ SYB/1 NT	回転ナデ/直軸 ナデ				美濃領南 IV-3	209	70
804 氷温器	鉢	SD6 SD6 SD6	① ② ③ a b	1 — — —	13.3 / 6.5 / 1 — —	8.0 ± 1	やや粗 (~ 6.1) の砂粒をわずかに 含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ 切り				近天焼成	209	66
805 氷温器	鉢	SD6 SD6	① ② c	(11.0) / (11.4) /(4.6) / -	1.5 ± 0	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ 切り				美濃領南 付青	209	70	
806 氷温器	平瓶	DN15 DN16 DN17	SD6 — — —	② II-III III	— /(9.0) / (9.4) —	- ± 0	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ クリッピング タ突起			外壁自然剥付 代	209	66	
807 氷温器	甕・鉢	DN17	SD6	② d III	- / (12.2) /(2.6) / -	- ± 0	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	SYB/1 2. SYB/2 NT	回転ナデ/直軸 ナデ・底膨調整 ナデ			焼元焼成	209	70	
808 氷温器	甕・瓶	SD6	② c	- / - (8.11) / (11.0)	- ± -	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	SYB/1 NT	回転ナデ/直軸 ナデ・ヘラクリッ ピング				焼画及び色 画・深鉢 (7. SYB/3)	209	70	
809 土師器	鍋	SD6	② d	- / - / (7.0) —	- ± -	密 (~ 6.0) の少 量多く含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ/ハケ ・板ナデ/ハケ、 押出サエ					209	70	
810 氷温器	平瓶	SD3	② d	(6.9) / - (6.2) / -	2.5 ± -	密 (~ 6.0) の少 量を少し含 む)	NA/ NA/ 2. SYB/4	回転ナデ/直軸 ナデ				内系化 代	209	70	
811 氷温器	灰身A	SD14	② b	- / - / (2.0) —	- ± -	密 (~ 6.0) の少 量を少し含 む)	NE/ NE/ NE	回転ナデ/ナ ダ・凹輪ナデ・凹 輪ヘラ切り					212	70	
812 氷温器	灰身B2	SD14	① a	- / 6.2 / (2.6) —	- ± 1	やや粗 (~ 6.2) の砂粒を少し含 む)	NE/ NE/ NE	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ナデ・凹 輪ヘラクリッピ ング				7代	212	70	
813 氷温器	瓶	SD14	① a	- / (6.0) / (2.1) —	- ± 0	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ/ナ ダ・凹輪ナデ・凹 輪ヘラ・貼り付 合				底部外縁ヘラ 配分・内底面 擦耗	212	70	
814 氷温器	甕・壺	SD14	② b	- / - / (3.6) —	1.0 ± -	密 —	2. SYB/1 2. SYB/1	回転ナデ/直軸 ナデ				焼画(幅0.3. 1.6m)	212	70	
815 氷温器	横瓶	SD14	① c	(11.2) / - (6.7) / -	1.0 ± -	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	NT/ NT/ NT	回転ナデ・当て 風痕/凹輪ナ ダ・タキ				美濃領南 T0前半	212	70	
816 氷温器	甕	SD14	① b	- / - / (7.1) —	- ± -	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	NE/ NE/ NE	回転ナデ・当て 風痕/凹輪ナ ダ・カキミ・タキ				T0代	212	70	
817 氷温器	瓦・甕	SD14	② a	(15.6) / - (1.4) / -	1.0 ± -	密 —	— SYB/1 2. SYB/1	回転ナデ/直軸 ナデ				焼画及び色 画・瓦 (7. SYB/3)	212	70	
818 氷温器	小瓶	DN20	SD14	② a III	10.4 / (5.0) / 0 - .7/-	5.4 ± 1	密 —	NE/ NE/ 2. SYB/1	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ クリッピング 糊付合				焼画及び色 画・灰瓦 (7. SYB/3)	212	70
819 土師器	甕A	DM20	SD14	① a III	(17.4) / - (19.4) / -	1.0 ± -	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	NT/ NT/ NE	焼ナデ/ハケ、 板ナデ/押出サエ/ 焼ナデ/ハケ					212	70
820 土師器	甕A	SD14	② c	(21.4) / - (4.9) / -	1.7 ± -	密 (~ 6.0) の少 量を少し含 む)	2. SYB/8 2. SYB/8 107BB/4	焼ナデ/ハケ/ 板ナデ/ハケ					212	70	
821 氷温器	灰身C	SD16	① b	(17.6) / - (1.6) / -	1.0 ± -	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	2. SYT/1 2. SYT/1 2. SYT/1	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ クリッピング				美濃領南 V-1	214	70	
822 氷温器	深瓶	SD16	—	(14.9) / - 7.8/6 - .4/-	1.1 ± 1	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	7. SYB/3 7. SYB/3 7. SYB/3	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ナ ダ・凹輪ヘラ クリッピング				焼画及び色 画・灰瓦 (7. SYB/3)	214	70	
823 ロクロ 灰温器	甕	SD16	① a	10.6 / 5.3 / 3.7 —	11.5 ± 1	密 (~ 6.0) の少 量をわずかに 含む)	7. SYB/3 7. SYB/3 7. SYB/3	回転ナデ/直軸 ナデ・凹輪ヘラ クリッピング					214	66	

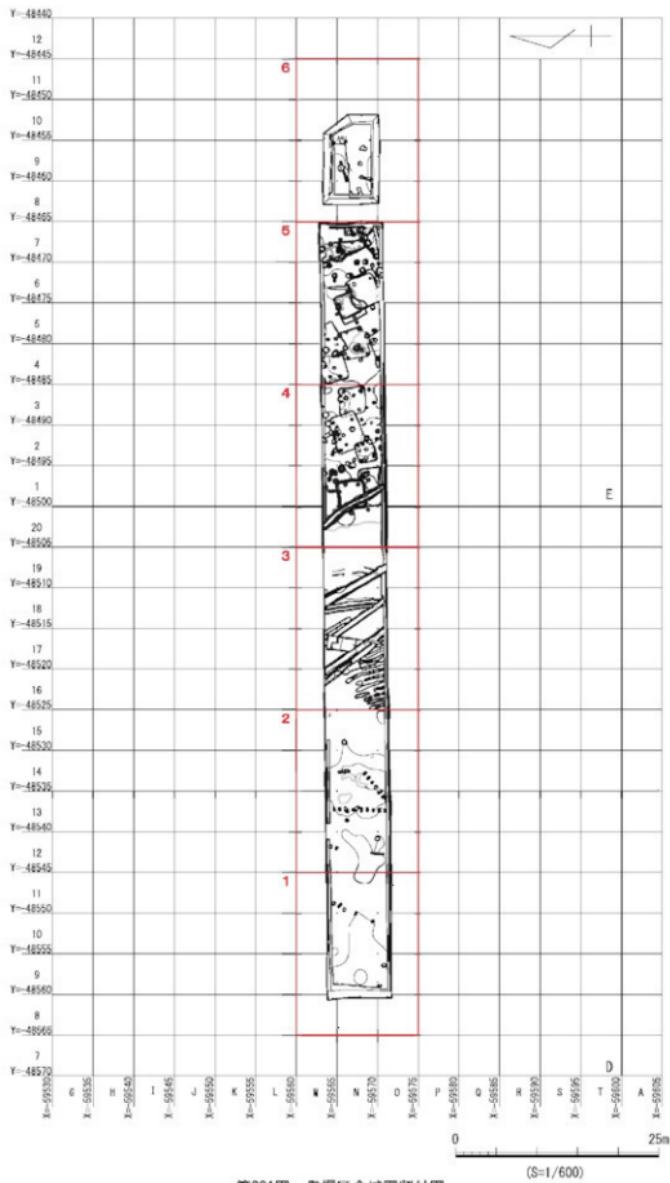
表94 遺構出土土器觀察表⑨

表95 造構出土土器観察表⑩

発 見 番 号	種別	基標	出土位置		口縁部 底径 高さ (mm)	底径 高さ (mm)	層位	土色 (単位: mm) 土質 (断面)	形状 (内面) (外面)	表面 磨耗 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・ その他の 特徴 (単位: cm)	備 考 番 号	
			出土区 域名 (グリット)	遺構 番号										
845	灰陶器	坪山C (高田面)	SK83	① 1	-/(11.0) /(2.3)/-	- · 0	甕 (~61の形 状をねじり含む)	魚 骨	2.37/1 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ・ヘラケズ リ・貼り付け高 台	美濃須南 IV-3	内面磨耗、外 面自然斜付着	230	72
849	灰陶器	坪山C	SK86	① 1	-/-/(1.8) /-	- · -	甕 (~61の形 状をねじり含む)	N7/ N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ・ヘラケズ リ	美濃須南 V-1			230	72
850	灰陶器	坪山Cか 盤	SK86	② b	-/(17.6) /(1.3)/-	- · 0	甕 (~61の形 状をねじり含む)	魚 骨	2.37/1 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ・頭端切 り後ナブ・貼り 付け高台	美濃須南		230	72
851	灰陶器	坪山B	SK86	② 1	(12.0)/ /(3.6)/-	3.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	美濃須南 III~IV带 円肩		230	72	
852	灰陶陶 器	瓶	SK86	① a	-/(6.0)/-/- -	- · 0	甕 (~61の形 状をねじり含む)	魚 骨	2.37/1 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付け高 台	8-63	斑斑及び色 擦(2.37/1) 内面凹欠痕跡	230	72
853	クロ 土器類	瓶	SK107	① 1	(10.0)/ /(2.8)/-	1.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ			230	72	
854	灰陶器	坪山A	SK109	① a IIb	-/(4.6)/ (4.0)/(12.0)	- · 0	甕	不 定	2.37/1 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	國內系BC	深元胎燒成	230	72
855	灰陶器	坪山C	SK112	① 3	(14.2)/ (16.0) /3.8/-	1.0 · 0	甕 (~63の形 状をねじり含む)	魚 骨	N7/ 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ・貼り付け高 台	美濃須南 V-1		230	72
856	牛軒器	坪山B	SK112	② 1	(23.4)/ /(8.0)/-	2.6 · -	甕 (~62の形 状を多く含 む)	N7/ 10729/2 2.37/1	2.37/1 10729/2 2.37/1	ナブ・ハケ/横 ナブ・ハケ	外差ス付青		230	72
857	牛軒器	坪山土器 か	SK112	② 3	(11.2)/ /(3.0)/-	2.5 · -	甕 (~62の形 状を多く含 む)	N7/ 7.397/6 10729/3	2.37/1 7.397/6 10729/3	坂ナブ・花オウ ニ/口縁キザ ミ・指捺オニ			230	72
858	灰陶器	不明	SK113	② b	-/-/(2.5) -	- · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ・貼り付け 高台	國內系		230	72	
859	灰陶器	坪山C	SK113	① a	(17.0)/ /(1.6)/-	1.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ	美濃須南 IV-3~V -1		230	72	
860	灰陶器	坪山か	SK113	② c	-/-/(6.0)/(23.4)	- · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・削り		体側上半外面 自然斜付着	230	72	
861	灰陶器	不明	SK113	① b	-/-/(2.5) -	1.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ	TC代か		230	72	
862	灰陶器	坪山C	SK114	① 1	-/-/(2.5) -	- · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ・ナブ /回転ヘラケズリ	美濃須南 IV-3		230	72	
863	灰陶器	水原	SK114	① d IIb	-/-/(18.5)/(22. 3)	- · -	甕 (~62の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ・貼り付 け高台	美濃須南 IV-2~3	沈鉢(標.0.2)	230	72	
864	灰陶器	盤	SK116	① b	(19.0)/ /(1.7)/-	1.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ 2.37/2 2.37/2	印軸ナブ/回転 ナブ	美濃須南 IV期	深元胎燒成	230	72	
865	土軒器	坪山B	SK116	② e	-/-/(4.4) -	1.0 · -	甕 (~61の形 状を少しあ る)	N7/ 10728/3 10728/3	2.37/2 10728/3 10728/3	ハケ/横ナブ			230	72
866	灰陶器	盤	SK120	a	(8.0)/ /(1.1)/-	1.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ	美濃須南 IV-3~V -1	ミニチュアか	230	72	
867	灰陶器	坪山B	SK128	② a	(9.8)/ (1.7)/(11.9)	1.7 · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	2.37/1 2.37/1 2.37/1	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	追加5件 付	外差ス付青	230	69
868	灰陶器	坪山C	SK129	③ a	(13.8)/ /(1.6)/-	1.0 · -	甕	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ	美濃須南 IV	外差スねじき 板、外面に月 形自然斜付着	230	69	
869	灰陶器	盤か	SK129	④ a	(15.8)/ /(2.3)/-	1.0 · -	甕 (~61の形 状をねじり含 む)	N7/ N7/ N7/	印軸ナブ/回転 ナブ・回転ヘラ ケズリ	美濃須南 IV		230	69	

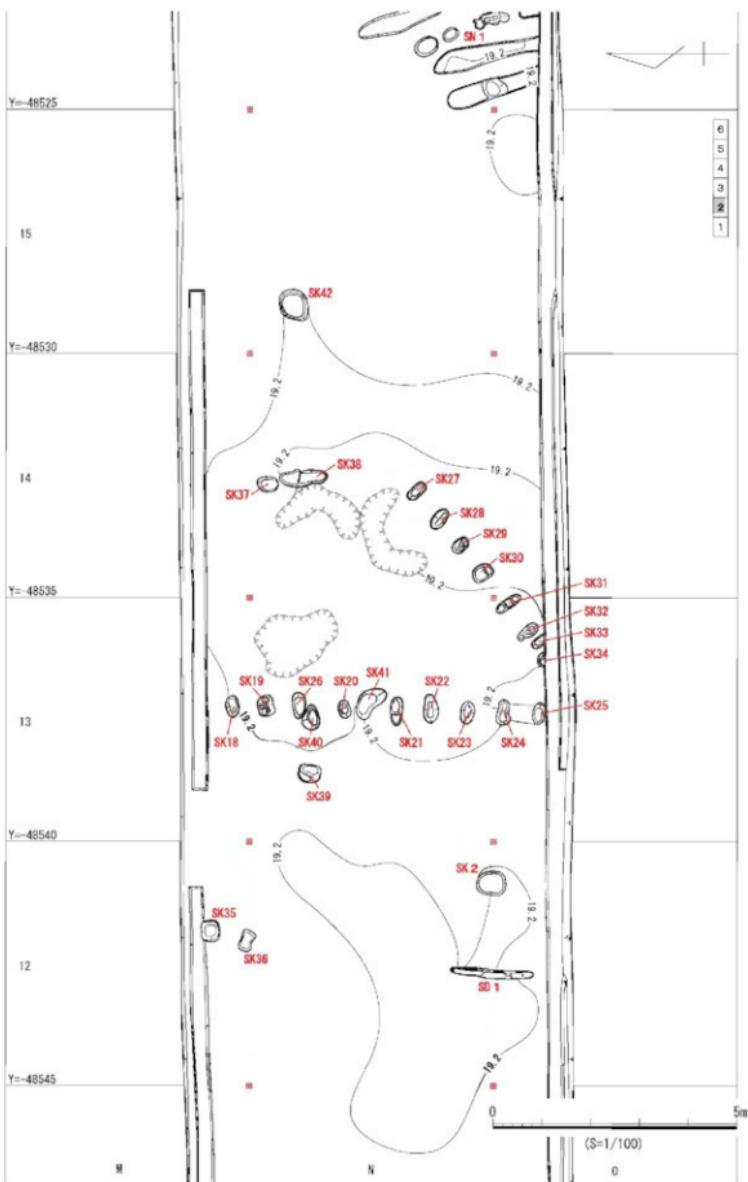
表96 造構出土石器・石製品一覧表

用 器 番 号	取上 番号	基標	出土位置		素材	長軸/幅/厚 (mm)	重 さ (g)	觀察・ その他の 特徴	博 物 館 番 号	出 版 番 号
			遺構番号	層位						
751	2834	砾石	SI10	⑥ 1	砂岩	17.0	6.6	6.5 1100.0		191 75
724	2538	石皿・石杓子	SI17	⑤ 2	花崗岩	(12.5) (15.6)	(7.3)	(2500.0)		183 75
1442	石皿・台石類	ST1	② a		花崗岩	12.2	10.5	(15.0) (2500.0)		
- 91	坪山C・石杓子	SK43	⑤ a		砂岩	13.3	6.1	(3.4) (429.4)	使用状況AB	- - -





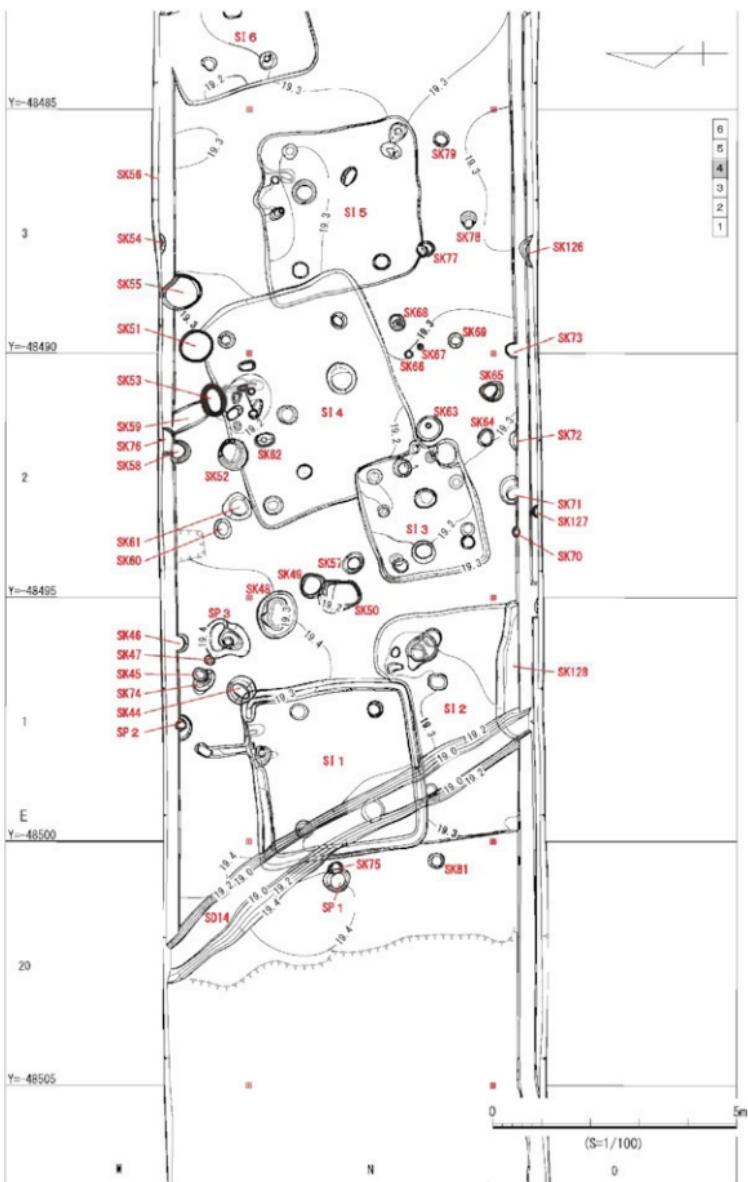
第232図 免擅区全域図分割図①



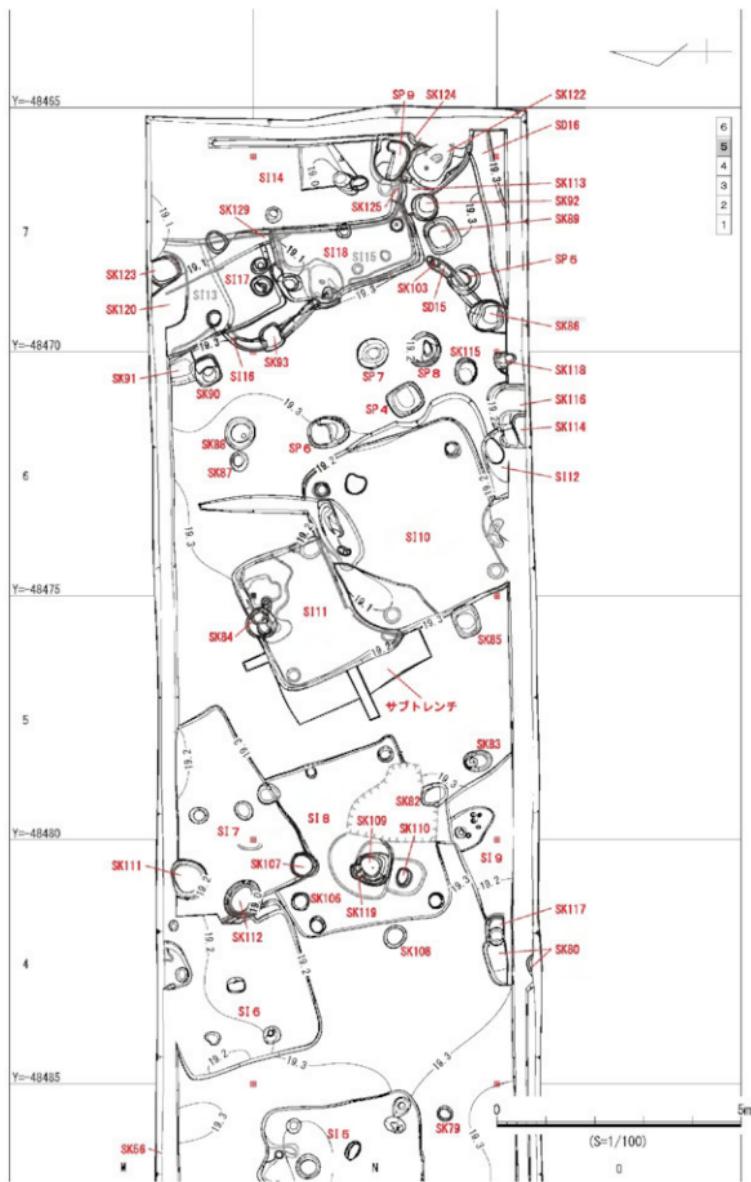
第233図 白堀区全域図分割図②



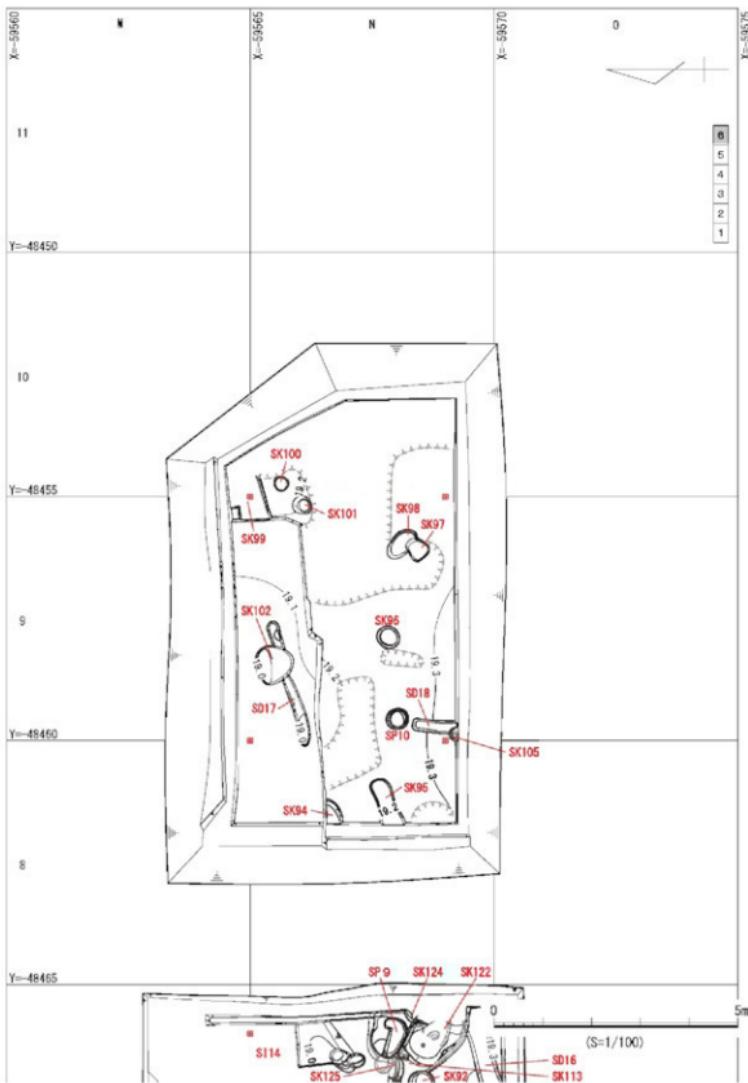
第234図 免堀区全域図分割図③



第235図 発掘区全域図分割図④



第236図 発掘区全域図分割図⑤



第237図 発掘区全域図分割図⑥

第4節 その他の時代の遺構・遺物

DM12 から D016 グリッドにおける遺物包含層掘削作業中に確認した遺構群で、Ⅲ層上面から検出した。大畦畔の痕跡と考えられる遺構と共に伴う杭痕、土坑、溝状遺構などがある。層序から、六里遺跡の第1調査面に対応する遺構群と考えられる。

1 大畦畔 (SM 1 第 238 ~ 241 図)

検出状況 DM15 から D015 グリッドにかけて検出した。遺物包含層掘削過程で、DM15 グリッドの北東隅付近から円礫で構成される集石を検出したため、この面で周囲の遺構検出を実施したところ、杭穴と南北に延びる帶状の鉄分沈着を確認した。礫は北側の一部にのみ集積し、南側には続かない。杭痕 (SP) は平面形が円形の小穴として検出した。その多くは帶状の鉄分沈着範囲に含まれる。以上の状況から水田遺構の大畦畔の痕跡と判断した。この遺構の位置は、大野郡条里プランの坪境推定位置に近い（第2章第2節参照）ことから、何らかの関連が考えられる。

堆積状況 集石は、南北方向に延びる溝状の掘り込みの上面で、平面的に検出した。集石の散布状況から、この溝状遺構と集石が必ずしも関連するとは言い難いが、溝状掘り込みから離れた範囲に礫はみられなかった。溝状遺構の埋土は、上層のⅡ層と類似する。杭痕はすべて断ち割り調査を実施した。その結果、SP19・SP22・SP29 の 3 基から杭を検出した（第 240 図・241 図）。3 基とも検出面から 0.5 m 程度の深さまで達しており、その他の杭穴とは様相を異にする。また、断面図を図示した杭穴は深さ 0.1 m を超えるもので、集石の東側に多い。その他の穴はいずれも 0.1 m 未満の深さであった。これらの杭穴の埋土は、いずれもⅡ層に類似する。

遺物出土状況 集石周辺から、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗の破片が出土した。

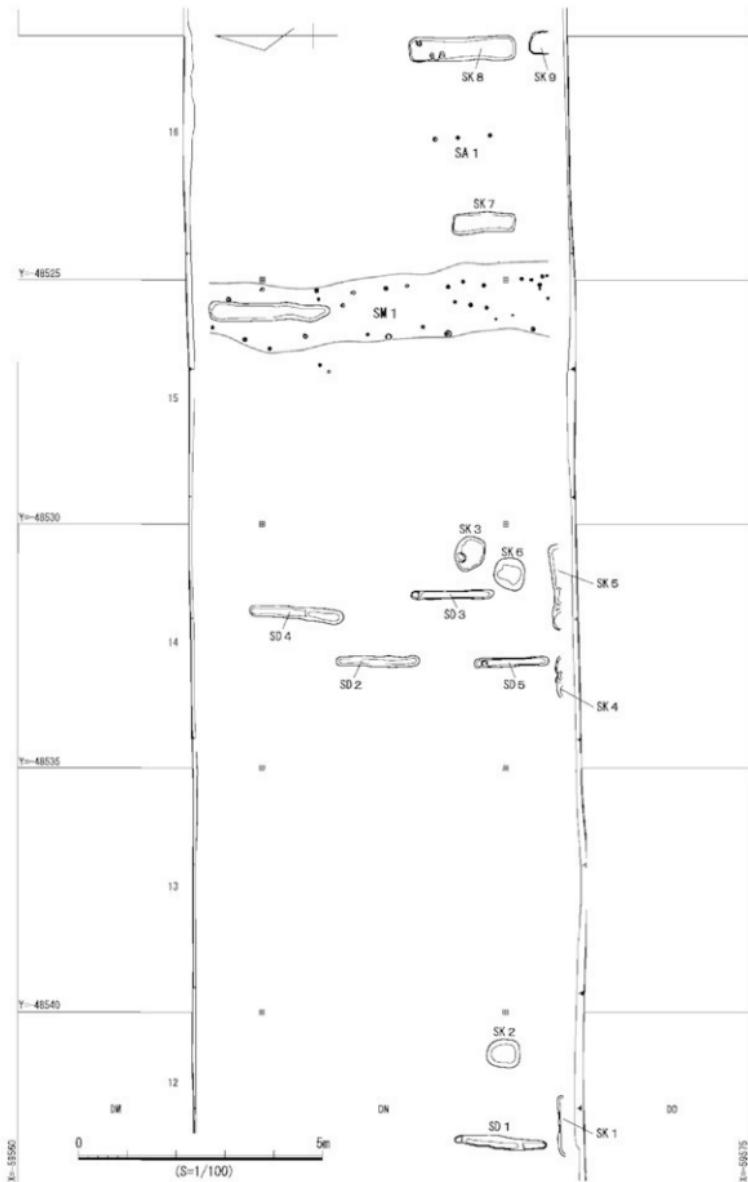
出土遺物 図化可能な遺物は出土しなかった。

所属時期 遺構を確認した面は、層序的に六里遺跡の第1調査面と同じと考えられる。そのため、Ⅶ期以降の遺構であると考えられる。

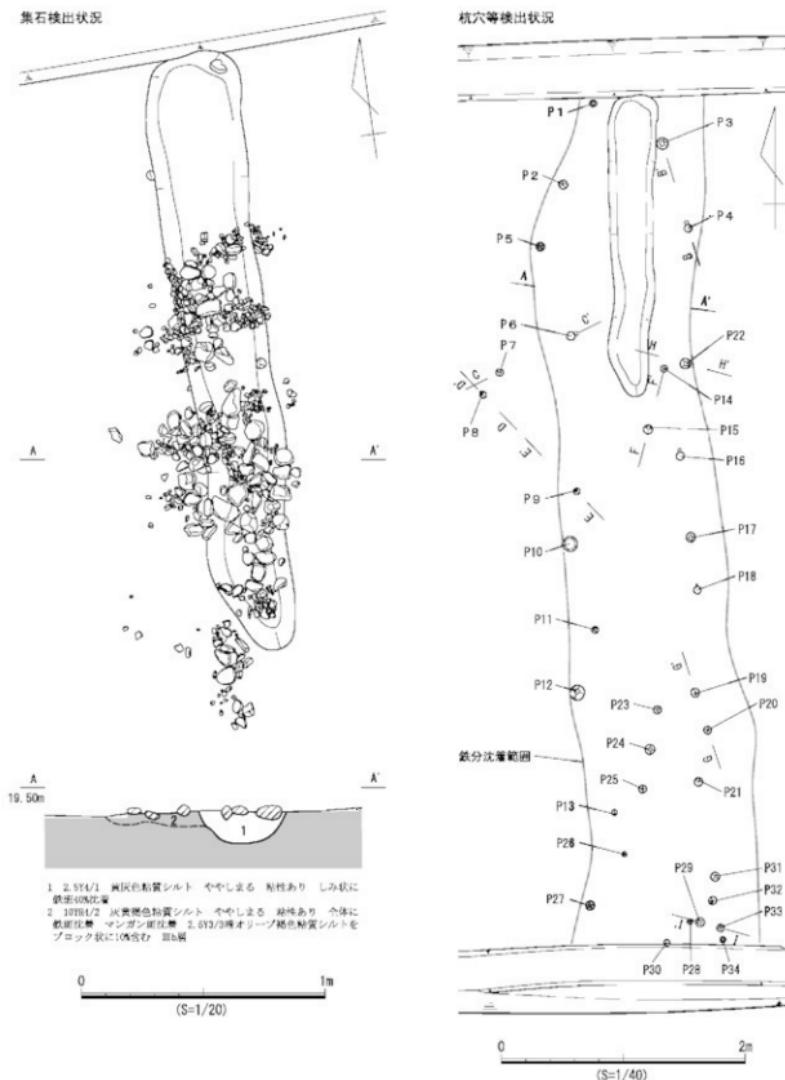
2 その他の遺構

SM 1 の他、杭列 (SA 1) 1 条、溝状遺構 5 基、土坑 10 基を検出した。SA 1 は南北方向に並ぶ 3 基の杭穴である。SM 1 と平行して設置されており、SM 1 からの距離は約 2.6 m ある。南北方向の畦畔に伴う遺構の可能性がある。溝状遺構は SM 1 の西側に分布し、長さ 1.5 ~ 2 m、幅 0.3 m 以下の形状で、いずれも南北方向に近い長軸を持つ。土坑は、SM 1 の西側に分布する平面形が不定形なものと、東側の平面形が長方形の一群があり、長方形のものは溝状遺構と同様に南北方向の長軸をもつ。いずれの遺構もⅡ層と類似する埋土で埋没しており、上層における耕作に関連する遺構と思われる。

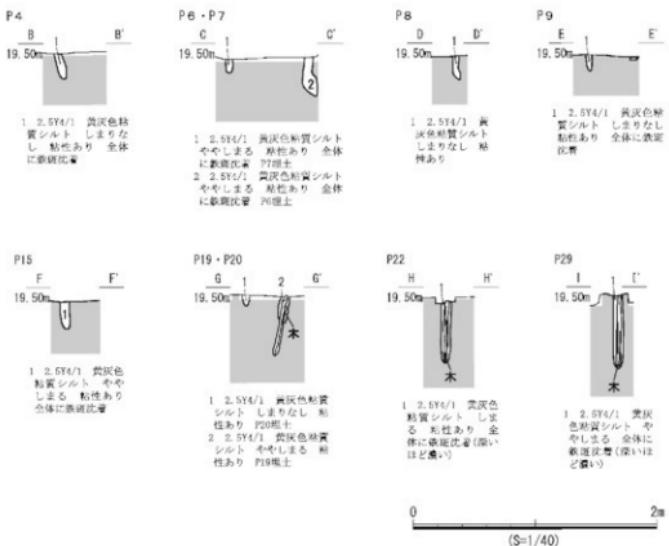
遺物は須恵器、土師器、灰釉容器、山茶碗、中近世陶器などが出土しているが、いずれも破片である。この内、SK 8 から出土した 1 点を図示した。870 は古瀬戸系施釉陶器の縁釉小皿である。口縁部内外面に鉄釉が施される。



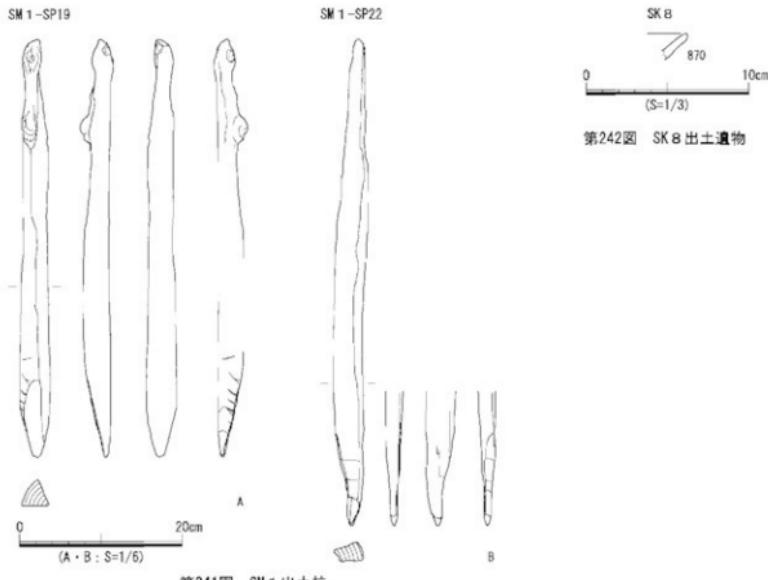
第238図 III層上面遺構群 (DM12~D016)



第239図 SM 1 遺構図①



第240図 SM 1 遺構図②



第241図 SM 1 出土杭

表97 Ⅲ層上面杭痕一覧表

遺構名	地区割り		検出面	長軸(m)		短軸(m)		深さ(m)	備考
	南北	東西		上端	下端	上端	下端		
SM 1-P1	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.04	0.06	0.04	0.08	SM 1
SM 1-P2	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.09	SM 1
SM 1-P3	DN	15	Ⅲ上	0.10	0.05	0.09	0.06	0.05	SM 1
SM 1-P4	DN	15	Ⅲ上	0.09	0.03	0.06	0.03	0.21	SM 1
SM 1-P5	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.09	SM 1
SM 1-P6	DN	15	Ⅲ上	0.10	0.03	0.07	0.03	0.32	SM 1
SM 1-P7	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.03	0.06	0.03	0.26	SM 1
SM 1-P8	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.03	0.05	0.03	0.33	SM 1
SM 1-P9	DN	15	Ⅲ上	0.05	0.03	0.05	0.03	0.15	SM 1
SM 1-P10	DN	15	Ⅲ上	0.12	0.12	0.12	0.12	0.04	SM 1
SM 1-P11	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.03	0.05	0.03	0.32	SM 1
SM 1-P12	DN	15	Ⅲ上	0.12	0.04	0.12	0.04	0.20	SM 1
SM 1-P13	DN	15	Ⅲ上	0.05	0.02	0.04	0.02	0.07	SM 1
SM 1-P14	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.02	0.06	0.02	0.54	SM 1
SM 1-P15	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.03	0.07	0.03	0.58	SM 1
SM 1-P16	DN	15	Ⅲ上	0.09	0.02	0.06	0.02	0.11	SM 1
SM 1-P17	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.03	0.07	0.03	0.08	SM 1
SM 1-P18	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.01	0.06	0.01	0.09	SM 1
SM 1-P19	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.02	0.07	0.02	0.49	SM 1
SM 1-P20	DN	15	Ⅲ上	0.06	0.02	0.06	0.02	0.12	SM 1
SM 1-P21	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.07	SM 1
SM 1-P22	DN	15	Ⅲ上	0.09	0.04	0.08	0.04	0.50	SM 1
SM 1-P23	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.06	0.04	0.04	SM 1
SM 1-P24	DN	15	Ⅲ上	0.08	0.04	0.08	0.04	0.09	SM 1
SM 1-P25	DN	15	Ⅲ上	0.07	0.02	0.06	0.02	0.11	SM 1
SM 1-P26	DN	15	Ⅲ上	0.04	0.02	0.04	0.02	0.15	SM 1
SM 1-P27	DO	15	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.06	SM 1
SM 1-P28	DO	15	Ⅲ上	0.05	0.02	0.04	0.02	0.08	SM 1
SM 1-P29	DO	15	Ⅲ上	0.08	0.04	0.07	0.04	0.62	SM 1
SM 1-P30	DO	15	Ⅲ上	0.05	0.03	0.05	0.03	0.07	SM 1
SM 1-P31	DO	16	Ⅲ上	0.07	0.04	0.07	0.04	0.06	SM 1
SM 1-P32	DO	16	Ⅲ上	0.07	0.02	0.06	0.02	0.07	SM 1
SM 1-P33	DO	16	Ⅲ上	0.06	0.04	0.06	0.04	0.07	SM 1
SM 1-P34	DO	16	Ⅲ上	0.05	0.04	0.05	0.04	0.07	SM 1
SA 1-P1	DN	16	Ⅲ上	0.09	0.03	0.09	0.03	0.13	SA 1
SA 1-P2	DN	16	Ⅲ上	0.07	0.03	0.07	0.03	0.17	SA 1
SA 1-P3	DN	16	Ⅲ上	0.07	0.03	0.07	0.03	0.08	SA 1

表98 Ⅲ層上面溝状遺構一覧表

遺構名	地区割り		検出面	堆積	断面形	長さ(m)		幅A(m)		深さ(m)	長軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西				上端	下端	上端	下端			新	旧	
SD 1	DN	12	Ⅲ上	b3	台形	1.89	1.62	0.27	0.10	0.32	N 3° E			H1 S1
SD 2	DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.70	1.56	0.21	0.08	0.07	N 2° W			
SD 3	DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.69	1.56	0.17	0.12	0.08	N 1° W			P1 H1
SD 4	DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.94	1.78	0.24	0.15	0.05	N 4° E			K1 H1
SD 5	DN	14	Ⅲ上	a	半円形	1.53	1.40	0.18	0.10	0.09	N 2° W			PS X2 H1

表99 SM1出土杭一覧表

取上 番号	素材	形態	遺構	長軸/短軸/厚(φmm)	備考	牌号	固版 番号
A 623	木	角材	SM1-P19②	51.3 3.7 3.5		241	71
B 646	木	角材	SM1-P22②	59.7 3.8 3.0		241	71
-	658	木	角材	SM1-P22③	52.0 2.7 2.4 接合2点	-	-

表100 III層上面土坑一覧表

遺構名	地区割り		検出面	平面形	堆積	断面形	長軸 (m)		短軸 (m)		深さ (m)	主軸方位	切り合い		出土遺物
	南北	東西					上端	下端	上端	下端			新	旧	
SK 1	DN	12	Ⅲ上	-	a	不明	1.24	1.14	0.13	0.12	0.05	-			
SK 2	DN	12	Ⅲ上	円形	b3	台形	0.68	0.50	0.46	0.38	0.26	-			P2
SK 3	DK	14	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.74	0.62	0.59	0.45	0.12	-			P9
SK 4	DO	14	Ⅲ上	不定形	a	不明	0.81	0.76	0.10	0.05	0.10	-			K1
SK 5	DO	14	Ⅲ上	不定形	a	不明	1.75	1.62	0.17	0.14	0.10	-			
SK 6	DN	14	Ⅲ上	円形	a	不定形	0.72	0.41	0.58	0.32	0.15	-			
SK 7	DN	16	Ⅲ上	方形	a	半円形	1.28	1.18	0.41	0.33	0.04	N 4° W			P6 K1 H3
SK 8	DN	16°17'	Ⅲ上	方形	a	半円形	2.18	2.05	0.46	0.40	0.04	N 1° W			P6 K3 T1 H1
SK 9	DO	16°17'	Ⅲ上	方形	a	半円形	0.47	0.42	0.36	0.38	0.06	N 1° W			P1 H7 K2
SK 10	DM	15	Ⅲ上	円形	a	台形	0.38	0.26	0.23	0.14	0.09	-			SM 1 P1 Y2

表101 SK 8 出土土器觀察表

出 土 遺 構 番 号	種 別	器種	出土位置			口徑/底径 /基高/最大径 (cm)	口縁部 堆存率 (0/12) ・底部 個体数	底土 (単位: m)	積成	色調 (内面) (外面) (断面)	器面性質 内面/外面	分類 ・測定	文様・その他 (単位: cm)	測 定 番 号	
			出土区・ グリット	遺構 番号	層位										
870	吉廟戸	縦輪小皿		SK8	1	-/-/(1.65)/ -	1.0+--	盤	-	良 好 2.57m/2 2.57m/2 2.57m/2	凹輪ナダ／凹 輪ナダ	吉廟戸 縦輪小皿 口縁部内外面 直輪	斜め及び色 調：赤輪 縦輪小皿 口縁部内外面 直輪	242	71

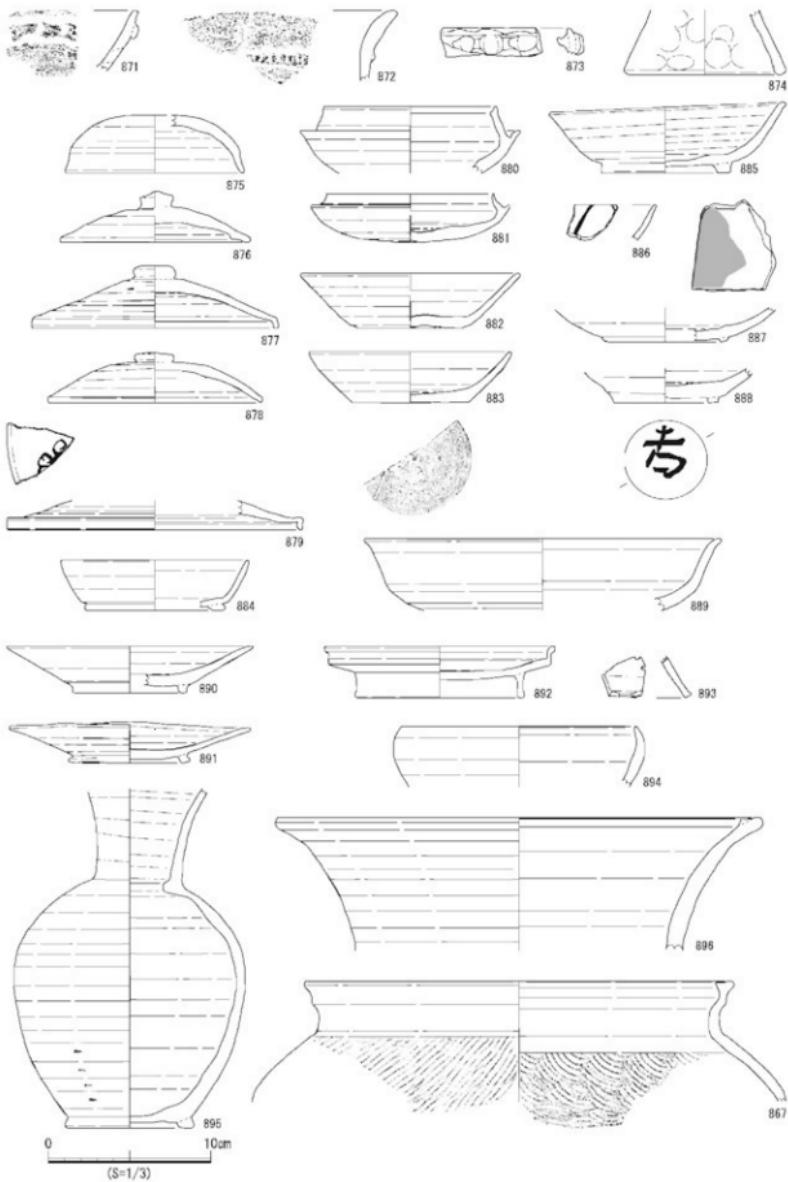
第5節 遺物包含層出土遺物

本項では、遺物包含層であるⅡ層及びⅢ層、試掘坑等から出土した遺物について一括して掲載する（第243～245図）。

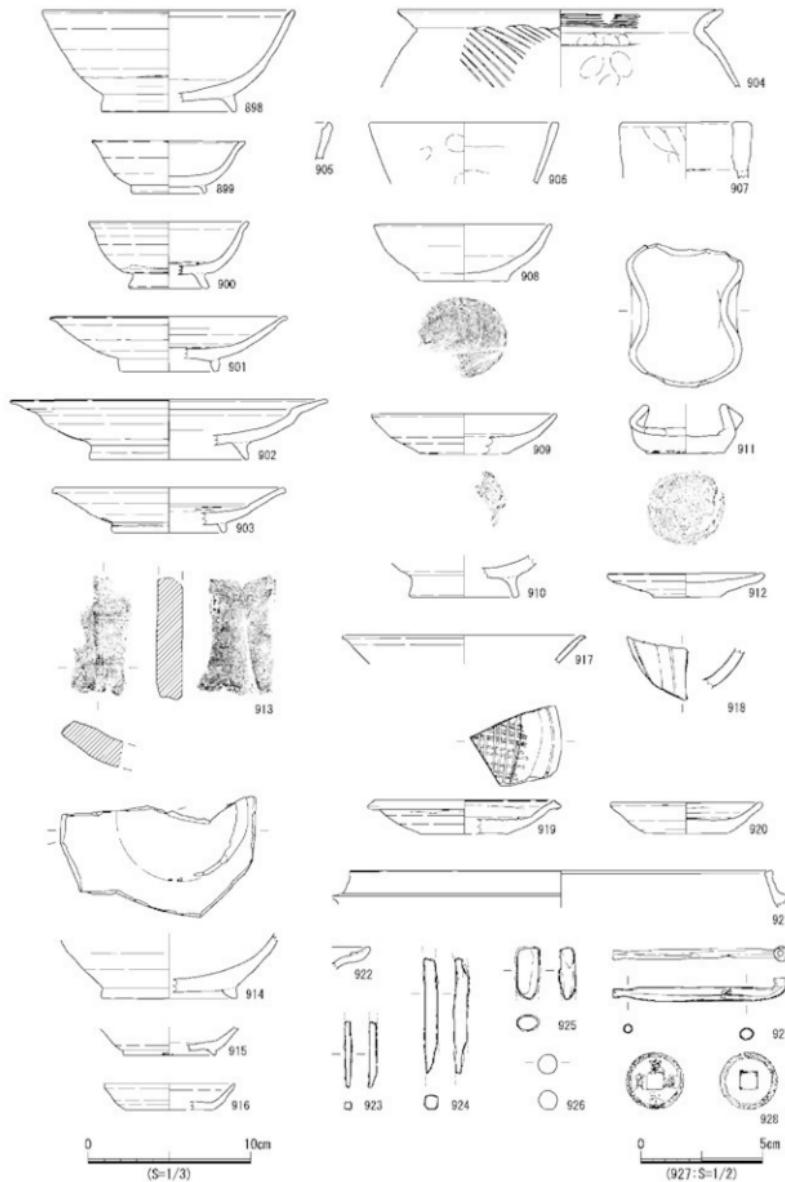
871～873は縄文土器である。破片であるため詳細は不明であるが、五貫森式から馬見塚式に比定される土器と思われる。871は第II群A2i類とした。口縁端部が面取りされ、端部からやや下に突帯が貼り付けられる。突帯の上部と側面がナデ調整されるが下部は未調整である。突帯にはヘラ状工具によるD字刻みが施される。872はA4類とした。外反する口縁部の屈曲部外面に低い突帯が貼り付けられる。突帯にはヘラ状工具による縱位の連続刻みが施される。873は浅鉢と思われる。異系統土器（第II群D類）と考えられ、明赤褐色で緻密な胎土をもつ。外面には眼鏡状付帯文が貼り付けられ、内面は受口状に拡幅されている。

874は土師器の台付甕の脚台である。内外面は指オサエで成形し、端部を内面に拡幅する。

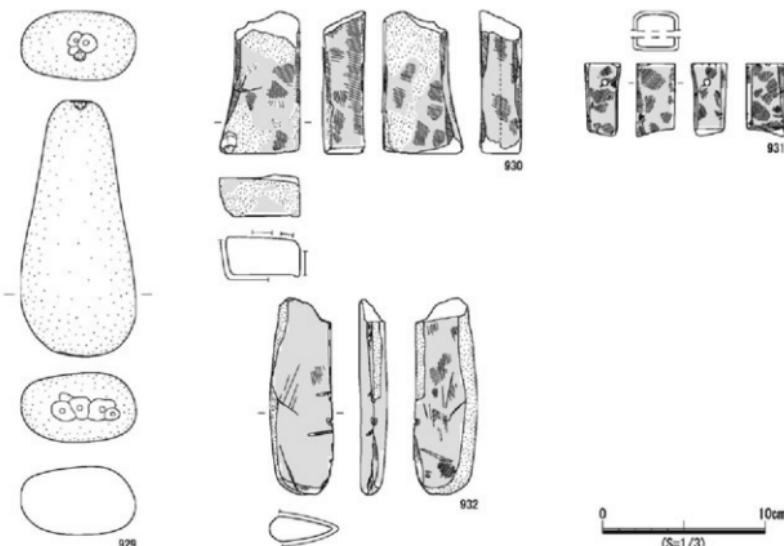
875～897は須恵器である。大半は7世紀～9世紀にかけての美濃須衛窯産と思われるが、中には880のように5世紀代まで時期が遡るものも含まれる。875は坏蓋A類で、焼成不良で胎土が灰白色である。口縁部と体部に明確な境はない、頂部に不定方向のナデが施され、ケズリ調整はみられない。体部外面が摩耗している。876は坏蓋B類である。頂部に先端が尖り気味の宝珠摘みが付され、内面の反りは口縁部より下に突出しない。877～879は坏蓋C類である。877は頂部に回転ケズリ調整が施されるが、その上から再度回転ナデを行っている。878は径が小さく、口縁端部のかえりが短い。879は外面に花弁を描いたような墨書きがみられる。880・881は坏身A類である。880は口縁部がほとんど外反せず、直線的に内傾する。口縁端部に明瞭な段がつけられる。受部は斜め上に向かって直線的に開く。体部外面は回転ヘラケズリ調整が施される。881は、口縁部がやや外反しながら上方へ立ち上がる。器高が低く、身が浅い。882・883は坏身B2類である。ともに体部から口縁部が直線的に開く。882は底部外面の回転ヘラ切り痕が未調整であるが、883は板ナデによって平滑に仕上げられ、ヘラ記号がみられる。884は坏身C類である。やや丸みのある潰れた高台が付される。885～888は碗である。885は底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部のみ僅かに外反する。底部外面は回転ヘラケズリ痕がナデ消され、体部下半は回転ヘラケズリで調整される。底部内面は摩耗している。886は口縁部破片で坏身の可能性もある。内面に蓮弁文のような墨書きが描かれる。887は内面が摩耗し、墨痕が認められることから転用硯とした。888は底部外面に「吉」の文字がみられる。889は金属器写しの碗と思われる。体部から口縁部に掛けて強く内湾し、口縁端部は外反する。体部外面下半には丁寧な回転ヘラケズリが施される。890・891は須恵器の皿である。ともに底部から口縁部にかけて直線的に開く。891は底部外面に回転ヘラケズリ調整が施され、底部内面は摩耗している。892・893は盤である。892は口縁部が玉縁状になる、遺構出土資料には見られない形状をとる。また底部外面が静止ヘラケズリ調整される点も特異である。893は盤の脚台であるが、3箇所の小円孔による透かしをもつ。稻田山2号窯（各務原市）などに類例がある。894は鉢である。口縁部が内湾している。895は長頸瓶である。体部中程のやや上に最大径をもつ。底部外面は回転ヘ



第243図 遺物包含層出土遺物①



第244図 遺物包含層出土遺物②



第245図 遺物包含層出土遺物③

ラ切りがナデ消され、体部下半は回転ヘラケズリによって調整される。高台は底部外面の端部に付される。896・897は甕である。896は頸部から体部にかけてラッパ状に開く。口縁部内面が肥厚され、受口状になる。897は口縁の立ち上がりが短く、中程から上方へ折れて二重口縁状になる。口縁端部内面が896と同様に肥厚される。体部外面に平行タタキ目、内面に青海波模様の當て具痕が残る。897は全体的な形状から、体部に把手がつく器形になる可能性がある。

898～903は灰釉陶器である。遺構から出土した灰釉陶器と同様に、K-90号窯～0-53号窯式に比定される。898・899は碗である。898は底部外面はヘラケズリ調整され、その外縁に高台が付される。体部は内湾しながら開き、口縁部が僅かに外反する。口縁端部には煤が付着し、底部内面は摩耗している。灰釉は漬け掛けで施される。899は小碗で非常に薄手で丁寧なつくりであるが、胎土に砂粒が多く含まれる。体部は内湾しながら開き、口縁部が外反する。内面に自然釉が付着するが、灰釉は発色が悪いためか確認できない。900は深碗である。899と同様に法量が小さいが、高台が高く器壁が厚い。灰釉は漬け掛けで施される。901は皿である。焼成不良により胎土が灰白色で、軟質である。体部に丸みがあり、口縁部が外反する。外面は不明瞭であるが、口縁部と底部の内面に刷毛塗りと思われる灰釉が明瞭にみられる。902・903は段皿である。902はやや厚手で高い高台が付され、内面の段の位置から口縁部が開く。903は薄手で底部から口縁部にかけて直線的に開く。902は内面のみ、903は内外面に漬け掛けで灰釉を施す。ともに底面に重ね焼き痕が残る。

904～907は、V・VI期に属すると考えられる土師器である。904は甕B類である。全体の器壁

が薄く、口縁部のみ折り返しによって肥厚している。体部外面と口縁部に粗いハケ調整が施され、内面には指頭痕が残る。905・906は焼塙土器の可能性がある口縁部破片である。薄手で、指オサエによって成形される。907は器種不明の口縁部である。口縁部が肥厚し、口縁端部から内面にかけて横ナデ調整される。外面には指頭痕が残る。

908～912はロクロ土器器である。910を除き、底部外面に回転糸切り痕が認められる。第3節で述べたように、多くがSD16に関連する遺物と考えられる。908は柱状高台皿である。ほぼ同じもの(823)がSD16底面から出土している。909も柱状高台碗としたが、908と比べると器高が低い。911は柱状高台の耳皿である。912のような皿の口縁部を折り曲げて成形している。910は脚高高台皿、912は柱状高台皿である。

913は、平瓦である。表面に成形時の布目痕がわずかに残る。遺跡の西に位置する大隆寺跡との関連が示唆される遺物である。

914～920は中世陶磁器である。山茶碗や古瀬戸系施釉陶器、貿易陶磁器があり、いずれもVII期に属する。914は尾張型山茶碗で、底部内面が著しく摩耗している。見込み部分に重ね焼きによって釉着した別個体の高台が一部付着している。915は東濃型山茶碗の碗、916が皿である。917は白磁の碗である。体部は直線的に開き、口縁端部のみ外反する。内外面に白磁釉が施される。918は龍泉窯系青磁の碗である。体部下半の破片であり、外面に鎌運弁文が施される。919は古瀬戸系施釉陶器の鉢皿である。見込み部分に格子状の御目が施される。口縁部の内外面には灰釉が施され、底部外面に回転糸切り痕が残る。920は古瀬戸系施釉陶器の縁釉小皿である。口縁部内外面に鉄釉が施され、底部外面に回転糸切り痕が残る。

921・922はVII期に属すると考えられる土師器であり、921が羽釜、922が伊勢型鍋である。

923～928は金属製品である。923・924は角釘である。いずれも基部が折損している。925は器種不明の鉄製品である。断面形状が楕円形に近い。926は鉛玉である。火縄銃の弾と考えられる。927は銅製の煙管である。雁首と吸い口、羅字が一体となっている。銅板を丸めて製作したと見られ、吸い口から羅字にかけて合わせ目が残る。928は銅錢の寛永通寶である。所謂「新寛永」であり、初鋳年は1668年である。

929～932は石器・石製品である。929は叩石である。扁平で細長い川原石の両端に敲打痕が残る。それ以外の使用痕は見られない。六里遺跡から出土した磨石・叩石類に形態が類似するものもあることから、縄文時代晩期に属する可能性がある。930～932は砥石である。930は残存する面すべてに砥面がみられるが、原石の凹凸によって、一部表面に自然面が残る。砥面の状況から手持ち砥石と考えられる。931も角柱状の砥石であるが、携帯用のためか穿孔されている。折損面を除く全面に赤い付着物があり、赤錆の可能性がある。932は、他の2つと同様折損しているが、2つの砥面によって断面形状が三角形になるまで使い込まれている。手持ち砥石と考えられる。

表 102 遺物包含層出土土器観察表①

名 前 記 号	種別	層級	出土位置		口径/底径 /高さ/最大径 (cm)	口盤部 底面 ・底部 斜面 側面 底面	胎土 (単位: mm)	焼成 度	色調 (内面) 好	器面模様 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	番 記 号
			出土深 度	層位									
871	縄文土器	深鉢	EM20～ED4	I～II	-/-/(3.7)/-	1.0...	黒(～φ2の小石多く含む)	良好	10SY5/2 10SY5/2 10SY6/1	/無模様	第Ⅱ群 A21	周Ⅲ安善(編1.0、ヘラツミD字)	243 73
872	縄文土器	安行窓か	DN18	IIb	-/-/(4.3)/-	1.0...	黒(～φ2の砂粒を多く含む)	良好	7.SY5/4 7.SY5/4 7.SY5/3	/ナデ/ナツ	第Ⅱ群 A4	周Ⅲ安善(編0.9、ヘラツミ)	243 73
873	縄文土器	浅鉢	DN19	-	-/-/(1.7)/-	1.0...	黒(～φ2の砂粒を含む)	良好	2.SY5/6 2.SY5/6 2.SY5/6	/ナデ/ナツ	第Ⅱ群 D	243 73	
874	土器類	台付櫛	EM20～ED4	I～II	-/(10.0)/(4.0)/-	-...	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.SY5/2 2.SY5/2 2.SY5/2	/ナツ・指オサニ/ナツ・指オサニ	243 73		
875	恵心器	折腹A	EN4	III	(11.0)/-/-3.6/ /-	2.8...	黒 -	不良	10SY8/1 10SY8/1 10SY8/1	/無模様/回転ナ ジ・小近方方向のナ ジ	70代	濃Ⅳ深底底、外面草 飼	243 74
876	恵心器	折腹B	EN3	III	(11.2)/-/-3.2/ /-	1.5...	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	8/S 2.SY7/2 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	近ⅣⅤ併行 期	外面自然地物付	243 73
877	恵心器	折腹C	EM5～E97	I～II	15.0/-/4.8/ -...	5.4...	やや黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	8/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	近Ⅳ～V	回転・ナツ後に再 回転ナツを施して いる可能性あり	243 73
878	恵心器	折腹C	EN4	II～III	(13.0)/-/-3.1/ /-	5.6...	黒(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	8/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	先濃須南 V-1	243 73	
879	恵心器	折腹C	EO5	III	(18.0)/-/- (1.0)/-	1.0...	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ	先濃須南 IV-3	外面上墨書 鏡文不明	243 66
880	恵心器	折身A	EN4	III	(10.3)/-/- (4.1)/(12.5)	1.0...	黒(～φ2の砂粒を含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	50代	243 74	
881	恵心器	折身A	EN3	III	(10.2)/(1.9) /3.0/(12.2)	1.0...	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	近ⅣⅤ併行 期	243 74	
882	恵心器	折身B2	EM4	IIb	(13.2)/(6.4) /3.4/-	3.2-1	黒(～φ2の砂粒を含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	先濃須南 V-1	243 74	
883	恵心器	折身B2	EN4	III	(12.4)/(7.2) /3.2/-	5.0-0	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	先濃須南 V-1	底部ヘラ付	243 73
884	恵心器	折身C	TR8	-	(11.4)/(8.4) /3.1/-	2.5-0	黒(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・貼り付け底自	先濃須南 V-1	243 74	
885	恵心器	瓶	EN5～ED4	IIb I～II III	14.2/6.0/4.3/ /-	6.7-1	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ リ・回転ヘラツミ リ・ナツ・貼り付	先濃須南 V-1	内底面擦耗	243 73
886	恵心器	碗	DN17	III	-/-/(2.2)/-	1.0...	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	7.6Y7/1 7.6Y7/1	/無模様	先濃須南 V-1	墨書き文不明	243 66
887	恵心器	瓶 (利用用)	DN18	II	-/(7.6) (2.1)/-	-0	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・貼り付け底自	先葉純・瓶底	243 66	
888	恵心器	瓶	DN15	III	-/6.4/(2.1) /-	-1	黒(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	7.6Y7/1 7.6Y7/1 7.6Y7/1	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ リ・貼り付け底自	先濃須南 V-1	墨書き(古)	243 66
889	恵心器	瓶 (金鏡若 等)	DN17 DN16	III	(22.0)/-/ (4.4)/-	1.0...	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	9/S 2.SY7/2 2.SY7/2	/無模様/回転ナ ジ・回転ヘラツミ	先濃須南 V-1	243 74	
890	恵心器	瓶	EN1	III	(15.0)/(7.0) /2.9/-	4.6-0	やや程 -	良好	2.6Y7/1 2.6Y7/1 2.6Y7/1	/無模様/ナツ/ナ ツ・回転ナツ・貼 り付け底自	先濃須南 V-1	243 73	
891	恵心器	瓶	EN1 DN20	III	14.7/7.4/2.5/ /-	12.0-1	黒 -	良好	3/S 3/S -	/無模様/ナツ/ナ ツ・回転ナツ・貼 り付け底自	先濃須南 V-1	243 73	
892	恵心器	瓶	ED6	III	(14.0)/(10.0) /3.2/-	1.0-0	黒(～φ2の砂粒をわずかに含む)	良好	2.6Y8/1 2.6Y8/1 2.6Y8/1	/無模様/ナツ/ナ ツ・回転ナツ・貼 り付け底自	先濃須南 V-1	243 74	
893	恵心器	瓶 (脚部)	DN16	III	-/-/(2.4)/-	-0	黒(～φ1の砂粒をわずかに含む)	良好	2.6Y7/1 2.6Y7/1 2.6Y7/1	/無模様/回転ナ ジ	先濃須南 IV-3～V-1	川孔透かし	243 74
894	恵心器	瓶	DN5～DN6 ランテ ンタ	-	(14.4)/-/(3.7)/-	1.0-0	黒 -	良好	2.6Y7/1 2.6Y7/1 2.6Y7/1	/無模様/回転ナ ジ	先濃須南 IV-3～V-1	243 74	

表103 遺物包含層出土土器観察表②

遺物番号	測定	標識	出土位置		口径/底径 /高さ(最大径) (mm)	口絞れ 底形 (U12) ・直鉢 側鉢	地土 (単位: m)	積成	色調 (内面) (外面) (前面)	器面調査 内面/外面	分類 ・時期	文様・その他 (単位: cm)	傳 出 書 考 号	
			出土区・ グリッド	層位										
995	東京都	長野原	EN3 EN20a~EN4	III I ~ III II b	- / (7. 8) / (20. 6) / -	- - 1	灰 (~ 6.2) の砂鉄を わずかに含む)	不 良	10.07/1 2. 577/1 3. 578/1	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台	美濃倒置か RC代	慶光寺焼成	243	73
996	東京都	東	ENS~E96 サン・レ ンチ	EN3	(29. 6) / - / (8. 2) / -	1. 7 -	灰 (~ 6.1) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	NFT/ NFT/ NFT	回転ナブリ/回転ナ ブリ	美濃倒置 V期		243	74
997	東京都	東	DN6	III	(26. 0) / - / (7. 4) / -	1. 0 -	灰 (~ 6.1) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	2. 577/1	回転ナブリ、当て溝 底、(回転ナブリ) タ タキ	美濃倒置 V 1		243	74
998	灰船南 島	灰	E05~E07	I ~ II	(15. 2) / (10. 0) / 5. 3 / -	2. 5 - 0	灰 (~ 6.0) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	2. 577/1 2. 577/1 2. 577/1	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台	0-53	輪製及び色刷: 灰船 (7. 577/1) 内底正丸乳、口部部 スヌ付器	244	74
999	灰船南 島	灰	EN3	II b	9. 3 / 4. 4 / 3. 2	8. 6 - 1	灰 (~ 6.3) の砂鉄を 含む)	好 好 好	2. 577/1 2. 577/1 2. 577/1	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台		内底面自然釉付器	244	73
900	灰船南 島	深底	DM7 E95~E97	I ~ III I ~ II	(9. 6) / (4. 9) / 4. 1 / -	1. 0 - 0	灰 (~ 6.1) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	577/1 577/1 577/1	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台	0-53	輪製及び色刷: 灰船 (577/1) 内底正丸乳、口部部 スヌ付器	244	74
901	灰船南 島	墨	DN11 DN12	III	(14. 4) / (5. 4) / 3. 4 / -	1. 0 - 0	灰 (~ 6.1) の砂鉄を (少々含む)	好 好 好	578/1 578/1 578/1	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台	I-90-E- 053	輪製及び色刷: 灰船 (577/1) 内底正丸乳	244	76
902	灰船南 島	段丘	ENS ENS	III II b	(19. 2) / (9. 4) / 3. 8 / -	1. 3 - 0	灰 (~ 6.1) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	NFT/ NFT/ NFT	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台	I-90	輪製及び色刷: 灰船 (2. 577/2) 内底正丸乳、内底 正丸ね丸底	244	74
903	灰船南 島	段丘	D011	I ~ III	(14. 1) / (6. 7) / 2. 6 / -	1. 8 - 0	灰 (~ 6.2) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	NFT/ NFT/ NFT	回転ナブリ/回転ナ ブリ/回転ヘラズミ ド、貼り付け高台	0-53	輪製及び色刷: 灰船 (7. 577/1) 内底正丸乳、内底 正丸ね丸底	244	74
904	上野原	腰	E06	III	(20. 0) / / (4. 8) / -	1. 2 +	灰 (~ 6.2) の砂鉄を 多く含む)	好 好 好	10.07/2 10.07/2 573/1	ハケ・程オサニ/ ナヂ・ハケ			244	73
905	上野原	製塼上場 か	TE9	-	/ / (2. 3) / -	1. 0 - +	灰 (~ 6.1) の砂鉄を 少し含む)	好 好 好	NFT/ 10.07/3 10.07/6	横ナブリ/横ナ ブリ・程オサニ		内底ス付器	244	73
906	上野原	製塼上場 か	ENS	III	(11. 0) / - / (3. 8) / -	1. 0 - -	灰	-	7. 578/6 7. 578/4 7. 578/1	ナヂ・程オサニ/ ナヂ・程オサニ			244	73
907	上野原	不明	ENS	III	(7. 0) / - / (3. 5) / -	2. 0 - 0	灰 (~ 6.2) の砂鉄を 含む)	好 好 好	10.07/2 10.07/2 2. 576/2	横ナブリ/ナ ブリ・横オサニ			244	73
908	ロクロ 上野原	編	E05~E07	I ~ II	(10. 7) / 5. 6 / 3. 5 / -	1. 2 + 1	灰 (~ 6.1) の砂鉄を わずかに含む)	好 好 好	10.05/4 7. 578/3 7. 578/3	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底			244	73
909	ロクロ 上野原	編	EN7	III	(11. 0) / (5. 2. 5) / -	2. 2 - 0	灰	-	10.07/3 573/6 10.07/4	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底			244	73
910	ロクロ 上野原	断面高台 豆か	E07	II b	- / (6. 7) / (2. 6) / -	- - 0	灰	-	577/8 577/8 7. 578/4	回転ナブリ/回転ナ ブリ・貼り付け高台			244	73
911	ロクロ 上野原	瓦皿	E07	I ~ III	(9. 9) / 4. 7 / 3. 1 / -	9. 3 - 1	灰	-	10.05/6 2. 577/6 7. 578/4	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底			244	73
912	ロクロ 上野原	瓦	ENS~E07	I ~ II	(9. 4) / 4. 0 / 1. 5 / -	1. 0 - 1	灰	-	2. 577/6 7. 578/3 7. 578/3	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底			244	73
913	山形城	編	DN16 DN16	III	- / (7. 0) / (4. 0) / -	- - 0	灰 (~ 6.1) の砂鉄を 含む)	好 好 好	2. 577/1 2. 577/1 2. 577/1	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底 盤、モミガラ底、 貼り付け高台	足底深 5底式	六本足正丸底の高台 が輪製(並ね跡き 底)、内底正丸底	244	75
914	山形城	編	DN17	II	- / (5. 6) / (1. 7) / -	- - 0	灰	-	2. 578/2 2. 577/2 2. 578/2	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底 盤、モミガラ底、 貼り付け高台	足底深 7~8底式		244	75
915	山形城	編	DN17	II	- / (5. 6) / (1. 7) / -	- - 0	灰	-	2. 578/2 2. 577/2 2. 578/2	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底 盤、モミガラ底、 貼り付け高台	足底深		244	75
916	山形城	灰	DN11	III	(8. 0) / (5. 0) / 1. 6 / -	2. 0 - 0	灰	-	NFT/ NFT/ NFT	回転ナブリ/回転ナ ブリ・回転糸切り底 盤	内底付	口唇部内外面自然釉 付器	244	76
917	賀呂 城跡	白磁瓶	DN12	III	(16. 0) / - / (1. 6) / -	1. 0 - -	灰	-	-	回転ナブリ/回転ナ ブリ	大字付分類 白磁瓶V- 4a	輪製及び色刷: 白磁 (7. 577/1)	244	75
918	賀呂 城跡	青磁瓶	DN12	III	- / - / (2. 5) / -	- - -	灰	-	-	-	大字付分類 青磁瓶V- 3またはIII	輪製及び色刷: 青磁 (2. 566/1)	244	75

表104 遺物包含層出土土器観察表③

通 報 番 号	種別	器種	出土位置		口径/底径 /高さ(最大径) (m)	口径部 残存本 (X/12) ・底部 個体数	土土 (単位: m)	構成	色調 (内面) (外面) (削面)	器面調整 内面/外面	分類 ・ 時期	文様・その他 (単位: cm)	通 報 番 号	
			出土区 出土地・ グリット	層位										
919	六瓢	鉢	DN13	Ⅲ	(1.0) / (5.4) / 2.1 / -	1.2 ± 0	表 (~ 6.1) の砂粒を わざかに含む	良	2.5TR/1 2.5TR/1 SYB/1	上円弧ナード/凹輪ナード・ 凹輪角切り邊	古窯/・ 後Ⅳ期	釉面及び色調: 沈暗 (7.3TS/3)	246	75
920	古窯	縦輪小皿	DN16 DN15 DO15	Ⅲ - Ⅳ Ⅲ	(9.2) / 0.0 / 2.0 /-	1.8 ± 1	表 (~ 6.0) の砂粒を わざかに含む	良	10YR8/2 10YR8/2 10YR8/2	上圓弧ナード/凹輪ナード・ 凹輪角切り邊	古窯/・ 後Ⅳ期古	釉面及び色調: 沈暗 (7.3TS/2) 口縁部内外削面無	246	75
921	土器	呂基	DN13	Ⅲ	(26.0) / - (2.3) / -	1.0 ±	表 (~ 6.1) の砂粒を 含む	良	10YR8/1 10YR8/1 2.5TR/1	横ナード/ナード・横 ナード/ナード			246	73
922	土器	伊勢型鉢	DX9	Ⅲ	- / - / (1.4) / -	1.0 ±	表 (~ 6.2) の砂粒を 含む	良	10YR8/2 10YR8/3 SYL/1	ナード/ナード			246	73

表105 遺物包含層出土土製品一覧表

通報 番号	取上 番号	器種	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ (cm)		重さ (g)	観察・その他	通報 番号	通報 番号	
			出土区 出土地・ グリット	層位		長軸	短軸					
913	747	平瓦	DN16	Ⅲ	土	(4.2)	(4.4)	(7.6)	73.5	凹面帯目彌、凸面斜彌	246	74
-	168	輪の口	DO19	I	土	(2.0)	(1.6)	(1.3)	3.4		-	-

表106 遺物包含層出土石器・石製品一覧表

通報 番号	取上 番号	種別	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ (cm)		重さ (g)	観察・その他	通報 番号	通報 番号	
			出土区 出土地・ グリット	層位		長軸	短軸					
930	21	研石	DN20~DN24	I ~ II	砂岩	8.7	4.9	2.6	183.2		246	76
931	2737	研石	DN15	I	泥炭	4.4	2.3	2.1	31.8		246	76
932	1063	研石	EN3	II b	泥炭	11.9	3.8	1.7	106.9		246	75
-	267	MP	DN11	II	チャート	1.3	1.3	0.4	0.6		-	-
-	323	MP	DN15	II	チャート	2.4	1.9	0.5	2.5		-	-
-	42	石皿・合石類	EN7	I ~ III	砂岩	7.5	5.0	4.1	238.2		-	-
929	697	磨石・研石類	DO17	III	安山岩	16.8	7.0	4.3	657.7	笠置山系分類3	246	76

表107 遺物包含層出土金属製品一覧表

通報 番号	取上 番号	種別	出土位置		素材	長軸/短軸/幅・厚さ (cm)		重さ (g)	観察・その他	通報 番号	通報 番号	
			出土区 出土地・ グリット	層位		長軸	短軸					
923	321	骨針	DN13	II	鉄	4.1	0.5	0.5	3.0	皮筋欠損	246	75
924	242	骨針	DN13	II	鉄	(7.1)	0.8	0.9	20.2	皮筋欠損	244	76
-	33	針	DN13~DN15	I ~ II	鉄	7.3	0.9	0.6	6.6	丸頭	-	-
-	831-8	針	EN2	II	鉄	(5.5)	1.1	0.9	5.5	丸頭欠損	-	-
925	998	不明装飾品	EN1	Ⅲ (V上部)	鉄	3.2	1.6	0.9	7.8		244	76
926	770	釦	DN20	-	鉄	1.1	1.1	1.1	9.0		244	76
927	382	所持	DN15	II	銅	10.9	8.0	7.6	12.8		246	75
928	333	鍔質	DN13	II	銅	2.4	2.4	0.1	2.9	「寛永通宝」、新寛永	244	76
-	233	鍔質	DO11	II	銅か	2.3	2.3	0.1	3.8	浮代か	-	-

第5章 自然科学分析

第1節 分析の概要と成果

1 花粉分析及びプラント・オパール分析

分析の経緯 六里遺跡・稻荷遺跡では、試掘・確認調査において水田耕作土と推定される堆積（Ⅲ層）を確認した。これを受け、水田跡であることを検証し、さらに他の作物の有無、種類及び周辺の自然環境を把握することを目的に、花粉分析及びプラント・オパール分析の実施を計画した。その後の調査の進展により、水田跡だけでなく畑跡の可能性がある畝構状遺構群や古墳時代から古代の溝を検出し、これらの遺構が花粉化石やプラント・オパールを含む可能性がある粘質シルトや粘土で埋没していることから、古代以前の古環境を検証することも分析の目的に含めた。

分析結果と考察 今回の分析試料で、最も古い土壌は六里遺跡のIV層・V層及び稻荷遺跡のIV層であるが、花粉化石を検出することができなかった。プラント・オパールはネザサ節型が多量に産出しているが、このことから当該地は、開けた日の当たる場所であったことが推定され、IV・V層の堆積段階が乾燥状態にあったとする花粉分析の結果とも矛盾しない。以降の時代においても、ネザサ属のプラント・オパールが卓越する状況から、縄文時代晚期以降の地形形成段階において開けた地形となり、大きく地形が変わらなかったと推定される。遺構では、古墳時代前期に設置されたと考えられるSD35の埋土で分析を行ったが、後の遺構やⅢ層と大きな違いを見出すことはできなかった。古墳時代中期以前のSD42も同様である。7世紀代の遺構と考えられるSD54やSD60では栽培植物と考えられるベニバナ属の花粉が僅かに検出されており、新たに栽培が始まった可能性がある。六里遺跡・稻荷遺跡の畝構状遺構群については、イネ科のプラント・オパールを産出したものと産出しないもの認められる。いずれの遺構もⅢ層の耕作によって耕土が失われているため、検出されたプラント・オパールもその影響を受けていると思われる。条里地割施行前後の遺構と考えられる六里遺跡のSD24・SN27-D13、稻荷遺跡のSN1が捕つてコウヤマキ属が卓越する現象が見られ、当時の植生を反映している可能性がある。Ⅲ層の花粉分析の結果から、丘陵地にコナラ属アカガシ亜属やシイノキ属・マテバシイ属などの照葉樹林が発達し、その上部の山地にはコナラ属コナラ亜属やブナ属などの落葉広葉樹林が分布し、スギ林も存在していたとされる植生が推定されているが、前述のように古墳時代前期以降大きな植生の変化はないと思われる。なお、Ⅲ層には多量のイネ科のプラント・オパールに加え、ソバ属の花粉が検出されており、中世段階から付近でソバの栽培が始まっている可能性がある。また、一時期古い水田層と推定される六里遺跡のⅢb層でもイネ科のプラント・オパールが検出されており、中世以前にも水田耕作が行われていたと考えられる。六里遺跡・稻荷遺跡ともⅡ層の土壌ではスギ属の花粉化石が減少し、マツ属が増える傾向にある。中世以降、近世から現代にかけての周辺の植生の変化を反映していると推測される。

2 樹種同定及び放射性年代測定

分析の経緯 樹種同定は、六里遺跡第3調査面のSK112出土炭化材を対象に実施した。検出状況（第

3章第5節)から、当時の人々が意図的に集めた材の可能性があり、当時の用材に対する試料を得ると共に、遺跡の古環境の復元や縄文時代晚期の年代の推定に対する一助とするために実施した。また、SI 4出土炭化物の年代測定については、SI 4が六里遺跡発掘区内の集落跡における最終段階の遺構と考えられたが、これを示す明確な遺物が出土しなかったため、時期を考えるための手段として、年代測定を実施した。

分析結果と考察 六里遺跡SK112出土の炭化材は、いずれもクリ材であった。分析においては燃料材として優秀である点に触れているが、縄文時代においてクリは製品や建物の構造材として広く用いらることや、板材の可能性があることを考えると、手元にあった木材を何らかの目的で燃やした可能性も考えられる。また、六里遺跡で活動した当時の人々が選択的にクリ材を入手できる環境にいたことを示していると思われる。年代測定では、第3章第5節でも述べたように、周囲で出土する縄文土器の推定年代とほぼ一致しており、重要なデータを得ることができたと考える。一方SI 4の炭化材については、概ね7世紀代の測定結果が得られた。これは、遺構の推定年代とは矛盾しないが、年代を絞り込む結果を得ることはできなかった。

3 鉄滓の成分分析

分析の経緯 今回の調査では鍛冶関連遺構を確認することはできなかったが、六里遺跡のSD26で出土した鉄滓は、7世紀代の可能性がある。遺跡の西方には赤鉄鉱を産出する金生山があり、当該地域を支配する上で金生山の鉄鉱脈が重要であったとの見解がある(八賀2005)が、現状ではこれに関する遺構は確認されていない。そのため、鍛冶関連遺物である鉄滓を分析し、鉄に関する資料を蓄積すると共に、遺跡の性格を考える一助とすることを分析の目的とした。

分析結果と考察 分析の結果、分析した3点とも鍛錬鍛冶の鉄滓の可能性が高いとされた。六里遺跡の東に位置する上保本郷遺跡では、集落において中世の鍛錬鍛冶が営まれていたことが判明しており(岐阜県文化財保護センター2015)、当該地においても付近に同様な遺構が存在した可能性がある。ただし、県内において、古代以前の鍛冶関連遺構は弥勒寺官衙遺跡群(関市教育委員会2012等)や野内遺跡(財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007)など、ごく限られた遺跡でのみ確認されており、SD26出土の鉄滓が7世紀以前のものとすれば、重要な資料の一つと考えられる。なお、前掲書において八賀氏は、赤坂赤鉄鉱にヒ素が多く含まれることについて述べられており、例として、当時未公表であった東町田遺跡出土の6世紀後半の椀形滓を挙げている。一方東町田遺跡の発掘調査報告書(大垣市教育委員会2004)では、赤鉄鉱を素材とする可能性が高いとしながら、これまで示されている赤坂産の赤鉄鉱とは特徴が異なるとされており、真相の解明には至っていない。今回の分析では、SD26出土品のみ僅かにヒ素の酸化物が含まれることを確認したが、このような自然科学分析の蓄積が今後重要になってくると考えられる。

第2節 花粉分析及びプラント・オパール分析

1 花粉分析

六里遺跡・稻荷遺跡では、古墳時代や平安時代の溝の他、中世や近世以降の水田跡を検出している。以下では、稻荷遺跡や六里遺跡で採取した試料について行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、分析は森将志（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

対象試料と方法 六里遺跡の分析対象試料（No.1～30）は、水田区画（SN 3・SN 9・SN14・SN17・SN24）、畝溝状遺構群（SN26・SN27）、溝状遺構（SD24、SD30、SD35、SD42、SD54、SD60）から採取した計30試料である。稻荷遺跡の分析試料（No.31～44）は、D011 グリッド、D013 グリッド、D015 グリッドの発掘区界面土層及び畝溝状遺構群（SN 1）、溝状遺構（SD10・SD14）から採取した計14試料である（表108、第246図）。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

試料（湿重量約3～4g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煮する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PL C.1543～1557）を作製し、写真13・14に掲載した。

表108 花粉分析試料一覧表

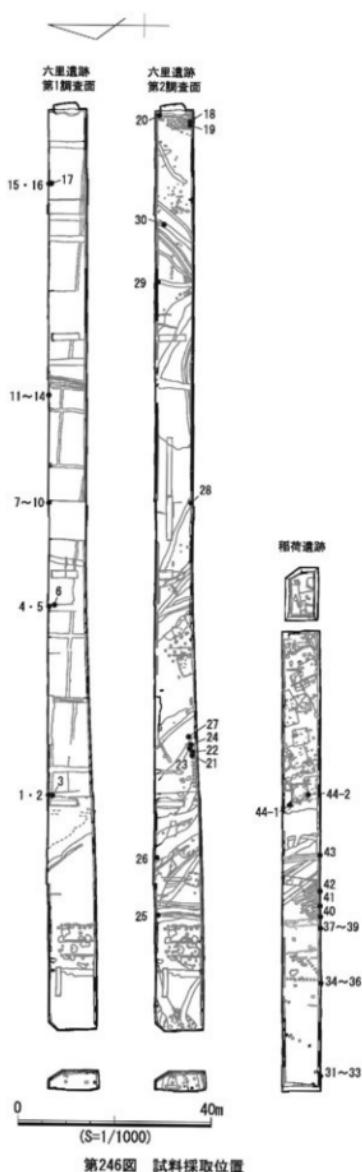
遺跡	種別	採取箇所	層位	土性	試料No.
水田区画		SN3	II層	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト	1
			III層	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	2
			IV層	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	3
			II層	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	4
水田区画		SN9	III層	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	5
			IV層	灰オリーブ色 (5Y4/2) 黏土	6
			II層	ナリーブ黑色 (5Y3/2) シルト	7
			IIIa層	暗オリーブ色 (7.5Y4/3) シルト	8
水田区画		SN14	II層	ナリーブ黑色 (7.5Y3/2) シルト	9
			III層	灰オリーブ色 (5Y4/2) 黏土	10
			IV層	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	11
			III層	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	12
水田区画		SN17	II層	ナリーブ黑色 (5Y3/2) 黏土	13
			III層	ナリーブ黑色 (5Y3/2) 黏土	14
			IV層	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	15
			III層	灰オリーブ色 (7.5Y3/2) シルト	16
六里遺跡		SN24	II層	暗オリーブ色 (5Y4/2) 黏土	17
			III層	灰オリーブ色 (5Y4/2) 黏土	18
			IV層	灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト	19
			III層	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	20
畝溝状遺構群		SN27-D10	II層	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	21
			SN27-D11	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	22
			SN27-D12	ナリーブ黑色 (5Y3/2) シルト	23
			SN27-D13	ナリーブ黑色 (5Y3/2) シルト	24
溝状遺構		SD24	II層	ナリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト	25
			SD30	ナリーブ黑色 (5Y3/2) シルト	26
			SD35	ナリーブ黑色 (7.5Y3/2) 黏土	27
			SD42	暗灰黄色 (2.5Y4/2) 黏土	28
稻荷遺跡		SD54	最下層	暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 黏土	29
			SD59	ナリーブ黑色 (5Y3/2) 黏土	30
			II層	ナリーブ黑色 (5Y3/2) シルト	31
			III層	灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト	32
稻荷遺跡		D013	IV層	灰オリーブ色 (5Y4/2) 黏土	33
			II層	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	34
			III層	灰オリーブ色 (5Y4/3) シルト	35
			II層	黒褐色 (2.5Y3/2) シルト	37
稻荷遺跡		D015	III層	暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト	38
			IV層	ナリーブ黑色 (2.5Y4/3) 黏土	39
			SN1-D7	ナリーブ色 (5Y4/3) シルト	40
			SN1-D9	灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 黏土	41
稻荷遺跡		SN1-D10	SN1-D10	灰オリーブ黑色 (5Y4/2) 黏土	42
			SD10	最下層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 黏土	43
			SD14	最下層 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 黏土	44

分析結果

①六里遺跡（表109・110、第247図）

六里遺跡の30試料から検出した花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉42、草本花粉35、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計80である。分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。なお、樹木花粉200未満の試料については検出の有無のみを分布図に示したが、一部の試料（SN3・SN9のII層）については産出傾向を把握するために分布図に示した分類群がある。また、図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やユキノシタ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れた。

30試料の検鏡を行った結果、10試料（SN3のII層・IVb層、SN9のII層・IVb層、SN17のV層、SN24のII層・V層、SN27）には十分な量の花粉化石が含まれていなかった。十分な量の花粉が得られた試料で産出が目立つ分類群は、マツ属複維管束亞属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、シイノキ属-マテバシイ属などである。マツ属複維管束亞属はSN3とSN9、SN14のII層において産出が目立つ。コウヤマキ属は0.5～41%の産出率を示し、SN27-D23とSD24において産出が多い。スギ属は1～27%の産出率を示し、SN14、SN17では上位層に向かって減少する。コナラ属コナラ亞属とコナラ属アカガシ亞属、シイノキ属-マテバシイ属の産出率は、それぞれ6～43%、1～23%、1～24%である。草本花粉ではイネ科が多く産出しており、8～61%の産出率である。また、アブラナ科の産出はSN3、SN9、SN14が多い。その他では、裁



第246図 試料採取位置

培植物のソバ属とベニバナ属が産出しており、ソバ属はSN3のII層、SN14のII層とIII層、SN17のII層、SN24のII層とIII層、SN26-D4で、ベニバナ属はSD60とS054で産出している。

②稻荷遺跡（表111、第248図）

稻荷遺跡では、14試料から検出した花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉28、草本花粉29、形態分類のシダ植物胞子2の総計59である。分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。なお、樹木花粉200未満の試料については検出の有無のみを分布図に示した。また、図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科やマメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

14試料の検鏡を行った結果、D013グリッドのIV層とD015グリッドのV层、SD10、SD14では十分な量の花粉化石が得られなかった。十分な量の花粉が得られた試料で産出が目立つ分類群は、マツ属複維管束亞属、コウヤマキ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属-マテバシイ属などである。マツ属複維管束亞属は各グリッドのII層において産出が目立つ。特にD015グリッドII層では55%の産出率を示し、突出している。コウヤマキ属は1～37%の産出率を示し、特に乾燥状況群で採取した試料(SN26-D3～5)で産出が多い。スギ属は5～26%の産出率を示し、上位層に向かって減少する。コナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属-マテバシイ属の産出率は、それぞれ7～37%、0.5～19%、4～21%である。草本花粉ではイネ科が最も多く産出しており、25～60%の産出率である。また、アブラナ科がD015グリッドのII層で突出しており、33%の産出率を示す。その他では、栽培植物のソバ属がD011グリッドのII層とD013グリッドのII層、D015グリッドのII層とIII層で産出している。

古植生について 六里遺跡では、縄文時代晩期の遺物包含層であるV層(SN17、SN24下層)は、花粉化石がほとんど含まれていなかった。一般的に花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的環境に堆積すると紫外線や土壤バクテリアなどによって分解され消失してしまう。そのため、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では花粉が残りにくい。V層の堆積当時の試料採取箇所周辺では乾燥状態にあったと推測される。IV層では3試料の分析を行ったが、うち2試料では十分な量の花粉が得られなかった。よって、IV層堆積時においても一部の場所では乾燥状態にあったと考えられる。SN14のIV層では十分な量の花粉化石が得られ、プラント・オパール分析でイネ機動細胞珪酸体も産出しており、草本花粉で水田雜草を含む分類群であるミズアオイ属やキカシグサ属の産出も見られる。しかし、後の確認で、上層との攪拌が認められる箇所の試料を採取したことが判明し、III層の分析結果を反映している可能性が高い。

III層から産出した樹木花粉では、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属や照葉樹のコナラ属アカガシ亜属、温帯性針葉樹のスギ属の産出が目立つ。中部・東海地方の植生は「中部・東海地方の植生史」(守田ほか1998)にまとめられており、それによると標高約500m以下の丘陵帯では下部にシイやカシが優占し、上部にカシの優占する常緑広葉樹林が発達する。標高500～1700mの山地帯ではブナやミズナラを主とする冷温帶性落葉広葉樹林が発達するが、太平洋側の丘陵帯上部から山地帯下部の移行帯ではモミやツガなどの針葉樹が混交し、しばしば優占する。III層から産出する上記の分類群はこうした丘陵帯から山地帯にかけての植生を反映していると考えられる。すなわち、当遺跡周辺の丘

表109 六里遺跡から産出した花粉胞子一覧表①

学名	英名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15
樹木																
<i>Podocarpus</i>	マキ属	-	-	-	-	1	-	3	-	2	1	-	3	1	-	-
<i>Aleurites</i>	ナシ属	-	1	-	2	-	-	2	9	11	1	2	4	-	-	-
<i>Taxus</i>	ブガ属	3	3	-	3	9	-	4	7	3	2	-	4	4	-	-
<i>Pinus</i>	マツ属	17	9	-	22	25	-	196	14	9	7	11	10	10	-	9
<i>Quercus</i>	コウヤク属	2	28	-	-	27	1	1	22	8	7	6	17	6	-	7
<i>Ostrya</i>	コガネ属	8	63	-	1	36	-	26	27	83	56	11	38	42	2	6
<i>Salix</i>	ヤナギ属	-	-	-	-	8	-	2	1	22	16	4	13	43	-	1
<i>Myrica</i>	ヤマモチ属	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Pinus-japonica</i>	サザンカシノ木属	-	1	-	-	1	-	-	-	2	1	2	3	3	-	1
<i>Gymnospermae</i>	リクイムアザミ属	1	7	-	-	8	-	2	12	4	5	11	7	6	1	11
<i>Garrya</i>	ハシバミ属	-	1	-	-	4	-	1	3	5	-	2	1	2	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	-	-	-	4	-	-	-	3	3	16	3	3	-	3
<i>Alnus</i>	ハシバミ属	5	7	1	5	4	1	11	8	4	5	9	5	24	18	-
<i>Fagus</i>	ブナ属	-	6	-	-	12	-	1	12	8	3	20	29	22	23	13
<i>Fraxinus</i>	カシ属	13	69	-	13	26	-	16	66	34	39	89	41	21	1	105
<i>Artemisia</i>	セトノハラガニ属	1	17	-	-	18	-	3	30	21	29	22	23	13	-	4
<i>Ceratonia</i>	タリ属	-	1	-	3	6	-	9	1	4	3	2	3	3	-	-
<i>Ceratopetalum</i>	シバタキ属	7	60	-	7	8	1	12	12	9	10	18	10	8	-	2
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレノキ-ヤケカキ属	-	-	-	5	-	-	2	8	6	1	1	8	-	-	-
<i>Celtis-Aphanes</i>	メハキ-ホコノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ilicium</i>	シキモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Phellodendron</i>	キダマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Daphne</i>	エボク属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Meliosma</i>	アカヌメシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Maackia</i>	マックイア属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ziziphus</i>	シモジマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Calotropis</i>	シロバナバチガイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Acorus</i>	セイヨウバチガイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Anemone</i>	トテキ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	4
<i>Vitis</i>	ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Parthenocissus</i>	フタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Tilia</i>	シナノイヌ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aralia</i>	ウコギ属	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Amelanchier</i>	オオキモチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ormosia</i>	ミズモチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sisymbrium</i>	カキノハ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Simplicia</i>	ハイノハ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Liquetrum</i>	イボトリノハ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Prunus</i>	トキリノハ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	6	-	-
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本																
<i>Typha</i>	ガマ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Allium</i>	セジオモガタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Sagittaria</i>	オモギモガタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Gramineae</i>	イネ科	81	79	-	109	456	1	532	205	324	171	100	372	521	-	375
<i>Ophioglossum</i>	クマノミヅクゲ科	-	2	-	1	5	-	2	1	8	14	1	15	97	-	5
<i>Fraxinella</i>	セシカタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Comelinia</i>	コフクモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Asclepias</i>	イボガモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Monocotyledon</i>	ミズベモイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Hedysarum</i>	タワコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	5	2	-	2	2	-	-	2	-	-	1	2	1	-	1
<i>Coriandrum</i>	ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Scrophulariaceae</i>	アズキナガ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Brassica</i>	アブラナ科	2	-	-	857	5	-	779	2	3	3	1	4	2	-	8
<i>Saxifragaceae</i>	コキアシナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ligustrum</i>	マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Desmodium</i>	アズキナガ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Impatiens</i>	フタリソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Rosaceae</i>	セカクシダ属	-	4	-	3	7	-	3	6	4	1	3	2	1	-	3
<i>Habenaria</i>	アリノウクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-
<i>Ajuga</i>	セリソウ属	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-
<i>Labiatae</i>	シソ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Schizanthus</i>	シソ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Juncus</i>	タカシマヤマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Plantago</i>	オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Polygonum</i>	ヘクソカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Ericaceae</i>	ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Antennaria-Euthamia</i>	ブリオニモイモイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Aristolochia</i>	ヨモギ属	-	1	-	-	2	-	3	3	4	15	2	5	8	-	1
<i>Tulilliflorae</i>	タキシキ属	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	3	2	1	-	-
<i>Liguliflorae</i>	ランボク科	47	12	-	37	13	-	69	7	7	-	7	20	1	-	6
シダ植物																
<i>Selaginella</i>	サンショウモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Asplenium</i>	モウセンゴケ属	23	9	1	48	8	5	8	22	5	9	7	18	6	28	28
<i>Asplenium</i>	三脚モウセンゴケ属	20	3	-	15	3	3	17	16	3	2	6	5	3	14	-
<i>Arthropollen</i>	苔本花粉	94	304	1	82	333	3	204	218	210	206	208	220	206	4	46
<i>Nonvittariale</i>	苔本花粉	605	104	-	1014	648	1	1240	233	368	208	126	421	433	1	199
<i>Sporoz</i>	シダ植物胞子	43	12	1	58	13	8	26	38	5	12	15	19	10	16	37
Total Pollen & Spores	苔本花粉+孢子總数	902	320	2	1124	674	12	1470	481	679	426	349	660	648	21	284
Unknown	不明	3	8	-	-	6	-	6	1	13	4	6	3	10	-	2

表110 六里遺跡から産出した花粉胞子一覧表②

学名	俗名	%16	%17	%18	%19	%20	%21	%22	%23	%24	%25	%26	%27	%28	%29	%30
Podocarpus	マツノ属	-	-	2	1	4	-	-	-	6	1	-	1	4	1	-
Aleurites	モクノ属	-	-	8	1	11	-	-	1	2	4	2	-	8	10	12
Tsuga	ツガ属	4	-	8	2	3	-	-	1	4	31	2	-	6	18	3
Hura oblongata	ラバ高麗酸豆芭蕉	2	-	16	18	12	-	-	1	6	4	23	6	7	10	4
Schizopeltis	コヤマカケ属	13	1	11	14	10	1	1	2	62	95	8	3	16	15	6
Cryptomeria	スギ属	17	3	39	49	33	-	-	1	9	3	40	36	17	37	42
Salix	サリ属	4	-	22	11	16	-	-	2	-	24	16	4	6	13	-
Rubus	ウラジロ属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-
Prunus-Syringa	ミツバチ属	1	-	4	5	11	-	-	-	1	4	3	20	1	-	1
Ostrya-Corylus	ミツバチ属	19	1	13	8	8	-	-	2	7	4	8	1	4	-	-
Corylus	ハバチノ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Betula	ガバチノ属	6	-	2	-	2	-	-	-	1	-	6	3	-	-	1
Alnus	ハンノキ属	10	1	6	2	2	-	-	-	2	2	19	-	2	5	-
Fagus	ブナ属	16	-	17	19	18	-	-	-	3	5	12	4	3	13	7
Quercus-Castanea	ロタマリナガバ属	69	-	33	13	23	-	-	1	43	18	33	23	51	44	44
Quercus-Castanea	カラマツアガバ属	31	-	24	48	42	-	-	1	15	17	24	11	27	24	26
Carpinus	クルミ属	11	-	1	12	9	-	-	-	8	1	4	21	2	1	10
Genista-Eruca	ツバキアガバ属	8	-	3	4	2	-	-	4	40	14	11	19	47	14	18
Ulmus-Liquidambar	カシノキ属	2	-	6	2	8	-	-	1	2	10	8	5	3	-	-
Celtis-Artemesia	カシノキアゲハ属	4	-	1	-	-	-	-	1	-	2	2	-	1	-	-
Illigaster	シカニ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Phellodendron	キンメダ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Daphne	ニズハ属	2	-	1	20	3	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-
Melilotus	アズメガタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Humulus-Tutuilobus	ヌグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Illicium	モクヅク属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Celastraceae	ニンキイ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Decidua	カシノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Amelanchier	トリカケ属	1	-	4	1	1	-	-	-	-	-	-	12	1	-	-
Vitis	ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Parthenocissus	ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Tilia	シラノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Alnus	ウラジロ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Acacia	アカシア属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cornus	ミズベ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eriogonum	ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Dioscorea	カクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Symplocos	ヘンリイ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Liquiritia	イソラクモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
Psilotum	トリコノ属	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
Lomatium	スイカズラ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
草本																
Tytia	ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Alliaria	セリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Solidago	オオダマリ属	4	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Gramineae	イネ科	373	8	541	292	305	-	1	3	187	257	248	40	59	72	168
Cyperaceae	カヤツリグサ科	6	-	36	13	16	-	-	-	6	6	21	2	8	9	9
Erythrina	ホルタケ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
Connivillea	フジノリ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Anemone	イソリソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
Monocotyledon	ヒカルソウ属	1	-	1	1	1	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Heracleum	クワ科	1	-	2	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Brassicaceae	アブラナ科	3	-	1	-	1	-	-	-	12	-	1	-	32	2	1
Lagopyrum	ムクシ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Boraginaceae	ムクシ科	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Scrophulariaceae	イカリソウ属	2	-	1	-	-	-	-	-	3	2	1	-	4	1	1
Psathyrocephalus	ソラマダ属	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gentianaceae	アガツメソウ属	6	-	-	-	-	-	-	-	2	3	-	-	-	-	2
Corynepetalaceae	ナシコ科	5	-	-	1	-	-	-	-	4	4	-	-	1	-	2
Ranunculaceae	キンポウゲ科	1	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-
Brassicaceae	アブラナ科	3	-	-	1	-	-	-	-	12	-	1	-	32	2	1
Plantago	ムクシ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Paulownia	オバノコロ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Polypodiaceae	ヘンリイ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Antennaria-Bartsia	フジノリ-イカリソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Ceratodon	ペッカナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
Artemisia	カモノ属	9	1	7	9	3	-	-	1	6	5	12	7	19	8	242
Tuliflorae	キク科	3	-	3	-	-	-	1	-	1	-	3	-	11	1	-
Liguliflorae	グンバク属	9	-	9	9	7	1	-	1	56	16	5	3	3	3	4
シダ植物																
Selaginella	サンショウモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Asplenium spec.	アスplenium属	26	-	1	1	1	-	2	3	24	10	1	165	41	4	11
Urticaceae	ウツボカズラ属	2	-	2	1	-	-	-	2	2	4	4	-	1	-	4
Anthriscus	セリ科	207	7	208	210	224	1	1	11	280	285	219	207	300	206	287
Microseris	ムクシ属	424	4	399	326	343	1	2	7	197	302	309	48	108	100	391
Spores	シダ植物孢子	34	2	4	2	1	-	2	5	29	12	305	5	261	42	9
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	668	15	609	547	566	2	5	23	426	319	553	556	556	315	618
unknown	不明	3	-	2	4	1	-	-	2	6	5	8	7	3	2	-

表111 稲荷遺跡から産出した花粉胞子一覧表

学名	和名	N-01	N-02	N-03	N-04	N-05	N-06	N-07	N-08	N-09	N-10	N-11	N-12	N-13
樹木														
<i>Podocarpus</i>	ヤマトクイ	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Araucaria</i>	モミ属	-	-	4	1	1	-	-	2	-	-	-	2	
<i>Taxus</i>	ブナ属	3	3	10	14	8	-	-	7	-	6	2	2	
<i>Ficus</i>	モクレン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ficus elastica</i>	モクレン属	19	4	8	21	2	-	116	-	7	2	3	6	
<i>Schizolobium</i>	コウヤクイ	3	16	9	9	20	1	2	19	-	79	31	51	
<i>Oxydendrum</i>	スギモク	16	28	26	12	31	1	36	87	-	20	36	36	
<i>Imperata</i>	タカシマヤハクイ	2	8	7	5	2	-	1	1	-	2	6	2	
<i>Mitchella</i>	ヤマツリイ	1	2	-	1	3	-	-	4	-	5	5	4	
<i>Pithecellobium</i>	モクセイノキ	9	1	2	3	1	-	-	4	12	1	6	6	
<i>Coccoloba</i>	ヤマトヨシノキ	5	13	15	-	-	-	-	3	-	2	1	-	
<i>Betula</i>	カバノキ属	-	2	2	3	-	-	-	3	-	2	-	-	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	11	6	4	21	8	-	10	7	-	8	3	2	
<i>Rhus</i>	ブナ属	10	12	28	11	39	-	2	20	-	7	6	10	
<i>Imperata cylindrica</i>	コラチヨウガヤハク	73	39	50	59	43	1	15	25	-	45	41	44	
<i>Quercus</i>	コラチヨウガヤハク	10	40	17	19	29	-	1	11	-	20	32	18	
<i>Gentiana</i>	ヤマツリイ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Psychotria</i>	モクセイノキ属	4	3	1	5	3	-	7	2	-	8	5	6	
<i>Hamelia</i>	モクセイノキ属	41	20	10	12	10	-	9	15	-	9	36	10	
<i>Elaphoglossum</i>	ニンニクササゲ属	-	1	3	-	2	-	1	3	-	4	4	3	
<i>Ochna</i>	アオイ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Diospyros</i>	ユズリハ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Melastoma</i>	アカタヌキ属	-	-	-	1	-	-	1	-	-	2	-	1	
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ascaria</i>	カエデ属	1	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	1	
<i>Annona</i>	アオイ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
<i>Amomum</i>	クモクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Curcuma</i>	イヌキイ属	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Eriobotrya</i>	クモクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Ardisia</i>	クモクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Psychotria</i>	モクセイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Type</i>	ガマ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Alliaria</i>	ガマオセカイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Brassica</i>	アブラナ科	107	60	417	811	384	5	372	407	6	927	327	307	
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	7	7	10	19	7	-	6	9	-	6	6	6	
<i>Compositae</i>	ブタクサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Monachilia</i>	ミヌアイ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Hedysarum</i>	クリ科	4	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Ranunculus</i>	ボウズリ属	-	-	-	2	2	-	1	1	-	2	1	-	
<i>Myrsinaceae</i>	アカルザヒニ科	10	-	3	4	1	-	1	1	-	-	-	-	
<i>Psychotria</i>	モクセイノキ属	20	1	6	5	2	-	6	2	-	4	3	2	
<i>Thlaspiaceae</i>	カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ科	1	-	1	-	-	-	-	2	-	-	1	-	
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	24	2	-	20	-	-	317	9	-	6	24	24	
<i>Leganiceae</i>	ササ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Desmodium</i>	ブタクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Desmodium</i>	ブタクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Desmodium</i>	カキシダ属	10	7	2	6	6	-	6	6	-	6	25	8	
<i>Alpinia</i>	アリノトウガヤ属	8	-	-	4	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Monotropa</i>	セリ科	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Justicia</i>	モツヅリソウ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Patrinia</i>	モツヅリソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Adonis</i>	アオイ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Artemisia</i>	モツヅリソウ属	11	7	2	2	-	-	1	2	-	6	35	8	
<i>Tridax</i>	モツヅリソウ属	1	12	7	2	2	-	1	2	-	6	35	8	
<i>Thulium</i>	モツヅリソウ属	3	1	13	1	-	-	2	1	-	-	-	1	
<i>Lindernia</i>	ランボウ科	29	1	8	28	-	-	28	14	-	7	6	13	
シダ植物														
<i>Microlepia</i>	島嶼縄葉子	23	-	7	29	6	3	1	2	4	31	13	8	12
<i>Urticaceae</i>	赤穂子	34	4	1	19	3	1	7	4	2	2	11	2	
<i>Urtica</i>	モクシナ	200	215	215	215	4	203	221	212	202	207	207	207	207
<i>Naubertia</i>	モクシナ	310	113	668	630	568	3	749	468	5	266	308	331	3
<i>Trichomanes</i>	シダ植物	37	6	8	9	4	8	6	6	5	35	16	19	13
<i>Trichomanes</i>	モクシナ	307	320	691	691	532	11	955	695	12	641	690	662	12
<i>Whipplea</i>	モクシナ	4	-	14	8	-	-	4	4	-	6	7	3	4

陵地にはコナラ属アカガシ亞属やシノキ属-マテバシイ属などの落葉樹林が発達しており、その上部の山地にはコナラ風コナラ亞属やブナ属などの落葉広葉樹林が分布していた。また、丘陵帶から山地帯にかけて分布を広げる落葉樹林や落葉広葉樹林のなかにはスギ林も存在していたであろう。

古墳時代から中世にかけての遺構や堆積層から採取した試料の樹木花粉では、顕著な花粉組成の相違がみられず、それほど大きな植生の変化はなかったと考えられる。ただし、スギ属は上位層に向かって減少傾向を示し、時期を経るにしたがって分布を縮小させていたかもしれない。さらに、SN27-D13 や SD24 ではコウヤマキ属が突出しており、コウヤマキが分布を広げていたと推測される。なお、コウヤマキ属の突出した産出状況については、堆積環境の相違が影響している可能性や、局地的な植生を反映している可能性などが考えられるが、詳細は不明である。

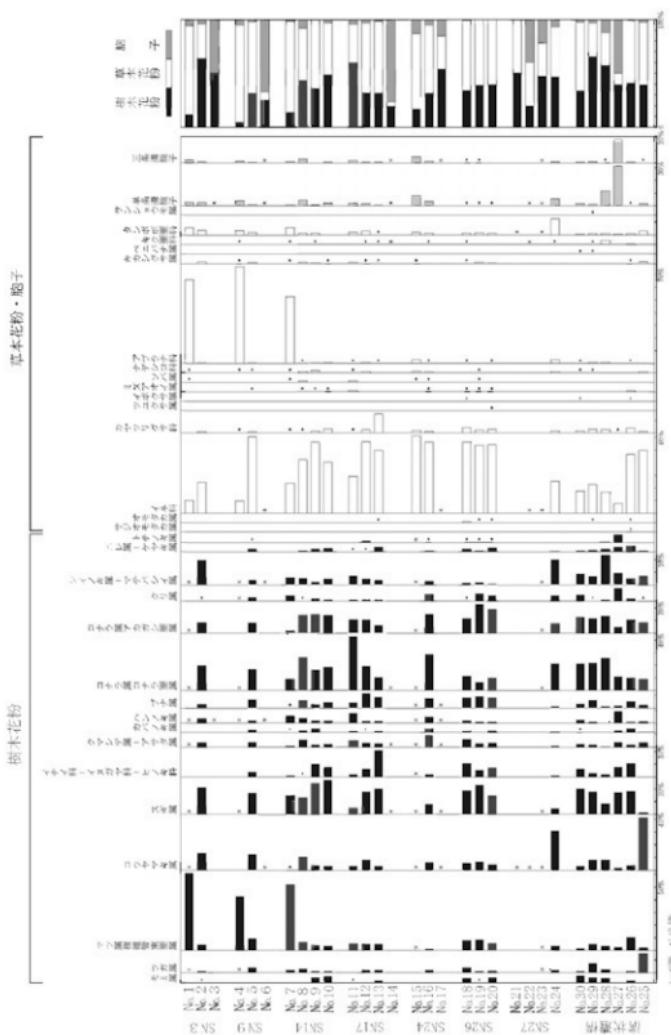
近世以降の耕作土であるⅡ層（SN 3とSN 9、SN14）では、マツ属複維管束亜属が増加している。十分な量の花粉が得られなかったSN 3のSN14においても樹木花粉で多産するのはマツ属複維管束亜属である（表109）。これらの採取箇所は六里遺跡の西部に位置するため、おそらく、近世以降では遺跡西部にニヨウマツ類などの二次林が広がっていたと考えられる。さらには、マツ属複維管束亜属の産出が顕著な試料では、アブラナ科の産出も顕著である。稻荷遺跡と同様に水田の一部でアブラナ科が栽培されていたか、水田周辺の畦畔などに野生種が生育していた状況などが推測される。

その他に、栽培植物ではベニバナ属とソバ属の産出も見られた。ベニバナ属は古墳時代後期とみられるSD54とSD60で、ソバ属は中世の耕作土であるⅢ層や近世以降の耕作土であるⅡ層を中心とした層準で産出している。ベニバナとソバはとともに虫媒花で、広範囲に花粉を散布させないと考えられるため、試料採取箇所周辺において古墳時代後期にはベニバナ栽培が、中世から近世以降にはソバ栽培が行われていたと考えられる。

稻荷遺跡D013・D015グリッドのIV層では、花粉化石がほとんど含まれていなかった。おそらく、IV層堆積当時の水田区画周辺は乾燥状態にあったと思われる。D011グリッドIV層では花粉化石が産出しており、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属やブナ属、照葉樹のコナラ属アカガシ亜属やシノキ属・マテバシイ属、温帯性針葉樹のスギ属の産出が目立ち、ツガ属やモミ属を伴う。なお、プラント・オパール分析においてもIV層ではイネ機動細胞珪酸体を検出しているが、六里遺跡と同様にⅢ層との攪拌がある試料を採取していたことが判明し、本資料についてもⅢ層の分析結果が反映されていると考えられる。畝溝状遺構群から採取したSN 1では、コウヤマキ属の産出も目立つ。遺跡周辺の丘陵帶上部から山地帯下部の移行帶においてモミやツガなどと共にコウヤマキも分布を広げていたと思われる。草本花粉ではイネ科が優勢であり、水田雜草を含む分類群であるキカシグサ属を伴っている。

古代以降の水田耕作土であるⅢ層や圃場整備前の耕作土であるⅡ層においても、コナラ亜属などの落葉広葉樹やアカガシ亜属などの照葉樹、スギ属などの温帯性針葉樹が産出しており、遺跡周辺にはIV層の堆積時と同様な森林植生が広がっていたと考えられる。ただし、スギ属については上位層に向かって減少傾向を示しているため、スギ林は時期を経るにしたがって分布を縮小させていた可能性がある。代わって、上位層に向かって増加傾向を示すのがマツ属複維管束亜属である。特にD015グリッドではマツ属複維管束亜属が顕著な産出を示しており、D015グリッドを中心としてニヨウマツ類の二次林が存在していたと考えられる。また、マツ属複維管束亜属の産出が顕著な試料では、アブラナ科の産出も顕著である。アブラナ科にはナズナ、タネツケバナなどの野生種や蕓、大根といった栽培種が含まれるが、花粉の形態で種を区別するのは難しい。例えば、畦畔にナズナなどの野生種が生育していた状況や、水田の一部において蕓や大根が栽培されていた状況などが推測される。さらには、D011、D013、D015各グリッドのⅡ層とⅢ層ではソバ属の産出が見られた。ソバは虫媒花で花粉の散布範囲は狭いと考えられるため、試料採取箇所の近辺でソバ栽培が行われていたと推測される。

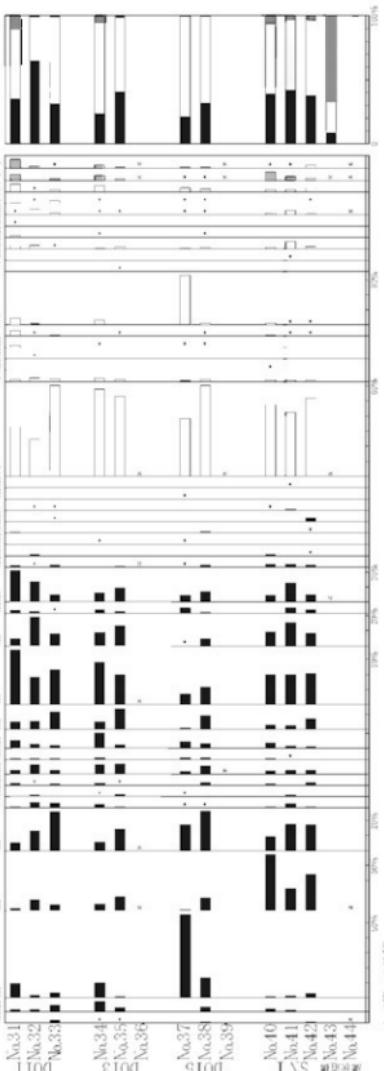
なお、古代の溝の最下部から採取したSD10とSD14では花粉化石が産出しなかった。これらの堆積物は人為的な埋土など、花粉が保存されるのに適した土壤ではなかったと考えられる。



第247図 六大遺跡における花粉分布図
樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は抽出物胞子発生数を基数として百分率で算出した。*は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

樹木花粉

苔木花粉・胞子



第248図 稲荷遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉地図、葦木花粉・胞子は飛山花粉地図を基準として百分率で算出した。＊は樹木花粉200個未満の資料について、検出した分類群を示す。

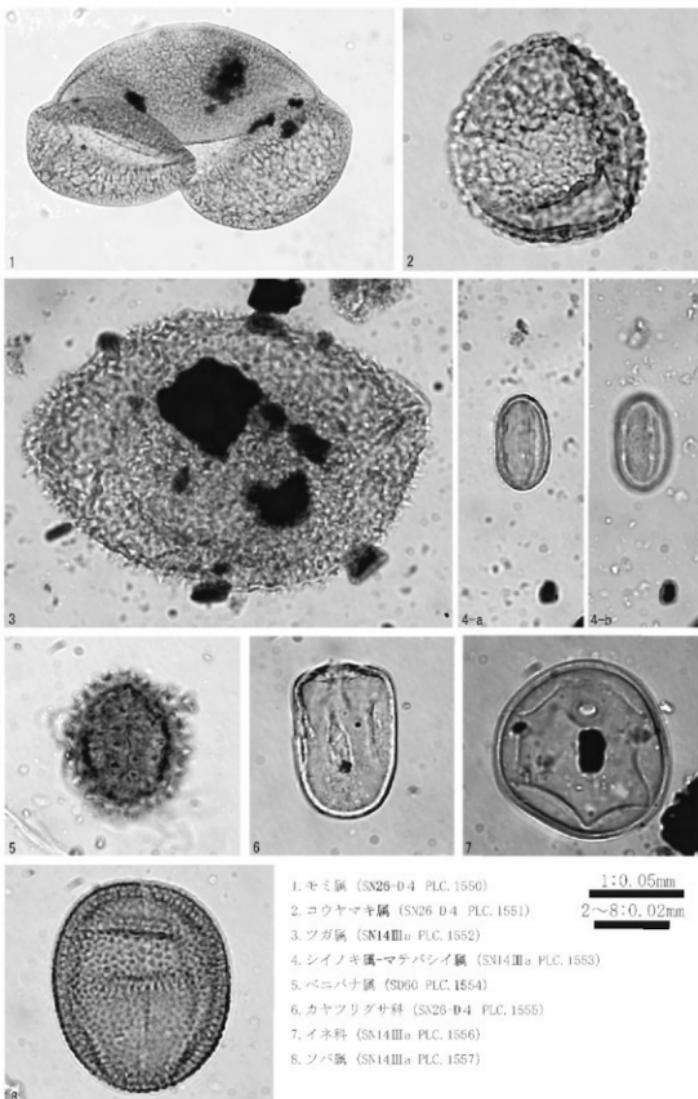


写真11 六里遺跡から産出した花粉化石

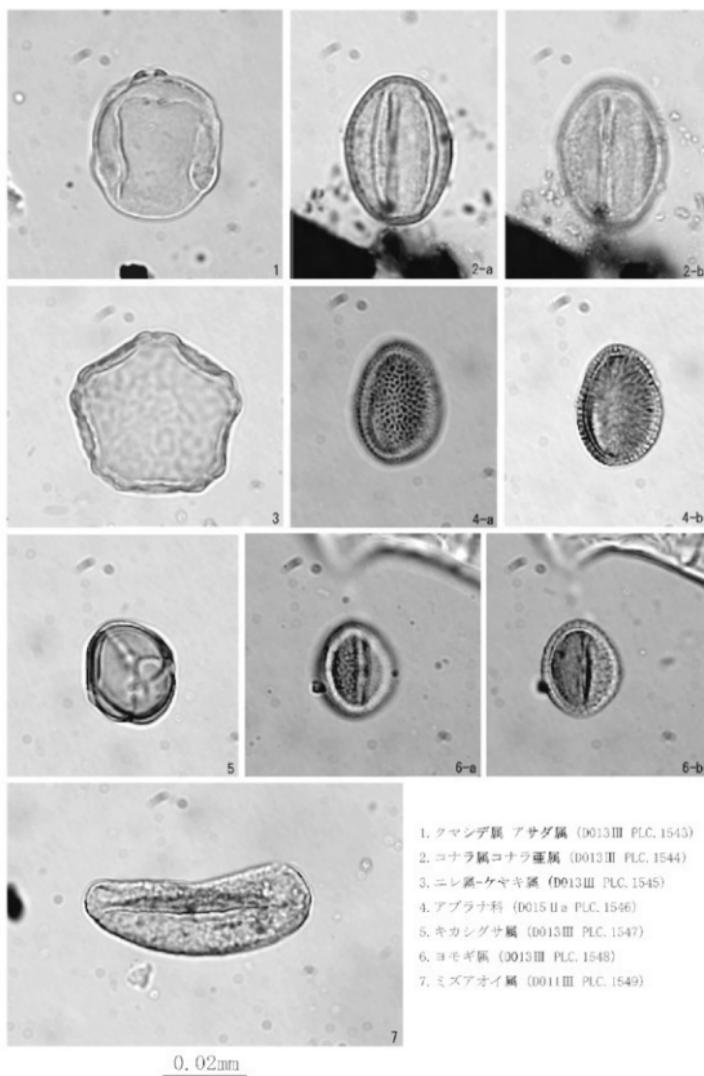


写真12 稲荷遺跡から産出した花粉化石

2 プラント・オパール分析

前項の試料の内、耕作に関連する可能性が高い土壌及び比較のために採取した層序の上下層を対象にプラント・オパール分析を実施した。分析は鈴木茂（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と分析方法 六里遺跡の分析対象試料（No. 1 ~ 24）は、水田区画（SN 3・SN 9・SN14・SN17・SN24）と畝溝状遺構群（SN26・SN27）から採取した計 24 試料である。稻荷遺跡の分析試料（No. 31 ~ 42）は、D011 グリッド、D013 グリッド、D015 グリッドの発掘区壁面上土層及び畝溝状遺構群（SN 1）から採取した計 12 試料である（表 112）。各試料の土相はおおむね灰色系のシルト～粘土である。これら 36 試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。なお、試料は花粉分析と同位置で採取したものと、同じ番号で表示した。

六秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約 1 g（秤量）をトールビーカーにとり、約 0.02 g のガラスピーズ（直径約 0.04 mm）を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ~ 30 cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により 0.01 mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定及び計数はガラスピーズが 300 個に達するまで行った。

分析結果 同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーズ個数の比率から試料 1 g 当たりの各プラント・オパール個数を求め（表 113・114）、それらの分布を第 249 図に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1 g 当たりの検出個数である。

①六里遺跡（表 113、第 249 図）

水田区画の II 層から 5 地点とも 10,000 個を超えるイネのプラント・オパールを検出しており、SN 9 や SN14 では 30,000 個を超えていた。また、イネの穎に形成される珪酸体の破片も少ないながら 5 地点とも確認した。最も多く検出したのはネザサ節型で、おおむね 30,000 個前後の個数を示している。次いでウシクサ族が多く、全地点とも 10,000 個以上を示し、キビ族も 10,000 個前後を確認した。その他には、ササ属型やヨシ属、シバ属などを確認した。III a 層からもおおむね 10,000 個前後のイネ

表112 プラント・オパール分析対象試料一覧

遺跡	種別	採取箇所	層位	土相	試料N.
六里遺跡	水田区画	SN 3	II 層	オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト	1
			III 层	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	2
			IV 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	3
			II 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	4
			III 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	5
	水田区画	SN 9	II 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土	6
			III 层	オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト	7
			III a 层	暗オリーブ色 (7.5Y3/2) シルト	8
			III b 层	オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粘土	9
			IV 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土	10
稻荷遺跡	水田区画	SN 14	II 层	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	11
			III 层	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	12
			III b 层	オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土	13
			IV 层	オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘土	14
			II 层	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	15
	水田区画	SN 24	III 层	灰オリーブ色 (7.5Y3/2) シルト	16
			IV 层	暗オリーブ色 (5Y4/3) 粘土	17
			SN26-D 3	灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土	18
			SN26-D 4	灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト	19
			SN26-D 5	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	20
船荷遺跡	格状構造群	SN27-D 10	II 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	21
			SN27-D 11	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	22
			SN27-D 12	オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト	23
			SN27-D 13	オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト	24
	格状構造群	D011	II 层	オリーブ黒色 (5Y3/2) シルト	31
			III 层	灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト	32
			IV 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘土	33
			II 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	34
			III 层	灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト	35
船荷遺跡	D013	D015	IV 层	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	36
			II 层	黑褐色 (2.5Y3/2) シルト	37
			III 层	暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト	38
			IV 层	オリーブ黒色 (2.5Y3/2) 粘土	39
			SN 1-D 7	暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト	40
	D015	SN 1-D 10	SN 1-D 9	灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘土	41
			SN 1-D 10	灰オリーブ黒色 (5Y4/2) 粘土	42

のプラント・オパールを検出しているが、SN 3 では 3,300 個とやや少ない個数を示している。また、本層においてもイネの穎に形成される珪酸体の破片を 3 地点で確認した。最も多く検出したのはやはりネザサ節型で、おおむね 10,000 個前後を確認した。その他ではウシクサ族が約 4,000 ~ 9,000 個、キビ族が約 2,000 ~ 10,000 個検出している。III b 層 (SN14 と SN17) からも 6,000 個前後のイネのプラント・オパールを検出しているが、イネの穎に形成される珪酸体は観察されていない。その他には、ネザサ節型やキビ族、ウシクサ族などを若干確認した。IV 層、V 層のイネのプラント・オパールについては、SN14 の III 層の攪拌と考えられる IV 層上層より若干検出している他は確認できなかった。最も多く検出したのはやはりネザサ節型で、SN 9 では 30,000 個を超えていた。その他には、ササ属型やキビ族、ウシクサ族などをわずかに確認した。

畝溝状遺構群である SN26 では 5,000 個前後のイネのプラント・オパールを検出した。最も多く検出したのは 14,000 個前後を示しているネザサ節型で、その他に、ササ属型やキビ族、ウシクサ族が 3,000 個前後の産出個数を示している。SN27 では他の試料と比べてプラント・オパールの検出数が少なく、10,000 個を超える分類群は無かった。ただし、D13 より 1,100 個のイネのプラント・オパールを検出した。

② 稲荷遺跡（表 114、第 249 図）

D011 グリッドの全 3 試料から 5,000 個を超えるイネのプラント・オパールを検出しており、II 層では 10,000 個を超えていた。また、II 層からはイネの穎に形成される珪酸体の破片も確認した。最も多く検出したのはネザサ節型で、3 試料とも 10,000 個以上を示している。次いでウシクサ族が多く、II 層では 10,000 個を超えていた。その他には、ササ属型やキビ族などを若干確認した。D013 グリッドでは、II 層と III 層から 10,000 個を超えるイネのプラント・オパールを検出し、イネの穎に形成される珪酸体の破片も若干確認した。最も多く検出したのはネザサ節型で、3 試料とも 10,000 個以上を確認した。ウシクサ族は II 層と III 層で 10,000 個前後を示しており、その他にも、ササ属型やシバ属、キビ族などを確認した。D015 グリッドでは、II a 層と III 層からそれぞれ 26,700 個と 13,500 個のイネのプラント・オパールを検出し、イネの穎に形成される珪酸体も確認した。最も多いのはネザサ節型で、II 層では 40,000 個を超えていた。その他には、ササ属型やキビ族、ウシクサ族などを検出している。

SN 1 では、D 9 と D10 からそれぞれ 9,300 個と 8,900 個のイネのプラント・オパールを検出した。最も多いのはやはりネザサ節型で、D 7 と D 9 では 10,000 個を超えていた。その他には、ササ属型やキビ族、ウシクサ族などを確認した。

水田耕作について 上記のように、多くの試料からイネのプラント・オパールを検出した。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料 1 g 当たり 5,000 個以上検出した地点から推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査で判明した水田跡の分布とがよく対応する結果が得られており（藤原 1984）、耕作が行われていたか否かの検証ではこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。

六里遺跡では、II 層は近世以降の耕作土、III a 層は中世の耕作土、III b 層は古墳時代から古代の耕作土の可能性がある。先にも記したように、II 层からは 10,000 個を超えるイネのプラント・オパールが、III a 層からも 10,000 個前後のイネのプラント・オパールが得られており、耕作土、すなわち

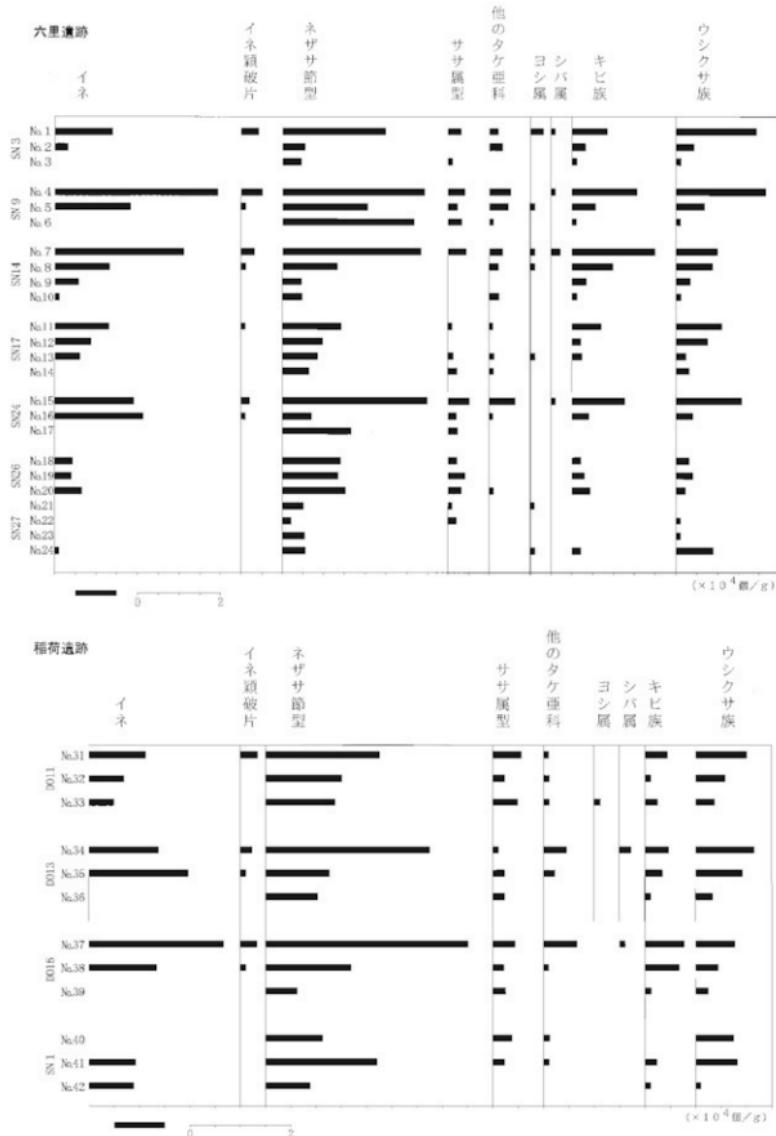
表113 六里遺跡試料 1 g 当たりのプラント・オパール個数

試料番号	採取箇所	層位	イネ (個/g)	イネ殻破片 (個/g)	ネズサ節壺 (個/g)	ササ属 (個/g)	他のタケ科群 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
1		II 層	14,100	4,300	25,000	3,300	2,200	3,300	1,100	6,700	19,600	4,300
2	SN3	III a 層	3,300	0	5,500	0	3,300	0	0	3,300	4,400	2,200
3		IV 層	0	0	4,700	1,200	0	0	0	1,200	1,200	0
4		II 層	39,600	5,200	34,400	4,200	5,200	0	1,000	15,600	21,900	8,300
5		III a 層	18,500	1,200	20,800	2,300	4,600	1,200	0	5,800	6,900	4,600
6		IV 層	0	0	31,800	3,400	1,100	0	0	1,100	1,100	10,200
7		II 层	31,200	3,300	33,500	4,500	3,300	1,100	2,200	20,100	10,000	12,300
8		III a 層	13,300	1,100	13,300	0	2,200	1,100	0	10,000	8,900	5,600
9	SN14	III b 層	5,900	0	4,700	0	0	0	0	3,500	3,500	2,400
10		IV 层	1,200	0	4,800	0	2,400	0	0	1,200	1,200	0
11		II 层	13,200	1,000	14,200	1,000	1,000	0	0	7,100	11,200	2,000
12		III a 層	8,800	0	9,900	0	0	0	0	2,200	7,700	7,700
13		III b 層	6,100	0	9,600	1,200	1,200	1,200	0	2,500	2,500	7,400
14		V 层	0	0	6,500	2,200	1,100	0	0	0	3,300	3,300
15		II 层	19,100	2,100	35,000	5,300	6,400	0	1,100	12,700	15,900	12,700
16	SN24	III a 層	21,300	1,000	7,100	2,000	1,000	0	0	4,100	4,100	6,100
17		V 层	0	0	16,800	2,400	0	0	0	0	0	2,400
18	SN26-D09		4,300	0	14,100	2,200	0	0	0	2,200	3,300	2,200
19	SN26-D14		4,100	0	13,400	4,100	0	0	0	3,100	4,100	4,100
20	SN26-D9		6,600	0	15,400	3,300	1,100	0	0	4,400	2,200	9,900
21	SN27-D10		0	0	5,100	1,000	0	1,000	0	0	4,300	0
22	SN27-D11		0	0	2,100	2,100	0	0	0	0	1,100	1,100
23	SN27-D12		0	0	5,500	0	0	0	0	0	1,100	0
24	SN27-D13		1,100	0	5,600	0	0	1,100	0	2,300	9,000	7,900

表114 稲荷遺跡試料 1 g 当たりのプラント・オパール個数

試料番号	採取箇所	層位	イネ (個/g)	イネ殻破片 (個/g)	ネズサ節壺 (個/g)	ササ属 (個/g)	他のタケ科群 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
31	D011	E 層	11,300	3,400	22,500	5,600	1,100	0	0	4,500	10,100	9,000
32		III b 層	7,000	0	15,100	2,300	1,200	0	0	1,200	5,800	1,200
33		IV 层	5,000	0	13,800	5,000	1,300	1,300	0	2,500	3,800	5,000
34	D013	E 层	13,900	2,300	32,400	1,200	4,600	0	2,300	4,600	11,600	5,800
35		III a 層	19,700	1,200	12,800	2,300	2,300	0	0	3,500	9,300	7,000
36		V 层	0	0	10,600	2,300	0	0	0	1,200	3,500	3,500
37	D015	E 层	20,700	3,300	40,100	4,500	6,700	0	1,100	7,800	7,800	10,000
38		III b 層	13,500	1,100	16,900	2,300	1,100	0	0	6,800	4,600	2,300
39		V 层	0	0	6,400	2,600	0	0	0	1,300	2,600	1,300
40	SN1-D7		0	0	11,400	3,800	1,300	0	0	0	7,600	1,300
41	SN1-D9		9,300	0	22,100	2,300	1,200	0	0	2,300	8,200	1,200
42	SN1-D10		8,900	0	8,900	0	0	0	0	1,100	1,100	4,400

水田耕作を支持する結果が得られたと判断される。また、III b 層からも 6,000 個前後のイネのプラント・オパールを検出しており、III b 層においても水田耕作が営まれていた可能性は高いと判断される。なお、SN 3 の III a 層では、イネのプラント・オパールは 3,300 個で 5,000 個に達していない。他の分類群も他の試料と比べ検出数が少ない点から、要因は不明であるが SN 3 の III a 層におけるプラント・オパール密度が小さいために少なく表現されたのではないかと思われる。さらに、SN14 の IV 層では 1,200 個のイネを検出した。この試料では花粉分析においても水田雑草を含む分類群が得られないが、III 層との層界付近で採取した試料であるため、III 層との攪拌が反映された可能性が高い。畝溝状遺構群の SN26-D 3 と D 4 におけるイネのプラント・オパールはそれぞれ 4,300 個と 4,100 個で、5,000 個には達していないもののそれに近い数値を示しており、6,600 個を示している D 5 の土壌と合わせて水田土壌である可能性は高いと推測される。一方、SN27 ではイネのプラント・オパールは得られておらず、D 13 でも 1,100 個と少ないとから、SN27 の畝溝状遺構群の土壌については水田土壌では



第249図 六里遺跡及び福荷遺跡におけるプラント・オパール分布図

ない可能性が高いと判断される。

稲荷遺跡では、II層、III層の試料から7,000個を超えるイネのプラント・オパールを検出した。このうちIII層は古代以降の水田耕作土の可能性があると考えられており、今回のプラント・オパール分析ではこれを支持する結果が得られたと判断される。また、II層は圃場整備前の耕作土と考えられており、10,000個を超えるイネのプラント・オパールを検出したのは、耕作土、すなわち水田耕作の存在を支持する結果と判断される。なお、D011のIV層でも5,000個のイネのプラント・オパールが得られており、花粉分析でも水田雑草を含む分類群を確認したが、六里遺跡のSN14のIV層と同様な状況と考えられる。SN 1 の D 9・D10 からも 9,000 個前後のイネのプラント・オパールを検出しておらず、鉢溝状遺構群の土壤が水田土壤である可能性は高いと判断される。一方、D 7 からイネのプラント・オパールは得られていないため、遺構の性格の評価について慎重に扱う必要がある。

遺跡周辺のイネ科植物 両遺跡とともに、最も多く検出しているネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）については、開けた日の当たる場所での生育が考えられる。このうちケネザサ（ミヤコネザサ）について、愛知県名古屋市周辺の丘陵から稜線下にかけては現在クロマツーケネザサ群集やコナラーケネザサ群集（谷斜面）が成立している（愛知県 1995）。また、スキ（ウシクサ族）とともに、丘陵のやや平坦な台状地においてススキーケネザサ群集を形成している（愛知県 1995）。このような状況から、三木川の自然堤防上や丘陵部空き地、林縁部、水田耕作地周辺などの開けた日の当たるところに上記のようなネザサ節型のササ類やウシクサ族が多く生育していたとみられる。一方、ササ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたと考えられる落葉広葉樹林（花粉分析の項参照）の下草的存在として生育していたとみられる。また、ヨシ属（ヨシなど）については水田周辺の水路などに、シバ属（シバなど）は畔などに生育していたと推測される。

キビ族については、アワやヒエ、キビといった栽培種に由来するか、エノコログサやスズメノヒエ、イヌビエなどの野生種に由来するかについて現時点においては形態からは分類できず不明である。しかしながら、上記のように遺跡周辺では古墳時代から古代以降において水田耕作が営まれていたと考えられるため、検出したキビ族にはタイヌビエなどの稻作にともなう野生種が含まれている可能性がある。

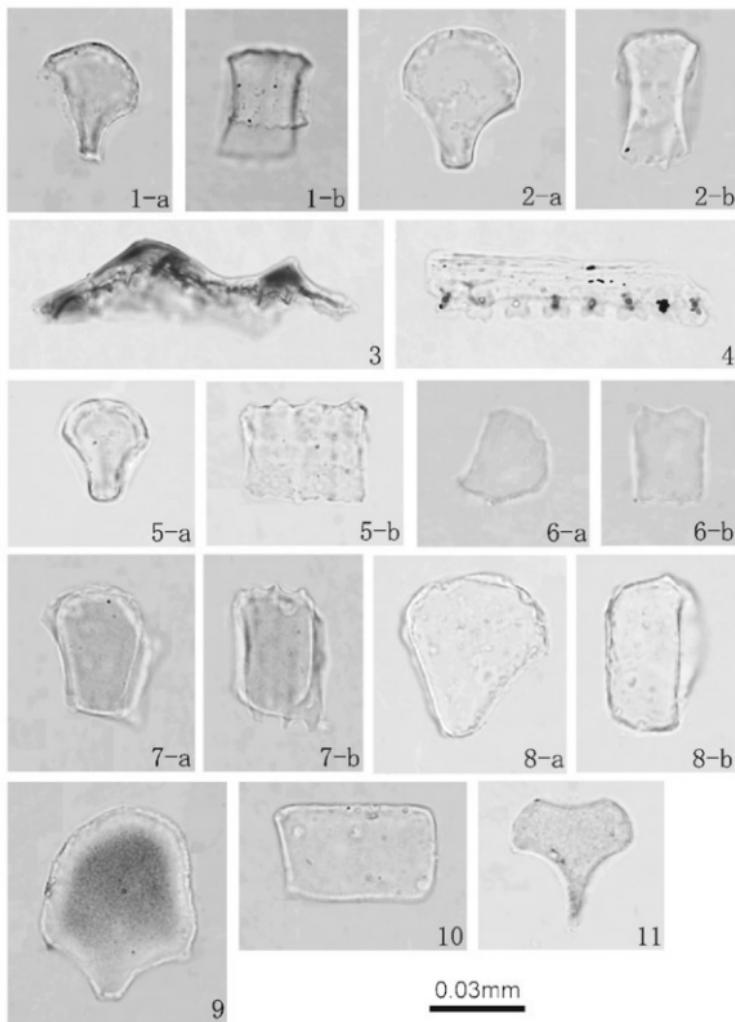
第3節 炭化材樹種同定及び放射性炭素年代測定

1 炭化材樹種同定

六里遺跡第3調査面のSK112で出土した炭化材の樹種同定を行った。遺構埋土の上面で検出した板状の材で、出土時には完全に炭化していた（第3章第5節参照）。燃料の可能性もあるが詳細は不明である。なお、分析は小林克也（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 試料は、表115に示した12点である。まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡及び写真撮影を行なった。

分析結果 同定の結果、試料はいずれも広葉樹のクリであった。同定結果を表115に示す。次に、同



1、2：イネ（a：断面、b：側面） 1：SN3 II、 2：SN9 III
 3：イネ類破片 SN5 II
 4：イネ型短細胞壁酸体 SN14 II 8：ウシクサ族（a：断面、b：側面） SN17 III a
 5：ネザサ藻型（a：断面、b：側面） SN14 II 9：ヨシ属（断面） SN3 II
 6：ササ属型（a：断面、b：側面） SN3 II 10：キビ属（a：断面、b：側面） SN24 II
 7：他のタケ亞科（a：断面、b：側面） SN9 IV 11：シバ属（断面） SN14 II

写真13 六里遺跡のプランツ・オバール

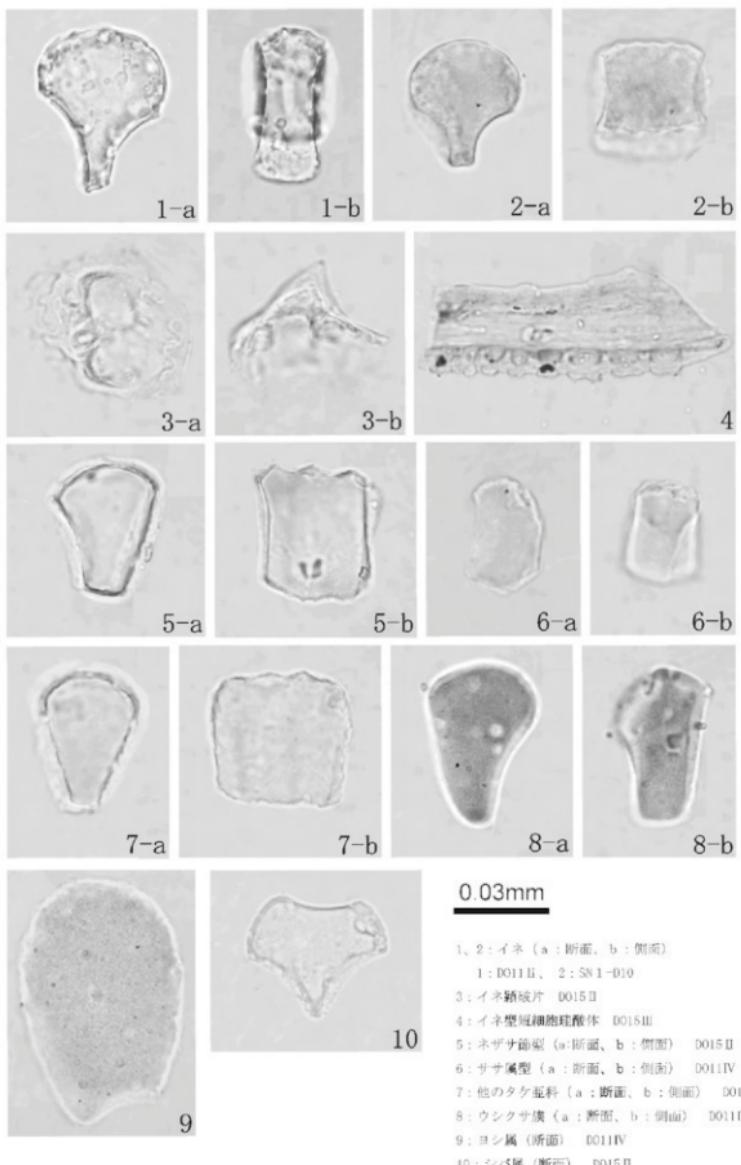


写真14 種荷遺跡のプラント・オパール

定された材の特徴を記載し、写真17に走査型電子顕微鏡の写真（1a-1C（No.7）、2a（No.3）、3a（No.6）、4a（No.9）、5a（No.10）、6a（No.11）、7a（No.12））を示す。

クリ（*C astanea C rehata Siebold. et Zu C C .* ブナ科）は、年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

考察 クリは堅硬で耐朽性が高いという材質を持つが、燃料材としては、長時間燃焼し続けるという材質を持つ（伊東ほか2011）。燃料材に適したクリが遺跡周辺に生育しており、選択的に利用された可能性がある。

2 放射性炭素年代測定（AMS法）

六里遺跡第3調査面の樹種同定を行ったSK112出土炭化材及び第2調査面のSI4の炭化物・焼土堆積試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。なお、分析は株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ（伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadidze・小林克也）が担当した。

試料と方法 試料は、SK112の3点、SI4の2点、計5点である。いずれの試料も、最終形成年輪は残っていなかった。SK112は縄文時代晚期、SI4は古墳時代（7世紀代）の遺構と推定される。測定試料の情報、調製データは表116のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

分析結果 表117に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第250図に曆年較正結果をそれぞれ示した。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていいない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

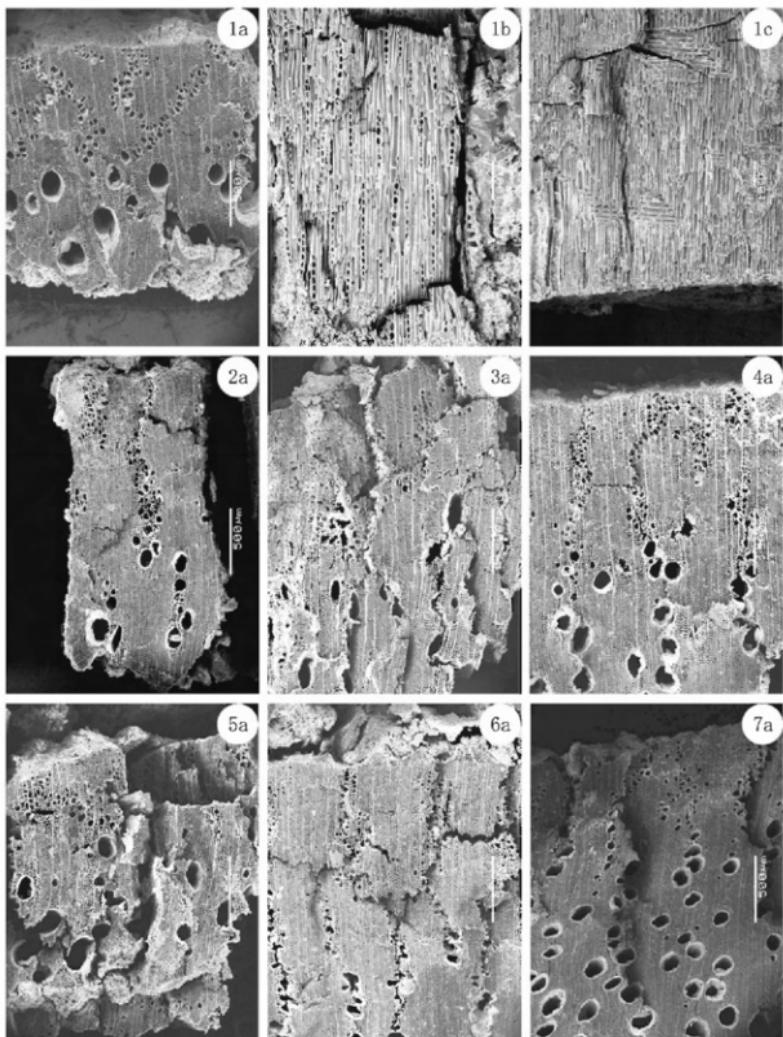
¹⁴C年代はAD1,950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

表115 樹種同定試料一覧及び同定結果

試料番号	収上番号	測定器番号	遺構種別	産地	年代測定試料番号
1	4755	SK112②	土坑	クリ	
2	4881	SK112①	土坑	クリ	No.1
3	4885	SK112①	土坑	クリ	
4	4887	SK112①	土坑	クリ	
5	4888	SK112①	土坑	クリ	
6	4890	SK112①	土坑	クリ	
7	4892	SK112①	土坑	クリ	
8	4893	SK112①	土坑	クリ	
9	4894	SK112①	土坑	クリ	No.2
10	4895	SK112①	土坑	クリ	
11	4896	SK112①	土坑	クリ	
12	4897	SK112①	土坑	クリ	No.3



1a-1c. クリ (No. 7)、2a. クリ (No. 3)、3a. クリ (No. 6)、4a. クリ (No. 9)、5a. クリ (No. 10)、6a. クリ (No. 11)、7a. クリ (No. 12)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

写真15 六里遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

^{14}C 年代の曆年較正には OxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 曆年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

考察 以下、 2σ 曆年代範囲（確率 95.4%）に着目して結果を整理する。土坑 SK112 の試料 No. 2 は 14 C 年代が $2,770 \pm 20$ ^{14}C BP、 2σ 曆年代範囲（確率 95.4%）が 978–842 Cal BC (95.4%)、試料 No. 9 は 14 C 年代が $2,750 \pm 20$ ^{14}C BP、 2σ 曆年代範囲が 971–960 Cal BC (2.8%) 及び 936–832 Cal BC (92.6%)、試料 No. 12 は 14 C 年代が $2,775 \pm 20$ ^{14}C BP、 2σ 曆年代範囲が 996–889 Cal BC (83.4%) 及び 881–847 Cal BC (12.0%) で、紀元前 1,000 ~ 830 年頃の曆年代を示した。これは、凸帯文系土器の年代に関する分析（中村 2008）を参照すると、縄文時代晚期中葉に相当する。SK112 は縄文時代の遺構と考えられており、今回の測定結果は遺構の推定時期に対して整合的であった。

なお、試料 No. 1 ~ 3 は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死若しくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であ

表116 放射性炭素年代測定試料及び処理

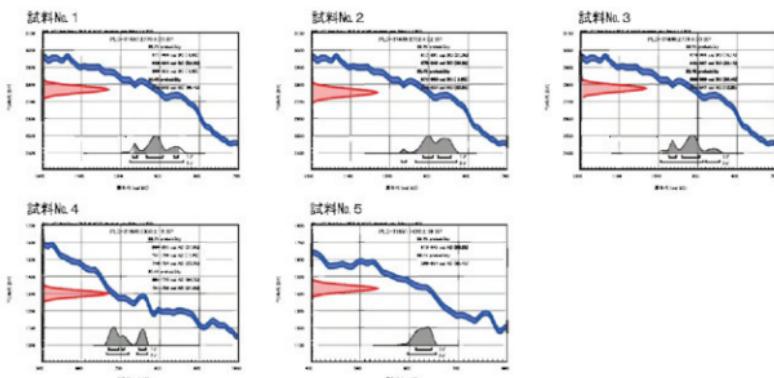
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31687	遺構: SK112 試料No. 1	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31688	遺構: SK112 試料No. 2	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31689	遺構: SK112 試料No. 3	種類: 炭化材 (クリ) 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31690	遺構: SI 4 試料No. 4	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-31691	遺構: SI 4 試料No. 14	種類: 炭化材 (広葉樹) 試料の性状: 部位不明 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)

表117 測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
PLD-31687 SK112 試料No. 1	-25.32 ± 0.16	2770 ± 20	$971-960$ cal BC (8.5%) $936-894$ cal BC (53.0%) $866-855$ cal BC (6.8%)	$978-842$ cal BC (95.4%)	
				$971-960$ cal BC (2.8%) $936-832$ cal BC (92.6%)	
				$971-891$ cal BC (31.3%) $879-846$ cal BC (36.9%)	
PLD-31688 SK112 試料No. 2	-27.33 ± 0.16	2752 ± 22	$974-956$ cal BC (15.1%) $942-897$ cal BC (53.1%)	$971-960$ cal BC (2.8%) $936-832$ cal BC (92.6%)	
				$974-956$ cal AD (37.6%) $701-709$ cal AD (7.3%) $746-764$ cal AD (23.3%)	
PLD-31689 SI 4 試料No. 3	-26.36 ± 0.17	2776 ± 20	$669-695$ cal AD (64.2%) $741-768$ cal AD (31.2%)	$996-889$ cal BC (83.4%) $881-847$ cal BC (12.0%)	
				$669-695$ cal AD (64.2%) $741-768$ cal AD (31.2%)	
PLD-31690 SI 4 試料No. 5	-28.49 ± 0.17	1300 ± 18	$613-645$ cal AD (68.2%)	$664-720$ cal AD (64.2%) $741-768$ cal AD (31.2%)	
				$613-645$ cal AD (68.2%)	
PLD-31691 SI 4 試料No. 6	-29.50 ± 0.16	1430 ± 19	$596-654$ cal AD (95.4%)	$664-720$ cal AD (64.2%) $741-768$ cal AD (31.2%)	
				$664-720$ cal AD (64.2%) $741-768$ cal AD (31.2%)	

るほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の測定結果はいずれも古木効果の影響を受けていると推定され、枯死若しくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。

SI 4 の試料 No. 4 は 2σ 値年代範囲が 664–720 Cal AD (64.2%) 及び 741–768 Cal AD (31.2%) で、7 世紀後半から 8 世紀後半の値年代を示した。また試料 No. 5 は 2σ 値年代範囲が 596–654 Cal AD (95.4%) で、6 世紀末から 7 世紀中頃の値年代を示した。SI 4 は古墳時代後期（7 世紀代）の遺構の可能性が高いため、今回の測定結果は遺構の推定期間に對して整合的であった。なお、試料 No. 4 と 5 も、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、実際に枯死若しくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。



第250図 年齢校正結果

第4節 鉄滓の成分分析

六里遺跡の遺構等で出土した鉄滓について、走査型電子顕微鏡観察及びX線分析（EPMA分析）を実施した。なお、分析は竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）が担当した。

試料と方法 分析対象は、鉄滓 3 点である（表 118、第 251 ~ 253 図）。時期は、No. 1 と No. 2 が古墳時代から中世の可能性があり、No. 3 は所属時期不明である。いずれも磁着が認められ、観察・測定面は比較的磁着の強い箇所を選んだ。第 251 図 ~ 253 図にそれぞれの採取部位を示した。

各試料の断面プレバラートを作製し、観察、分析を行った。プレバラートの作製には、包埋樹脂に注型

表118 鉄滓成分分析対象試料一覧

No.	取上 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	寸法(cm)			備考
					長さ	幅	厚さ	
1	3571	S026②	c	鉄滓	7.0	5.4	2.3	
2	4303	S021③	a	鉄滓	4.6	4.0	4.3	
3	1935-21	—	III	鉄滓	4.5	3.2	1.5	A020グリッド

用高透明エポキシ樹脂を使用し、試料の一部を岩石カッターで切り取った後包埋した。包埋試料は、ディスコプランで研磨した後、コランダムの #3000、ダイヤモンド粒子の $1\text{ }\mu\text{m}$ の順で研磨し、観察、分析面とした。試料は、採取断面について蛍光X線分析（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製 SEA1200VX、照射径 8 mm ：以後 XRF 分析）を行い、採取部位の化学組成を調べた。走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV、以後 SEM）による反射電子像の観察及び付属するエネルギー分散型X線分析装置（同 JED-2200、以後 EDS）による鉱物組織の定性分析を行った。

分析結果及び考察 XRF 分析による半定量値を表 119 に酸化物の形で示した。また、SEM 反射電子像を第 251 図～253 図 - 2、第 251 図～253 図 - 3 に、SEM 反射電子像に示した a～c のポイントの

表119 蛍光X線分析による半定量値 (wt%)

No.	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	FeO ₃	TiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MoO	Fe ₂ O ₃	NiO	CoO	ZnO	As ₂ O ₃	SrO	ZrO ₂	SnO ₂	BaO
1	—	9.02	14.87	0.10	3.85	0.08	0.68	0.47	0.02	0.30	70.47	0.07	0.29	0.02	0.01	—	0.01	0.03	0.01
2	0.60	8.26	25.41	0.38	0.68	0.64	0.46	0.30	0.02	0.06	68.16	—	0.01	0.01	—	0.01	0.01	—	0.02
3	0.44	7.86	10.39	0.49	3.75	0.06	0.43	0.31	0.02	0.06	76.79	—	—	0.02	—	—	0.01	—	0.01

EDS によるスペクトルを第 251 図～253 図 - 4～6 に、検出元素を表 120 に示した。

① 試料 No. 1

XRF 分析では、鉄が酸化物 (Fe2O3) 換算で約 70% と高い割合で検出された。チタン (TiO2) 含有量は少ない。SEM 反射電子像では、第 251 図 - 2、3 のような結晶組織が観察された。EDS 分析結果と併せると、明色の樹枝状ないし粒状組織（第 251 図 - 3 の a）では鉄 (Fe) と酸素 (O) が検出され、ウスタイト (FeO) とみられる。中間色木ずれ状組織（同図 b）では鉄とケイ素 (Si) と酸素が主に検出され、ファイヤライト (2FeO·SiO2) とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同図 c）上に晶出している。また、別の箇所では錆化鉄も観察された。以上の特徴より、含鉄錆冶津と考えられ、鍛錆冶津である可能性が高い。

② 試料 No. 2

XRF 分析では、鉄が酸化物 (Fe2O3) 換算で約 70% と高い割合で検出された。チタン (TiO2) 含有量は少ない。SEM 反射電子像では、第 252 図 - 2、3 のような結晶組織が観察された。EDS 分析結果と併せると、密集している明色の樹枝状ないし粒状組織（第 252 図 - 3 の a）では鉄 (Fe) と酸素 (O) が主に検出され、ウスタイト (FeO) とみられる。中間色木ずれ状組織（同図 b）では鉄とケイ素 (Si) と酸素が主に検出され、ファイヤライト (2FeO·SiO2) とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同図 c）上に晶出している。以上の特徴より、鍛錆冶津である可能性が高い。

③ 試料 No. 3

XRF 分析では、鉄が酸化物 (Fe2O3) 換算で約 75% と高い割合で検出され

表120 EDS分析結果

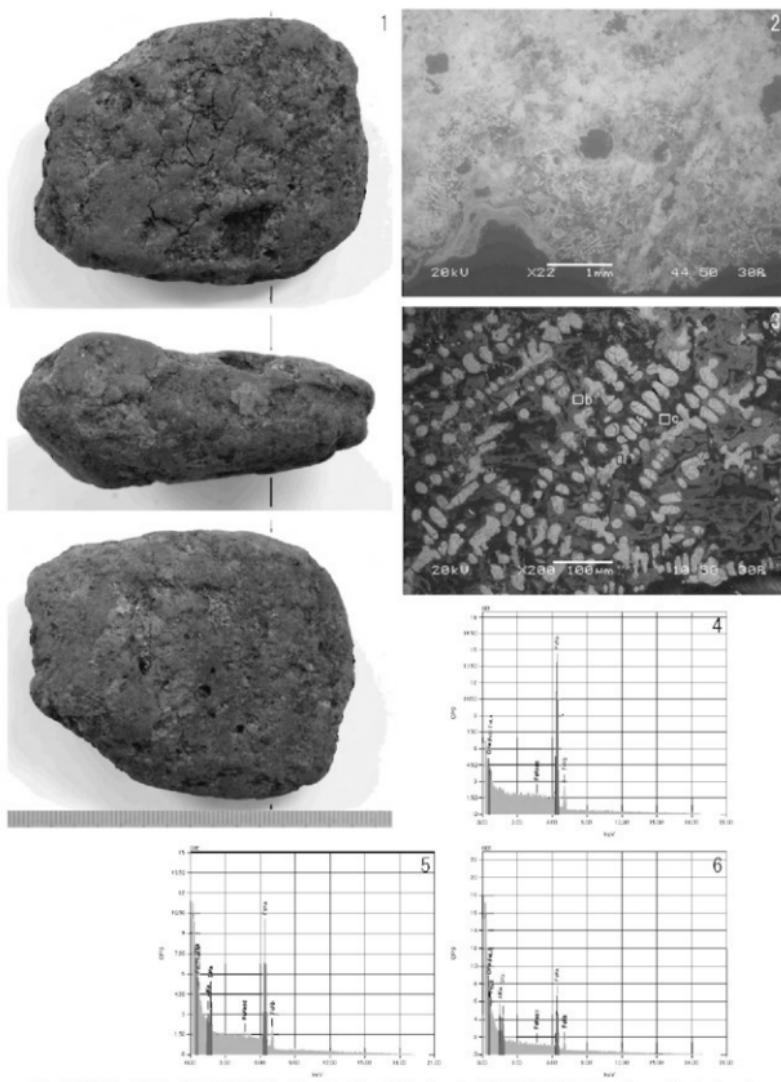
No.	ポイント	検出元素	所見
1	a	0, Fe	ウスタイト
	b	0, (Al), Si, Fe	ファイヤライト (鍛錆冶津?)
	c	0, Al, Si, Fe	ガラス質
2	a	0, (Si), Fe	ウスタイト
	b	0, (Al), Si, Fe	ファイヤライト (鍛錆冶津?)
	c	0, Al, Si, K, Ca, Fe	ガラス質
3	a	0, Fe	ウスタイト
	b	0, Si, Fe	ファイヤライト (鍛錆冶津?)
	c	0, Al, Si, Fe	ガラス質

た。チタン (TiO₂) 含有量は少ない。SEM 反射電子像では、第 253 図-2、3 のような結晶組織が観察された。EDS 分析結果と併せると、密集している明色の樹枝状ないし粒状組織（第 253 図-3 の a）では鉄 (Fe) と酸素 (O) が検出され、ウスタイト (FeO) とみられる。中間色木ずれ状組織（同図 b）では鉄とケイ素 (Si) と酸素が検出され、ファイヤライト (2FeO·SiO₂) とみられる。これらが、基質となる暗色ガラス質（同図 c）上に晶出している。以上の特徴より、鍛冶滓と考えられ、鍛錬鍛冶滓である可能性が高い。

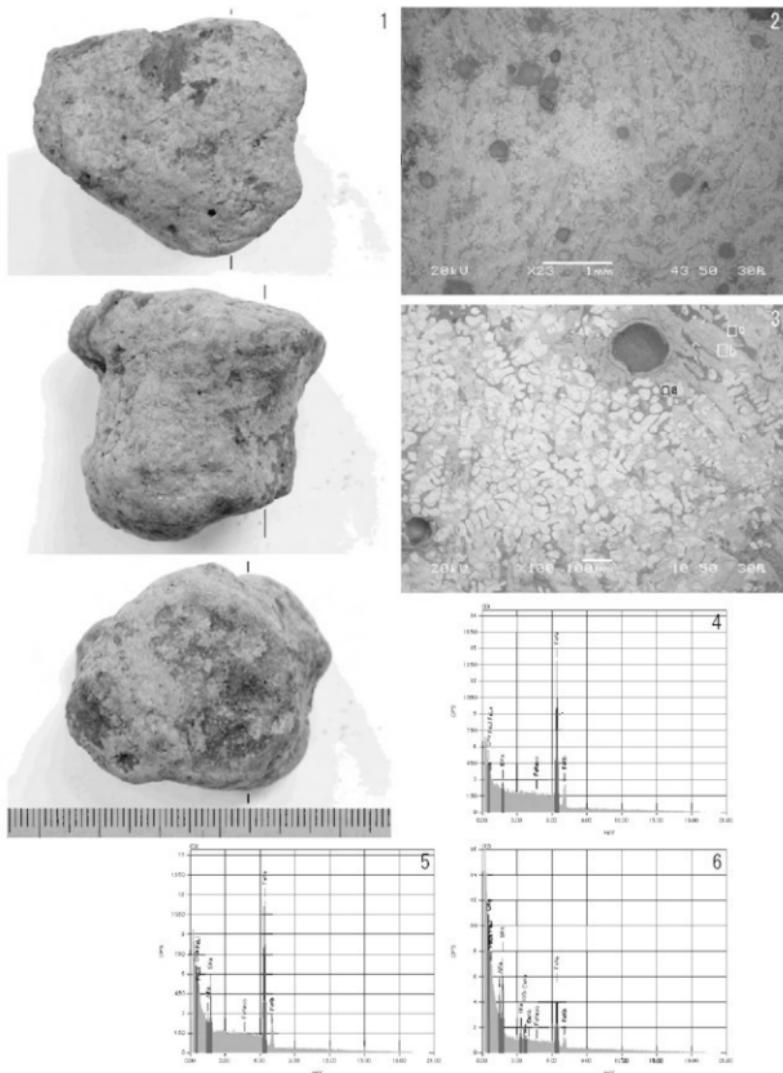
一般に砂鉄製錬の場合、原料中にチタンが多く含まれており、さらにその製錬滓にはチタンが濃縮され、チタンを含む結晶鉱物が晶出する。今回の鉄滓の鉱物組織の定性分析結果では、チタン含有の鉱物が検出されず、またウスタイトが多くみられ、また、蛍光 X 線分析ではチタン含有量が少なく鉄含有量が多い。以上より、製錬に伴う製錬滓ではなく、精錬鍛冶や鍛錬鍛冶に伴う鍛冶滓といえ、中でも鍛錬鍛冶滓である可能性が高い。

引用文献・参考文献

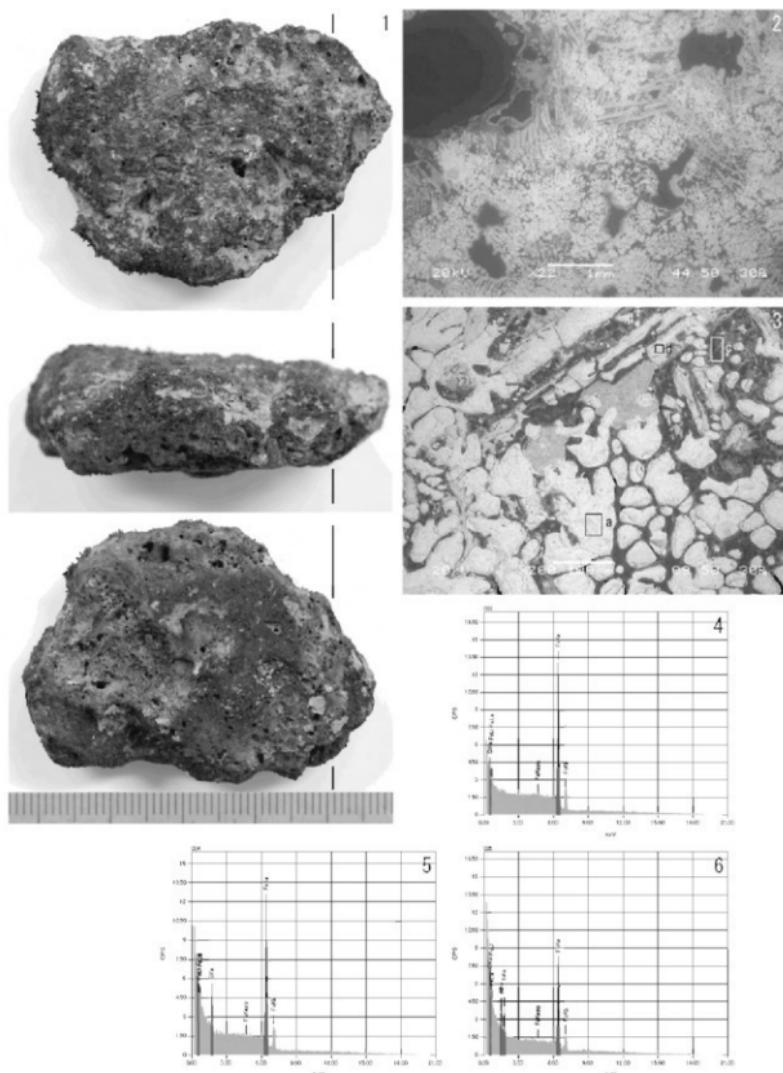
- 守田益宗・崔 基龍・日比野紘一郎 1998 「中部・東海地方の植生史」『日本列島植生史』安田喜憲・三好教夫編 朝倉書店 : 92-104
- 南川 幸編 1995 『愛知県の植物相』 愛知県 : 328 p.
- 藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査ー」『考古学ジャーナル』227 ニュー・サイエンス社 : 2-7
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 増子康眞 2008 「晚期半裁竹管文土器」『総覧縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション : 774-781
- 中村健二 2008 「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」：『総覧縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション : 798-805
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の 14 C 年代』日本先史時代の 14 C 年代編集委員会編 日本第四紀学会 : 3-20
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4) : 1869-1887.



1. 採取部位 2・3. SEM 反射電子像 (2:x22, 3:x200) 4～6. EDS 分析スペクトル (4:a, 5:b, 6:c)



1. 採取部位 2・3. SEM反射電子像 (2: x23, 3: x100) 4～6. EDS分析スペクトル (4: a, 5: b, 6: c)



1. 採取部位 2・3. SEM 反射電子像 (2: x22, 3: x200) 4～6. EDS 分析スペクトル (4: a, 5: b, 6: c)

第253図 鉄滓のSME観察とEDS分析結果③

第6章 総括

第1節 六里遺跡・稻荷遺跡の堅穴建物について

今回の調査において六里遺跡で7軒、稻荷遺跡で18軒の堅穴建物を検出した。いずれも古墳時代後期以降の堅穴建物であり、美濃地域ではこの時期、屋内の壁際にカマドを備えるものが多い。カマドを備える堅穴建物については、平成4年に行われた集成がある（中井・鈴木1992）。これによると西濃地域の事例は大垣市東町田遺跡のみで、集成時にはまだ本報告（大垣市教育委員会2004）がなされていなかった。以降多数の発掘調査が行われ資料の蓄積が成されたが、西濃地域におけるカマドを備える堅穴建物の事例はそれほど増加したとはいえない状況にある。その上で今回の調査で確認した六里遺跡・稻荷遺跡の堅穴建物群は、当該期における西濃地域の集落の在り方を示す重要な資料と考える。

本節では、平成4年の集成で着目されたカマドの位置や煙道の形態による分類に加え、建物規模や長軸方位等から各時期における特徴を抽出し、西濃地域で確認された堅穴建物との比較をすることで地域的な特徴について検討する。

1 対象とした遺跡と遺構

西濃地域においてカマドが検出された事例は少なく、対象としたのは、六里遺跡・稻荷遺跡の他3遺跡にとどまった。

東町田遺跡は、星飯大塚古墳にほど近い大垣市赤坂町に所在する遺跡で、国史跡である「東町田墳墓群」を含む。標高は六里遺跡・稻荷遺跡よりやや低いが、低位段丘に立地しているため、基盤は安定している。主に弥生時代の遺構・遺物が確認されているが、平成3～6年に大垣市教育委員会が実施した調査で、7世紀代の堅穴建物が3軒確認された。同じ大垣市内の一本松遺跡では、大垣市教育委員会による平成4年の第2次調査で、8世紀代の堅穴建物が3軒確認された。東町田遺跡と同様赤坂町に所在し、山麓の緩斜面に立地する。なお、3軒の内、SB03についてはカマドのみ検出され、堅穴建物の堅穴掘方は残存していなかった。座倉遺跡では、平成元年に大野町教育委員会が調査し、平安時代の堅穴建物や掘立柱建物などが確認された。六里遺跡から北西約1.3kmに位置し、地形も類似する。

この他、大野町教育委員会が平成24年度に実施した六里遺跡の調査（以下「24年度調査」という。）について、すでに公表されている図面等（大野町教育委員会2013）を用いて、計測を行った¹⁾。ただし、遺構の内容は明示されていないため、規模や長軸方位のみ記載した。また、岐阜市教育委員会が調査した御望遺跡と財団法人岐阜市教育文化振興事業団が調査した下西郷一本松遺跡は、立地や標高が類似し、地理的に六里遺跡・稻荷遺跡と比較的近いことから、参考事例として一覧表に含めた。

2 堅穴建物一覧表について

集成した堅穴建物一覧表の各項目は、以下のとおりである。

遺跡名 集成した遺跡の名称を記載した。集成した遺跡の概要は次項に記載した。

遺構名 文献に記載された名称を記載した。

時期 文献に記載された時期を、本報告の時期区分に置き換えて記載した。なお、特に時期が示されていないものは出土遺物から判断した。

平面形 今回集成した竪穴建物は、形状がわかるものはすべて方形又は長方形であった。このため、全容が不明なものは「方形か」と記載した。

長軸・短軸 平面形から長軸とそれに直交する短軸の上端の長さを、図面から計測した。重複により全容が不明なものは、残存値を括弧で示した。

面積 長軸・短軸から面積を算出した。

長軸方位 北を起点に長軸が東西にどの程度傾いているかを図面から計測し、本書の記載に合わせて「N-●° -E (W)」と記載した。平面形が歪な遺構は、直交する2辺を基準に計測した。

南北軸からのずれ 算出に当たっては、まず西に傾く長軸を直交する東の傾きに換算し、この数値から45°を引くことで、平均となる北東方向からの分散を算出した。その上で、算出した数値を45で割り（マイナスの値はプラスに補正）、その比率をパーセントで示した。従って、割合が高いほど方が南北軸に近いことを示す。

煙道タイプ 平成4年の集成でも示されているとおり、カマドの煙道は竪穴建物の掘方（以下、「竪穴掘方」という。）から突出するものと突出しないものに大きく分けることができる。谷氏の分類（谷1992）では、さらに竪穴掘方の突出について詳細な細分が行われている。ここでは、六里遺跡・稻荷遺跡の検出例等を参考に、第254図のような分類を行った。なお、平成4年の集成にもあるとおり、A類にはB類やC類の上面が削平された可能性のあるものも含むと思われる。

A類 竪穴掘方から煙道が突出しないもの。

B類 カマドが接する竪穴掘方が竪穴掘方外にやや突出するもの。

C類 カマドは竪穴掘方内に構築し、煙道が長く延びるもの。

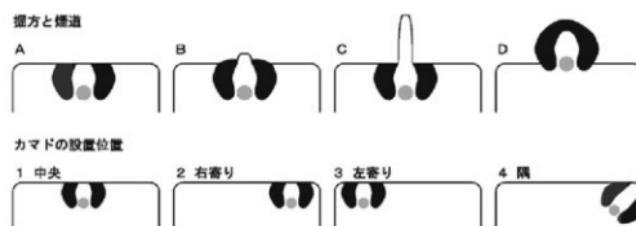
D類 カマドそのものが竪穴掘方外に構築されるもの。

カマド位置 竪穴掘方壁面とカマドの設置位置との関係について以下のとおり分類した。

1類 竪穴掘方中軸線上に設置されるもの。

2類 カマドの左袖が竪穴掘方中軸線より右に位置するもの。

3類 カマドの右袖が竪穴掘方中軸線より左に位置するもの。



第254図 カマド属性分類模式図

表121 西濃地域におけるカマドをもつ堅穴建物一覧表

遺跡名	遺構名	時期	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	面積 (m ²)	長軸方位	南北軸 からのお かれ	煙道 タイプ	カマド 位置	主柱穴	参考 文献
六里遺跡 (II4)	9号堅穴建物	III	方形	5.40	5.10	27.54	N 0° E	100%	—	—	—	3
下西跡一本松遺跡	SB 1	III	方形	4.98	(4.10)	—	N 4° W	91%	B	1か	c	4
下西跡一本松遺跡	SB 7	III	方形	5.91	(4.98)	—	N 71° W	58%	B	3	c	4
下西跡一本松遺跡	SB17	III	方形	6.13	5.04	30.9	N 81° E	80%	B	2	c	4
下西跡一本松遺跡	SB26	III	方形か	(3.29)	(2.02)	—	N 1° W	98%	不明	不明	不明	4
下西跡一本松遺跡	SB29	III	方形	4.70	4.30	20.21	N 46° W	2%	Cか	2	c	4
下西跡一本松遺跡	SB 2	IV a	方形	6.00	4.10	24.6	N 52° W	16%	不明	2	c	4
下西跡一本松遺跡	SB 5	IV a	方形	3.18	3.14	9.99	N 33° W	27%	B	2	a	4
下西跡一本松遺跡	SB 6	IV a	方形	4.60	3.66	16.84	N 24° E	47%	C	1	c	4
下西跡一本松遺跡	SB11	IV a	方形	6.12	4.12	25.21	N 20° E	56%	B	1	c	4
下西跡一本松遺跡	SB22	IV a	方形	5.90	(3.20)	—	N 72° E	60%	不明	不明	c	4
下西跡一本松遺跡	SB28	IV a	方形	5.10	4.60	23.46	N 60° E	33%	B	1	c	4
六里遺跡 (II4)	8号堅穴建物	IV bか	方形か	5.06	3.79	19.18	N 30° W	33%	—	—	—	3
六里遺跡	S11	IV b	方形	5.44	(5.36)	—	N 41° E	9%	不明	不明	a	本番
六里遺跡	S12	IV bか	方形か	(4.30)	(1.26)	—	N 70° E	56%	不明	不明	aか	本番
六里遺跡	S13	IV bか	方形	4.81	4.76	22.9	N 48° W	7%	不明	不明	aか	本番
六里遺跡	S15	IV b	方形	(2.66)	(2.11)	—	N 51° E	13%	不明	不明	aか	本番
六里遺跡	S16	IV b	方形	6.36	6.24	39.69	N 47° E	4	横造不明	1か	a	本番
六里遺跡	S17	IV b	方形	4.00	3.20	12.8	N 70° E	56%	C	1	礫石か	本番
稻荷遺跡	S14	IV b	方形	4.53	3.67	16.63	N 72° E	50%	A	1	a	本番
六里遺跡 (II4)	1号堅穴建物	IV cか	方形	3.47	2.88	9.99	N 27° W	40%	—	—	—	3
六里遺跡 (II4)	2号堅穴建物	IV cか	方形	3.55	2.80	9.94	N 46° W	2%	—	—	—	3
六里遺跡 (II4)	3号堅穴建物	IV cか	方形	3.81	2.91	11.09	N 7° E	84%	—	—	—	3
六里遺跡 (II4)	10号堅穴建物	IV cか	方形か	3.44	(2.22)	—	N 39° W	13%	—	—	—	3
東町三日遺跡	SB03 (I区)	IV a	方形	5.10	(3.30)	—	N 28° E	38%	A	2	a	2
東町三日遺跡	SB04 (II区)	IV c	方形	5.60	4.15	23.24	N 31° E	31%	A	1	aか	2
東町三日遺跡	SB05 (V区)	IV c	方形	5.40	5.10	27.54	N 51° W	13%	A	1	a	2
六里遺跡	S14	IV dか	方形	2.74	2.56	7.29	N 16° E	64%	なし	なし	c	本番
御室遺跡	SB16 (B区)	IV cか	方形か	不明	不明	—	N 69° E	53%	不明	不明	—	5
御室遺跡	SB07 (A区)	IV ~ V	方形か	不明	不明	—	N 36° W	20%	不明	1か	c	5
御室遺跡	SB08a (A区)	Vか	方形か	(3.80)	(2.60)	—	N 45° E	0%	不明	不明	c	5
御室遺跡	SB02 (B区)	Vか	方形か	(2.40)	(2.15)	—	N 1° E	98%	不明	不明	不明	5
御室遺跡	SB03 (B区)	Vか	方形か	不明	不明	—	N 11° W	76%	不明	1か	c	5
御室遺跡	SB04 (B区)	V ~ VI	方形	3.90	3.60	14.04	N 58° E	43%	A	2	c	5
御室遺跡	SB05 (B区)	IV ~ V	方形	不明	不明	—	N 18° W	65%	不明	不明	c	5
御室遺跡	SB06 (B区)	IV ~ V	方形	不明	不明	—	N 16° W	64%	不明	不明	c	5
御室遺跡	SB07 (B区)	V a	方形か	(2.80)	(1.10)	—	N 10° W	78%	不明	不明	不明	5
御室遺跡	SB08 (B区)	V a	方形か	(3.10)	(1.30)	—	N 15° W	57%	Dか	2か	不明	5
御室遺跡	SB09 (B区)	V a	方形か	3.30	(2.10)	—	N 23° W	49%	B	2か	不明	5
御室遺跡	SB12 (B区)	Vか	方形か	不明	不明	—	—	—	不明	1か	c	5
御室遺跡	SB13 (B区)	Vか	方形か	不明	不明	—	N 72° E	60%	不明	不明	c	5
御室遺跡	SB14 (B区)	V a	方形	3.90	3.90	15.21	N 8° W	82%	Bか	2	c	5
御室遺跡	SB15 (B区)	V bか	方形	不明	不明	—	N 87° E	93%	B	1 ~ 2	c	5
御室遺跡	SB17 (B区)	V c	不定形	(2.50)	2.10	—	N 10° E	78%	なし	なし	c	5
御室遺跡	SB18 (B区)	Vか	方形か	不明	不明	—	N 85° E	89%	不明	2か	c	5
御室遺跡	SB20 (B区)	Vか	方形か	不明	不明	—	N 6° W	87%	不明	不明	c	5
稻荷遺跡	S12	V b	方形	4.69	(2.96)	—	N 84° E	87%	構造不明	R1か	b	本番
稻荷遺跡	S15	V b	方形	3.30	3.25	10.75	N 7° W	84%	B	2	b	本番
稻荷遺跡	S18	V b	方形	3.62	3.36	11.83	N 75° E	67%	A	1	b	本番
稻荷遺跡	S110	V b	方形	3.88	3.66	14.19	N 30° W	33%	A	2	b	本番
稻荷遺跡	S111	V b	方形	2.85	2.80	7.97	N 23° W	49%	A	2	b	本番
稻荷遺跡	S112	V b	方形か	(1.45)	(0.90)	—	N 28° W	38%	B	1	不明	本番
稻荷遺跡	S113	V b	方形か	(1.60)	(1.22)	—	—	—	不明	不明	不明	本番
稻荷遺跡	S115	V b	方形か	(4.20)	(1.68)	—	N 23° W	49%	B	1	不明	本番
稻荷遺跡	S116	V a堅穴跡	方形か	—	—	—	—	—	不明	不明	不明	本番
稻荷遺跡	S117	V b堅穴跡	方形か	(2.75)	(1.79)	—	N 24° W	47%	不明	不明	不明	本番
稻荷遺跡	S118	V b	方形か	2.92	(1.27)	—	N 15° W	67%	不明	不明	不明	本番
一本松遺跡	SB01	V bか	方形	4.05	2.80	11.34	N 34° W	24%	D	3	c	6
一本松遺跡	SB02	V bか	方形	3.60	3.40	12.24	N 9° E	80%	不明	4	c	6
稻荷遺跡	S11	V1 a	方形	3.64	3.49	12.69	N 5° E	92%	C	2	b	本番
稻荷遺跡	S16	V1 a	方形	3.01	2.85	8.56	N 18° W	60%	構造不明	2	b	本番
稻荷遺跡	S17	V1 a	方形	3.98	(3.04)	—	N 58° E	29%	不明	不明	b	本番
稻荷遺跡	S19	V1 a	方形か	(2.82)	(1.60)	—	—	—	A	2	不明	本番
河内遺跡	第1号住居跡	V1 a	方形	2.92	2.23	6.51	N 84° E	87%	C	1	c	1
御室遺跡	SB11 (B区)	V1 a	方形	2.80	2.04	5.71	N 84° E	87%	D	2	c	5
六里遺跡 (II4)	6号堅穴建物	V1 b ~ e	方形	2.56	2.46	6.3	N 1° E	98%	—	—	—	3
稻荷遺跡	S13	V1 b	方形	2.69	2.38	6.17	N 77° E	71%	B	2	b	本番
稻荷遺跡	S14	V1 b	方形か	(4.72)	(2.12)	—	N 3° W	93%	不明	不明	bか	本番
稻荷遺跡	第1号堅穴建物	V1 b	方形	2.78	2.32	6.45	N 7° E	84%	なし	なし	c	1

4類 壇穴掘方の隅に設置されるもの

主柱穴 今回集成した遺構については主柱穴について明確な記載のないものが多かったため、図面上から判断できる内容について、以下のとおり分類した。なお、a類については今回の調査における六里遺跡の事例から、深さが0.15m以上あることを基準とした。

a類 明確な掘り込みのある主柱穴が同心円上に配置されるもの。

b類 明確な掘り込みはないが、同心円上の配置が認められるもの。

c類 同心円上の配置が認められないもの、又は掘り込みのないもの。

文献 節末尾の脚注に示した文献の番号を記載した²⁾。

3 集成結果

(1) 各時期の様相（第IR95図）

Ⅲ期 六里遺跡の9号竪穴建物（24年度調査）と下西郷一本松遺跡の5軒（財団法人岐阜市教育文化振興事業団2000の時期区分7期）がある。いずれも5世紀後半の遺構であり、美濃地方におけるカマドの出現期とされる時期である。建物規模は一辺が5m以上あり、長軸方位は南北軸に近いものが多い。カマドの煙道が壇穴掘方からやや突出するものがあり、下西郷一本松遺跡のSB29では、カマドに接した竪穴掘方外で炭化物の散布が報告され、壇穴掘方外へ延びる煙道の存在が示唆されている。この時期はカマドの設置位置に明確な特徴は認められず、主柱穴も不明確である。

Ⅳa・Ⅳb期 下西郷一本松遺跡の6軒（8期）と六里遺跡の5号竪穴建物（24年度調査）、六里遺跡のSI 1～3及びSI 5～7、稻荷遺跡のSI 4がある。下西郷一本松遺跡の竪穴建物は、六里遺跡より時期の古い遺構が含まれている可能性が高い。前時期に引き続き、一辺5m以上の竪穴掘方をもつものが多いが、下西郷一本松遺跡 SB 5や六里遺跡のSI 7のように小規模な竪穴掘方のものも認められる。長軸方位は南北軸から傾いたものが多く、下西郷一本松遺跡ではⅢ期との違いが認められる。六里遺跡では、SI 1・3・5・6に特徴的類似性があり、位置も近いことから何らかのまとまりを示す可能性がある。一方、六里遺跡5号竪穴建物（24年度調査）及びSI 2・7、稻荷遺跡SI 4にも類似性が認められるが、これらは立地する場所が互いに離れており、SI 1等とは、詳細な時期が異なる可能性がある。煙道タイプは遺存状態が良好な事例が少ないが、下西郷一本松遺跡 SB 6や六里遺跡 SI 7にはC類が認められる。主柱穴は、下西郷一本松遺跡では不明確なものが多いが、六里遺跡では同心円上に配置された明瞭なものが認められる。なお、六里遺跡SI 7については、床面で検出した河原石が柱の礎石である可能性について指摘した（第3章第4節）。

Ⅳc・Ⅳd期 六里遺跡（24年度調査）4軒と東町田遺跡3軒がある。六里遺跡のものはいずれも規模が小さく、長軸方位に若干ばらつきがある。東町田遺跡では前時期と規模は変わらない。Ⅳd期の可能性がある六里遺跡のSI 4はさらに小規模で、カマドをもたない特殊な遺構である。カマド位置がわかる事例は東町田遺跡のみであるが、カマド部分の竪穴掘方の突出ではなく、カマドは竪穴掘方中軸線上に設置される。主柱穴は、東町田遺跡で同心円上に配置された明瞭なものが認められる。

V期 御望遺跡17軒と稻荷遺跡11軒、一本松遺跡2軒がある。御望遺跡については遺存状態が悪いものが多く、規模がわかるものは2軒のみである。また、時期は稻荷遺跡より古いⅤa期のものが含まれている可能性が高い。一本松遺跡は出土遺物からVb期とほぼ同じ時期の遺構と思われる。前時

期と比較すると堅穴掘方が小型化し、一辺が5mを超えるものが認められない。長軸方位は、稻荷遺跡の事例で西部のSI 2・5、東部のSI10～17、SI 8・18の3グループに分けることができ、いずれも近接している。カマドはA・B類が多いが、一本松遺跡のSB01のように堅穴掘方外に設置されるD類も認められる。設置位置は堅穴掘方中軸線上又は右寄りが多い。なお、一本松遺跡 SB02のように堅穴掘方隅に設置された可能性のあるものは、他の遺跡では確認できなかった。主柱穴は、稻荷遺跡のように壅み状の浅いものか、御望遺跡のように確認できないもので、a類は認められなかつた。VIa・VIb期 御望遺跡1軒と稻荷遺跡6軒、六里遺跡(24年度調査)1軒、座倉遺跡2軒がある。御望遺跡SB11は9世紀代の須恵器が出土しているため当期に含めた。座倉遺跡は堅穴建物とされているのは1軒のみであるが、参考事例として1号堅穴状遺構を掲載した。IV期より堅穴の小型化が進み、一辺4mを超えるものも認められない。どの遺跡でも長軸方位が南北軸に近いものが多くなり、IV期との違いは明瞭である。煙道タイプは様々なものがあるが、カマドはいずれも堅穴掘方中軸から右寄りに設置されるものが目立つ。主柱穴はb類又はc類で、a類は認められなかつた。

(2)まとめ

今回の検討によって、カマドをもつ堅穴建物について、いくつかの特徴を抽出することができた。

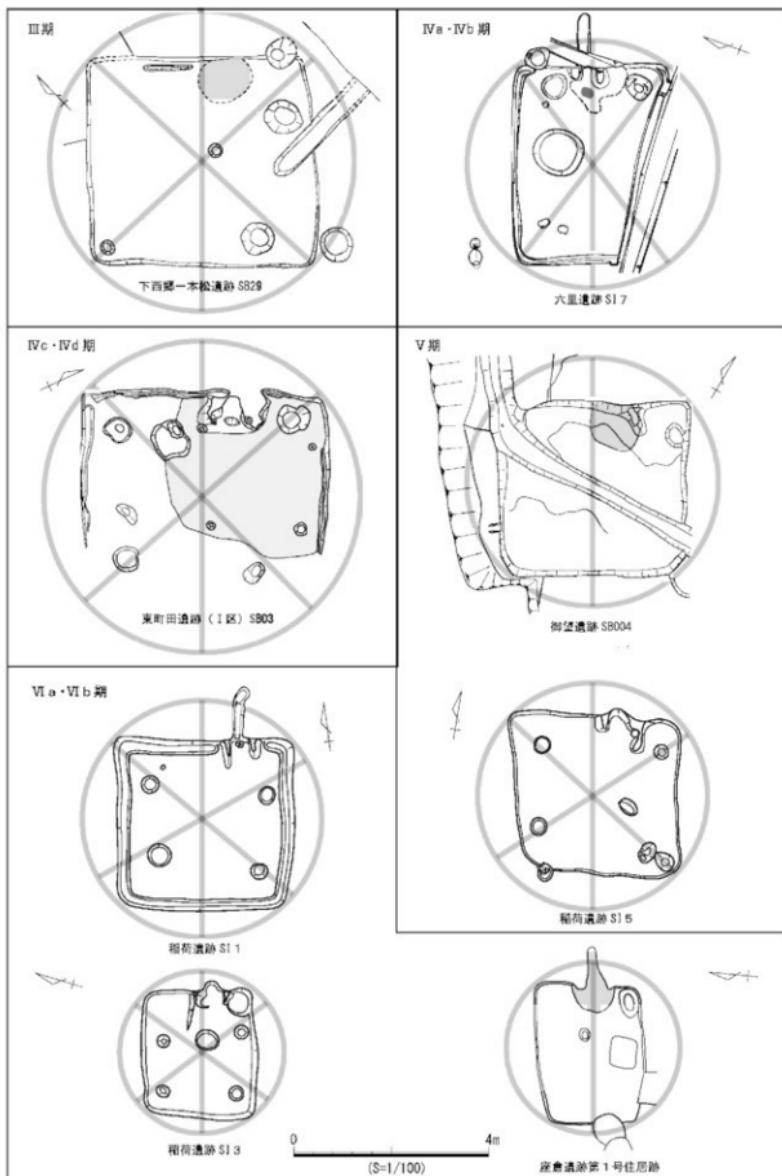
①建物規模は縮小化する傾向があり、III・IV期には一辺5mを超えるものが認められるが、V期には5m未満、VI期には4m未満となる。

②長軸方位により、まとまりを抽出できる可能性を指摘することができた。また、III期やVI期においては、南北軸に近い傾向がある。

③煙道タイプの明確な傾向は、遺存状態の問題もあり見出せなかつたが、煙道が屋外へ長く延びるC類は各時期で認められる。設置位置は堅穴掘方中軸線上か右寄りが多く、左寄りのものは少ない。

④主柱穴はIV期以前はa類が多いが、V期以降はb類、c類のみとなる。

①については、比較的明瞭な傾向である。ただし、六里遺跡 SI 7のようにIV期でも小型のものや稻荷遺跡 SI14のようにVI期でも大型のものが存在し、堅穴建物の規模によって、性格が異なる可能性がある。②は、平安時代以降南北軸を基準とした土地区分が、浸透しつつある可能性がある。稻荷遺跡では、溝状遺構等には同時期における長軸方位の変化が確認できないため、一般的な傾向とするには、他地域の類例を検証する必要がある。③の煙道C類は、堅穴掘方壁面から横穴をあけるものや、堅穴掘方から溝状に延ばすもの³⁾が削平により煙道の一部が残存したものと考えられ、遺存状態の良い資料により検証を進める必要がある。カマドの設置位置については、時期にかかわらず堅穴掘方中軸線上の右側に寄せる例が多いことが特筆される。六里遺跡は1類でカマドの両側に貯蔵穴を配し、東町田遺跡 SB 1は2類で、狭くなった右隅に主柱穴が配される。稻荷遺跡 SB 3は2類で右隅に貯蔵穴、座倉遺跡第1号住居跡は1類で同様に貯蔵穴と思われる土坑が認められる。D類を除くカマドは堅穴建物の床面の一定の場所を占める構造物であり、その両脇を活用するために工夫された結果、片側に寄せたことが考えられる。ただし、右側に寄せる例が多いことは、地域的傾向や当時の屋内利用に関する慣習などによる可能性を秘めている。④は①と同様比較的明瞭な傾向である。柱穴によって柱を固定する構造でない場合、屋根の重量によって安定させる必要があり、規模の縮小傾向と主柱穴の変化は、堅穴建物の構造が違うことを示す可能性がある。今後は、六里遺跡 SI 7のように、



第255 図 各時期の整穴建物（引用文献の遺構図をトレースして転載、一部改変）

床面上に置かれた礫などにも注目していく必要があると思われる。ただし、Ⅲ期の下西郷一本松遺跡では明確な柱穴が検出されておらず、時期的あるいは地域的な傾向なのかを、他地域の類例を含めて検討する必要がある。

注

- 1) 大野町教育委員会から六里遺跡 24 年度調査における全体図原図の提供を受けた。また、出土遺物の実見について御協力を得た。
- 2) 表の引用文献は以下のとおりである。
 - 1 高木宏和 1990『座倉遺跡』大野町文化財調査報告書第 1 集 大野町教育委員会
 - 2 大垣市教育委員会 2004『東町田遺跡』大垣市埋蔵文化財報告書第 14 集
 - 3 大野町教育委員会 2013『大野町史跡 条里跡（六里遺跡）の発掘調査』平成 25 年度岐阜県発掘調査報告会配付資料
 - 4 財団法人岐阜市教育文化振興事業団 2000『下西郷一本松遺跡』（財）岐阜市教育文化振興事業団報告書第 6 集
 - 5 大垣市教育委員会 1994「一本松遺跡（第 2 次調査）」『大垣市埋蔵文化財調査概要 平成 4 年度』
 - 3) 谷氏によれば、「地山を掘り抜いたトンネル状のもの、溝を掘って被覆したもの、土器を接続した土管状のもの」があるとされ、F 類として一括されている（谷 1997）。

第2節 六里遺跡の土器埋設遺構について

県内の縄文時代晩期の土器埋設遺構については、平成 12 年に集成が行われ（春日井 2000）、この中で美濃地域は 18 遺跡が挙げられている。その後、恵那市串原町の大平遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006）、揖斐川町の櫛原村平遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007）、大垣市の荒尾南遺跡 A 地区（岐阜県文化財保護センター 2013）で確認された。これまで県内で確認された土器埋設遺構は後世の搅乱を受けている例が多いが、今回の調査で検出したものは遺存状態が良く、設置状況を考える上で重要な資料になると考えられる。以下に、今回検出した土器埋設遺構の埋設形態と位置について検討するとともに、同時期の他遺跡における検出例との比較を行う。

1 埋設形態

西日本における縄文時代晩期中葉の土器埋設遺構については、人骨が土器内容物として遺存している事例などから「土器棺」として使用されたことは確実とする見解がある（立岡 2000）。今回の調査では埋設土器の内部から人骨が出土しなかったため埋設土器としたが、一般的に「土器棺」とされる遺構と類似する形態を持つ。中村氏は「土器棺」の埋設形態について 8 類の分類を行っている（中村 1996）。今回検出した土器埋設遺構は、この内、B 類、D 類、G 類に当たると考えられ、それ以外に SJ 9・SJ11 のような複合的な要素を含むものも認められる。以下に、六里遺跡の土器埋設遺構を分類（第 256 図）し、その詳細を述べる。

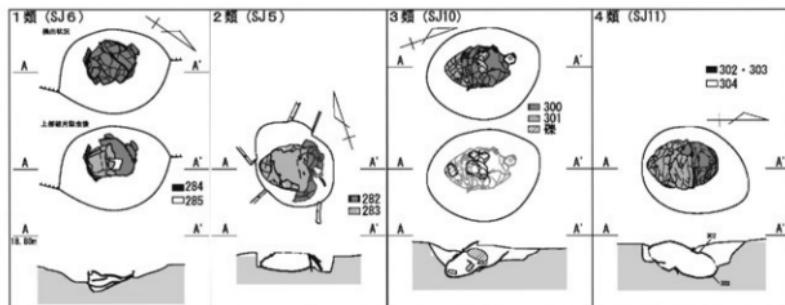
1類 同一個体の土器片を組み合わせて設置するもので、中村氏のB類に当たる。今回確認したのはSJ 6 の1基である。SJ 6 は2個体の土器が使用されているが、小型の頸部屈曲深鉢（285）を別個体の深鉢（284）の破片で覆うように設置されていた。ほぼ設置当初の状況を留めていると考えられるが、284・285ともに底部破片を欠く特徴がある。時期は異なるが、土器片を組み合わせる埋設形態は、大平遺跡SZ 4で認められる。

2類 横位又は斜位に設置した土器に、別個体の土器の破片を蓋として被せるもので、中村氏のD類に当たる。今回の調査ではSJ 3～SJ 5、SJ 8がこれに該当する。蓋の被せ方は、同一個体の大型破片を被せたもの（SJ 3）、複数個体の破片を蓋に用いたもの（SJ 4・SJ 8）、同一個体の破片を組み合わせて蓋としたもの（SJ 5）がある。蓋として用いられた破片は接合するものは多いが、いずれも完形にはならない。また、体部下半を欠くものが多い。その中で、SJ 4は体部を含む比較的小型の破片を集めて蓋とする特徴をもつ。遺構の時期は、いずれもI b期である。

3類 横位又は斜位に設置した同一器種の土器を、口縁部同士で合わせて設置するもので、中村氏のG類に当たる。今回の調査ではI b期のSJ 1・SJ 2、I c期のSJ 10がこれに該当する。SJ 1・SJ 2は、口径が異なる深鉢を深く組み合わせる特徴があり、SJ 10のように、ほぼ同じ口径の2個体を組み合わせたものとは若干異なる。

4類 2類と3類の2つの要素をもつもので、SJ 9・SJ 11が該当する。SJ 9は298の中に底部を欠く297を合わせ口で設置し、さらに296の破片を蓋としている。このような事例は、戸入村平遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター 1994）SZ 7にも認められる。SJ 11は完形の深鉢（304）の口縁部に2個体の深鉢で蓋をするが、蓋とした破片の内、上に置かれた方（302）の口縁部と304の口縁部を合わせた擬似的な合わせ口形態をもつ。

5類・6類 5類は設置形態（正位・横位など）にかかわらず土器1個体を埋設するもので、中村氏のA類に当たる。6類は異なる器種を組み合わせるもので、中村氏のE類若しくはF類に当たる。とともに今回の調査では確認できなかったが、第3項における同時期の遺構の集成では、いんべ遺跡や戸入村平遺跡で5類、はいづめ遺跡で6類が認められたため、分類に加えた。



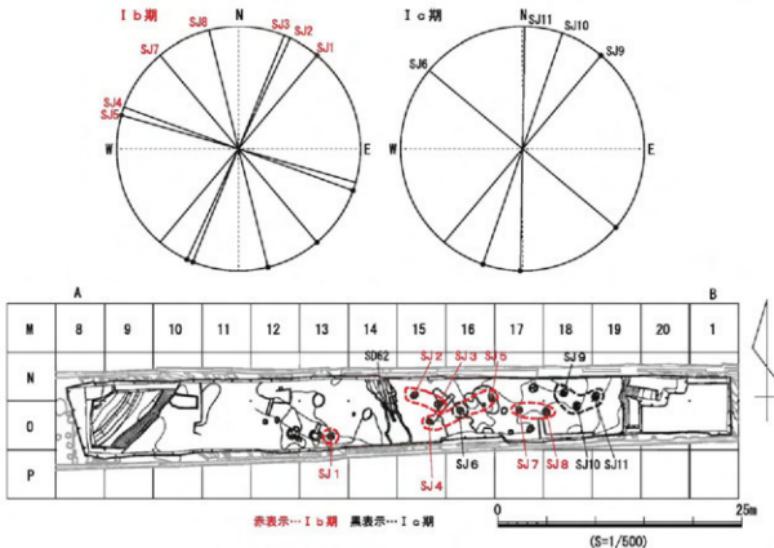
第256 図 六里遺跡における土器埋設遺構の分類

2 遺傳の分布

第257図に、六里遺跡の土器埋設遺構の長軸方位と位置を示した。長軸方位は埋設土器の中軸線で計測した。「●」を付けた方位が、主となる土器のある方向である。I b期がA013グリッドからA018グリッドまで広がっているのに対し、I c期はA016グリッドに単独で位置するSJ 6とAN18～AN19グリッドに集中するSJ 9～SJ11に分かれる。長軸方位では、位置が比較的近いSJ 2とSJ 3、SJ 7・SJ 8、SJ 9～SJ11がそれぞれ近似している。SJ 4・SJ 5は若干離れているが、長軸方位や埋設形態（2類）に類似点があり、SJ 1とSJ 2は長軸方位や土器の埋設形態（3類）が類似するが、位置は他のものと比べると離れている。今回の調査は発掘区の幅が約10mしかない狭い範囲での検出状況であるため断定はできないが、土器埋設遺構が位置や長軸方位にまとまりをもって設置されていた可能性を示すと考えられる。

3 他遺跡の状況

第2節冒頭で述べた遺跡の内、六里遺跡の土器埋設遺構と同時期と考えられる遺構が確認されたのは、北裏遺跡（大江他 1973）、はいづみ遺跡（岐阜県教育委員会 1989）、戸入村平遺跡、上原遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター 1998）、いんべ遺跡（財団法人岐阜県文化財保護センター 2000）、櫛原村平遺跡¹¹がある。北裏遺跡の土器埋設遺構は、土器の埋設状態などに不明な点が多いため、それ以外の遺跡から I b・I c 期の土器埋設遺構を抽出し、表 122 にまとめた。遺構の規模や長軸方



第257 図 土器埋設遺構の長軸方位と配置

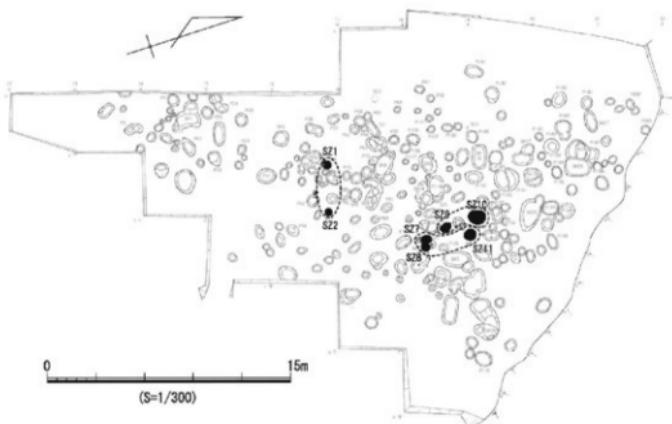
位は報告書の記載に従ったが、記載のないものは図上で計測した。はいづめ遺跡の土器埋設遺構は「五貫森式期から下り松式期」と表記されたものが多いが、六里遺跡の土器埋設遺構と類似する土器が使用されているものを抽出した。いんべ遺跡・戸入村平遺跡は「粗いミガキ」を施す土器や「滋賀里Ⅲb式期」と記載のあるものを抽出したが、六里遺跡では認められない器形の土器も多く、時期幅がある可能性がある。櫛原村平遺跡については報告書に明確な時期の記載はないが、SK110にA 2 c類の土器が用いられていることから、隣接するSK111を含めて抽出した。

土器埋設遺構の掘方 いずれも長軸が1m未満で、類似する規模をもつ。これは使用されている土器の大きさがほぼ同じであり、これに合わせて土器を設置する穴を掘り込んだものが多いと推定される。なお、六里遺跡では掘方底面に土器が置かれていたもののみであったが、掘方の埋土中に設置されている事例が多く認められた。

設置及び埋設形態 いんべ遺跡及び戸入村平遺跡では、六里遺跡ではない5類が認められる。前掲の集成結果を受けて春日井氏は、「晚期前半の段階では正位埋設例が多く、後半になって横位埋設例が増加し優位となる」としており（春日井 2000）、時期的に古い要素と思われる。なお、いんべ遺跡の事例は別個体の土器が共伴しており、5類ではない可能性もある。埋設形態が明確なものは、I b期は2類が11例で3類が4例、I c期は2類が3例で3類が2例あり、基数は少ないとI c期の方が3類の比率が高い。4類では、戸入村平遺跡のSZ 7で、時期は異なるが六里遺跡SJ 9と同様な土器の埋設形態が認められた。しかし、残存状態の関係からSJ11のような事例は認められなかった。5類とした単独のものも報告されているが、上面を削平された可能性もあり詳細は不明である。6類ははいづめ遺跡の第12号土器棺で認められ、壺と深鉢による合わせ口の埋設形態をもつ。なお、今回

表122 美濃地域におけるI b・I c期の土器埋設遺構

番 号	遺跡名	遺構名	掘方(m)			主軸方位	埋設 形態	特徴
			長軸	短軸	深さ			
1	六里遺跡	SJ1	0.75	0.64	0.26	N 40°	3類	I b
2	六里遺跡	SJ2	0.81	0.74	0.27	N 25°	3類	I b 内部に石皿
3	六里遺跡	SJ3	(0.76)	(0.70)	0.28	N 22°	2類	I b
4	六里遺跡	SJ4	0.80	0.57	0.16	N 70°	2類	I b
5	六里遺跡	SJ5	0.78	0.60	0.16	N 74°	2類	I b
6	六里遺跡	SJ7	0.74	0.70	0.13	N 40°	不明	I b
7	六里遺跡	SJ8	0.89	0.74	0.25	N 14°	2類	I b 内部に石皿 川原石配置
8	はいづめ遺跡	第14号土器棺	—	—	—	N 25°	3類か	I b
9	はいづめ遺跡	第16号土器棺	—	—	—	N 42°	3類	I b 川原石配置
10	はいづめ遺跡	SZ 1	0.60	0.50	0.35	—	不明	I b
11	はいづめ遺跡	SZ 2	0.70	0.45	0.29~0.39	N 35°	2類	I b
12	はいづめ遺跡	SZ 7	0.75	0.65	0.35	N 38°	2類	I b
13	はいづめ遺跡	SZ 8	0.65	0.55	0.28	N 40°	3類	I b SZ 7 GSZ 8
14	はいづめ遺跡	SZ 9	0.63	0.50	0.38	N 18°	2類	I b 骨片出土
15	はいづめ遺跡	SZ10	0.60	0.55	0.30	N 68°	5類か	I b 立石あり
16	はいづめ遺跡	SZ11	0.75	0.60	0.30	N 48°	2類	I b
17	戸入村平遺跡	SZ 2	—	—	—	N 90°	2類	I b
18	戸入村平遺跡	SZ 4	0.77	0.38	0.22	N 44°	2類	I b か
19	戸入村平遺跡	SZ 5	0.33	0.33	0.13	—	5類	I b
20	戸入村平遺跡	SZ 7	0.97	—	0.13	N 50°	4類	I b か
21	戸入村平遺跡	SZ 9	0.49	—	0.13	N 29°	2類か	I b
22	戸入村平遺跡	SZ13	0.64	—	0.18	N 60°	2類	I e か
23	六里遺跡	SJ6	0.85	(0.70)	0.20	N 50°	1類	I c
24	六里遺跡	SJ9	0.87	0.67	0.19	N 40°	4類	I c
25	六里遺跡	SJ10	0.95	0.74	0.31	N 19°	3類	I c 内部に川原石
26	六里遺跡	SJ11	0.90	0.72	0.30	N 1°	2類	I c
27	はいづめ遺跡	第7号土器棺	—	—	—	N 64°	5類	I c 圓なし、骨片出土
28	はいづめ遺跡	第12号土器棺	—	—	—	N 90°	6類	I c
29	戸入村平遺跡	SZ 4	—	—	—	N 43°	3類か	I c
30	戸入村平遺跡	SK110	0.93	0.82	0.29	N 30°	3類	I c
31	戸入村平遺跡	SK111	0.78	0.64	0.21	N 16°	2類	I c か



第258 図 いんべ遺跡における土器埋設遺構の配置

の集成では、六里遺跡のSZ 6のような1類は認められなかった。

遺跡内の分布 六里遺跡の検出状況から、位置と長軸方位にまとまりが存在する可能性について指摘したが、いんべ遺跡では、報告書の中で「南東もしくは北西を向くものと、南西もしくは北東を向くもの」(財団法人岐阜県文化財保護センター 2000)、の2種があるとしており、前者がSZ 7・SZ 8・SZ11、後者がSZ 2・SZ 9・SZ10である(第258図)。SZ 7・SZ 8は、竪穴掘方が切り合う位置にあり、SZ11も両遺構から4m程度北に位置する。一方、SZ 2はSZ 1に隣接するが、SZ 9・SZ10からは大きく離れており、六里遺跡の状況に照らせば、SZ 2(-SZ 1)、SZ 7・SZ 8・SZ11、SZ 9・SZ10の3グループになると思われる。戸入村平遺跡では、発掘区中央にSZ 4・SZ 5・SZ 7・SZ13が横並びで配置されており、この内SZ 7とSZ13が隣接して長軸方位が類似する。いんべ遺跡ではI b期とした14号・16号土器棺は隣接しており、長軸方位が一致する²⁾。I c期の7号と12号においても設置位置が10m程度離れているが、長軸方位が南北軸から大きく傾く点では類似している。櫛原村平遺跡はSK110・SK111とともに同一グリッドで検出されており、長軸方位が類似している。

4 おわりに

今回の集成によって、六里遺跡で確認した土器埋設遺構の埋設形態が同時期の他の遺跡においても認められること、また、当該期の土器埋設遺構の一部がまとまりを構成して配置され、他の遺跡でも同様な配置が存在する可能性があることを指摘できた。春成氏は、晩期の埋葬人骨の抜歯や装身具から血縁の有無を基準とした埋葬場所の区分について言及しており(春成 1992)、土器埋設遺構が墓であるという観点に立てば、家族や血縁に基づく単位などの解釈は可能と思われる。しかし、今回は

同一遺跡内における土坑墓などに関する検討を行っていないため、墓域としての説明をするためにには、さらなる検討が必要になると考えられる。また、その他の今回対象とした遺跡は、結果的に、旧徳山村（現揖斐川町徳山）と六里遺跡という岐阜県西濃地方でも限られた地域の資料のみとなってしまったため、今後の調査事例の増加を待つて検討する必要があると考えられる。

注

1) 表の参考文献は以下のとおりである。

岐阜県教育委員会 1989『いづめ遺跡－徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』

財団法人岐阜県文化財保護センター 1994『戸入村平遺跡』徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査報告書第4集 岐阜県文化財保護センター調査報告書第11集

財団法人岐阜県文化財保護センター 1998『上原遺跡I』徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 岐阜県文化財保護センター調査報告書第36集

財団法人岐阜県文化財保護センター 2000『いんべ遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第55集

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007『植原村平遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第106集

2) 藤田氏は、いづめ遺跡の晩期中葉の土器棺をI群とし、「調査区西側に偏る」ことを指摘している（藤田 2013）。

第3節 六里遺跡・稻荷遺跡の出土土器について

六里遺跡・稻荷遺跡では、縄文時代から近世にかけての土器が出土している。本節では、この中でも縄文時代の遺物と古墳時代から古代にかけての土器に焦点を当て、その特性について検証する。

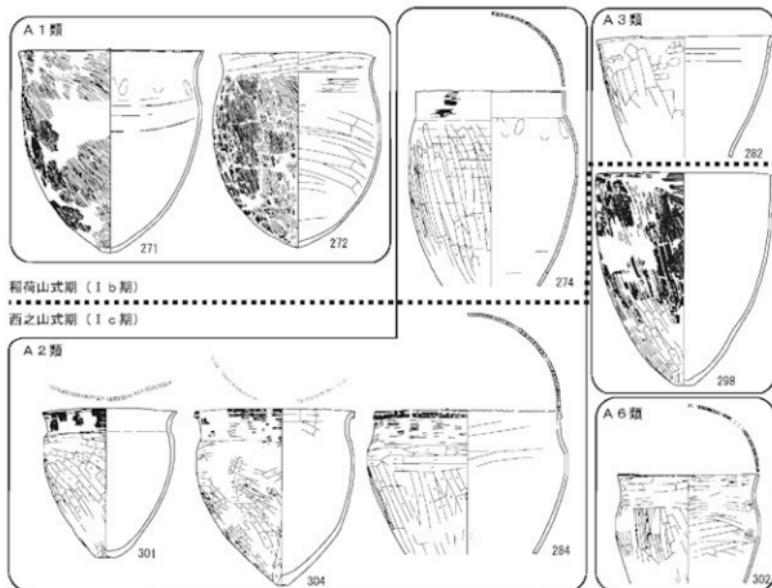
1 縄文時代晩期の土器について

これまで述べたとおり、今回出土した縄文土器は、大半が晩期中葉から後葉に属すると考えられる（第5章第3節）。特に第3調査面の遺構・遺物は、後世の影響を大きく受けておらず、遺存状態が良いこともすでに述べた。そこで、第3章第2節の縄文土器の分類と出土状況を対比し、遺跡の特性について検証を行う。

埋設土器 今回検出した土器埋設遺構は、第2節で述べたとおり、異なる個体の土器を組み合わせて設置されている。既存の研究では、A 1類が稻荷山式期（I b期）、A 2 c類が西之山式期（I c期）をそれぞれ代表する器形であり、今回の調査における時期区分の判断も、これによる部分が大きい。土器埋設遺構に埋設された土器は、異なる分類同士の共伴が認められ、これを整理することで各分類の同時性を検証することができると思われる。表123に、埋設土器の分類とその共伴について掲載した。なお、縄文時代晩期を示す「第II群」は、以下の記述では省略する。I b期としたものの共伴では、A 1 a類とA 1 b類が2例、A 1 a類とA 2 a類が3例、A 1 b類とA 3 c類が1例が認められる。一方、I c期とした共伴では、A 2 c類とA 2 b類が1例、A 2 c類とA 3 a類が1例、A 2 c類同士が1例、A 2 d類とA 6類が1例認められる。この共伴関係について代表的な土器を抽出し、

表123 埋設土器の分類と組み合わせ

分類	SJ2	SJ8	SJ1	SJ3	SJ4	SJ5	SJ7	SJ6	SJ9	SJ10	SJ11
A 1 a	○	○	○	○	○		○				
A 1 b	○	○				○					
A 2 a			○	○	○						
A 2 b							○				
A 2 c							○	○	○		
A 2 d										○	
A 3 a								○			
A 3 c						○					
A 6										○	



第259 図 埋設土器の分類と時期区分 (S=1/5)

第259図にまとめた。I b期ではA 1類(271・272)とA 2 a類(274)及びA 3 c類(282)、I c期ではA 2 c類(301)と突帯文をもつA 2 b類(284)又はA 3 a類(298)が共伴すると考えられる。SJ11のみ突帯文を持つA 2 d類(304)と今回細分できなかったA 6類(302)との共伴である。A 2 d類はA 2 c類と器形や外面調整の類似性は高いが、後述の遺物包含層出土土器の組成の検討から、六里遺跡のI c期の中でも新しい要素をもつ土器の可能性がある。

遺構出土土器 今回検出した遺構の多くは、I b期あるいはI c期に属する可能性があることは、第3章第5節すでに述べた。ここでは、土器埋設遺構以外の各遺構で出土した縄文土器の、分類ごとの組成について検討する。なお、数量の算出に当たっては、口縁部が残存する分類可能な土器を対象

表124 遺構から出土した縄文土器の分類と組成

分類	SK104	SK105	SK106	SK107	SK103	SK111	SK115	SK117	SL2	SL4	SD62	合計
A 1 a		0.08									0.08	0.16
A 1 b	0.08		0.17	0.08							0.33	
A 1										0.08		0.08
A 2 aか									0.08			0.08
A 2 b							0.08				0.08	0.16
A 2 c					0.17	0.21	0.75				0.58	1.71
A 2 d												0.00
A 2 e										0.08	0.08	0.16
A 2 f										0.08		0.08
A 2 g												0.00
A 2 h												0.00
A 2 i												0.00
A 2 j												0.00
A 2 kか								0.08				0.08
A 3 a											0.08	0.08
A 3 b												0.00
A 3 c											0.32	0.32
A 3 d												0.00
A 3 e												0.00
A 4												0.00
A 5												0.00
A 6											0.17	0.17
B 1						0.17						0.17
B 2												0.00
B 3												0.00
C 1												0.00
C 2												0.00
C 3						0.20			0.08			0.28
C 4												0.00
C 5												0.00
C 6									0.08			0.08
C	0.08	0.08									0.08	0.24
D		0.08									0.09	0.17
E					0.17							0.17
合計	0.08	0.16	0.33	0.08	0.17	0.38	1.20	0.08	0.16	0.32	1.56	4.52

※数値は口縁部個体数（単位：点）

とし、表示した数値は口縁部個体数である（第3章第2節参照）。

SK104～SK107では、深鉢はA 1類のみが出土し、浅鉢（C類）の細片が伴う。また、SK106では、大洞B C～C式期と考えられる異系統土器D類（341）が認められる。SK115では突帯文をもつA 2 b類（351）とA 2 c類（348等）が共伴する。また、外面をミガキ調整する壺（B 1類、352）や口縁部が外傾及び外反する浅鉢（C 3類、353等）も認められる。SL 2では素文突帯を施す浅鉢（306）が出土しているが、細片であるため詳細は不明である。SD62では、A 2 b類（326）と口縁部内面に沈線を施すA 2 e類（321）がA 2 c類（316等）と共に伴する他、砲弾型深鉢であるA 3 a類（322）・A 3 c類（323等）が出土している。逆に、第3調査面の土器埋設遺構を除く遺構から出土しなかった分類としては、頸部屈曲深鉢のA 2 d・A 2 g～A 2 j類、砲弾型深鉢A 3 b・A 3 d・A 3 e類、変容壺A 4、その他の突帯文をもつ深鉢A 5類、壺のB 2・B 3類、浅鉢C 1・C 2、C 4・C 5類がある。以上のように、遺構内から出土した遺物については、後述する遺物包含層と比較すると組成に偏りがある状況が認められる。

遺物包含層（VI a層） VI a層出土土器については、第3章第5節において出土した土器の特徴から、①AN 9～A012グリッド、②AN13～A014グリッド、③AN15～A018グリッド、④AN19・A019グリッドに区分した。第3章第5節の土器観察表で示したように、大型の破片については区分を超えて接合した事例も認められなかった。ここでは遺構出土遺物と同様の集計を区分ごとに行い、各分類における

る組成の検証を行った。また、堆積状況から、最終的な埋没時期がVI a層より新しいNR 3とIV・V層の出土遺物についても、比較のために組成を確認した。その集計結果を表125に示し、代表的な土器を第260図に掲載した。いずれの区分でもA 1類やA 2 c類が認められることについて、第3章第5節でも述べたとおり、発掘区全体に遺構が認められることから、各時期における活動域が重複した結果と考えられる。この他①において、C 2類の浅鉢(403)が認められる。②では突帯文をもつA 2 b類(448)、口縁部内面に沈線を施すA 2 e~g類(439)、外面に条痕を施すA 3 a類及びA 2 c類と類似する外面調整が認められるA 3 b類(447)、口縁部が外反及び外傾する浅鉢であるC 3類(460)が出土している。③では②と同様な土器に加え、A 2 c類に突帯を施すA 2 d類(513)や口縁端部の刻みが内面側に寄るA 2 h類(495)、口縁端部を面取りせず突帯を施すA 2 i類(517)が認められる。A 3類では、

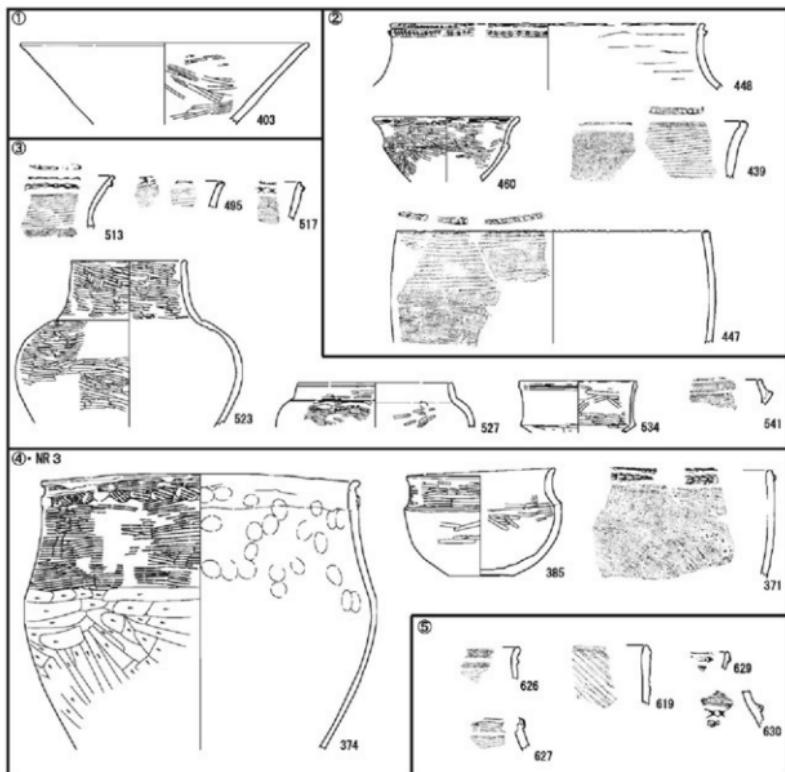
外面をナデやケズリ調整するc類は存在するが、b類は認められない。壺は馬見塚F地点型壺であるB 2類(523)と口縁部が短いB 3類(527)があり、浅鉢には逆く字口頸部浅鉢であるC 5類(541)と、素文突帯を施すC 6類(534)が認められる。④とNR 3は、遺物包含層掘削作業時に出土遺物が混在したためか、ほぼ同じような組成を示す。④又はNR 3に存在し③に認められないものとしては、突帯に幅広の二枚貝押圧を施すA 2 j類(374)と砲弾型深鉢に突帯を施すA 3 e類(371)、口縁端部に接して突帯を施すA 5 a類、口縁部を外反及び内傾する浅鉢C 4類(385)がある。⑤では、変容壺と考えられるA 4類(626・627)、粗い竹管状工具を施すA 3 d類(619)、突帯を施す壺B 4類(629・630)が認められる。

以上のように、各区分において違う要素を含む分類の数が増え、重層的になっている状況が窺える。これは、時期が新しくなるにつれて、第3調査面発掘区西部に活動の比重が移ったことを示すと思われる。中でも重要と考えられる点は、③で出土しているA 2 d類やA 2 h類が②には認められないことである。A 2 d類について松本氏は、西之山式の標識資料である大ノ木遺跡出土の突帯を施す土器が突帯文出現期の資料としてはやや新しいこと(松本2007)や、口縁端部に刻みを施す突帯文をもつ深鉢が五貫森式古段階まで存在する可能性があること(松本2009)を述べており、このタイプの深鉢が新しい要素であることを推察している。また、増子氏がA 2 h類に類似する土器を西之山式よ

表125 遺物包含層で出土した縄文土器の分類と組成

分類	①	②	③	④	NR 3	⑤	合計
A 1 a	0.08	0.33			0.08		0.49
A 1 b	0.25	0.27	0.63	0.43		0.25	1.83
A 2 a	0.08		0.33				0.41
A 2 b		0.33	0.25				0.58
A 2 c	0.17	3.23	1.67	1.53	0.40	0.58	7.58
A 2 d			0.33				0.33
A 2 e	0.25	0.17	0.08				0.50
A 2 f		0.08	0.25				0.33
A 2 g		0.17					0.17
A 2 h			0.17				0.17
A 2 i			0.17	0.64	0.75	0.65	2.21
A 2 j					0.40	0.25	0.65
A 2 k	0.32	0.74	0.17			0.11	1.34
A 3 a	0.17	0.40	0.33			0.34	1.24
A 3 b	0.33						0.33
A 3 c		0.43	0.08	0.17	0.27	0.27	0.95
A 3 d						0.08	0.08
A 3 e			0.08	0.25			0.33
A 4					0.08	0.08	0.08
A 5 a				0.08	0.08		0.16
A 5 b		0.08	0.08			0.08	0.24
A 6	0.71	0.08	0.08	0.08	0.25		1.20
B 1					0.08		0.08
B 2			0.66				0.66
B 3			0.10				0.10
B 4						0.08	0.08
C 1					0.26		0.26
C 2	0.22	0.08			0.17		0.47
C 3		0.57	0.25	0.20	0.08	0.08	1.18
C 4				0.08	0.51	0.17	0.76
C 5		0.33	0.68	0.65			1.66
C 6			0.59			0.51	1.10
D	0.58	0.17	0.18	0.25	0.17	1.35	
E			0.26				0.26
合計	0.72	7.17	8.39	4.72	4.21	3.95	29.16

※数量は口縁部個体数(単位:点)



第260図 各区分における組成上の特徴を示す土器 (S=1/6)

り新しい時期に位置付けていることはすでに述べた（第3章第2節）。これらの土器が出土する時期を編年上に位置付けるのは難しいため、今回の調査では I c 期に含めたが、②と③における組成の違いは、時期差を示している可能性が高い。なお、②に素文突帯の浅鉢が認められない点については、SL 2 では細片とはいえ出土しているため、本来は存在する可能性を残す。

これまで美濃地方で確認された当該期の土器は、同一面や同一造構で複数時期が混在する事例が多く、時期的な組成を考えることが困難な状況にあった。今回の調査により比較的良好な資料を得たことで出土状況に基づく検討を行うことができた。ただし、I b 期・I c 期については墓域の可能性が高く、それ以降については遺物包含層の出土遺物のみであり、当該期の土器組成全てが現れているとは言い難い面がある。また、対象とした資料には破片も多く含まれるため、今後の資料の蓄積を待つてさらに検討する必要がある。

2 古墳時代から古代の土器について

六里遺跡第2調査面及び稻荷遺跡から検出した集落跡は、IV b期からVI b期を主体とする。これらの時期判断は、主に遺構内から出土した土器によるが、各遺構によって様々な土器が出土している。ここでは、遺構出土遺物により各時期における土器組成を検討する。

検討対象とした遺構 今回の調査において最も遺物が多く出土した遺構は溝状遺構であるが、その大半は埋め戻し等に伴い様々な時期の土器が混在しているため、比較的時期的なまとまりがあると思われる竪穴建物出土遺物を対象とした。ただし、稻荷遺跡の遺構については、V・VI期の遺構でも、一定量のIV期の遺物を含んでおり、また、SI 5やSD14の事例（第4章第3節）にもみられるように、新しい時期の遺物が、遺構の埋没過程で混入する状況も考えられる。これらの遺物を意図的に除外することはできないため、今回の検証では、その量比から傾向を確認することを主眼とした。なお、対象とした遺構は遺物出土状況や出土量から選択し、IV b期が六里遺跡SI 1及びSI 7、V b期が稻荷遺跡SI10・SI11・SI15、VI a期が稻荷遺跡SI 1、VI b期がSI 3及びSI14とした。なお、組成の検証には、口縁部残存率による口縁部個体数を用いた（第3章第2節参照）。

種別ごとの組成（表126①） IV b期においては須恵器と土師器が認められ、その比率は6:4である。V b期では、須恵器の比率が高くなり、以降の時期に継続する。VI a期には灰釉陶器が出現し、VI b期において、比率が増加する。なお、前述のように稻荷遺跡においては時期が古い須恵器が一定量遺構に混入するため、V b期以降の組成に一部反映されている。

器種ごとの組成（表126②） 須恵器では、IV b期ではA類の壺類のみであったのに対し、V b期でB類・C類が卓越するようになる。また、これに加えて盤も認められる。碗・皿はV b期にも若干存在するが、VI b期を主体とする。壺は、V b期以降の遺構にみられIV b期には認められないが、SI 7では横瓶（57・58）が出土している。VI a期の灰釉陶器は、碗・皿類に加え、口縁部が残存していないため表示していないが、手平瓶（667）のような壺・瓶類も出土している。VI b期では深碗や輪花皿の他、口縁部が残存していない段皿（694）も出土している。土師器はIV b期で壺A類のみであるが、V b期以降ではB類が主体を占める。V b期には瓶の把手（707）も出土している。なお、壺身（790）とした土師器は、内外面の摩耗が著しいため回転ナデ調整が確認できないが、器形は須恵器の壺身に類似している。VI a期には、鍋とした土師器（670）があるが、細片であるため詳細は不明である。また、VI b期にSI14でロクロ土師器が出土しており、SD16では当該期の灰釉陶器との共伴が認められた（第4章第3節）。

用途ごとの組成（表126③） 出土した土器について、壺や碗・皿類を「食膳具」、須恵器の壺や壺・瓶類を「貯蔵具」、土師器の壺や鍋を「煮炊具」（宇野1989）として、用途ごとに集計した。その結果、各時期において食膳具・貯蔵具・煮炊具が存在し、当該地において生活を営んでいた状況が考えられるが、組成においては、IV b期に比べてV b期以降に大きな違いが認められた。IV b期の遺構については、食膳具や貯蔵具と比較し、破損しやすいうことからより消費量が多いと考えられる土師器の煮炊具が卓越する状況から、一般的な傾向と考えられる。一方V b期では、組成の8割以上を食膳具が占める状況が認められる。なお、V b期においては須恵器が食膳具の主体を占め、VI期以降灰釉陶器が採用されるようになったが、組成における食膳具の比率に変化はなかったと思われる。美濃地域においてはV期以降美濃須衛窯における生産が活発となり、当該地でもV期以降に美濃須衛窯の須恵

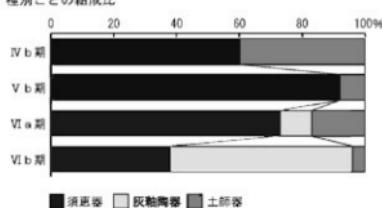
表126 古墳時代～古代の土器組成

①種別ごとの組成

時期	須恵器	灰釉陶器	土師器	合計
IV b 期	1.61		1.09	2.70
V b 期	10.71		0.98	11.69
VI a 期	5.90	0.77	1.38	8.05
VI b 期	3.08	4.69	0.33	8.10
合計	21.30	5.46	3.78	30.54

※数量は口縁部個体数（単位：点）

種別ごとの組成比



②器種ごとの組成

種別	器種	IV b 期	V b 期	VI a 期	VI b 期	合計
須恵器	壺蓋 A	0.08	0.08		0.23	0.39
須恵器	壺身 A		0.13		0.08	0.21
須恵器	壺蓋 B				0.08	0.08
須恵器	壺蓋 C		3.42	0.88	0.46	4.76
須恵器	壺身 B 2		0.73	0.93	0.09	1.75
須恵器	壺身 C		3.02		0.17	3.19
須恵器	壺身 B 又は C	2.00	1.45	1.47	4.92	
須恵器	鉢	0.08				0.08
須恵器	盤	0.35	0.17	0.68	0.60	
須恵器	碗	0.08	1.29	0.08	1.45	
須恵器	杓	0.30				0.30
須恵器	匡		0.90			0.90
須恵器	豆	0.08				0.08
須恵器	束坏	0.37				0.37
須恵器	壺		0.28	0.08	0.17	0.53
須恵器	短頸壺			0.21		0.21
須恵器	横瓶	0.39				0.39
須恵器	立瓶		0.08			0.08
須恵器	高脚			0.08	0.08	
須恵器	焼台	0.77				0.77
須恵器	不明	0.08			0.08	0.16
灰釉陶器	碗		0.25	2.64	2.89	
灰釉陶器	深碗			0.62	0.62	
灰釉陶器	皿		0.21	1.11	1.32	
灰釉陶器	耳皿		0.31		0.31	
灰釉陶器	輪花皿			0.33	0.33	
土師器	壺身	0.24				0.24
土師器	ロクロ土師器皿			0.08	0.08	
土師器	壺 A	1.09	0.17	0.17	0.08	1.51
土師器	壺 B		0.49	1.11	0.17	1.77
土師器	鍋			0.10		0.10
土師器	不明		0.08			0.08
合計		2.70	11.69	8.06	8.10	30.55

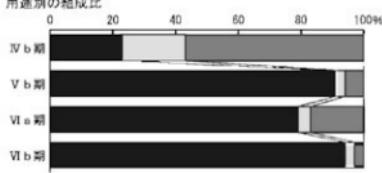
※数量は口縁部個体数（単位：点）

③用途ごとの組成

時期	食膳具	貯蔵具	烹炊具	合計
IV b 期	0.45	0.39	1.09	1.93
V b 期	10.51	0.36	0.66	11.53
VI a 期	6.38	0.29	1.38	8.05
VI b 期	7.52	0.25	0.25	8.02
合計	24.86	1.29	3.38	29.53

※数量は口縁部個体数（単位：点）

用途別の組成比



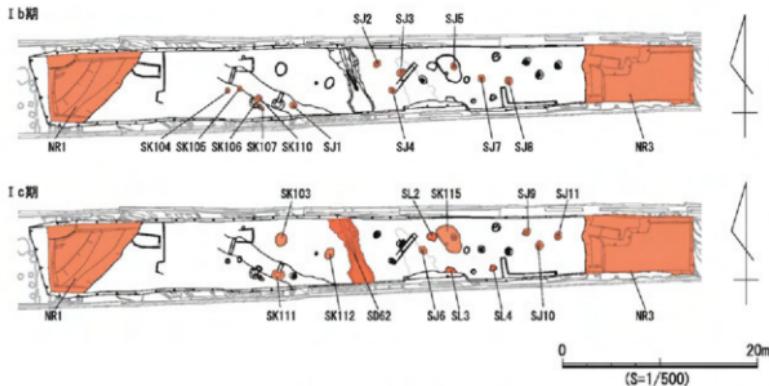
■ 食膳具 □ 貯蔵具 ■ 烹炊具

器が食器として多量に持ち込まれたと推定されるが、組成的に食器が主体を占めてIV b期と大きく異なる状況については、遺跡の特徴を示している可能性がある。稻荷遺跡発掘区の北に位置する里山稻荷神社境内では「美濃國」刻印須恵器が採集されており、また、近世には稻荷遺跡の東を流れる三水川が水運に利用されたことから、稻荷遺跡で確認した集落跡が、V期以降において、水運を背景として物資が集積する拠点的な性格をもった集落であった可能性も考えられる。ただし、官衙の可能性がある広畠野口遺跡（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2010）や官営工房的とされる野内遺跡B地点（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2009）と比較すると、文字と認識できる墨書き土器や硯などの特徴的な遺物は比較的少なく、公的な性格を持っていたかは不明である。今後の周辺の調査の進展を待って稻荷遺跡の集落跡の性格を、さらに検討する必要がある。

第4節 土地利用の変遷について

本項では、これまでの検討を踏まえ、今回の調査で確認した周辺の土地利用の変遷について考察する。なお、六里遺跡の24年度調査（第6章第1節参照）における発掘区は、今回の発掘区と座標を合わせて配置した¹⁰⁾。

I期 今回の調査で確認した最も古い遺物は、六里遺跡の縄文時代後期（I a期）の可能性がある土器である。大野町では、北部山麓古墳群の調査で縄文時代早期～中期の遺物が確認されているが、後期については今のところ例がない。ただし、大野町の公郷八木では地下約1.5mから大型の彫刻石棒が出土した事例（第2章第2節参照）もあり、当時の大野町の地形については不明な点が多い。I b期には、NR1及びNR3に挟まれた中洲状の微高地に、六里遺跡第3調査面で確認した土器埋設遺構や土坑が出現する。土器埋設遺構や土坑出土遺物はいずれも特徴が類似しており、大きな時期幅はないと思われる。第3章第5節でも述べたが、I b期の遺構は今回の六里遺跡第3調査面発掘区全体に広がっており、骨片の可能性がある白色粒が出土した土坑や土器埋設遺構を含めた墓域を形成していた可能性がある。I c期に遺物包含層や遺構から出土する遺物の量が増加する。I c期には、六里



第261図 土地利用の変遷（I期）

遺跡と地形が類似する大垣市の荒尾南遺跡や、本巣市の番場遺跡（岐阜県文化財保護センター 2016）にも当該期以降の土器が出土しており、当時の人々の揖斐川中流域沖積地への進出が始まった可能性がある。六里遺跡では、特に AN13～A014 グリッドにおいては質・量ともに顕著で、当該期の溝状遺構と思われる SD62 以西を土器捨て場にしていた可能性が考えられる。一方、I c 期の遺構は、AN13～A014 グリッド周辺の他、SD62 以東に分布している。土器埋設遺構や焼土遺構、土坑などはいずれも I c 期の遺構と思われるが、明確な建物跡は確認できなかったため、集落跡が存在したかは判断できなかった。I d 期の遺構は認められないが、SD62 以東の各グリッドにおいて遺物が出土している。第3節で検証したように量や器種は豊富で、当該期の土器捨て場として利用された可能性がある。発掘区東端の NR 3 は、VI a 層堆積後に埋没しており、VI a 層出土土器より新しい様相をもった土器が含まれることから、I e 期までは周辺で人々の活動があったと考えられる。六里遺跡のIV・V層は均質で下層ほど粒子が粗いことから、沈殿堆積の可能性がある。網目状の河川が堰き止められることによって生じた池や沼が、流入する土砂によって埋没することで古墳時代以降に基盤となる地形が形成されたと考えられる。IV・V層には I e 期以降の縄文土器が認められ、縄文時代の末期には堆積が始まったと思われる。なお、稲荷遺跡から出土する縄文土器は摩耗しており、時期的にIV・V層に含まれるものと類似することから、当該期以降に二次的に流入した可能性がある。

II期 II期の遺物としては六里遺跡 SD39 から出土した高藏式期の弥生土器（197～199）がある。著しく摩耗しているため、二次的な流入と考えられるが、これまで大野町で確認された弥生土器では最古である。また扇形文を施した後期の土器（202）も出土した。

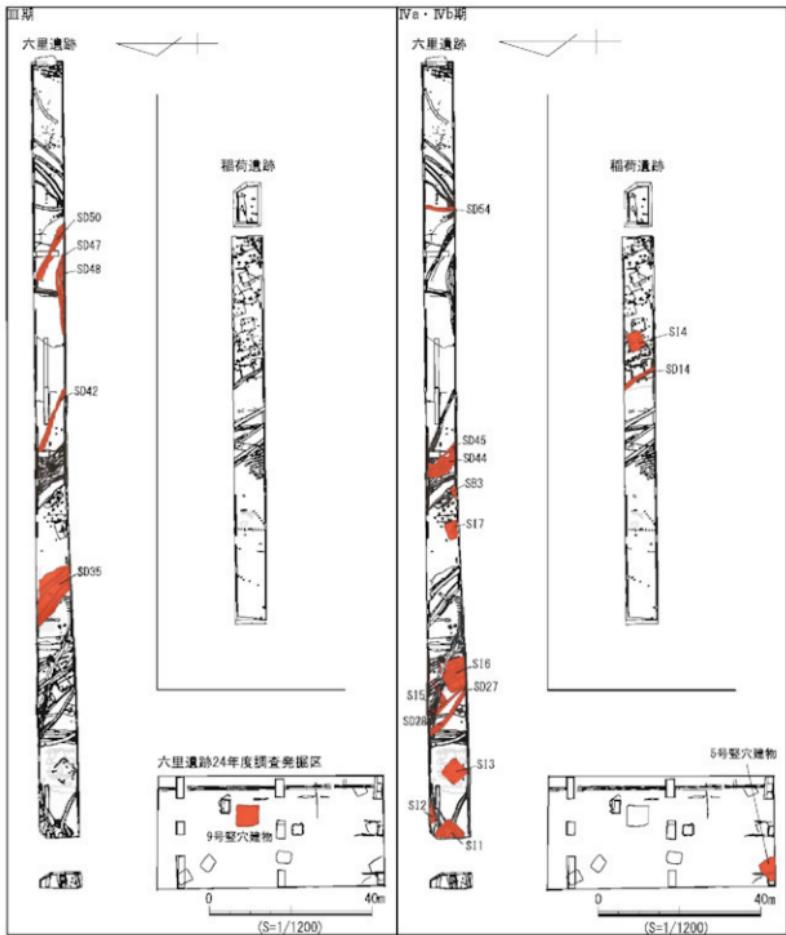
III期 III期には六里遺跡で幅 3 m を超える SD35 が設置される。この溝状遺構は、六里遺跡発掘区西部の微高地に立地しており、流水の痕跡があることから取水路と考えられる。一方、発掘区東部の低地には、古墳時代前期から中期に属すると考えられる SD42 や SD50 が設置される。流水の痕跡がなく、湿地性であった水田の水位を下げることを目的とした遺構の可能性がある。八賀氏は、大野町における土壤環境の分析と古墳の分布から「弥生時代後期までには南部及び北部に広がる強湿地系の水田経営が始まつた。この頃、平野の大半を占める条里地帯は山林であり、4世紀代から5世紀にかけ、湿地系の水田を中核としてその縁辺で新たな開発が及んだ」（八賀 2011）という見解を示しており、六里遺跡の溝状遺構は、その時期の状況を反映している可能性がある。SD35 設置当時の集落域は不明であるが、六里遺跡の 24 年度調査では 5 世紀後半代の竪穴建物を確認した。六里遺跡西部に分布する遺構の埋土からも同時期の遺物が出土しており、5 世紀後半には集落域が存在した可能性は高い。なお、稲荷遺跡でも 5 世紀代の遺物が出土している。

IVa・IVb期 IV期前半になると六里遺跡の SD35 はほぼ埋没して機能を失い、これに代わって SD44 が設置される。SD44 は SD35 とは異なり、西部の微高地と東部の低地の境に位置する。その後、同じような位置に溝が複数設置されており、付け替えが行われたと考えられる。東部の低地には SD42・SD50 より東に溝状遺構群が設置される。SD42・SD45 が旧河道上の低地に設けられているのに対し、SD54 等の溝状遺構群は若干地形が高い東側に位置し、水田域が拡大した可能性がある。西部の微高地には、集落域が形成される。SI 1～3・SI 5・6 などは当該期の竪穴建物と考えられる。SI 7 も同時期の遺構と思われるが、他の竪穴建物から離れた SD44 に近接する位置に設置され、その後同じ場所に SB 1・SB 2 が建てられる状況から、集落内で特殊な役割を担った建物であったと推測される。

なお、その位置関係や長軸方位の類似から SB 3 が SI 7 と同時期の建物である可能性がある。この他、集落域内に SD27 ~ SD29 が設置されており、集落域における排水溝や区画溝と考えられる。

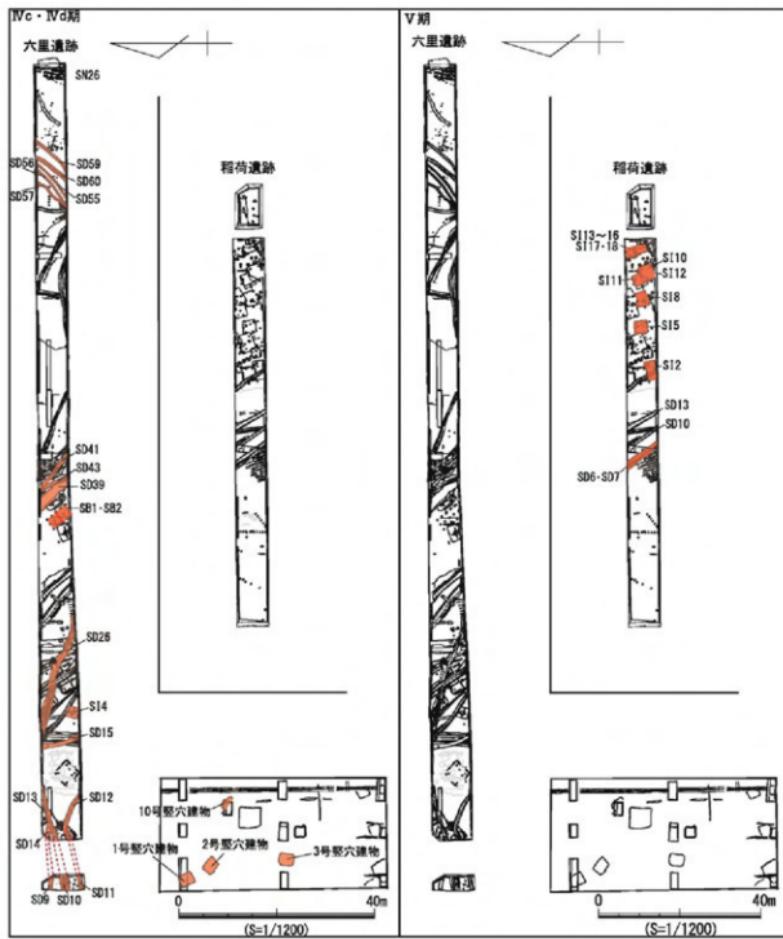
稻荷遺跡では、SI 4 と SD14 が設置される。SD14 も六里遺跡 SD44 と同様に取水路と考えられ、当該期には稻荷遺跡においても水田経営が行われていた可能性がある。

IVc・IVd期 IV期の後半には、六里遺跡発掘区西部に SD26などの溝状遺構が設置される。IV期前半の SD27・SD28 とは異なり、等高線に直交するような長軸方位をもつものが多い。また、流水の痕跡は認められるが、発掘区内における東端あるいは西端の底面の標高が低い特徴があり、地形に沿つ



第262図 土地利用の変遷（III期及びIVa期・IVb期）

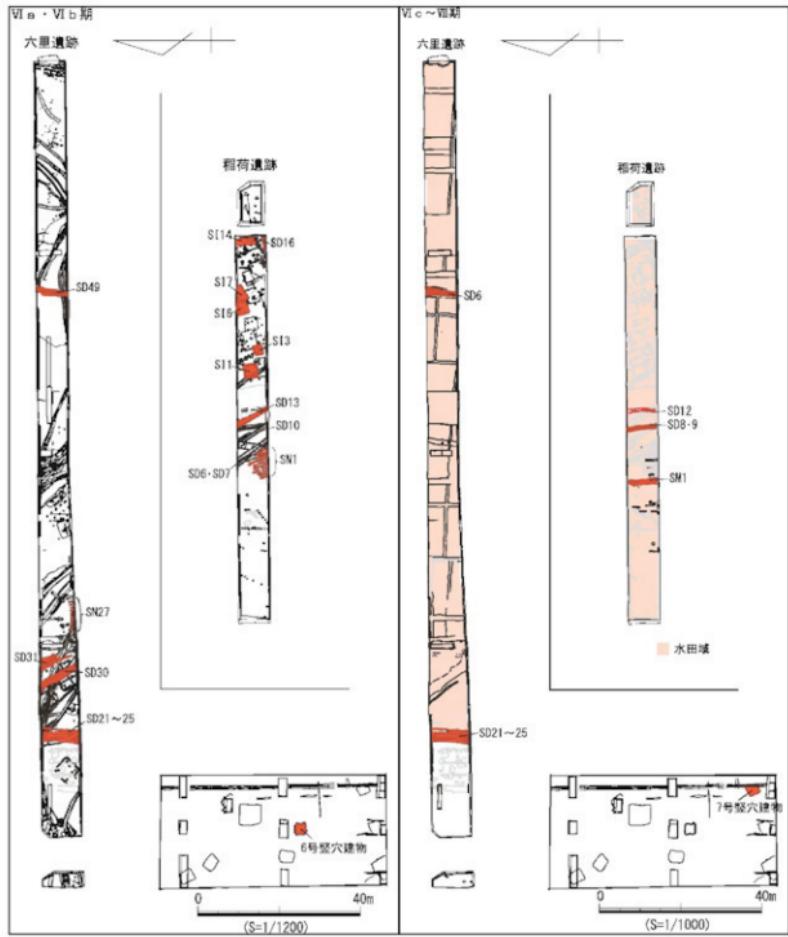
た取水溝ではない可能性が高い。この時期の六里遺跡の集落域は、より地形の高い24年度調査区（1号堅穴建物等）に移動し、六里遺跡発掘区内の溝状遺構は、この集落の北縁に位置すると考えられる。なお、SI 4はSD26と長軸方位が類似することから、当該期の堅穴建物である可能性がある。発掘区東部では、遺物での検証はできなかったが、IV期前半のSD44周辺に引き続き溝状遺構が設置され、重複の新しいSD39・SD40・SD41などがこれに該当する可能性がある。また、総柱据立柱建物であるSB 1・SB 2も遺構の重複や長軸方位から当該期の可能性がある。また、発掘区西部のSD57ではIV d期の遺物が出土しており、IV期前半から引き続き排水溝が設置されていたと考えられる。



第263図 土地利用の変遷 (IV c期・IV d期及びV期)

稻荷遺跡では、当該期の遺物は比較的多く出土するものの、遺構は確認できなかった。

V期 V a 期は、六里遺跡・稻荷遺跡とともに明確な遺構・遺物が確認できない時期である。7世紀後半の大隆寺建立にみられる社会の変化や奈良時代の律令制への移行を背景として、集落の再編が行われたと考えられる。遺物包含層からも当該期の遺物は出土しないことから、発掘区から離れた位置に集落が移動したと推測されるが、前述のように、稻荷遺跡の発掘区から北へ約200mに位置する里山稻荷神社の境内では、V a 期と考えられる「美濃」刻印須恵器が採集されており、当該期の集落域が三水川右岸に形成されていた可能性を示すと思われる。V b 期になると、稻荷遺跡発掘区東部の微高



第264図 土地利用の変遷 (VIa・VIb期及びVIc～Ⅶa期)

地に集落が展開する。特に、発掘区東端付近の堅穴建物は重複が著しい。稻荷遺跡発掘区中央部の溝状遺構は、出土遺物から推測することはできないが、V b 期の堅穴建物の長軸方位や SN 1 との位置関係から、SD 6・SD 7 といった溝状遺構が対応する可能性がある。発掘区西部の低地部分では引き続き水田が營まれたと考えられるが、明確な遺構は確認できなかった。

六里遺跡で V b 期の遺物が出土したのは SD49 のみである。SD49 は条里地割の坪境と考えられる遺構であり、当該期にまで時期を遡らせられるかは、十分検討する必要がある。

VI期 稲荷遺跡では集落域が存続する。発掘区中央部の SD13 や SN 1 が当該期の遺構である可能性はあるが明確でない。VI b 期には SI 3 と SI14 の 2 軒となり、発掘区内の建物は減少する。SD16 が同時期の溝状遺構と考えられる。VI期の堅穴建物は長軸方位が南北軸に近くなるが、SD16 も含めて一致はしない。VI b 期の段階では、当該地に条里地割が施行されていなかった可能性が高い。

六里遺跡では、SD30 が設置される。埋土から取水路の可能性があり、SD44 東側の低地にあった水田域が、SD30 以東まで広がった可能性を示す。設置時期は VI b 期以降であるが、IV期に設置された SD44 等とは時期差があるため、この間の土地利用状況は不明である。なお、24 年度調査の 6 号堅穴建物は、長軸方位が南北軸とほぼ一致し（第6章第1節表 121）、条里地割の導入期の遺構と推定されている（大野町教育委員会 2013）。この遺構で出土する遺物は、稻荷遺跡の SI 3 や SI14 より若干新しい様相を示し²⁰、VI b 期の後半以降に条里地割が施行されたとすれば、今回の調査結果と矛盾しない。また、里境溝状遺構群（SD22～SD25）や坪境構（SD49）、SN27 など、南北方向の長軸をもつ遺構も、この段階まで時期が降る可能性がある。

VI c 期・VII期 六里遺跡・稻荷遺跡とともに水田化が進んだと考えられる。六里遺跡では 24 年度調査区で中世前期の堅穴状遺構（7号堅穴建物）を確認しており、また、III層で比較的残存状態の良い中世の遺物が出土したことから、集落域が微高地に広がっていた可能性がある。

VII期以降 VII期は六里遺跡の第1調査面や、稻荷遺跡のIII層上面遺構で確認した水田遺構の所属時期と考えられる。六里遺跡の里境溝状遺構群以西にはIII層がないため、水田域に関しては VII期の状況と変化がなかったことが推定され、稻荷遺跡の III 層上面から検出した SM 1 等も、層序から同時期の遺構である可能性が高い。IX期には六里遺跡・稻荷遺跡の発掘区全域が II 層を耕作土とする水田となる。SD 6 は同じ場所で改修等が行われ、昭和 43 年の圃場整備前まで使用された（SD 5）。また里境溝は、近世以降に一区画西の「条里的坪境の水路跡」（大野町教育委員会 2013）へ移動したと考えられる。

なお、表 127 に、六里遺跡・稻荷遺跡と今回の調査で確認した条里閑連遺構について、六里遺跡で確認した里境溝状遺構群（SD22～SD25）からの距離を示した。六里遺跡の SD 6・SD49、稻荷遺跡の SM 1 とともに想定された坪境の位置に近似することがわかる。ただし、稻荷遺跡の SM 1 は VII期以降の遺構である可能性が高く、SM 1 以外に坪境に相当する遺構は確認できなかったため、条里地割施行直後の坪境については不明である。

表127 条里閑連遺構と距離

遺跡名	調査面	検出 遺構	竹谷2011の復原条里 における位置	想定 距離 (m)	想定 坪数 /109	実測 距離 (m)	算出 坪数 /109
六里遺跡	第2調査面	SD22～25	大野郡条里12条6 里 1 坪西綱 (里境)	0	0	0.00	0.00
六里遺跡	第1調査面 第2調査面	SD 6 SD49	大野郡条里12条6 里 2 坪西綱	109	1	109.40	1.00
稻荷遺跡	上層遺構	SM 1	大野郡条里12条6 里 4 坪西綱	327	3	334.00	3.06

注

- 1) 大野町教育委員会から提供を受けた六里遺跡 24 年度調査の全体図原図と座標値をもとに作図した。
- 2) 遺物の実見により判断した。

引用・参考文献

- 家根祥多 1994 「縄原式の提唱—神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」『縄紋晚期前葉—中葉の広域編年』平成 4 年度科学研究費補助（総合 A）研究成果報告書（立命館大学文学部 2016 『家根祥多先生著作集』より）
- 泉拓良・山崎純男 1989 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』4 後期 晩期 縄縄文、小学館
- 泉拓良 1990 「西日本凸帯文土器の編年」『奈良大学文化財学報』第 8 集、奈良大学文学部文化財学科
- 岩瀬彰利 1996 「縄文後期～晩期の煮炊具—美濃・尾張・三河・遠江における変遷—」『鍋と壺そのデザイン』、第 4 回考古学フォーラム実行委員会
- 内堀信雄・井川祥子 1996 「美濃における古代煮炊具の様相」『鍋と壺そのデザイン』、第 4 回考古学フォーラム実行委員会
- 宇野隆夫 1989 「古代と中世の歴史と社会」、真陽社
- 宇野隆夫 1991 「律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として」、桂書房
- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』、柏書房
- 大野町教育委員会 2006 『大野町北部山麓古墳群発掘調査報告書』
- 大野町教育委員会 2009 『大野の絵図 大野町遺跡詳細分布調査報告書資料（絵図）編』
- 大野町教育委員会 2013 『大野町史跡条里跡（六里遺跡）の発掘調査』、平成 25 年度岐阜県発掘調査報告会資料
- 長田友也 2010 「東海地方の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性 II 葬墓制』、雄山閣
- 小野木学 1997 「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第 2 号、美濃の考古学刊行会
- 各務原市教育委員会 1984 『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
- 春日井恒 2000 「岐阜県」『関西の縄文墓地—葬り葬られた関西縄文人—』資料集第 1 分冊、関西縄文文化研究会
- 春日井恒 2000 「東海・北陸からの視点」『関西の縄文墓地—葬り葬られた関西縄文人—』発表要旨集、関西縄文文化研究会
- 春日井恒 2007 「岐阜県の突帯文土器の概要・集成」『関西の突帯文土器』第 8 回関西縄文文化研究会資料集、関西縄文文化研究会
- 大江まさる他 1973 『北裏遺跡』、可児町北裏遺跡発掘調査団
- 川添和曉 2003 「棺の構造からみた縄文晚期葬法研究について—近畿・東海・中部高地・北陸地方を中心にして—」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集 1、関西縄文文化研究会
- 菊池実 1995 「壘棺葬」『縄文文化の研究』9、雄山閣
- 岐阜県教育委員会 1989 『はいづめ遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2013 『荒尾南遺跡 A 地区 II』

- 岐阜県文化財保護センター2015『上保本郷遺跡現地見学会資料』
- 岐阜県文化財保護センター2016『番場遺跡』
- 国府町教育委員会 1998『桜本遺跡』
- 小村美代子 2004「東町田遺跡出土鉄滓・鉄塊の分析」『東町田遺跡』、大垣市教育委員会
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1990『廻間遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター1994『戸入村平遺跡』
- 財団法人岐阜県文化財保護センター2000『いんべ遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『大平遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『爐原村平遺跡』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2009『野内遺跡B地区』
- 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2010『広畠野口遺跡』
- 齋藤孝正 1995「東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第3巻東日本編I、雄山閣
- 重久淳一 1985「雷文土器の研究—東京都町田市なすな原遺跡出土土器を中心として—」『古代探叢II』、早稻田大学出版部
- 城ヶ谷和広 1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』、第4回考古学フォーラム実行委員会
- 鈴木正貴 2005「東海における中世土器・陶磁器の編年」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』実行委員会
- 関市教育委員会 2012『弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺東遺跡1』
- 瀬戸市史編纂委員会 1998『瀬戸市史』陶磁史編6、瀬戸市
- 高木宏和 1997「美濃の古式土師器、南山遺跡再考」『美濃の考古学』第2号、美濃の考古学刊行会
- 高木宏和・藤田英博 2002「美濃（飛騨）地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』、木耳社
- 竹谷勝也 2011「考古学的調査」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、大野町教育委員会
- 竹谷勝也 2011「大野郡の条里プラン」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、大野町教育委員会
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡X V－陶磁器分類編－』
- 立岡和人 2000「土器棺墓・埋甕・埋設土器」『関西の縄文墓地—葬り葬られた関西縄文人—』発表要旨集、関西縄文文化研究会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』、角川書店
- 谷旬 1983「古代東国のかまど」『千葉県文化財センター研究紀要』7
- 田村陽一 2007「三重県の突帯文土器の概要・集成」『関西の突帯文土器』第8回関西縄文文化研究会 資料集、関西縄文文化研究会
- 戸田哲也 1982「飛騨における晩期縄文土器の様相」『信濃』第34巻第4号、信濃史学会
- 中井正幸・鈴木元 1992「岐阜県」『古墳時代の竈を考える』、埋蔵文化財研究会
- 永井宏之 1993「条痕文土器をめぐる諸問題」『突帯文土器から条痕文土器へ』、第1回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会

- 永井宏之 2007 「伊勢湾周辺からみた突帯文系土器様式の終焉」『関西の突帯文土器』、第8回関西縄文文化研究会発表要旨集、関西縄文文化研究会
- 中沢道彦 2007 「関西出土所謂東日本系土器の再検討」『関西の突帯文土器』第8回関西縄文文化研究会発表要旨集、関西縄文文化研究会
- 中野晴久 2005 「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 中村健二 1996 「縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－」『紀要』第9号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 中村健二 2008 「凸帯文系土器（中四国・近畿・東海地方）」『総覧縄文土器』、アム・プロモーション
- 中村豊 2008 「西日本磨研土器（滋賀里1～3式土器）」『総覧縄文土器』、アム・プロモーション
- 日本貨幣商協同組合 1993 『日本貨幣カタログ 1993年版』
- 八賀晋 2005 「安八磨郡と鉄生産」『東海学セミナー（1）－古代の鉄生産を考える－』、春日井市教育委員会
- 八賀晋 2011 「地形環境と開発」『大野の条里 大野町遺跡詳細分布調査報告書 条里編・解説編』、大野町教育委員会
- 藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』3、三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 2005 「瀬戸系」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集、「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 春成秀爾 1992 「墓」『図解・日本人類遺跡』、財団法人東京大学出版会
- 藤田英博 2013 「荒尾南遺跡」『論集 馬見塚』、考古学フォーラム編集部
- 藤本健三 2007 「奈良時代から平安時代までの集落」『国府町史』考古・指定文化財編、国府町史刊行委員会
- 増子康眞 2013 「東海西部の晩期土器編年と馬見塚遺跡」『論集 馬見塚』、考古学フォーラム編集部
- 松木泰典 2007 「愛知県の突帯文土器の概要・集成」『関西の突帯文土器』第8回関西縄文文化研究会資料集、関西縄文文化研究会
- 松木泰典 2009 「西之山式の突帯文土器についての一考察－馬見塚遺跡E地点井上吉貞氏採集資料の紹介」『南山考人』第37号、南山考古文化人類学研究会
- 松木泰典 2013 「愛知県内田貝塚における稻荷山式土器」『東海縄文論集一大塚達朗代表還暦記念－』、東海縄文研究会
- 豆谷和之 1994 「弥生壺成立以前－馬見塚F地点型壺形土器について－」『古代文化』第46卷第7号、古代学学会
- 三重県埋蔵文化財センター 1993 『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』
- 宮田聰一郎 2007 「逆「く」字形浅鉢の成立と展開」『関西の突帯文土器』第8回関西縄文文化研究会発表要旨集、関西縄文文化研究会
- 山下峰司 1995 「灰釉陶器・山茶碗」『中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社
- 渡辺博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相－蓋坏の型式設定とその編年試案－」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会